

うらめしげにぞ思したるや。帝、

「世の常の紅葉とや見るいにしへの

ためしにひける庭の錦を」

と、聞こえ知らせたまふ。御容貌いよいよねびととのほりたまひて、ただ一つもの見えさせたまふを、中納言さぶらひたまふが、ことことならぬこそ、めざましかめれ。あてにめでたきけはひや、思ひなしに劣りまさらむ、あざやかに匂はしきところは、添ひてさへ見ゆ。

笛仕うまつりたまふ、いとおもしろし。唱歌の殿上人、御階にさぶらふ中に、弁少将の声すぐれたり。なほさるべきにこそと見えたる御仲らひなめり。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

らず、なまめかしきほどに、殿上の童べ、舞仕うまつる。朱雀院の紅葉の賀、例の古事思し出でらる。「賀王恩」といふものを奏するほどに、太政大臣の御弟子の十ばかりなる、切におもしろう舞ふ。内の帝、御衣ぬぎて賜ふ。太政大臣降りて舞踏したまふ。

主人の院、菊を折らせたまひて、「青海波」の折を思し出づ。

「色まさる籬の菊も折々に

袖うちかけし秋を恋ふらし」

大臣、その折は、同じ舞に立ち並びきこえたまひしを、我も人にはすぐれたまへる身ながら、なほこの際はこよなかりけるほど、思し知らる。時雨、折知り顔なり。

「紫の雲にまがへる菊の花

濁りなき世の星かとぞ見る

時こそありけれ」

と聞こえたまふ。

夕風の吹き敷く紅葉の色々、濃き薄き、錦を敷きたる渡殿の上、見えまがふ庭の面に、容貌をかしき童べの、やむごとなき家の子どもなどにて、青き赤き白椽、蘇芳、葡萄染めなど、常のごと、例のみづらに、額ばかりのけしきを見せて、短きものどもをほのかに舞ひつつ、紅葉の蔭に返り入るほど、日の暮るるもいと惜しげなり。

楽所などおどろおどろしくはせず。上の御遊び始まりて、書司の御琴ども召す。ものの興切なるほどに、御前に皆御琴ども参れり。宇多法師の変はらぬ声も、朱雀院は、いとめづらしくあはれに聞こし召す。

「秋をへて時雨ふりぬる里人も

かかる紅葉の折をこそ見ね」

老人どもも、かやうの筋に聞こえ集めたるを、中納言は、をかしと思す。女君は、あいなく面赤み、苦しと聞きたまふ。

神無月の二十日あまりのほどに、六条院に行幸あり。紅葉の盛りにて、興あるべきたびの行幸なるに、朱雀院にも御消息ありて、院さへ渡りおはしますべければ、世にめづらしくありがたきことにて、世人も心をおどろかす。主人の院方も、御心を尽くし、目もあやなる御心まうけをせさせたまふ。

巳の時に行幸ありて、まづ、馬場殿に左右の寮の御馬牽き並べて、左右近衛立ち添ひたる作法、五月の節にあやめわかれず通ひたり。未くだるほどに、南の寝殿に移りおはします。道のほどの反橋、渡殿には錦を敷き、あらはなるべき所には軟障を引き、いつくしうしなさせたまへり。

東の池に舟ども浮けて、御厨子所の鵜飼の長、院の鵜飼を召し並べて、鵜をおろさせたまへり。小さき鮒ども食ひたり。わぎとの御覧とはなけれども、過ぎさせたまふ道の興ばかりになむ。

山の紅葉、いづ方も劣らねど、西の御前は心ことなるを、中の廊の壁を崩し、中門を開きて、霧の隔てなくて御覧ぜさせたまふ。

御座、二つよそひて、主人の御座は下れるを、宣旨ありて直させたまふほど、めでたく見えたれど、帝は、なほ限りあるるやるやしさを尽くして見せたてまつりたまはぬことをなむ、思しける。

池の魚を、左少将捕り、蔵人所の鷹飼の、北野に狩仕まつれる鳥一番を、右少将捧げて、寝殿の東より御前に出でて、御階の左右に膝をつきて奏す。太政大臣、仰せ言賜ひて、調じて御膳に参る。親王たち、上達部などの御まうけも、めづらしきさまに、常の事どもを変へて仕うまつらせたまへり。

皆御酔ひになりて、暮れかかるほどに、楽所の人召す。わぎとの大楽にはあ

う上り集りて、いとうれしと思ひあへり。

男君、

「なれこそは岩守るあるじ見し人の

行方は知るや宿の真清水」

女君、

「亡き人の影だに見えずつれなくて

心をやれるいさらぬの水」

などのたまふほどに、大臣、内よりまかでたまひけるを、紅葉の色に驚かさ  
れて渡りたまへり。

昔おはさひし御ありさまにも、をさをさ変はることなく、あたりあたりおと  
なく住まひたまへるさま、はなやかなるを見たまふにつけても、いともあ  
はれに思さる。中納言も、けしきことに、顔すこし赤みて、いとどしづまりて  
ものしたまふ。

あらまほしくうつくしげなる御あはひなれど、女は、またかかると容貌のたぐ  
ひも、などかなからむと見えたまへり。男は、際もなくきよらにおはす。古人  
ども御前に所得て、神さびたることども聞こえ出づ。ありつる御手習どもの、  
散りたるを御覧じつけて、うちしほたれたまふ。

「この水の心尋ねまほしけれど、翁は言忌して」  
とのたまふ。

「そのかみの老木はむべも朽ちぬらむ

植ゑし小松も苔生ひにけり」

男君の御宰相の乳母、つらかりし御心も忘れねば、したり顔に、

「いづれをも蔭とぞ頼む双葉より

根ざし交はせる松の末々」

とをなむ、朝夕の御嘆きぐさなりける。

内大臣上がりたまひて、宰相中将、中納言になりたまひぬ。御よろこびに出でたまふ。光いとどまさりたまへるさま、容貌よりはじめて、飽かぬことなきを、主人の大臣も、「なかなか人に圧されまし宮仕へよりは」と、思し直る。

女君の大輔乳母、「六位宿世」と、つぶやきし宵のこと、ものの折々に思し出でければ、菊のいとおもしろくて、移ろひたるを賜はせて、

「浅緑若葉の菊を露にても

濃き紫の色とかけきや

からかりし折の一言葉こそ忘れね」

と、いと匂ひやかにほほ笑みて賜へり。恥づかしう、いとほしきものから、うつくしう見たてまつる。

「双葉より名立たる園の菊なれば

浅き色わく露もなかりき

いかに心おかせたまへりけるにか」

と、いと馴れて苦しがる。

御勢ひまさりて、かかる御住まひも所狭ければ、三条殿に渡りたまひぬ。すこし荒れにたるを、いとめでたく修理しなして、宮のおはしましし方を改めしつらひて住みたまふ。昔おぼえて、あはれに思ふさまなる御住まひなり。

前裁どもなど、小さき木どもなりしも、いとしげき蔭となり、一村薄も心にまかせて乱れたりける、つくろはせたまふ。遣水の水草もかき改めて、いと心ゆきたるけしきなり。

をかしき夕暮のほどを、二所眺めたまひて、あさましかりし世の、御幼さの物語などしたまふに、恋しきことも多く、人の思ひけむことも恥づかしう、女君は思し出づ。古人どもの、まかで散らず、曹司曹司にさぶらひけるなど、参

に言ひなしなどすれど、それに消たるべくもあらず。いまめかしう、並びなきことをば、さらにもいはず、心にくくよしある御けはひを、はかなきことにつけても、あらまほしうもてなしきこえたまへれば、殿上人なども、めづらしき挑み所にて、とりどりにさぶらふ人びとも、心をかけたる女房の、用意ありさまさへ、いみじくととのへなしたまへり。

上も、さるべき折節には参りたまふ。御仲らひあらまほしううちとけゆくに、さりとしてさし過ぎもの馴れず、あなづらはしかるべきもてなし、はた、つゆなく、あやしくあらまほしき人のありさま、心ばへなり。

大臣も、「長からずのみ思さるる御世のこなたに」と、思しつる御参りの、かひあるさまに見たてまつりなしたまひて、心からなれど、世に浮きたるやうにて、見苦しかりつる宰相の君も、思ひなくめやすきさまにしづまりたまひぬれば、御心おちる果てたまひて、「今は本意も遂げなむ」と、思しなる。

対の上の御ありさまの、見捨てがたきにも、「中宮おはしませば、おろかならぬ御心寄せなり。この御方にも、世に知られたる親さまには、まづ思ひきこえたまふべければ、さりとも」と、思し譲りけり。

夏の御方の、時に花やぎたまふまじきも、「宰相のものしたまへば」と、皆とりどりにうしろめたからず思しなりゆく。

明けむ年、四十になりたまふ、御賀のことを、朝廷よりはじめたてまつりて、大きなる世のいそぎなり。

その秋、太上天皇に准らふ御位得たまうて、御封加はり、年官年爵など、皆添ひたまふ。かからでも、世の御心に叶はぬことなけれど、なほめづらしかりける昔の例を改めで、院司どもなどなり、さまことにいつくしうなり添ひたまへば、内に参りたまふべきこと、難かるべきをぞ、かつは思しける。

かくても、なほ飽かず帝は思して、世の中を憚りて、位をえ譲りきこえぬこ

て、上は、「まことにあはれにうつくし」と思ひきこえたまふにつけても、人に譲るまじう、「まことにかかることもあらましかば」と思す。大臣も、宰相の君も、ただこのことひとつをなむ、「飽かぬことかな」と、思しける。

三日過ごしてぞ、上はまかでさせたまふ。たち変はりて参りたまふ夜、御対面あり。

「かくおとなびたまふけぢめになむ、年月のほども知らればべれば、疎々しき隔ては、残るまじくや」

と、なつかしうのたまひて、物語などしたまふ。これもうちとけぬる初めなめり。ものなどうち言ひたるけはひなど、「むべこそは」と、めざましう見たまふ。

また、いと気高う盛りなる御けしきを、かたみにめでたしと見て、「そこらの御中にもすぐれたる御心ざしにて、並びなきさまに定まりたまひけるも、いとことわり」と思ひ知らるるに、「かうまで、立ち並びきこゆる契り、おろかなりやは」と思ふものから、出でたまふ儀式の、いとことによそほしく、御輦車など聴されたまひて、女御の御ありさまに異ならぬを、思ひ比ぶるに、さすがなる身のほどなり。

いとうつくしげに、雛のやうなる御ありさまを、夢の心地して見たてまつるにも、涙のみとどまらぬは、一つものとぞ見えざりける。年ごろよろづに嘆き沈み、さまざま憂き身と思ひ屈しつる命も延べまほしう、はればれしきにつけて、まことに住吉の神もおろかならず思ひ知らる。

思ふさまにかしづききこえて、心およばぬことはた、をさをさなき人のらうらうじさなれば、おほかたの寄せ、おぼえよりはじめ、なべてならぬ御ありさま容貌なるに、宮も、若き御心地に、いと心ことに思ひきこえたまへり。

挑みたまへる御方々の人などは、この母君の、かくてさぶらひたまふを、疵

博士ならでは」

と聞こえたり。はかなけれど、ねたきいらへと思す。なほ、この内侍にぞ、思ひ離れず、はひまぎれたまふべき。

かくて、御参りは北の方添ひたまふべきを、「常に長々しうえ添ひさぶらひたまはじ。かかるついでに、かの御後見をや添へまし」と思す。

上も、「つひにあるべきことの、かく隔たりて過ぐしたまふを、かの人も、ものしと思ひ嘆かるらむ。この御心にも、今はやうやうおぼつかなく、あはれに思し知るらむ。かたがた心おかれたてまつらむも、あいなし」と思ひなりたまひて、

「この折に添へたてまつりたまへ。まだいとあえかなるほどもうしろめたきに、さぶらふ人とても、若々しきのみこそ多かれ。御乳母たちなども、見及ぶことの心いたる限りあるを、みづからは、えつとしもさぶらはざらむほど、うしろやすかるべく」

と聞こえたまへば、「いとよく思し寄るかな」と思して、「さなむ」と、あなたにも語らひのたまひければ、いみじくうれしく、思ふこと叶ひはべる心地して、人の装束、何かのことも、やむごとなき御ありさまに劣るまじくいそぎたつ。

尼君なむ、なほこの御生ひ先見たてまつらむの心深かりける。「今一度見たてまつる世もや」と、命をさへ執念くなして念じけるを、「いかにしてかは」と、思ふも悲し。

その夜は、上添ひて参りたまふに、さて、車にも立ちくだりうち歩みなど、人悪るかるべきを、わがためは思ひ憚らず、ただ、かく磨きたてまつりたまふ玉の疵にて、わがなくながらふるを、かつはいみじう心苦しう思ふ。

御参りの儀式、「人の目おどろくばかりのことはせじ」と思しつつめど、おのづから世の常のさまにぞあらぬや。限りもなくかしづきすゑたてまつりたまひ

「時により心おごりして、さやうなることなむ、情けなきことなりける。こよなく思ひ消ちたりし人も、嘆き負ふやうにて亡くなりなき」

と、そのほどはのたまひ消ちて、

「残りとまれる人の、中將は、かくただ人にて、わづかになりのぼるめり。宮は並びなき筋にておはするも、思へば、いとこそあはれなれ。すべていと定めなき世なればこそ、何ごとも思ふさまにて、生ける限りの世を過ぐさまほしければ、残りたまはむ末の世などの、たとしへなき衰へなどをさへ、思ひ憚らるれば」

と、うち語らひたまひて、上達部なども御棧敷に参り集ひたまへれば、そなたに出でたまひぬ。

近衛司の使は、頭中將なりけり。かの大殿にて、出で立つ所よりぞ人びとは参りたまうける。藤典侍も使なりけり。おぼえことにて、内、春宮よりはじめたてまつりて、六条院などよりも、御訪らひども所狭きまで、御心寄せいとめでたし。

宰相中將、出で立ちの所にさへ訪らひたまへり。うちとけずあはれを交はしたまふ御仲なれば、かくやむごとなき方に定まりたまひぬるを、ただならずうち思ひけり。

「何とかや今日のかぎしよかつ見つ

おぼめくまでもなりにけるかな

あさまし」

とあるを、折過ぐしたまはぬばかりを、いかが思ひけむ、いともの騒がしく、車に乗るほどなれど、

「かぎしてもかつたどらるる草の名は

桂を折りし人や知るらむ

出だし、布施など、公さまに変はらず、心々にしたまへり。御前の作法を移して、君達なども参り集ひて、なかなか、うるはしき御前よりも、あやしう心づかひせられて臆しがちなり。

宰相は、静心なく、いよいよ化粧じ、ひきつくろひて出でたまふを、わざとならねど、情けだちたまふ若人は、恨めしと思ふもありけり。年ごろの積もり取り添へて、思ふやうなる御仲らひなめれば、水も漏らむやは。

主人の大臣、いとどしき近まさを、うつくしきものに思して、いみじうもてかしづききこえたまふ。負けぬる方の口惜しさは、なほ思せど、罪も残るまじうぞ、まめやかなる御心ざまなどの、年ごろ異心なくて過ぐしたまへるなどを、ありがたく思し許す。

女御の御ありさまなどよりも、はなやかにめでたくあらまほしければ、北の方、さぶらふ人びとなどは、心よからず思ひ言ふもあれど、何の苦しきことかはあらむ。按察使の北の方なども、かかる方にて、うれしと思ひきこえたまひけり。

かくて、六条院の御いそぎは、二十余日のほどなりけり。対の上、御阿礼に詣うでたまふとて、例の御方々いぎなひきこえたまへど、なかなか、さしも引き続きて心やましきを思して、誰も誰もとまりたまひて、ことことしきほどにもあらず、御車二十ばかりして、御前なども、くだくだしき人数多くもあらず、ことそぎたるしも、けはひことなり。

祭の日の暁に詣うでたまひて、かへさには、物御覽すべき御棧敷におはします。御方々の女房、おのおの車引き続き、御前、所占めたるほど、いかめしう、「かれはそれ」と、遠目よりおどろおどろしき御勢ひなり。

大臣は、中宮の御母御息所の、車押し避けられたまへりし折のこと思し出でて、

御返り、いと出で来がたげなれば、「見苦しや」とて、さも思し憚りぬべきことなれば、渡りたまひぬ。

御使の祿、なべてならぬさまにて賜へり。中将、をかしきさまにもてなしたまふ。常にひき隠しつつ隠ろへありきし御使、今日は、面もちなど、人びとしく振る舞ふめり。右近将監なる人の、むつましう思し使ひたまふなりけり。

六条の大臣も、かくと聞こし召してけり。宰相、常よりも光添ひて参りたまへれば、うちまもりたまひて、

「今朝はいかに。文などものしつや。賢しき人も、女の筋には乱るる例あるを、人悪ろくかかづらひ、心いられせで過ぐされたるなむ、すこし人に抜けたりける御心とおぼえける。

大臣の御おきての、あまりすくみて、名残なくくづほれたまひぬるを、世人も言ひ出づることあらむや。さりとても、わが方たけう思ひ顔に、心おごりして、好き好きしき心ばへなど漏らしたまふな。

さこそおいらかに、大きな心おきてと見ゆれど、下の心ばへ男々しからず癖ありて、人見えにくきところつきたまへる人なり」

など、例の教へきこえたまふ。ことうちあひ、めやすき御あはひ、と思さる。

御子とも見えず、すこしがこのかみばかりと見えたまふ。ほかほかにては、同じ顔を写し取りたると見ゆるを、御前にては、さまざま、あなめでたと見えたまへり。

大臣は、薄き御直衣、白き御衣の唐めきたるが、紋けぎやかにつやつやと透きたるをたてまつりて、なほ尽きせずあてになまめかしようおはします。

宰相殿は、すこし色深き御直衣に、丁子染めの焦がるるまでしめる、白き綾のなつかしきを着たまへる、ことさらめきて艶に見ゆ。

灌仏率てたてまつりて、御導師遅く参りければ、日暮れて、御方々より童女

かなな。『河口の』とこそ、さしいらへまほしかりつれ」

とのたまへば、女、いと聞き苦し、と思して、

「浅き名を言ひ流しける河口は

いかが漏らしし関の荒垣

あさまし」

とのたまふさま、いとこめきたり。すこしうち笑ひて、

「漏りにける岫田の関を河口の

浅きにのみはおほせざらなむ

年月の積もりも、いとわりなくて悩ましきに、ものおほえず」

と、酔ひにかこちて、苦しげにもてなして、明くるも知らず顔なり。人びと、

聞こえわづらふを、大臣、

「したり顔なる朝寝かな」

と、とがめたまふ。されど、明かし果てでぞ出でたまふ。ねくたれの御朝顔、  
見るかひありかし。

御文は、なほ忍びたりつるさまの心づかひにてあるを、なかなか今日はえ聞  
こえたまはぬを、もの言ひさがなき御達つきじろふに、大臣渡りて見たまふぞ、  
いとわりなきや。

「尽きせざりつる御けしきに、いとど思ひ知らるる身のほどを。堪へぬ心に  
また消えぬべきも、

とがむなよ忍びにしぼる手もたゆみ

今日あらはるる袖のしづくを」

など、いと馴れ顔なり。うち笑みて、

「手をいみじうも書きなられにけるかな」

などのたまふも、昔の名残なし。

「いとけやけうも仕うまつるかな」

と、うち乱れたまひて、

「年経にけるこの家の」

と、うち加へたまへる御声、いとおもしろし。をかしきほどに乱りがはしき御遊びにて、もの思ひ残らずなりぬめり。

やうやう夜更け行くほどに、いたうそら悩みして、

「乱り心地いと堪へがたうて、まかでむ空もほとほとしようこそはべりぬべけれ。宿直所譲りたまひてむや」

と、中将に愁へたまふ。大臣、

「朝臣や、御休み所求めよ。翁いたう酔ひ進みて無礼なれば、まかり入りぬ」

と言ひ捨てて、入りたまひぬ。

中将、

「花の蔭の旅寝よ。いかにぞや、苦しきしるべにぞはべるや」

と言へば、

「松に契れるは、あだなる花かは。ゆゆしや」

と責めたまふ。中将は、心のうちに、「ねたのわざや」と思ふところあれど、人ぎまの思ふさまにめでたきに、「かうもあり果てなむ」と、心寄せわたることなれば、うしろやすく導きつ。

男君は、夢かとおぼえたまふにも、わが身いとどいつかしうぞおぼえたまひけむかし。女は、いと恥づかしと思ひしみてものしたまふも、ねびまされる御ありさま、いとど飽かぬところなくめやすし。

「世の例にもなりぬべかりつる身を、心もてこそ、かうまでも思し許さるめれ。あはれを知りたまはぬも、さま異なるわざかな」

と、怨みきこえたまふ。

「少将の進み出だしつる『葦垣』の趣きは、耳とどめたまひつや。いたき主

べくや。なにがしの教へも、よく思し知るらむと思ひたまふるを、いたう心悩  
ましたまふと、恨みきこゆべくなむ」

などのたまひて、酔ひ泣きにや、をかしきほどにけしきばみたまふ。

「いかでか。昔を思うたまへ出づる御変はりどもには、身を捨つるさまにも  
とこそ、思うたまへ知りはべるを、いかに御覧じなすことにかはべらむ。もと  
より、おろかなる心のおこたりにこそ」

と、かしこまりきこえたまふ。御時よく、さうどきて、

「藤の裏葉の」

とうち誦じたまへる、御けしきを賜はりて、頭中將、花の色濃く、ことに房  
長きを折りて、客人の御盃に加ふ。取りて、もて悩むに、大臣、

「紫にかことはかけむ藤の花

まつより過ぎてうれたけれども」

宰相、盃を持ちながら、けしきばかり拝したてまつりたまへるさま、いとよ  
しあり。

「いく返り露けき春を過ぐし来て

花の紐解く折にあふらむ」

頭中將に賜へば、

「たをやめの袖にまがへる藤の花

見る人からや色もまさらむ」

次々順流るめれど、酔ひの紛れにはかばかしからで、これよりまさらず。

七日の夕月夜、影ほのかなるに、池の鏡のどかに澄みわたれり。げに、まだ  
ほのかなる梢どもの、さうぎうしきころなるに、いたうけしきばみ横たはれる  
松の、木高きほどにはあらぬに、かかれる花のさま、世の常ならずおもしろし。

例の、弁少將、声いとなつかしくて、「葦垣」を謡ふ。大臣、

入れたてまつる。いづれとなくをかしき容貌どもなれど、なほ、人にすぐれて、あざやかにきよらなるものから、なつかしう、よしづき、恥づかしげなり。

大臣、御座ひきつくろはせなどしたまふ御用意、おろかならず。御冠などしたまひて、出でたまふとて、北の方、若き女房などに、

「覗きて見たまへ。いと警策にねびまさる人なり。用意などいと静かに、ものものしや。あざやかに、抜け出でおよすけたる方は、父大臣にもまさりざまにこそあめれ。

かれは、ただいと切になまめかしう愛敬づきて、見るに笑ましく、世の中忘るる心地ぞしたまふ。公ぎまは、すこしたはれて、あざれたる方なりし、ことわりぞかし。

これは、才の際もまさり、心もちる男々しく、すぐよかに足らひたりと、世におぼえたためり」

などのたまひてぞ、対面したまふ。ものまめやかに、むべむべしき御物語は、すこしばかりにて、花の興に移りたまひぬ。

「春の花、いづれとなく、皆開け出づる色ごとに、目おどろかぬはなきを、心短くうち捨てて散りぬるが、恨めしうおぼゆるころほひ、この花のひとり立ち後れて、夏に咲きかかるほどなむ、あやしう心にくくあはれにおぼえはべる。色もはた、なつかしきゆかりにしつべし」

とて、うちほほ笑みたまへる、けしきありて、匂ひきよげなり。

月はさし出でぬれど、花の色さだかにも見えぬほどなるを、もてあそぶに心を寄せて、大酒参り、御遊びなどしたまふ。大臣、ほどなく空酔ひをしたまひて、乱りがはしく強ひ酔はしたまふを、さる心して、いたうすまひ悩めり。

「君は、末の世にはあまるまで、天の下の有職にもしたまふめるを、齢古りぬる人、思ひ捨てたまふなむつらかりける。文籍にも、家礼といふことある

「なかなか折りやまどはむ藤の花

たそかれ時のたどたどしくは」

と聞こえて、

「口惜しくこそ臆しにけれ。取り直したまへよ」

と聞こえたまふ。

「御供にこそ」

とのたまへば、

「わづらはしき隨身は、否」

とて、返しつ。

大臣の御前に、かくなむ、とて、御覽ぜさせたまふ。

「思ふやうありてものしたまひつるにやあらむ。さも進みものしたまはばこそは、過ぎにし方の孝なかりし恨みも解けめ」

とのたまふ。御心おごり、こよなうねたげなり。

「さしもはべらじ。対の前の藤、常よりもおもしろう咲きてはべるなるを、静かなるころほひなれば、遊びせむなどにやはべらむ」

と申したまふ。

「わざと使ひさされたりけるを、早うものしたまへ」

と許したまふ。いかならむと、下には苦しう、ただならず。

「直衣こそあまり濃くて、軽びためれ。非参議のほど、何となき若人こそ、

二藍はよけれ、ひき繕はむや」

とて、わが御料の心ことなるに、えならぬ御衣ども具して、御供に持たせてたてまつれたまふ。

わが御方にて、心づかひいみじう化粧じて、たそかれも過ぎ、心やましきほどに参うでたまへり。主人の君達、中将をはじめて、七、八人うち連れて迎へ

のけしきに、いとどうちしめりて、「雨気あり」と、人びとの騒ぐに、なほ眺め入りてゐたまへり。心ときめきに見たまふことやありけむ、袖を引き寄せて、「などか、いとこよなくは勘じたまへる。今日の御法の縁をも尋ね思さば、罪許したまひてよや。残り少なくなりゆく末の世に、思ひ捨てたまへるも、恨みきこゆべくなむ」

とのたまへば、うちかしまりて、

「過ぎにし御おもむけも、頼みきこえさすべきさまに、うけたまはりおくことはべりしかど、許しなき御けしきに、憚りつつなむ」

と聞こえたまふ。

心あわたたしき雨風に、皆ちりぢりに競ひ帰りたまひぬ。君、「いかに思ひて、例ならずけしきばみたまひつらむ」など、世とともに心をかけたる御あたりなれば、はかなきことなれど、耳とまりて、とやかうやと思ひ明かしたまふ。

ここらの年ごろの思ひのしるしにや、かの大臣も、名残なく思し弱りて、はかなきついで、わざとはなく、さすがにつきづきしからむを思すに、四月の朔日ごろ、御前の藤の花、いとおもしろう咲き乱れて、世の常の色ならず、ただに見過ぐさむこと惜しき盛りなるに、遊びなどしたまひて、暮れ行くほどの、いとど色まされるに、頭中将して、御消息あり。

「一日の花の蔭の対面の、飽かずおぼえはべりしを、御暇あらば、立ち寄りたまひなむや」

とあり。御文には、

「わが宿の藤の色濃きたそかれに

尋ねやは来ぬ春の名残を」

げに、いとおもしろき枝につけたまへり。待ちつけたまへるも、心ときめきせられて、かしまりきこえたまふ。

御いそぎのほどにも、宰相中将は眺めがちにて、ほればれしき心地するを、「かつはあやしく、わが心ながら執念きぞかし。あながちにかう思ふことならば、関守の、うちも寝ぬべきけしきに思ひ弱りたまふなるを聞きながら、同じくは、人悪からぬさまに見果てむ」と念ずるも、苦しう思ひ乱れたまふ。

女君も、大臣のかすめたまひしことの筋を、「もし、さもあらば、何の名残かは」と嘆かしうて、あやしく背き背きに、さすがなる御もろ恋なり。

大臣も、さこそ心強がりたまひしかど、たけからぬに思しわづらひて、「かの宮にも、さやうに思ひ立ち果てたまひなば、またとかく改め思ひかかづらはむほど、人のためも苦しう、わが御方さまにも人笑はれに、おのづから軽々しきことやまじらむ。忍ぶとすれど、うちうちのことあやまりも、世に漏りにたるべし。とかく紛らはして、なほ負けぬべきなめり」と、思しなりぬ。

上はつれなくて、恨み解けぬ御仲なれば、「ゆくりなく言ひ寄らむもいかが」と、思し憚りて、「ことごとしくもてなきむも、人の思はむところをこなり。いかなるついでしてかはほのめかすべき」など思すに、三月二十日、大殿の大宮の御忌日にて、極楽寺に詣でたまへり。

君達皆ひき連れ、勢ひあらまほしく、上達部などもあまた参り集ひたまへるに、宰相中将、をさをさけはひ劣らず、よそほしくて、容貌など、ただ今のいみじき盛りにねびゆきて、取り集めめでたき人の御ありさまなり。

この大臣をば、つらしと思ひきこえたまひしより、見えたてまつるも、心づかひせられて、いといたう用意し、もてしづめてものしたまふを、大臣も、常よりは目とどめたまふ。御誦経など、六条院よりもせさせたまへり。宰相君は、まして、よろづをとりもちて、あはれにいとなみ仕うまつりたまふ。

夕かけて、皆帰りたまふほど、花は皆散り乱れ、霞たどたどしきに、大臣、昔を思し出でて、なまめかしううそぶき眺めたまふ。宰相も、あはれなる夕べ

藤裏葉

藤  
裏  
葉

御文は、思ひあまりたまふ折々、あはれに心深きさまに聞こえたまふ。「誰がまことをか」と思ひながら、世馴れたる人こそ、あながちに人の心をも疑ふなれ、あはれと見たまふふし多かり。

「中務宮なむ、大殿にも御けしき賜はりて、さもやと、思し交はしたなる」と人の聞こえければ、大臣は、ひき返し御胸ふたがるべし。忍びて、「さることをこそ聞きしか。情けなき人の御心にもありけるかな。大臣の、口入れたまひしに、執念かりきとて、引き違へたまふなるべし。心弱くなびきても、人笑へならましこと」

など、涙を浮けてのたまへば、姫君、いと恥づかしきにも、そこはかたなく涙のこぼるれば、はしたなくて背きたまへる、らうたげさ限りなし。

「いかにせまし。なほや進み出でて、けしきをとらまし」  
など、思し乱れて立ちたまひぬる名残も、やがて端近う眺めたまふ。

「あやしく、心おくれても進み出でつる涙かな。いかに思しつらむ」  
など、よろづに思ひるたまへるほどに、御文あり。さすがにぞ見たまふ。こまやかにて、

「つれなさは憂き世の常になりゆくを  
忘れぬ人や人にことなる」

とあり。「けしきばかりもかすめぬ、つれなさよ」と、思ひ続けたまふは憂けれど、

「限りとて忘れがたきを忘るるも  
こや世になびく心なるらむ」

とあるを、「あやし」と、うち置かれず、傾きつつ見るたまへり。

たまふ。

「かやうのことは、かしこき御教へにだに従ふべくもおぼえざりしかば、言まぜま憂けれど、今思ひあはするには、かの御教へこそ、長き例にはありけれ。つれづれのものすれば、思ふところあるにやと、世人も推し量るらむを、宿世の引く方にて、なほなほしきことにありありてなびく、いと尻びに、人悪ろきことぞや。

いみじう思ひのぼれど、心にしもかなはず、限りのあるものから、好き好きしき心つかはるな。いはけなくより、宮の内に生ひ出でて、身を心にまかせず、所狭く、いささかの事のあやまりもあらば、軽々しきそしりをや負はむと、つみしだに、なほ好き好きしき咎を負ひて、世にはしたなめられき。

位浅く、何となき身のほど、うちとけ、心のままなる振る舞ひなどものせらるな。心おのづからおごりぬれば、思ひしづむべきくさはひなき時、女のことにてなむ、かしこき人、昔も乱るる例ありける。

さるまじきことに心をつけて、人の名をも立て、みづからも恨みを負ふなむ、つひのほだしとなりける。とりあやまりつつ見む人の、わが心にかなはず、忍ばむこと難き節ありとも、なほ思ひ返さむ心をならひて、もしは親の心にゆづり、もしは親なくて世の中かたほにありとも、人柄心苦しうなどあらむ人をば、それを片かどに寄せても見たまへ。わがため、人のため、つひによかるべき心ぞ深うあるべき」

など、のどやかにつれづれなる折は、かかる御心づかひをのみ教へたまふ。

かやうなる御諫めにつきて、戯れにても他ぎまの心を思ひかかるは、あはれに、人やりならずおぼえたまふ。女も、常よりことに、大臣の思ひ嘆きたまへる御けしきに、恥づかしう、憂き身と思し沈めど、上はつれなくおほどかにて、眺め過ぐしたまふ。

沈の筥に入れて、いみじき高麗笛添へて、奉れたまふ。

またこのころは、ただ仮名の定めをしたまひて、世の中に手書くとおぼえたる、上中下の人びとにも、さるべきものども思しはからひて、尋ねつつ書かせたまふ。この御筥には、立ち下れるをば混ぜたまはず、わざと、人のほど、品分かせたまひつつ、草子、巻物、皆書かせたてまつりたまふ。

よろづにめづらかなる御宝物ども、人の朝廷までありがたげなる中に、この本どもなむ、ゆかすと心動きたまふ若人、世に多かりける。御絵どもととのへさせたまふ中に、かの『須磨の日記』は、末にも伝へ知らせむと思せど、「今すこし世をも思し知りなむに」と思し返して、まだ取り出でたまはず。

内の大臣は、この御いそぎを、人の上にて聞きたまふも、いみじう心もとなく、さうぎうしと思す。姫君の御ありさま、盛りにととのひて、あたらしううつくしげなり。つれづれとうちしめりたまへるほど、いみじき御嘆きぐさなるに、かの人の御けしき、はた、同じやうになだらかなれば、「心弱く進み寄らむも、人笑はれに、人のねむごろなりしきぎみに、なびきなましかば」など、人知れず思し嘆きて、一方に罪をもおほせたまはず。

かくすこしたわみたまへる御けしきを、宰相の君は聞きたまへど、しばしつらかりし御心を憂しと思へば、つれなくもてなし、しづめて、さすがに他ざまの心はつくべくもおぼえず、心づから戯れにくき折多かれど、「浅緑」聞こえごちし御乳母どもに、納言に昇りて見えむの御心深かるべし。

大臣は、「あやしう浮きたるさまかな」と、思し悩みて、

「かのわたりのこと、思ひ絶えにたらば、右大臣、中務宮などの、けしきばみ言はせたまふめるを、いづくも思ひ定められよ」

とのたまへど、ものも聞こえたまはず、かしこまりたる御さまにてさぶらひ

て澄まぬ心地して、いたはり加へたるけしきなり。歌なども、ことさらめきて、選り書きたり。

女の御は、まほにも取り出でたまはず。齋院のなどは、まして取う出たまはざりけり。葦手の草子どもぞ、心々にはかなうをかしき。

宰相中将のは、水の勢ひ豊に書きなし、そそけたる葦の生ひざまなど、難波の浦に通ひて、こなたかなたいきまじりて、いたう澄みたるどころあり。また、いとかめしう、ひきかへて、文字やう、石などのたたずまひ、好み書きたまへる枚もあめり。

「目も及ばず。これは暇いりぬべきものかな」

と、興じめでたまふ。何事ももの好みし、艶がりおはする親王にて、いといみじうめできこえたまふ。

今日はまた、手のことどものたまひ暮らし、さまざまの継紙の本ども、選り出でさせたまへるついでに、御子の侍従して、宮にさぶらふ本ども取りに遣はす。

嵯峨の帝の、『古万葉集』を選び書かせたまへる四卷、延喜の帝の、『古今和歌集』を、唐の浅縹の紙を継ぎて、同じ色の濃き紋の綺の表紙、同じき玉の軸、緞の唐組の紐など、なまめかしうて、巻ごとに御手の筋を変へつつ、いみじう書き尽くさせたまへる、大殿油短く参りて御覧ずるに、

「尽きせぬものかな。このころの人は、ただかたそばをけしきばむにこそありけれ」

など、めでたまふ。やがてこれはとどめたてまつりたまふ。

「女子などを持てはべらましにだに、をさをさ見はやすまじきには伝ふまじきを、まして、朽ちぬべきを」

など聞こえてたてまつれたまふ。侍従に、唐の本などのいとわざとがましき、

たてまつる。うちかしこまりて、かたみにうるはしだちたまへるも、いとぎよらなり。

「つれづれに籠もりはべるも、苦しきまで思うたまへらるる心のどけさに、折よく渡らせたまへる」

と、よろこびきこえたまふ。かの御草子待たせて渡りたまへるなりけり。やがて御覧ずれば、すぐれてしもあらぬ御手を、ただかたかどに、いといたう筆澄みたるけしきありて書きなしたまへり。歌も、ことさらめき、そばみたる古言どもを選びて、ただ三行ばかりに、文字少なに好ましくぞ書きたまへる。大臣、御覧じ驚きぬ。

「かうまでは思ひたまへずこそありつれ。さらに筆投げ捨てつべしや」と、ねたがりたまふ。

「かかる御中に面なくくだす筆のほど、さりとともなむ思うたまふる」など、戯れたまふ。

書きたまへる草子どもも、隠したまふべきならねば、取う出たまひて、かたみに御覧ず。

唐の紙の、いとすくみたるに、草書きたまへる、すぐれてめでたしと見たまふに、高麗の紙の、肌こまかに和うなつかしきが、色などははなやかならで、なまめきたるに、おほどかなる女手の、うるはしう心とどめて書きたまへる、たとふべきかたなし。

見たまふ人の涙さへ、水茎に流れ添ふ心地して、飽く世あるまじきに、また、ここの紙屋の色紙の、色あひはなやかなるに、乱れたる草の歌を、筆にまかせて乱れ書きたまへる、見所限りなし。しどろもどろに愛敬づき、見まほしければ、さらに残りどもに目も見やりたまはず。

左衛門督は、ことごとしうかしこげなる筋をのみ好みて書きたれど、筆の掟

とて、まだ書かぬ草子ども作り加へて、表紙、紐などいみじうせさせたまふ。  
「兵部卿宮、左衛門督などにもものせむ。みづから一具は書くべし。けしきば  
みいますがりとも、え書き並べじや」

と、われぼめをしたまふ。

墨、筆、並びなく選り出でて、例の所々に、ただならぬ御消息あれば、人び  
と、難きことに思ひて、返さひ申したまふもあれば、まめやかに聞こえたまふ。  
高麗の紙の薄様だちたるが、せめてなまめかしきを、

「この、もの好みする若き人びと、試みむ」

とて、宰相中將、式部卿宮の兵衛督、内の大殿の頭中將などに、

「葦手、歌絵を、思ひ思ひに書け」

とのたまへば、皆心々に挑むべかめり。

例の寢殿に離れおはしまして書きたまふ。花ざかり過ぎて、浅緑なる空うら  
らかなるに、古き言どもなど思ひすましたまひて、御心のゆく限り、草のも、  
ただのも、女手も、いみじう書き尽くしたまふ。

御前に人しげからず、女房二、三人ばかり、墨など擦らせたまひて、ゆゑあ  
る古き集の歌など、いかにぞやなど選り出でたまふに、口惜しからぬ限りさぶ  
らふ。

御簾上げわたして、脇息の上に草子うち置き、端近くうち乱れて、筆の尻く  
はへて、思ひめぐらしたまへるさま、飽く世なくめでたし。白き赤きなど、掲  
焉なる枚は、筆とり直し、用意したまへるさまさへ、見知らむ人は、げにめで  
ぬべき御ありさまなり。

「兵部卿宮渡りたまふ」と聞こゆれば、おどろきて、御直衣たてまつり、御  
茵参り添へさせたまひて、やがて待ち取り、入れたてまつりたまふ。この宮も  
いときよげにて、御階さまよく歩み昇りたまふほど、内にも人びとのぞきて見

草子の筈に入るべき草子どもの、やがて本にもしたまふべきを選らせたまふ。いにしへの上なき際の御手どもの、世に名を残したまへるたぐひのも、いと多くさぶらふ。

「よろづのこと、昔には劣りざまに、浅くなりゆく世の末なれど、仮名のみなむ、今の世はいと際なくなりたる。古き跡は、定まれるやうにはあれど、広き心ゆたかならず、一筋に通ひてなむありける。

妙にをかしきことは、外よりてこそ書き出づる人びとありけれど、女手を心に入れて習ひし盛りに、こともなき手本多く集へたりしなかに、中宮の母御息所の、心にも入れず走り書いたまへりし一行ばかり、わぎとならぬを得て、際ことにおぼえしはや。

さて、あるまじき御名も立てきこえしぞかし。悔しきことに思ひしみたまへりしかど、さしもあらざりけり。宮にかく後見仕うまつることを、心深うおはせしかば、亡き御影にも見直したまふらむ。

宮の御手は、こまかにをかしげなれど、かどや後れたらむ」と、うちささめきて聞こえたまふ。

「故入道宮の御手は、いとけしき深うなまめきたる筋はありしかど、弱きところありて、にほひぞすくなかりし。

院の尚侍こそ、今の世の上手におはすれど、あまりそぼれて癖ぞ添ひためる。

さはありとも、かの君と、前齋院と、ここにこそは、書きたまはめ」と、聴しきこえたまへば、

「この数には、まばゆくや」と聞こえたまへば、

「いたうな過ぐしたまひそ。にこやかなる方のなつかしきは、ことなるものを。真名のすすみたるほどに、仮名はしどけなき文字こそ混じるめれ」

後の世のためしにやと、心狭く忍び思ひたまふる」

など聞こえたまふ。宮、

「いかなるべきことも思うたまへ分きはべらざりつるを、かうことごとしうとりなさせたまふになむ、なかなか心おかれぬべく」

と、のたまひ消つほどの御けはひ、いと若く愛敬づきたるに、大臣も、思すさまにをかしき御けはひどもの、さし集ひたまへるを、あはひめでたく思さる。母君の、かかる折だにえ見たてまつらぬを、いみじと思へりしも心苦しうて、参う上らせやせましと思せど、人のもの言ひをつつみて、過ぐしたまひつ。

かかる所の儀式は、よろしきにだに、いとこと多くうるさきを、片端ばかり、例のしどけなくまねばむもなかなかやとて、こまかに書かず。

春宮の御元服は、二十余日のほどになむありける。いと大人しくおはしませば、人の女ども競ひ参らすべきことを、心ざし思すなれど、この殿の思しきざすさまの、いとことなれば、なかなかにてや交じらはむと、左の大臣なども、思しとどまるなるを聞こしめして、

「いとたいだいしきことなり。宮仕への筋は、あまたあるなかに、すこしのけぢめを挑まむこそ本意ならめ。そこらの警策の姫君たち、引き籠められなば、世に映えあらじ」

とのたまひて、御参り延びぬ。次々にもとしづめたまひけるを、かかるよし所々に聞きたまひて、左大臣殿の三の君参りたまひぬ。麗景殿と聞こゆ。

この御方は、昔の御宿直所、淑景舎を改めしつらひて、御参り延びぬるを、宮にも心もとながらせたまへば、四月にと定めさせたまふ。御調度どもも、もとあるよりもとのへて、御みづからも、もの下形、絵様などをも御覧じ入れつつ、すぐれたる道々の上手どもを召し集めて、こまかに磨きととのへさせたまふ。

とりあへぬまで吹きや寄るべき  
情けなく」

と、皆うち笑ひたまふ。弁少将、

「霞だに月と花とを隔てずは

ねぐらの鳥もほころびなまし」

まことに、明け方になりてぞ、宮歸りたまふ。御贈り物に、みづからの御料の御直衣の御よそひ一領、手触れたまはぬ薰物二壺添へて、御車にたてまつらせたまふ。宮、

「花の香をえならぬ袖にうつしもて

ことあやまりと妹やとがめむ」

とあれば、

「いと屈したりや」

と笑ひたまふ。御車かくるほどに、追ひて、

「めづらしと故里人も待ちぞ見む

花の錦を着て帰る君

またなきことと思さるらむ」

とあれば、いといたうからがりたまふ。次々の君達にも、ことことしからぬさまに、細長、小桂などかづけたまふ。

かくて、西の御殿に、戌の時に渡りたまふ。宮のおはします西の放出をしつらひて、御髪上の内侍なども、やがてこなたに参れり。上も、このついでに、中宮に御対面あり。御方々の女房、押しあはせたる、数しらず見えたり。

子の時に御裳たてまつる。大殿油ほのかなれど、御けはひいとめでたしと、宮は見たてまつれたまふ。大臣、

「思し捨つまじきを頼みにて、なめげなる姿を、進み御覽ぜられはべるなり。

月さし出でぬれば、大御酒など参りて、昔の御物語などしたまふ。霞める月の影心にくきを、雨の名残の風すこし吹きて、花の香なつかしきに、御殿のあたり言ひ知らず匂ひ満ちて、人の御心地いと艶あり。

蔵人所の方にも、明日の御遊びのうちならしに、御琴どもの装束などして、殿上人などあまた参りて、をかしき笛の音ども聞こゆ。

内の大殿の頭中将、弁少将なども、見参ばかりにてまかづるを、とどめさせたまひて、御琴ども召す。

宮の御前に琵琶、大臣に箏の御琴参りて、頭中将、和琴賜はりて、はなやかに掻きたてたるほど、いとおもしろく聞こゆ。宰相中将、横笛吹きたまふ。折にあひたる調子、雲居とほるばかり吹きたてたり。弁少将、拍子取りて、「梅が枝」出だしたるほど、いとをかし。童にて、韻塞ぎの折、「高砂」謡ひし君なり。宮も大臣もさしいらへしたまひて、ことことしからぬものから、をかしき夜の御遊びなり。

御土器参るに、宮、

「鶯の声にやいとどあくがれむ

心しめつる花のあたりに

千代も経ぬべし」

と聞こえたまへば、

「色も香もうつるばかりにこの春は

花咲く宿をかれずもあらなむ」

頭中将に賜へば、取りて、宰相中将にさす。

「鶯のねぐらの枝もなびくまで

なほ吹きとほせ夜半の笛竹」

宰相中将、

「心ありて風の避くめる花の木に

ささかの咎を分きて、あながちに劣りまさりのけぢめをおきたまふ。かのわが御二種のは、今ぞ取う出させたまふ。

右近の陣の御溝水のほとりになずらへて、西の渡殿の下より出づる汀近う埋ませたまへるを、惟光の宰相の子の兵衛尉、堀りて参れり。宰相中将、取りて伝へ参らせたまふ。宮、

「いと苦しき判者にも当たりてはべるかな。いと煙たしや」

と、悩みたまふ。同じうこそは、いづくにも散りつつ広ざるべかめるを、人びとの心々に合はせたまへる、深さ浅さを、かぎあはせたまへるに、いと興あること多かり。

さらにいづれともなき中に、齋院の御黒方、さいへども、心にくくしづやかなる匂ひ、ことなり。侍従は、大臣の御は、すぐれてなまめかしうなつかしき香なりと定めたまふ。

対の上の御は、三種ある中に、梅花、はなやかに今めかしう、すこしはやき心しつらひを添へて、めづらしき薫り加はれり。

「このころの風にたぐへむには、さらにこれにまさる匂ひあらじ」とめでたまふ。

夏の御方には、人びとの、かう心々に挑みたまふなる中に、数々にも立ち出でずやと、煙をさへ思ひ消えたまへる御心にて、ただ荷葉を一種合はせたまへり。さま変はりしめやかなる香して、あはれになつかし。

冬の御方にも、時々によれる匂ひの定まれるに消たれむもあいなしと思して、薫衣香の方のすぐれたるは、前の朱雀院のをうつさせたまひて、公忠朝臣の、ことに選び仕うまつれりし百歩の方など思ひ得て、世に似ずなまめかしきを取り集めたる、心おきてすぐれたりと、いづれをも無徳ならず定めたまふを、

「心ぎたなき判者なめり」

と聞こえたまふ。

宮、

「うちのこと思ひやらるる御文かな。何ごとの隠ろへあるにか、深く隠したまふ」

と恨みて、いとゆかしと思したり。

「何ごとかはべらむ。隈々しく思したるこそ、苦しけれ」

とて、御硯のついでに、

「花の枝にいとど心をしむるかな

人のとがめむ香をばつつめど」

とやありつらむ。

「まめやかには、好き好きしきやうなれど、またもなかめる人の上にて、これこそはことわりのいとなみなめれと、思ひたまへなしてなむ。いと醜ければ、疎き人はかたはらいたさに、中宮まかでさせたてまつりてと思ひたまふる。親しきほどに馴れきこえかよへど、恥づかしきところの深うおはする宮なれば、何ごとも世の常にて見せたてまつらむ、かたじけなくてなむ」

など、聞こえたまふ。

「あえものも、げに、かならず思し寄るべきことなりけり」

と、ことわり申したまふ。

このついでに、御方々の合はせたまふども、おのおの御使して、

「この夕暮れのしめりにこころみむ」

と聞こえたまへれば、さまさまをかしうしなして奉りたまへり。

「これ分かせたまへ。誰れにか見せむ」

と聞こえたまひて、御火取りども召して、こころみさせたまふ。

「知る人にもあらずや」

と卑下したまへど、言ひ知らぬ匂ひどもの、進み遅れたる香一種などが、い

へも、目馴れぬさまに、今めかしう、やう変へさせたまへるに、所々の心を尽くしたまへらむ匂ひどもの、すぐれたらむどもを、かぎあはせて入れむと思すなりけり。

二月の十日、雨すこし降りて、御前近き紅梅盛りに、色も香も似るものなきほどに、兵部卿宮渡りたまへり。御いそぎの今日明日になりにけることども、訪らひきこえたまふ。昔より取り分きたる御仲なれば、隔てなく、そのことかのこと、と聞こえあはせたまひて、花をめでつつおはするほどに、前齋院よりとて、散りすきたる梅の枝につけたる御文持て参れり。宮、聞こしめすこともあれば、

「いかなる御消息のすすみ参れるにか」

とて、をかしと思したれば、ほほ笑みて、

「いと馴れ馴れしきこと聞こえつけたりしを、まめやかに急ぎものしたまへるなめり」

とて、御文は引き隠したまひつ。

沈の筥に、瑠璃の坏二つ据ゑて、大きにまろがしつゝ入れたまへり。心葉、紺瑠璃には五葉の枝、白きには梅を選びて、同じくひき結びたる糸のさまも、なよびやかになまめかしうぞしたまへる。

「艶あるものさまかな」

とて、御目止めたまへるに、

「花の香は散りにし枝にとまらねど

うつらむ袖に浅くしまめや」

ほのかなるを御覧じつけて、宮はことごとしう誦じたまふ。

宰相中将、御使尋ねとどめさせたまひて、いたう酔はしたまふ。紅梅襲の唐の細長添へたる女の装束かづけたまふ。御返りもその色の紙にて、御前の花を折らせてつけさせたまふ。

御裳着のこと、思しいそぐ御心おきて、世の常ならず。春宮も同じ二月に、御かうぶりのことあるべければ、やがて御参りもうち続くべきにや。

正月の晦日なれば、公私のどやかなるころほひに、薰物合はせたまふ。大弐の奉れる香ども御覧ずるに、「なほ、いにしへのには劣りてやあらむ」と思して、二条院の御倉開けさせたまひて、唐の物ども取り渡させたまひて、御覧じ比ぶるに、

「錦、綾なども、なほ古きものこそなつかしうこまやかにはありけれ」

とて、近き御しつらひの、物の覆ひ、敷物、茵などの端どもに、故院の御世の初めつ方、高麗人のたてまつれりける綾、緋金錦どもなど、今の世のものに似ず、なほさまざま御覧じあてつつせさせたまひて、このたびの綾、羅などは、人びとに賜はず。

香どもは、昔今の、取り並べさせたまひて、御方々に配りたてまつらせたまふ。

「二種づつ合はせさせたまへ」

と、聞こえさせたまへり。贈り物、上達部の禄など、世になきさまに、内にも外にも、ことしげくいとなみたまふに添へて、方々に選りとのへて、鉄臼の音耳かしかましきころなり。

大臣は、寝殿に離れおはしまして、承和の御いましめの二つの方を、いかでか御耳には伝へたまひけむ、心にしめて合はせたまふ。

上は、東の中の放出に、御しつらひことに深うしなさせたまひて、八条の式部卿の御方を伝へて、かたみに挑み合はせたまふほど、いみじう秘したまへば、

「匂ひの深さ浅さも、勝ち負けの定めあるべし」

と大臣のたまふ。人の御親げなき御あらそひ心なり。

いづ方にも、御前にさぶらふ人あまたならず。御調度どもも、そこのきよらを尽くしたまへるなかにも、香壺の御筥どものやう、壺の姿、火取りの心ば

梅 枝

梅

枝

へず思ひ寄りたまひつるゆゑゆゑしきなどを、をかしく御覧ず。御前なる人びともめであへり。大臣、

「この紅葉の御消息、いとねたげなめり。春の花盛りに、この御応へは聞こえたまへ。このころ紅葉を言ひ朽さむは、龍田姫の思はむこともあるを、さし退きて、花の蔭に立ち隠れてこそ、強きことは出で来ぬ」

と聞こえたまふも、いと若やかに尽きせぬ御ありさまの見どころ多かるに、いとど思ふやうなる御住まひにて、聞こえ通はしたまふ。

大堰の御方は、「かう方々の御移ろひ定まりて、数ならぬ人は、いつとなく紛らはさむ」と思して、神無月になむ渡りたまひける。御しつらひ、ことのありさま劣らずして、渡したてまつりたまふ。姫君の御ためを思せば、おほかたの作法も、けぢめこよなからず、いとものものしくもてなさせたまへり。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

今一方の御けしきも、をさをさ落としたまはで、侍従君添ひて、そなたはもてかしづきたまへば、げにかうもあるべきことなりけりと見えたり。

女房の曹司町ども、当て当てのこまけぞ、おほかたのことよりもめでたかりける。

五、六日過ぎて、中宮まかでさせたまふ。この御けしきはた、さは言へど、いと所狭し。御幸ひのすぐれたまへりけるをばさるものにて、御ありさまの心にくく重りかにおはしませば、世に重く思はれたまへること、すぐれてなむおはしましける。

この町々の中の隔てには、塀ども廊などを、とかく行き通はして、気近くをかしきあはひにしなしたまへり。

長月になれば、紅葉むらむら色づきて、宮の御前えも言はずおもしろし。風うち吹きたる夕暮に、御箱の蓋に、色々の花紅葉をこき混ぜて、こなたにたてまつらせたまへり。

大きやかなる童女の、濃き袷、紫苑の織物重ねて、赤朽葉の羅の汗衫、いといたうなれて、廊、渡殿の反橋を渡りて参る。うるはしき儀式なれど、童女のをかしきをなむ、え思し捨てざりける。さる所にさぶらひなれたれば、もてなし、ありさま、他のには似ず、このましうをかし。御消息には、

「心から春まつ園はわが宿の

紅葉を風につてにだに見よ」

若き人びと、御使もてはやすさまどもをかし。

御返りは、この御箱の蓋に苔敷き、巖などの心ばへして、五葉の枝に、

「風に散る紅葉は軽し春の色を

岩根の松にかけてこそ見ぬ」

この岩根の松も、こまかに見れば、えならぬ作りごとどもなりけり。とりあ

めて、さまざまに、御方々の御願ひの心ばへを造らせたまへり。

南の東は、山高く、春の花の木、数を尽くして植ゑ、池のさまおもしろくすぐれて、御前近き前栽、五葉、紅梅、桜、藤、山吹、岩躑躅などやうの、春のもてあそびをわざとは植ゑで、秋の前栽をば、むらむらほのかに混ぜたり。

中宮の御町をば、もとの山に、紅葉の色濃かるべき植木どもを添へて、泉の水遠く澄ましやり、水の音まさるべき巖立て加へ、滝落として、秋の野をはるかに作りたる、そのころにあひて、盛りに咲き乱れたり。嵯峨の大堰のわたり野山、無徳にけおされたる秋なり。

北の東は、涼しげなる泉ありて、夏の蔭によれり。前近き前栽、呉竹、下風涼しかるべく、木高き森のやうなる木ども木深くおもしろく、山里めきて、卯の花の垣根ことさらにしわたして、昔おぼゆる花橘、撫子、薔薇、苦丹などやうの花、草々を植ゑて、春秋の本草、そのなかにうち混ぜたり。東面は、分けて馬場の御殿作り、埒結ひて、五月の御遊び所にて、水のほとりに菖蒲植ゑ茂らせて、向かひに御厩して、世になき上馬どもをととのへ立てさせたまへり。

西の町は、北面築き分けて、御倉町なり。隔ての垣に松の木茂く、雪をもてあそびむたよりによせたり。冬のはじめの朝、霜むすぶべき菊の籬、われは顔なる柞原、をさをさ名も知らぬ深山木どもの、木深きなどを移し植ゑたり。

彼岸のころほひ渡りたまふ。ひとたびにと定めさせたまひしかど、騒がしきやうなりとて、中宮はすこし延べさせたまふ。例のおいらかにけしきばまぬ花散里ぞ、その夜、添ひて移ろひたまふ。

春の御しつらひは、このころに合はねど、いと心ことなり。御車十五、御前四位五位がちにて、六位殿上人などは、さるべき限りを選らせたまへり。こちたきほどにはあらず、世のそしりもやと省きたまへれば、何事もおどろおどろしういかめしきことはなし。

るに、大臣も、「げに、過ぐしがたきことどもなり」と思して、「さやうの御いそぎも、同じくめづらしからむ御家居にて」と、いそがせたまふ。

年返りて、ましてこの御いそぎのこと、御としみのこと、楽人、舞人の定めなどを、御心に入れていとなみたまふ。経、仏、法事の日の装束、禄などをなむ、上はいそがせたまひける。

東の院に、分けてしたまふことどもあり。御なからひ、ましていとみやびかに聞こえ交はしてなむ、過ぐしたまひける。

世の中響きゆすれる御いそぎなるを、式部卿宮にも聞こしめして、

「年ごろ、世の中にはあまねき御心なれど、このわたりをばあやにくに情けなく、事に触れてはしたなめ、宮人をも御用意なく、愁はしきことのみ多かるに、つらしと思ひ置きたまふことこそはありけめ」

と、いとほしくもからくも思しけるを、かくあまたかかづらひたまへる人びと多かるなかに、取りわきたる御思ひすぐれて、世に心にくくめでたきことに、思ひかしづかれたまへる御宿世をぞ、わが家まではにほひ来ねど、面目に思すに、また、

「かくこの世にあまるまで、響かし宮みたまふは、おぼえぬ齡の末の栄えにもあるべきかな」

と喜びたまふを、北の方は、「心ゆかず、ものし」とのみ思したり。女御、御まじらひのほどなどにも、大臣の御用意なきやうなるを、いよいよ恨めしと思ひしみたまへるなるべし。

八月にぞ、六条院造り果てて渡りたまふ。未申の町は、中宮の御古宮なれば、やがておはしますべし。辰巳は、殿のおはすべき町なり。丑寅は、東の院に住みたまふ対の御方、戌亥の町は、明石の御方と思しおきてさせたまへり。もとありける池山をも、便なき所なるをば崩し変へて、水の趣き、山のおきてを改

「ことさらにさぶらひてなむ」

と聞こえたまふ。のどやかならで帰らせたまふ響きにも、后は、なほ胸うち騒ぎて、

「いかに思し出づらむ。世をたもちたまふべき御宿世は、消たれぬものこそ」

と、いにしへを悔い思す。

尚侍の君も、のどやかに思し出づるに、あはれなること多かり。今もさるべき折、風のつてにもほのめききこえたまふこと絶えざるべし。

后は、朝廷に奏せさせたまふことある時々ぞ、御たうばりの年官年爵、何くれのことに触れつつ、御心のかなはぬ時ぞ、「命長くてかかる世の末を見ること」と、取り返さまほしう、よろづ思しむつかりける。

老いもおはするままに、さがなさまさりて、院もくらべ苦しう、たとへがたくぞ思ひきこえたまひける。

かくて、大学の君、その日の文うつくしう作りたまひて、進士になりたまひぬ。年積もれるかしこき者どもを選らばせたまひしかど、及第の人、わづかに三人なむありける。

秋の司召に、かうぶり得て、侍従になりたまひぬ。かの人の御こと、忘るる世なけれど、大臣の切にまもりきこえたまふもつらければ、わりなくてなども対面したまはず。御消息ばかり、さりぬべきたよりに聞こえたまひて、かたみに心苦しき御仲なり。

大殿、静かなる御住まひを、同じくは広く見どころありて、ここかしこにておぼつかなき山里人なども、集へ住ませむの御心にて、六条京極のわたりに、中宮の御古き宮のほとりを、四町をこめて造らせたまふ。

式部卿宮、明けむ年ぞ五十になりたまひける御賀のこと、対の上思しまうく

あざやかに奏しなしたまへる、用意ことにめでたし。取らせたまひて、

「鶯の昔を恋ひてさへづるは

木伝ふ花の色やあせたる」

とのたまはする御ありさま、こよなくゆゑゆゑしくおはします。これは御私さまに、うちうちのことなれば、あまたにも流れずやなりにけむ、また書き落してけるにやあらむ。

楽所遠くておぼつかなければ、御前に御琴ども召す。兵部卿宮、琵琶。内大臣、和琴。箏の御琴、院の御前に参りて、琴は、例の太政大臣に賜はりたまふ。せめきこえたまふ。さるいみじき上手のすぐれたる御手づかひどもの、尽くしたまへる音は、たとへむかたなし。唱歌の殿上人あまたさぶらふ。「安名尊」遊びて、次に「桜人」。月おぼろにさし出でてをかしきほどに、中島のわたりに、ここかしこ篝火ども灯して、大御遊びはやみぬ。

夜更けぬれど、かかるついでに、大後の宮おはします方を、よきて訪らひきこえさせたまはざらむも、情けなければ、帰さに渡らせたまふ。大臣もろともにさぶらひたまふ。

后待ち喜びたまひて、御対面あり。いといたうさだ過ぎたまひにける御けはひにも、故宮を思ひ出できこえたまひて、「かく長くおはしますたぐひもおはしけるものを」と、口惜しう思ほす。

「今はかく古りぬる齢に、よろづのこと忘れはべりにけるを、いとかたじけなく渡りおはしまいたるになむ、さらに昔の御世のこと思ひ出でられはべる」と、うち泣きたまふ。

「さるべき御蔭どもに後れはべりてのち、春のけぢめも思うたまへわかれぬを、今日なむ慰めはべりぬる。またまたも」

と聞こえたまふ。大臣もさるべきさまに聞こえて、

人びとみな、青色に、桜襲を着たまふ。帝は、赤色の御衣たてまつれり。召しありて、太政大臣参りたまふ。おなじ赤色を着たまへれば、いよいよひとつものとかかやきて見えまがはせたまふ。人びとの装束、用意、常にことなり。院も、いときよらにねびまさらせたまひて、御さまの用意、なまめきたる方に進ませたまへり。

今日は、わざとの文人も召さず、ただその才かしこしと聞こえたる学生十人を召す。式部の司の試みの題をなずらへて、御題賜ふ。大殿の太郎君の試みたまふべきなめり。臆だかき者どもは、ものもおぼえず、繋がぬ舟に乗りて池に放れ出でて、いと術なげなり。

日やうやうくだりて、楽の舟ども漕ぎまひて、調子ども奏するほどの、山風の響きおもしろく吹きあはせたるに、冠者の君は、

「かう苦しき道ならでも交じらひ遊びぬべきものを」

と、世の中恨めしうおぼえたまひけり。

「春鶯囀」舞ふほどに、昔の花の宴のほど思し出でて、院の帝も、

「また、さばかりのこと見てむや」

とのたまはするにつけて、その世のことあはれに思し続けらる。舞ひ果つるほどに、大臣、院に御土器参りたまふ。

「鶯のさへづる声は昔にて

睦れし花の蔭ぞ変はれる」

院の上、

「九重を霞隔つるすみかにも

春と告げくる鶯の声」

帥の宮と聞こえし、今は兵部卿にて、今の上に御土器参りたまふ。

「いにしへを吹き伝へたる笛竹に

さへづる鳥の音さへ変はらぬ」

とのたまふも、

「何かは。六位など人のあなづりはべるめれば、しばしのこととは思うたまふれど、内へ参るもの憂くてなむ。故大臣おはしまさしかば、戯れにても、人にはあなづられはべらざらまし。もの隔てぬ親におはすれど、いとけけしうさし放ちて思いたれば、おはしますあたりにも、たやすくも参り馴れはべらず。東の院にてのみなむ、御前近くはべる。対の御方こそ、あはれにものしたまへ、親今一所おはしまさしかば、何ごとを思ひはべらまし」

とて、涙の落つるを紛らはいたまへるけしき、いみじうあはれなるに、宮は、いとどほろほろと泣きたまひて、

「母にも後るる人は、ほどほどにつけて、さのみこそあはれなれど、おのづから宿世宿世に、人と成りたちぬれば、おろかに思ふもなきわぎなるを、思ひ入れぬさまにてもものしたまへ。故大臣の今しばしだにものしたまへかし。限りなき蔭には、同じことと頼みきこゆれど、思ふにかなはぬことの多かるかな。内大臣の心ばへも、なべての人にはあらずと、世人もめで言ふなれど、昔に變はることのみまさりゆくに、命長さも恨めしきに、生ひ先遠き人さへ、かくいささかにても、世を思ひしめりたまへれば、いとなむよろづ恨めしき世なる」  
とて、泣きおはします。

朔日にも、大殿は御ありきしなければ、のどやかにておはします。良房の大  
臣と聞こえける、いにしへの例になずらへて、白馬ひき、節会の日、内の儀式  
をうつして、昔の例よりも事添へて、いつかしき御ありさまなり。

如月の二十日あまり、朱雀院に行幸あり。花盛りはまだしきほどなれど、弥  
生は故宮の御忌月なり。とく開けたる桜の色もいとおもしろければ、院にも御  
用意ことにつくろひ磨かせたまひ、行幸に仕うまつりたまふ上達部、親王たち  
よりはじめ、心づかひしたまへり。

ふもあぢきなしや。心ばへのかやうにやはらかならむ人をこそあひ思はめ」  
と思ふ。また、

「向ひて見るかひなからむいとほしげなり。かくて年経たまひにけれど、  
殿の、さやうなる御容貌、御心と見たまうて、浜木綿ばかりの隔てさし隠しつ  
つ、何くれともてなし紛らはしたまふめるも、むべなりけり」

と思ふ心のうちぞ、恥づかしかりける。

大宮の容貌ことにおはしませど、まだいときよらにおはし、ここにもかしこ  
にも、人は容貌よきものとのみ目馴れたまへるを、もとよりすぐれざりける御  
容貌の、ややさだ過ぎたる心地して、痩せ痩せに御髪少ななるなどが、かくそ  
しらはしきなりけり。

年の暮には、睦月の御装束など、宮はただ、この君一所の御ことを、まじる  
ことなういそぎたまふ。あまた領、いときよらに仕立てたまへるを見るも、も  
の憂くのみおぼゆれば、

「朔日などには、かならずしも内へ参るまじう思ひたまふるに、何にかくい  
そがせたまふらむ」

と聞こえたまへば、

「などてか、さもあらむ。老いくづほれたらむ人のやうにもものたまふかな」  
とのたまへば、

「老いねど、くづほれたる心地ぞするや」  
と独りごちて、うち涙ぐみてゐたまへり。

「かのことを思ふならむ」と、いと心苦しうて、宮もうちひそみたまひぬ。

「男は、口惜しき際の人だに、心を高うこそつかふなれ。あまりしめやかに、  
かくなものしたまひそ。何とか、かう眺めがちに思ひ入れたまふべき。ゆゆし  
う」

「誰がぞ」

と問へば、

「殿の冠者の君の、しかしかのたまうて賜へる」

と言へば、名残なくうち笑みて、

「いかにうつくしき君の御され心なり。きむぢらは、同じ年なれど、いふかひなくはかなかめりかし」

など誉めて、母君にも見す。

「この君達の、すこし人数に思しぬべからましかば、宮仕へよりは、たてまつりてまし。殿の御心おきて見るに、見そめたまひてむ人を、御心とは忘れたまふまじきところ、いと頼もしけれ。明石の入道の例にやならまし」

など言へど、皆急ぎ立ちにたり。

かの人は、文をだにえやりたまはず、立ちまさる方のごとし心にかかりて、ほど経るままに、わりなく恋しき面影にまたあひ見でやと思ふよりほかのことなし。宮の御もとへ、あいなく心憂くて参りたまはず。おはせしかた、年ごろ遊び馴れし所のみ、思ひ出でらるることまされば、里さへ憂くおぼえたまひつつ、また籠もりみたまへり。

殿は、この西の対にぞ、聞こえ預けたてまつりたまひける。

「大宮の御世の残り少なげなるを、おはせずなりなむのちも、かく幼きほどより見ならして、後見おぼせ」

と聞こえたまへば、ただのたまふままの御心にて、なつかしうあはれに思ひ扱ひたてまつりたまふ。

ほのかになど見たてまつるにも、

「容貌のまほならずもおはしけるかな。かかる人をも、人は思ひ捨てたまはざりけり」など、「わが、あながちに、つらき人の御容貌を心にかけて恋しと思

と、わぎとのことにはあらねど、うち添へて涙ぐまるる折々あり。

兄弟の童殿上する、常にこの君に参り仕うまつるを、例よりもなつかしう語らひたまひて、

「五節はいつか内へ参る」

と問ひたまふ。

「今年とこそは聞きはべれ」

と聞こゆ。

「顔のいとよかりしかば、すずろにこそ恋しけれ。ましが常に見るらむも羨ましきを、また見せてむや」

とのたまへば、

「いかでかさははべらむ。心にまかせてもえ見はべらず。男兄弟とて、近くも寄せはべらねば、まして、いかでか君達には御覽せさせむ」

と聞こゆ。

「さらば、文をだに」

とて賜へり。「先々かやうのことは言ふものを」と苦しけれど、せめて賜へば、いとほしうて持て往ぬ。

年のほどよりは、されてやありけむ、をかしと見けり。緑の薄様の、好ましき重ねなるに、手はまだいと若けれど、生ひ先見えて、いとをかしげに、

「日影にもしるかりけめや少女子が

天の羽袖にかけし心は」

二人見るほどに、父主ふと寄り来たり。恐ろしうあきれて、え引き隠さず。

「なぞの文ぞ」

とて取るに、面赤みてゐたり。

「よからぬわざしけり」

と憎めば、せうと逃げて行くを、呼び寄せて、

りがたうをかしげなるを、かう誉めらるるなめり。例の舞姫どもよりは、皆すこしおとなびつつ、げに心ことなる年なり。

殿参りたまひて御覧するに、昔御目とまりたまひし少女の姿思し出づ。辰の日の暮つ方つかはす。御文のうち思ひやるべし。

「乙女子も神さびぬらし天つ袖

古き世の友よはひ経ぬれば」

年月の積もりを数へて、うち思しけるままのあはれを、え忍びたまはぬばかりの、をかしうおぼゆるも、はかなしや。

「かけて言へば今日のこととぞ思ほゆる

日蔭の霜の袖にとけしも」

青摺りの紙よくとりあへて、紛らはし書いたる、濃墨、薄墨、草がちにうち交ぜ乱れたるも、人のほどにつけてはをかしと御覧ず。

冠者の君も、人の目とまるにつけても、人知れず思ひありきたまへど、あたり近くだに寄せず、いとけけしうもてなしたれば、ものつつましきほどの心には、嘆かしうてやみぬ。容貌はしも、いと心につきて、つらき人の慰めにも、見るわざしてむやと思ふ。

やがて皆とめさせたまひて、宮仕へすべき御けしきありけれど、このたびはまかでさせて、近江のは辛崎の祓へ、津の守は難波と、挑みてまかでぬ。大納言もことさらに参らすべきよし奏せさせたまふ。左衛門督、その人ならぬをたてまつりて、咎めありけれど、それもとどめさせたまふ。

津の守は、「典侍あきたるに」と申させたれば、「さもや劳らまし」と大殿も思いたるを、かの人は聞きたまひて、いと口惜しと思ふ。

「わが年のほど、位など、かくものげなからずは、乞ひ見てましものを。思ふ心ありとだに知られでやみなむこと」

房などは、いとをかしと見たてまつる。

上の御方には、御簾の前にだに、もの近うもてなしたまはず。わが御心ならひ、いかに思すにかありけむ、疎々しければ、御達なども氣遠きを、今日はものの紛れに、入り立ちたまへるなめり。

舞姫かしづき下ろして、妻戸の間に屏風など立てて、かりそめのしつらひなるに、やをら寄りてのぞきたまへば、悩ましげにて添ひ臥したり。

ただ、かの人の御ほどと見えて、今すこしそびやかに、様体などのことさらび、をかしきところはまさりてさへ見ゆ。暗ければ、こまかには見えねど、ほどのいとよく思ひ出でらるるさまに、心移るとはなけれど、ただにもあらで、衣の裾を引き鳴らいたまふに、何心もなく、あやしと思ふに、

「天にます豊岡姫の宮人も

わが心ざすしめを忘るな

乙女子が袖振る山の瑞垣の」

とのたまふぞ、うちつけなりける。

若うをかしき声なれど、誰ともえ思ひたどられず、なまむつかしきに、化粧じ添ふとて、騒ぎつる後見ども、近う寄りて人騒がしうなれば、いと口惜しうて、立ち去りたまひぬ。

浅葱の心やましければ、内へ参ることもせず、もの憂がりたまふを、五節にことつけて、直衣など、さま変はれる色聴されて参りたまふ。きびはにきよなるものから、まだきにおよすけて、されありきたまふ。帝よりはじめたてまつりて、思したるさまなべてならず、世にめづらしき御おぼえなり。

五節の参る儀式は、いづれともなく、心々に二なくしたまへるを、「舞姫の容貌、大殿と大納言とはすぐれたり」とめでののしる。げに、いとをかしげなれど、ここしうつくしげなることは、なほ大殿のには、え及ぶまじかりけり。

ものきよげに今めきて、そのものとも見ゆまじう仕立てたる様体などの、あ

東の院には、参りの夜の人びとの装束せさせたまふ。殿には、おほかたのこども、中宮よりも、童、下仕への料など、えならでたてまつれたまへり。

過ぎにし年、五節など止まれりしが、さうごうしかりし積もり取り添へ、上人の心地も、常よりもはなやかに思ふべかめる年なれば、所々挑みて、いといみじくよろづを尽くしたまふ聞こえあり。

按察使大納言、左衛門督、上の五節には、良清、今は近江守にて左中弁なるなむ、たてまつりける。皆止めさせたまひて、宮仕へすべく、仰せ言ことなる年なれば、女をおのおのたてまつりたまふ。

殿の舞姫は、惟光朝臣の、津守にて左京大夫かけたるが女、容貌などいとかしげなる聞こえあるを召す。からいことに思ひたれど、

「大納言の、外腹の女をたてまつらるるに、朝臣のいつき女出だし立てたらむ、何の恥かあるべき」

と苛めば、わびて、同じくは宮仕へやがてせさすべく思ひおきてたり。

舞習はしなどは、里にていとよう仕立てて、かしづきなど、親しう身に添ふべきは、いみじう選り整へて、その日の夕つけて参らせたり。

殿にも、御方々の童女、下仕へのすぐれたるをと、御覧じ比べ、選り出でらるる心地どもは、ほどほどにつけて、いとおもだたしげなり。

御前に召して御覧ぜむうちならしに、御前を渡らせてと定めたまふ。捨つべうもあらず、とりどりなる童女の様体、容貌を思しわづらひて、

「今一所の料を、これよりたてまつらばや」

など笑ひたまふ。ただもてなし用意によりてぞ選びに入りける。

大学の君、胸のみふたがりて、物なども見入れられず、屈じいたくて、書も読まで眺め臥したまへるを、心もや慰むと立ち出でて、紛れありきたまふ。

さま、容貌はめでたくをかしげにて、静やかになまめいたまへれば、若き女

男君、「我をば位なしとて、はしたなむるなりけり」と思すに、世の中恨めしければ、あはれもすこしきむる心地して、めざまし。

「かれ聞きたまへ。」

くれなるの涙に深き袖の色を

浅緑にや言ひしをるべき

恥づかし」

とのたまへば、

「いろいろに身の憂きほどの知らるるは

いかに染めける中の衣ぞ」

と、物のたまひ果てぬに、殿入りたまへば、わりなくて渡りたまひぬ。

男君は、立ちとまりたる心地も、いと人悪く、胸ふたがりて、わが御方に臥したまひぬ。

御車三つばかりにて、忍びやかに急ぎ出でたまふけはひを聞くも、静心なければ、宮の御前より、「参りたまへ」とあれど、寝たるやうにて動きもしたまはず。

涙のみ止まらねば、嘆きあかして、霜のいと白きに急ぎ出でたまふ。うちはれたるまみも、人に見えむが恥づかしきに、宮はた、召しまつはすべかめれば、心やすき所にとて、急ぎ出でたまふなりけり。

道のほど、人やりならず、心細く思ひ続けるに、空のけしきもいたう雲りて、まだ暗かりけり。

「霜氷うたてむすべる明けぐれの

空かきくらし降る涙かな」

大殿には、今年、五節たてまつりたまふ。何ばかりの御いそぎならねど、童女の装束など、近うなりぬとて、急ぎせさせたまふ。

いと心苦しう見て、宮にとかく聞こえたばかりで、夕まぐれの人のまよひに、  
対面せさせたまへり。

かたみにももの恥づかしく胸つぶれて、物も言はで泣きたまふ。

「大臣の御心のいとつらければ、さはれ、思ひやみなむと思へど、恋しうお  
はせむこそわりなかるべけれ。などて、すこし隙ありぬべかりつる日ごろ、よ  
そに隔てつらむ」

とのたまふさまも、いと若うあはれげなれば、

「まろも、さこそはあらめ」

とのたまふ。

「恋しとは思しなむや」

とのたまへば、すこしうなづきたまふさまも、幼げなり。

御殿油参り、殿まかだたまふけはひ、こちたく追ひののしる御前駆の声に、  
人びと、

「そそや」

など懼ぢ騒げば、いと恐ろしと思してわななきたまふ。さも騒がればと、ひ  
たぶる心に、許しきこえたまはず。御乳母参りてもとめたてまつるに、けしき  
を見て、

「あな、心づきなや。げに、宮知らせたまはぬことにはあらざりけり」

と思ふに、いとつらく、

「いでや、憂かりける世かな。殿の思しのたまふことは、さらにも聞こえず、  
大納言殿にもいかに聞かせたまはむ。めでたくとも、もののはじめの六位宿世  
よ」

少女

と、つぶやくもほの聞こゆ。ただこの屏風のうしろに尋ね来て、嘆くなりけ  
り。

と思せば、女御の御つれづれにことつけて、ここにもかしこにもおいらかに言ひなして、渡したまふなりけり。

宮の御文にて、

「大臣こそ、恨みもしたまはめ、君は、さりとも心ざしのほども知りたまふらむ。渡りて見えたまへ」

と聞こえたまへれば、いとをかしげにひきつくろひて渡りたまへり。十四になむおはしける。かたなりに見えたまへど、いと子めかしう、しめやかに、うつくしきさましたまへり。

「かたはらさけたてまつらず、明け暮れのもてあそびものに思ひきこえつるを、いとさうざうしくもあるべきかな。残りすくなき齡のほどにて、御ありさまを見果つまじきことと、命をこそ思ひつれ、今さらに見捨てて移ろひたまふや、いづちならむと思へば、いとこそあはれなれ」

とて泣きたまふ。姫君は、恥づかしきことを思せば、顔ももたげたまはで、ただ泣きにのみ泣きたまふ。男君の御乳母、宰相の君出で来て、

「同じ君とこそ頼みきこえさせつれ、口惜しくかく渡らせたまふこと。殿はことざまに思しなることおはしますとも、さやうに思しなびかせたまふな」

など、ささめき聞こゆれば、いよいよ恥づかしと思して、物ものたまはず。

「いで、むつかしきことな聞こえられそ。人の御宿世宿世、いと定めがたくとのたまふ。

「いでや、ものげなしとあなづりきこえさせたまふにはべるめりかし。さりとも、げに、わが君人に劣りきこえさせたまふと、聞こしめし合はせよ」

と、なま心やましきままに言ふ。

冠者の君、物のうしろに入りみて見たまふに、人の咎めむも、よろしき時こそ苦しかりけれ、いと心細くて、涙おし拭ひつつおはするけしきを、御乳母、

かりけることよ。また、さもこそあらめ、大臣の、ものの心を深う知りたまひながら、われを怨じて、かく率て渡したまふこと。かしこにて、これよりうしろやすきこともあらじ」

と、うち泣きつつのたまふ。

折しも冠者の君参りたまへり。「もしいささかの隙もや」と、このころはしげうほのめきたまふなりけり。内大臣の御車のあれば、心の鬼にはしたなくて、やをら隠れて、わが御方に入りゐたまへり。

内大殿の君達、左少将、少納言、兵衛佐、侍従、大夫などいふも、皆ここには参り集ひたれど、御簾の内は許したまはず。

左兵衛督、権中納言なども、異御腹なれど、故殿の御もてなしのままに、今も参り仕うまつりたまふことねむごろなれば、その御子どももさまさま参りたまへど、この君に似るにほひなく見ゆ。

大宮の御心ざしも、なずらひなく思したるを、ただこの姫君をぞ、気近うらうたきものと思しかしづきて、御かたはらさけず、うつくしきものに思したりつるを、かくて渡りたまひなむが、いとさうざうしきことを思す。

殿は、

「今のほどに、内に参りはべりて、夕つ方迎へに参りはべらむ」

とて、出でたまひぬ。

「いふかひなきことを、なだらかに言ひなして、さてもやあらまし」と思せど、なほ、いと心やましければ、「人の御ほどのすしものものしくなりなむに、かたはならず見なして、そのほど、心ざしの深さ浅さのおもむきをも見定めて、許すとも、ことさらなるやうにもてなしてこそあらめ。制し諫むとも、一所にては、幼き心のままに、見苦しうこそあらめ。宮も、よもあながちに制したまふことあらじ」

したまふを、心苦しう胸いたきに、まかでさせたてまつりて、心やすくうち休ませたてまつらむ。さすがに、主上につとさぶらはせたまひて、夜昼おはしますめれば、ある人びとも心ゆるびせず、苦しうのみわぶめるに」

とのたまひて、にはかにまかでさせたてまつりたまふ。御暇も許されがたきを、うちむつかりたまて、主上はしぶしぶに思し召したるを、しひて御迎へしたまふ。

「つれづれに思されむを、姫君渡して、もろともに遊びなどしたまへ。宮に預けたてまつりたる、うしろやすけれど、いとさくじりおよすけたる人立ちまじりて、おのづから気近きも、あいなきほどになりたればなむ」

と聞こえたまひて、にはかに渡しきこえたまふ。

宮、いとあへなしと思して、

「ひとりものせられし女亡くなりたまひてのち、いとさうざうしく心細かりしに、うれしうこの君を得て、生ける限りのかしづきものと思ひて、明け暮れにつけて、老いのむつかしさも慰めむところ思ひつれ、思ひのほかに隔てありて思しなすも、つらく」

など聞こえたまへば、うちかしこまりて、

「心に飽かず思うたまへらるることは、しかなむ思うたまへらるるとばかり聞こえさせしになむ。深く隔て思ひたまふることは、いかでかはべらむ。

内にさぶらふが、世の中恨めしげにて、このころまかでてはべるに、いとつれづれに思ひて屈しはべれば、心苦しう見たまふるを、もろともに遊びわざをもして慰めよと思うたまへてなむ、あからさまにものしはべる」とて、「育み、人となさせたまへるを、おろかにはよも思ひきこえさせじ」

と申したまへば、かう思し立ちにたれば、止めきこえさせたまふとも、思し返すべき御心ならぬに、いと飽かず口惜しう思されて、

「人の心こそ憂きものはあれ。とかく幼き心どもにも、われに隔てて疎まし

いみじう心もとなければ、

「これ、開けさせたまへ。小侍従やさぶらふ」

とのたまへど、音もせず。御乳母子なりけり。独り言を聞きたまひけるも恥づかしうて、あいなく御顔も引き入れたまへど、あはれは知らぬにしもあらぬぞ憎きや。乳母たちなど近く臥して、うちみじろくも苦しければ、かたみに音もせず。

「さ夜中に友呼びわたる雁が音に

うたて吹き添ふ萩の上風」

「身にしみけるかな」と思ひ続けて、宮の御前に帰りて嘆きがちなるも、「御目覚めてや聞かせたまふらむ」とつつましく、みじろき臥したまへり。

あいなくもの恥づかしうて、わが御方にとく出でて、御文書きたまへれど、小侍従もえ逢ひたまはず、かの御方さまにもえ行かず、胸つぶれておぼえたまふ。

女はた、騒がれたまひしことのみ恥づかしうて、「わが身やいかがあらむ、人やいかが思はむ」とも深く思し入れず、をかしうらうたげにて、うち語らふさまなどを、疎ましも思ひ離れたまはざりけり。

また、かう騒がるべきこととも思さざりけるを、御後見どもいみじうあはめきこゆれば、え言も通はしたまはず。おとなびたる人や、さるべき隙をも作り出づらむ、男君も、今すこしものはかなき年のほどにて、ただいと口惜しとのみ思ふ。

大臣は、そのままに参りたまはず、宮をいとつらしと思ひきこえたまふ。北の方には、かかることなむと、けしきも見せたてまつりたまはず、ただおほかた、いとむつかしき御けしきにて、

「中宮のよそほひことにて参りたまへるに、女御の世の中思ひしめりてもの

かく騒がるらむとも知らで、冠者の君参りたまへり。一夜も人目しげうて、思ふことをもえ聞こえずなりにしかば、常よりもあはれにおぼえたまひければ、夕つ方おはしたるなるべし。

宮、例は是非知らず、うち笑みて待ちよろこびきこえたまふを、まめだちて物語など聞こえたまふついでに、

「御ことにより、内大臣の怨じてものしたまひにしかば、いとなむいとほしき。ゆかしげなきことをしも思ひそめたまひて、人にも思はせたまひつべきが心苦しきこと。かうも聞こえじと思へど、さる心も知りたまはでやと思へばなむ」

と聞こえたまへば、心にかかれることの筋なれば、ふと思ひ寄りぬ。面赤みて、

「何ごとにかはべらむ。静かなる所に籠もりはべりにしのち、ともかくも人に交じる折なければ、恨みたまふべきことはべらじとなむ思ひたまふる」

とて、いと恥づかしと思へるけしきを、あはれに心苦しうて、

「よし。今よりだに用意したまへ」

とばかりにて、異事に言ひなしたまうつ。

「いとど文なども通はむことのかたきなめり」と思ふに、いと嘆かしう、物参りなどしたまへど、さらに参らで、寝たまひぬるやうなれど、心も空にて、人静まるほどに、中障子を引けど、例はことに鎖し固めなどもせぬを、つと鎖して、人の音もせず。いと心細くおぼえて、障子に寄りかかりてゐたまへるに、女君も目を覚まして、風の音の竹に待ちとられて、うちそよめくに、雁の鳴きわたる声の、ほのかに聞こゆるに、幼き心地にも、とかく思し乱るるにや、

「雲居の雁もわがごとや」

と、独りごちたまふけはひ、若うらうたげなり。

さらに思ひ寄らざりけること」

と、おのがどち嘆く。

「よし、しばし、かかること漏らさじ。隠れあるまじきことなれど、心をやりて、あらぬこととだに言ひなされよ。今かしこに渡したてまつりてむ。宮の御心のいとつらきなり。そこたちは、さりとも、いとかがれとしても、思はれざりけむ」

とのたまへば、「いとほしきなかにも、うれしくのたまふ」と思ひて、

「あな、いみじや。大納言殿に聞きたまはむことをさへ思ひはべれば、めでたきにて、ただ人の筋は、何のめづらしさにか思ひたまへかけむ」

と聞こゆ。

姫君は、いと幼げなる御さまにて、よろづに申したまへども、かひあるべきにもあらねば、うち泣きたまひて、

「いかにしてか、いたづらになりたまふまじきわざはすべからむ」

と、忍びてさるべきどちのたまひて、大宮をのみぞ恨みきこえたまふ。

宮は、いといとほしと思すなかにも、男君の御かなしきはすぐれたまふにやあらむ、かかる心のありけるも、うつくしう思さるるに、情けなく、こよなきことのやうに思しのたまへるを、

「などかさしもあるべき。もとよりいたう思ひつきたまふことなくて、かくまでかしづかむとも思し立たざりしを、わがかくもてなしそめたればこそ、春宮の御ことをも思しかけたためれ。とりはづして、ただ人の宿世あらば、この君よりほかにまさるべき人やはある。容貌、ありさまよりはじめて、等しき人のあるべきかは。これより及びなからむ際にもとこそ思へ」

と、わが心ざしのまさればにや、大臣を恨めしう思ひきこえたまふ。御心のうちを見せたてまつりたらば、ましていかに恨みきこえたまはむ。

はべれ。もろともに罪をおほせたまふは、恨めしきことになむ。

見たてまつりしより、心ことに思ひはべりて、そこに思いたらぬことをも、すぐれたるさまにもてなきむとこそ、人知れず思ひはべれ。ものげなきほどを、心の闇に惑ひて、急ぎものせむとは思ひ寄らぬことになむ。

さて、誰かはかかることは聞こえけむ。よからぬ世の人の言につきて、きはだけく思しのたまふも、あぢきなく、むなしきことにて、人の御名や汚れむとのたまへば、

「何の、浮きたることにかはべらむ。さぶらふめる人びとも、かつは皆もどき笑ふべかめるものを、いと口惜しく、やすからず思うたまへらるるや」とて、立ちたまひぬ。

心知れるどちは、いみじういとほしく思ふ。一夜のしりう言の人びとは、まして心地も違ひて、「何にかかる睦物語をしけむ」と、思ひ嘆きあへり。

姫君は、何心もなくしておはするに、さしのぞきたまへれば、いとらうたげなる御さまを、あはれに見たてまつりたまふ。

「若き人といひながら、心幼くものしたまひけるを知らで、いとかく人なみなみに思ひける我こそ、まさりてはかなかりけれ」

とて、御乳母どもをさいなみたまふに、聞こえむ方なし。

「かやうのことは、限りなき帝の御いつき女も、おのづから過つ例、昔物語にもあめれど、けしきを知り伝ふる人、さるべき隙にてこそあらめ」

「これは、明け暮れ立ちまじりたまひて年ごろおはしましつるを、何かは、いはけなき御ほどを、宮の御もてなしよりさし過ぐしても、隔てきこえさせむと、うちとけて過ぐしきこえつるを、一昨年ばかりよりは、けぎやかなる御もてなしになりてはべるめるに、若き人とても、うち紛ればみ、いかにぞや、世づきたる人もおはすべかめるを、夢に乱れたるところおはしまさざめれば、

り。はかばかしき身にはべらねど、世にはべらむ限り、御目離れず御覽ぜられ、おぼつかなき隔てなくとこそ思ひたまふれ。

よからぬものうへにて、恨めしと思ひきこえさせつべきことの出でまうで来たるを、かうも思うたまへじとかつは思ひたまふれど、なほ静めがたくおぼえはべりてなむ」

と、涙おし拭ひたまふに、宮、化粧じたまへる御顔の色違ひて、御目も大きになりぬ。

「いかやうなることにてか、今さらの齡の末に、心置きては思さるらむ」と聞こえたまふも、さすがにいとほしけれど、

「頼もしき御蔭に、幼き者をたてまつりおきて、みづからをばなかなか幼くより見たまへもつかず、まづ目に近きが、交じらひなどはかばかしからぬを、見たまへ嘆きいとなみつ、さりとも人となさせたまひてむと頼みわたりはべりつるに、思はずなることのはべりければ、いと口惜しうなむ。

まことに天の下並ぶ人なき有職にはものせらるめれど、親しきほどにかかるは、人の聞き思ふところも、あはつけきやうになむ、何ばかりのほどにもあらぬ仲らひにだにしはべるを、かの人の御ためにも、いとかたはなることなり。さし離れ、きらきらしうめづらしげあるあたりに、今めかしうもてなさるるこそ、をかしけれ。ゆかりむつび、ねぢけがましきさまにて、大臣も聞き思すところはべりなむ。

さるにても、かかることなむと、知らせたまひて、ことさらにもてなし、すこしゆかしげあることをませてこそはべらめ。幼き人びとの心にまかせて御覽じ放ちけるを、心憂く思うたまふ」

など聞こえたまふに、夢にも知りたまはぬことなれば、あさましう思して、

「げに、かうのたまふもことわりなれど、かけてもこの人びとの下の心なむ知りはべらざりける。げに、いと口惜しきことは、ここにこそまして嘆くべく

「今さへかかるあだけこそ」

と言ひあへり。ささめき言の人びとは、

「いとかうばしき香のうちそよめき出でつるは、冠者の君のおはしつるところ思ひつれ」

「あな、むくつけや。しりう言や、ほの聞こしめしつらむ。わづらはしき御心を」

と、わびあへり。

殿は、道すがら思すに、

「いと口惜しく悪しきことにはあらねど、めづらしげなきあはひに、世人も思ひ言ふべきこと。大臣の、しひて女御をおし沈めたまふもつらきに、わくらばに、人にまさることもやとこそ思ひつれ、ねたくもあるかな」

と思す。殿の御仲の、おほかたには昔も今もいとよくおはしながら、かやうの方にては、挑みきこえたまひし名残も思し出でて、心憂ければ、寢覚がちにて明かしたまふ。

「大宮をも、さやうのけしきには御覧ずらむものを、世になくかなしくしたまふ御孫にて、まかせて見たまふならむ」

と、人びとの言ひしけしきを、ねたしと思すに、御心動きて、すこし男々しくあざやぎたる御心には、静めがたし。

二日ばかりありて、参りたまへり。しきりに参りたまふ時は、大宮もいと御心ゆき、うれしきものに思いたり。御尼額ひきつくろひ、うるはしき御小桂などたてまつり添へて、子ながら恥づかしげにおはする御人ざまなれば、まほならずぞ見えたてまつりたまふ。

大臣御けしき悪しくて、

「ここにさぶらふもはしたなく、人びといかに見はべらむと、心置かれにた

「萩が花摺り」

など歌ひたまふ。

「大殿も、かやうの御遊びに心止めたまひて、いそがしき御政事どもをば逃れたまふなりけり。げに、あぢきなき世に、心のゆくわぎをしてこそ、過ぐしはべりなまほしけれ」

などのたまひて、御土器参りたまふに、暗うなれば、御殿油参り、御湯漬、くだものなど、誰も誰もきこしめす。

姫君はあなたに渡したてまつりたまひつ。しひて気遠くもてなしたまひ、「御琴の音ばかりをも聞かせたてまつらじ」と、今はこよなく隔てきこえたまふを、

「いとほしきことありぬべき世なるこそ」

と、近う仕うまつる大宮の御方のねび人ども、ささめきけり。

大臣出でたまひぬるやうにて、忍びて人にもものたまふとて立ちたまへりけるを、やをらかい細りて出でたまふ道に、かかるささめき言をするに、あやしうなりたまひて、御耳とどめたまへば、わが御うへをぞ言ふ。

「かしこがりたまへど、人の親よ。おのづから、おれたることこそ出で来べかめれ」

「子を知るといふは、虚言なめり」

などぞ、つきしろふ。

「あさましくもあるかな。さればよ。思ひ寄らぬことにはあらねど、いはけなきほどにうちたゆみて。世は憂きものにもありけるかな」

と、けしきをつぶつぶと心得たまへど、音もせで出でたまひぬ。

御前駆追ふ声のいかめしきにぞ、

「殿は、今こそ出でさせたまひけれ」

「いづれの隈におはしましたらむ」

姫君の御さまの、いときびはにうつくしうて、箏の御琴弾きたまふを、御髪  
のさがり、髪ざしなどの、あてになまめかしきをうちまもりたまへば、恥ぢら  
ひて、すこしそばみたまへるかたはらめ、つらつきうつくしげにて、取由の手  
つき、いみじう作りたる物の心地するを、宮も限りなくかなしと思したり。搔  
きあはせなど弾きすさびたまひて、押しやりたまひつ。

大臣、和琴ひき寄せたまひて、律の調べのなかなか今めきたるを、さる上手  
の乱れて掻い弾きたまへる、いとおもしろし。御前の梢ほろほろと残らぬに、  
老い御達など、ここかしこの御几帳のうしろに、かしらを集へたり。

「風の力蓋し寡し」

と、うち誦じたまひて、

「琴の感ならねど、あやしくものあはれなる夕べかな。なほ、あそばさむや」  
とて、「秋風楽」に掻きあはせて、唱歌したまへる声、いとおもしろければ、  
皆さまさま、大臣をもいとうつくしと思ひきこえたまふに、いとど添へむとに  
やあらむ、冠者の君参りたまへり。

「こなたに」とて、御几帳隔てて入れたてまつりたまへり。

「をさをさ対面もえ賜はらぬかな。などかく、この御学問のあながちならむ。  
才のほどよりあまり過ぎぬるもあぢきなきわざと、大臣も思し知れることなる  
を、かくおきてきこえたまふ、やうあらむとは思ひたまへながら、かう籠もり  
おはすることなむ、心苦しうはべる」

と聞こえたまひて、

「時々は、ことわざしたまへ。笛の音にも古事は、伝はるものなり」

とて、御笛たてまつりたまふ。

いと若うをかしげなる音に吹きたてて、いみじうおもしろければ、御琴ども  
をばしばし止めて、大臣、拍子おどろおどろしからずうち鳴らしたまひて、

きはべれ。物の上手の後にはべれど、末になりて、山賤にて年経たる人の、いかでさしも弾きすぐれけむ。かの大臣、いと心ことにこそ思ひてのたまふ折々はべれ。こと事よりは、遊びの方の才はなほ広う合はせ、かれこれに通はしはべるこそ、かしこけれ、独り事にて、上手となりけむこそ、珍しきことなれ」などのたまひて、宮にそそのかしきこえたまへば、

「柱さすことうひうひしくなりにけりや」

とのたまへど、おもしろう弾きたまふ。

「幸ひにうち添へて、なほあやしうめでたかりける人なりや。老いの世に、持たまへらぬ女子をまうけさせたてまつりて、身に添へてもやつしゐたらず、やむごとなきに譲れる心おきて、こともなかるべき人なりとぞ聞きはべる」など、かつ御物語聞こえたまふ。

「女はただ心ばせよりこそ、世に用ゐらるるものにはべりけれ」など、人の上のたまひ出でて、

「女御を、けしうはあらず、何ごとも人に劣りては生ひ出でずかしと思ひたまへしかど、思はぬ人におされぬる宿世になむ、世は思ひのほかなるものと思ひはべりぬる。この君をだに、いかで思ふさまに見なしはべらむ。春宮の御元服、ただ今のことになりぬるをと、人知れず思うたまへ心ぎしたるを、かういふ幸ひ人の腹の后がねこそ、また追ひ次ぎぬれ。立ち出でたまへらむに、ましてきしろふ人ありがたくや」

とうち嘆きたまへば、

「などか、さしもあらむ。この家にさる筋の人出でものしたまはで止むやうあらじと、故大臣の思ひたまひて、女御の御ことをも、ゐたちいそぎたまひしものを。おはせましかば、かくもてひがむることもなからまし」

など、この御ことにてぞ、太政大臣をも恨めしげに思ひきこえたまへる。

「むつまじき人なれど、男子にはうちとくまじきものなり」

と、父大臣聞こえたまひて、けどほくなりたるを、幼心地に思ふことなきにしもあらねば、はかなき花紅葉につけても、雛遊びの追従をも、ねむごろにまつはれありきて、心ざしを見えきこえたまへば、いみじう思ひ交はして、けざやかには今も恥ぢきこえたまはず。

御後見どもも、

「何かは、若き御心どちなれば、年ごろ見ならひたまへる御あはひを、にはかにも、いかがはもて離れはしたなめはきこえむ」

と見るに、女君こそ何心なくおはすれど、男は、さこそものげなきほどと見きこゆれ、おほけなく、いかなる御仲らひにかありけむ、よそよそになりては、これをぞ静心なく思ふべき。

まだ片生ひなる手の生ひ先うつくしきにて、書き交はしたまへる文どもの、心幼くて、おのづから落ち散る折あるを、御方の人びとは、ほのぼの知れるもありけれど、「何かは、かくこそ」と、誰にも聞こえむ。見隠しつつあるなるべし。

所々の大饗どもも果てて、世の中の御いそぎもなく、のどやかになりぬるころ、時雨うちして、萩の上風もただならぬ夕暮に、大宮の御方に、内大臣参りたまひて、姫君渡しきこえたまひて、御琴など弾かせたてまつりたまふ。宮は、よろづのもののお手におはすれば、いづれも伝へたてまつりたまふ。

「琵琶こそ、女のしたるに憎きやうなれど、らうらうじきものにはべれ。今の世にまことしう伝へたる人、をさをさはべらずなりたり。何の親王、くれの源氏」

など数へたまひて、

「女の中には、太政大臣の、山里に籠め置きたまへる人こそ、いと上手と聞

「弘徽殿の、まづ人より先に参りたまひにしもいかが」  
など、うちうちに、こなたかなたに心寄せきこゆる人びと、おぼつかながり  
きこゆ。

兵部卿宮と聞こえしは、今は式部卿にて、この御時にはましてやむごとなき  
御おぼえにておはする、御女、本意ありて参りたまへり。同じごと、王女御に  
てさぶらひたまふを、

「同じくは、御母方にて親しくおはすべきにこそは、母后のおはしまさぬ御  
代はりの後見に」

とことよせて、似つかはしかるべく、とりどりに思し争ひたれど、なほ梅壺  
ゐたまひぬ。御幸ひの、かく引きかへすぐれたまへりけるを、世の人おどろき  
きこゆ。

大臣、太政大臣に上がりたまひて、大将、内大臣になりたまひぬ。世の中の  
ことども政りごちたまふべく譲りきこえたまふ。人がら、いとすくよかに、き  
らきらしくて、心もちるなどもかしこくものしたまふ。学問を立ててしたまひ  
ければ、韻塞には負けたまひしかど、公事にかしこくなむ。

腹々に御子ども十余人、おとなびつつものしたまふも、次々になり出でつつ、  
劣らず栄えたる御家のうちなり。女は、女御と今一所なむおはしける。わかむ  
どほり腹にて、あてなる筋は劣るまじけれど、その母君、按察使大納言の北の  
方になりて、さしむかへる子どもの数多くなりて、「それに混ぜて後の親に譲ら  
む、いとあいなし」とて、とり放ちきこえたまひて、大宮にぞ預けきこえたま  
へりける。女御にはこよなく思ひおとしきこえたまひつれど、人がら、容貌な  
ど、いとうつくしくぞおはしける。

冠者の君、一つにて生ひ出でたまひしかど、おのおの十に余りたまひて後は、  
御方ことにて、

大将、盃さしたまへば、いたう酔ひ痴れてをる顔つき、いと痩せ瘦せなり。世のひがものにて、才のほどよりは用ゐられず、すげなくて身貧しくなむありけるを、御覧じ得るところありて、かくとりわき召し寄せたるなりけり。身に余るまで御顧みを賜はりて、この君の御徳に、たちまちに身を変へたると思へば、まして行く先は、並ぶ人なきおぼえにぞあらむかし。

大学に参りたまふ日は、寮門に、上達部の御車ども数知らず集ひたり。おほかた世に残りたるあらじと見えたるに、またなくもてかしづかれて、つくろはれ入りたまへる冠者の君の御さま、げに、かかる交じらひには堪へず、あてにうつくしげなり。

例の、あやしき者どもの立ちまじりつつ来るたる座の末をからしと思すぞ、いとことわりなるや。

ここにてもまた、おろしののしる者どもありて、めざましけれど、すこしも臆せず読み果てたまひつ。

昔おぼえて大学の栄ゆるころなれば、上中下の人、我も我もと、この道に志し集れば、いよいよ、世の中に、才ありはかばかしき人多くなむありける。文人擬生などいふなることどもよりうちはじめ、すがすがしう果てたまへれば、ひとへに心に入れて、師も弟子も、いとど励みましたまふ。

殿にも、文作りしげく、博士、才人ども所得たり。すべて何ごとにつけても、道々の人の才のほど現はるる世になむありける。

かくて、后ゐたまふべきを、

「斎宮女御をこそは、母宮も、後見と譲りきこえたまひしかば」

と、大臣もことづけたまふ。源氏のうちしきり后にゐたまはむこと、世の人許しきこえず。

「一月に三度ばかりを参りたまへ」

とぞ、許しきこえたまひける。

つと籠もりゐたまひて、いぶせきままに、殿を、

「つらくもおはしますかな。かく苦しからでも、高き位に昇り、世に用ゐらるる人はなくやはある」

と思ひきこえたまへど、おほかたの人がら、まめやかに、あだめきたるところなくおはすれば、いとよく念じて、

「いかでさるべき書どもとく読み果てて、交じらひもし、世にも出でたらむ」と思ひて、ただ四、五月のうちに、『史記』などいふ書、読み果てたまひてけり。

今は寮試受けさせむとて、まづ我が御前にて試みさせたまふ。

例の、大将、左大弁、式部大輔、左中弁などばかりして、御師の大内記を召して、『史記』の難き巻々、寮試受けむに、博士のかへさふべきふしぶしを引き出でて、一わたり読ませたてまつりたまふに、至らぬ句もなく、かたがたに通はし読みたまへるさま、爪じるし残らず、あさましきまでありがたければ、

「さるべきにこそおはしけれ」

と、誰も誰も、涙落としたまふ。大将は、まして、

「故大臣おはせましかば」

と、聞こえ出でて泣きたまふ。殿も、え心強うもてなしたまはず、

「人のうへにて、かたくななりと見聞きはべりしを、子のおとなぶるに、親の立ちかはり痴れゆくことは、いくばくならぬ齢ながら、かかる世にこそはべりけれ」

などのたまひて、おし拭ひたまふを見る御師の心地、うれしく面目ありと思へり。

数定まれる座に着きあまりて、帰りまかづる大学の衆どもあるを聞こしめして、釣殿の方に召しとどめて、ことに物など賜はせけり。

事果ててまかづる博士、才人も召して、またまた詩文作らせたまふ。上達部、殿上人も、さるべき限りをば、皆とどめさぶらはせたまふ。博士の人びとは、四韻、ただの人は、大臣をはじめたてまつりて、絶句作りたまふ。興ある題の文字選りて、文章博士たてまつる。短きころの夜なれば、明け果ててぞ講ずる。左中弁、講師仕うまつる。容貌いときよげなる人の、声づかひものものしく、神さびて読み上げたるほど、おもしろし。おぼえ心ことなる博士なりけり。

かかる高き家に生まれたまひて、世界の栄花にのみ戯れたまふべき御身もちて、窓の螢をむつび、枝の雪を馴らしたまふ心ざしのすぐれたるよしを、よろづのことによそへなずらへて、心々に作り集めたる句ごとにおもしろく、「唐土にも持て渡り伝へまほしげなる夜の詩文どもなり」となむ、そのころ世にめでゆすりける。

大臣の御はさらなり。親めきあはれなることさへすぐれたるを、涙おとして誦じ騒ぎしかど、女のえ知らぬことまねぶは憎きことをと、うたてあれば漏らしつ。

うち続き、入学といふことせさせたまひて、やがて、この院のうちに御曹司作りて、まめやかに才深き師に預けきこえたまひてぞ、学問せさせたてまつりたまひける。

大宮の御もにも、をさをさ参うでたまはず。夜昼うつくしみて、なほ稚児のやうにのみもてなしきこえたまへれば、かしこにては、えもの習ひたまはじとて、静かなる所に籠めたてまつりたまへるなりけり。

「憚るところなく、例あらむにまかせて、なだむることなく、厳しう行なへ」と仰せたまへば、しひてつれなく思ひなして、家より他に求めたる装束どもの、うちあはず、かたくなしき姿などをも恥なく、面もち、声づかひ、むべむべしくもてなしつつ、座に着き並びたる作法よりはじめ、見も知らぬさまどもなり。

若き君達は、え堪へずほほ笑まれぬ。さるは、もの笑ひなどすまじく、過ぐしつつ静まれる限りをと、選り出だして、瓶子なども取らせたまへるに、筋異なりけるまじらひにて、右大将、民部卿などの、おほなおほな土器とりたまへるを、あさましく咎め出でつつおろす。

「おほし、垣下あるじ、はなはだ非常にはべりたうぶ。かくばかりのしるしとあるなにかしを知らずしてや、朝廷には仕うまつりたうぶ。はなはだをこなり」

など言ふに、人びと皆ほころびて笑ひぬれば、また、

「鳴り高し。鳴り止まむ。はなはだ非常なり。座を引きて立ちたうびなむ」など、おどし言ふも、いとをかし。

見ならひたまはぬ人びとは、珍しく興ありと思ひ、この道より出で立ちたまへる上達部などは、したり顔にうちほほ笑みなどしつつ、かかる方さまを思ひ好みて、心ざしたまふがめでたきことと、いとど限りなく思ひきこえたまへり。いささかもの言ふをも制す。無礼げなりとても咎む。かしかましようのしりを顔どもも、夜に入りては、なかなか今すこし掲焉なる火影に、猿樂がましくわびしげに、人悪げなるなど、さまざまに、げにいとなべてならず、さまざまなるわぎなりけり。

大臣は、

「いとあざれ、かたくななる身にて、けうさうしまどはかさねなむ」

とのたまひて、御簾のうちに隠れてぞ御覧じける。

みて、心のままなる官爵に昇りぬれば、時に従ふ世人の、下には鼻まじろきをしつつ、追従し、けしきとりつつ従ふほどは、おのづから人とおぼえて、やむごとなきやうなれど、時移り、さるべき人に立ちおくれて、世衰ふる末には、人に軽めあなづらるるに、取るところなきことになむはべる。

なほ、才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるる方も強うはべらめ。さしあたりては、心もとなきやうにはべれども、つひの世の重鎮となるべき心おきてを習ひなば、はべらずなりなむ後も、うしろやすかるべきによりなむ。ただ今は、はかばかしからずながらも、かくて育みはべらば、せまりたる大学の衆とて、笑ひあなづる人もよもはべらじと思うたまふる」

など、聞こえ知らせたまへば、うち嘆きたまひて、

「げに、かくも思し寄るべかりけることを。この大将なども、あまり引き違へたる御ことなりと、かたぶけはべるめるを、この幼心地にも、いと口惜しく、大将、左衛門の督の子どもなどを、我よりは下臈と思ひおとしたりしだに、皆おのおの加階し昇りつつ、およすげあへるに、浅葱をいとからしと思はれたるに、心苦しくはべるなり」

と聞こえたまへば、うち笑ひたまひて、

「いとおよすげても恨みはべるななりな。いとはかなしや。この人のほどよ」とて、いとうつくしと思したり。

「学問などして、すこしものの心得はべらば、その恨みはおのづから解けはべりなむ」

と聞こえたまふ。

字つくることは、東の院にてしたまふ。東の対をしつらはれたり。上達部、殿上人、珍しくいぶかしきことにして、我も我もと集ひ参りたまへり。博士どもももなかなか臆しぬべし。

右大将をはじめきこえて、御伯父の殿ばら、みな上達部のやむごとなき御おぼえことにてのみものしたまへば、主人方にも、我も我もと、さるべきことどもは、とりどりに仕うまつりたまふ。おほかた世ゆすりて、所狭き御いそぎの勢なり。

四位になしてむと思し、世人も、さぞあらむと思へるを、

「まだいときびはなるほどを、わが心にまかせたる世にて、しかゆくりなからむも、なかなか目馴れたることなり」

と思しとどめつ。

浅葱にて殿上に帰りたまふを、大宮は、飽かずあさましきことと思したるぞ、ことわりにいとほしかりける。

御対面ありて、このこと聞こえたまふに、

「ただ今、かうあながちにしも、まだきに老いつかすまじうはべれど、思ふやうはべりて、大学の道にしぼし習はさむの本意はべるにより、今二、三年をいたづらの年に思ひなして、おのづから朝廷にも仕うまつりぬべきほどにならば、今、人となりはべりなむ。

みづからは、九重のうちに生ひ出ではべりて、世の中のありさまも知りはず、夜昼、御前にさぶらひて、わづかになむはかなき書なども習ひはべりし。ただ、かしこき御手より伝へはべりしだに、何ごとも広き心を知らぬほどは、文の才をまねぶにも、琴笛の調べにも、音耐へず、及ばぬところの多くなむはべりける。

はかなき親に、かしこき子のまさる例は、いとかたきことになむはべれば、まして、次々伝はりつつ、隔たりゆかむほどの行く先、いとうしろめたなきによりなむ、思ひたまへおきてはべる。

高き家の子として、官位爵位心にかなひ、世の中盛りにおごりならひぬれば、学問などに身を苦しめむことは、いと遠くなむおぼゆべかめる。戯れ遊びを好

へれ」

と、ほめきこえたまふを、若き人びとは笑ひきこゆ。

こなたにも対面したまふ折は、

「この大臣の、かくいとねむごろに聞こえたまふめるを、何か、今始めたる御心ざしにもあらず。故宮も、筋異になりたまひて、え見たてまつりたまはぬ嘆きをしたまひては、思ひ立ちしことをあながちにもて離れたまひしことなど、のたまひ出でつつ、悔しげにこそ思したりし折々ありしか。

されど、故大殿の姫君ものせられし限りは、三の宮の思ひたまはむことのとほしさに、とかく言添へきこゆることもなかりしなり。今は、そのやむごとくなくえさらぬ筋にてもせられし人さへ、亡くなられにしかば、げに、などてかは、さやうにておはせましも悪しかるまじとうちおぼえはべるにも、さらがへりてかくねむごろに聞こえたまふも、さるべきにもあらむとなむ思ひはべる」  
など、いと古代に聞こえたまふを、心づきなしと思して、

「故宮にも、しか心ごはきものに思はれたてまつりて過ぎはべりにしを、今さらに、また世になびきはべらむも、いとつきなきことになむ」

と聞こえたまひて、恥づかしげなる御けしきなれば、しひてもえ聞こえおもむけたまはず。

宮人も、上下、みな心かけきこえたれば、世の中いとうしろめたくのみ思さるれど、かの御みづからは、わが心を尽くし、あはれを見えきこえて、人の御けしきのうちもゆるばむほどをこそ待ちわたりたまへ、さやうにあながちなるさまに、御心破りきこえむなどは、思さざるべし。

大殿腹の若君の御元服のこと、思しいそぐを、二条の院にてと思せど、大宮のいとゆかしげに思したるもことわりに心苦しければ、なほやがてかの殿にてせさせたてまつりたまふ。

年変はりて、宮の御果ても過ぎぬれば、世の中色改まりて、更衣のほどなども今めかしきを、まして祭のころは、おほかたの空のけしき心地よげなるに、前齋院はつれづれと眺めたまふを、前なる桂の下風、なつかしきにつけても、若き人びとは思ひ出づることどもあるに、大殿より、

「御禊の日は、いかにのどやかに思さるらむ」

と、訪らひきこえさせたまへり。

「今日は、

かけきやは川瀬の波もたちかへり

君が禊の藤のやつれを」

紫の紙、立文すくよかにて、藤の花につけたまへり。折のあはれなれば、御返りあり。

「藤衣着しは昨日と思ふまに

今日は禊の瀬にかはる世を

はかなく」

とばかりあるを、例の、御目止めたまひて見おはす。

御服直しのほどなどにも、宣旨のもとに、所狭きまで、思しやれることどもあるを、院は見苦しきことに思しのたまへど、

「をかしやかに、けしきばめる御文などのあらばこそ、とかくも聞こえ返さめ、年ごろも、おほやけぎまの折々の御訪らひなどは聞こえならはしたまひて、いとまめやかなれば、いかがは聞こえも紛らはすべからむ」

と、もてわづらふべし。

女五の宮の御方にも、かやうに折過ぐさず聞こえたまへば、いとあはれに、

「この君の、昨日今日の稚児と思ひしを、かくおとなびて、訪らひたまふこと。容貌のいともきよらなるに添へて、心さへこそ人にはことに生ひ出でたま

少 女

少

女

むすぼほれつる夢の短き」

なかなか飽かず、悲しと思すに、とく起きたまひて、さとはなくて、所々に御誦経などせさせたまふ。

「苦しき目見せたまふと、恨みたまへるも、さぞ思さるらむかし。行なひをしたまひ、よろづに罪軽げなりし御ありさまながら、この一つことにてぞ、この世の濁りをすすいたまはざらむ」

と、ものの心を深く思したるに、いみじく悲しければ、

「何わざをして、知る人なき世界におはすらむを、訪らひきこえに参うでて、罪にも代はりきこえばや」

など、つくづくと思す。

「かの御ために、とり立てて何わざをもしたまはむは、人とがめきこえつべし。内にも、御心の鬼に思すところやあらむ」

と、思しつ々むほどに、阿弥陀仏を心にかけて念じたてまつりたまふ。「同じ蓮に」とこそは、

「亡き人を慕ふ心にまかせても

影見ぬ三つの瀬にや惑はむ」

と思すぞ、憂かりけるとや。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

すぐれたるは、かたき世なりや。

東の院にながむる人の心ばへこそ、古りがたくらうたけれ。さはた、さらにえあらぬものを、さる方につけての心ばせ、人にとりつつ見そめしより、同じやうに世をつつましげに思ひて過ぎぬるよ。今はた、かたみに背くべくもあらず、深うあはれと思ひはべる」

など、昔今の御物語に夜更けゆく。

月いよいよ澄みて、静かにおもしろし。女君、

「氷閉ぢ石間の水は行きなやみ

空澄む月の影ぞ流るる」

外を見出だして、すこし傾きたまへるほど、似るものなくうつくしげなり。髪ざし、面様の、恋ひきこゆる人の面影にふとおぼえて、めでたければ、いささか分くる御心もとり重ねつべし。鴛鴦のうち鳴きたるに、

「かきつめて昔恋しき雪もよに

あはれを添ふる鴛鴦の浮寝か」

入りたまひても、宮の御ことを思ひつつ大殿籠もれるに、夢ともなくほのかに見たてまつる、いみじく恨みたまへる御けしきにて、

「漏らさじとのたまひしかど、憂き名の隠れなかりければ、恥づかしう、苦しき目を見るにつけても、つらくなむ」

とのたまふ。御応へ聞こゆと思すに、襲はるる心地して、女君の、  
「こは、など、かくは」

とのたまふに、おどろきて、いみじく口惜しく、胸のおきどころなく騒げば、抑へて、涙も流れ出でにけり。今も、いみじく濡らし添へたまふ。

女君、いかなることにかと思すに、うちもみじろかで臥したまへり。

「とけて寝ぬ寝覚さびしき冬の夜に

きかし。

うち頼みきこえて、とあることかか折につけて、何ごとも聞こえかよひしに、もて出でてらうらうじきことも見えたまはざりしかど、いふかひあり、思ふさまに、はかなきことわざをもしなしたまひしはや。世にまた、さばかりのたぐひありなむや。

やはらかにおびれたるものから、深うよしづきたるところの、並びなくものしたまひしを、君こそは、さいへど、紫のゆゑ、こよなからずものしたまふめれど、すこしわづらはしき気添ひて、かどかどしきのすすみたまへるや、苦しからむ。

前齋院の御心ばへは、またさまことにぞ見ゆる。さうぎうしきに、何とはなくとも聞こえあはせ、われも心づかひせらるべきあたり、ただこの一所や、世に残りたまへらむ」

とのたまふ。

「尚侍こそは、らうらうじくゆゑゆゑしき方は、人にまさりたまへれ。浅はかなる筋など、もて離れたまへりける人の御心を、あやしくもありけることどもかな」

とのたまへば、

「さかし。なまめかしう容貌よき女の例には、なほ引き出でつべき人ぞかし。さも思ふに、いとほしく悔しきことの多かるかな。まいて、うちあだけ好きたる人の、年積もりゆくままに、いかに悔しきこと多からむ。人よりはことなき静けさ、と思ひしだに」

などの、のたまひ出でて、尚侍の君の御ことににも、涙すこしは落したまひつ。

「この、数にもあらずおとしめたまふ山里の人こそは、身のほどにはややうち過ぎ、ものの心など得つべけれど、人よりことなべきものなれば、思ひ上されるさまをも、見消ちてはべるかな。いふかひなき際の人はまだ見ず。人は、

など、日一日慰めきこえたまふ。

雪のいたう降り積もりたる上に、今も散りつつ、松と竹とのけぢめをかしう見ゆる夕暮に、人の御容貌も光まさりて見ゆ。

「時々につけても、人の心を移すめる花紅葉の盛りよりも、冬の夜の澄める月に、雪の光りあひたる空こそ、あやしう、色なきものの、身にしみて、この世のほかのことまで思ひ流され、おもしろさもあはれさも、残らぬ折なれ。すさまじき例に言ひ置きけむ人の心浅さよ」

とて、御簾巻き上げさせたまふ。

月は隈なくさし出でて、ひとつ色に見え渡されたるに、しをれたる前栽の蔭心苦しう、遣水もいといたうむせびて、池の水もえもいはずすぎきに、童女下ろして、雪まろばしせさせたまふ。

をかしげなる姿、頭つきども、月に映えて、大きやかに馴れたるが、さまざまの相乱れ着、帯しどけなき宿直姿、なまめいたるに、こよなうあまれる髪の毛、白きにはましてもてはやしたる、いとけぎやかなり。

小さきは、童げてよろこび走るに、扇なども落して、うちとけ顔をかしげなり。

いと多うまろばさらむと、ふくつけがれど、えも押し動かさでわぶめり。かたへは、東のつまなどに出でて、心もとなげに笑ふ。

「一年、中宮の御前に雪の山作られたりし、世に古りたることなれど、なほめづらしくもはかなきことをしなしたまへりしかな。何の折々につけても、口惜しう飽かずもあるかな。

いとけどほくもてなしたまひて、くはしき御ありさまを見ならしたてまつりしことはなかりしかど、御交じらひのほどに、うしろやすきものには思したり

ことに、あらまほしく、ものを深く思し知り、世の人の、とあるかかるけぢめも聞き集めたまひて、昔よりもあまた経まさりて思さるれば、今さらの御あだけも、かつは世のもどきをも思しながら、

「むなしからむは、いよいよ人笑へなるべし。いかにせむ」

と、御心動きて、二条院に夜離れ重ねたまふを、女君は、たはぶれにくくのみ思す。忍びたまへど、いかがうちこぼるる折もなからむ。

「あやしく例ならぬ御けしきこそ、心得がたけれ」

とて、御髪をかきやりつつ、いとほしと思したるさまも、絵に描かまほしき御あはひなり。

「宮亡せたまひて後、主上のいとさうぎうしげにのみ世を思したるも、心苦しう見たてまつり、太政大臣ものしたまはで、見譲る人なきことしげさになむ。このほどの絶え間などを、見ならはぬことに思すらむも、ことわりに、あはれなれど、今はさりととも、心のどかに思せ。おとなびたまひためれど、まだいと思ひやりもなく、人の心も見知らぬさまにもものしたまふこそ、らうたけれ」

など、まろがれたる御額髪、ひきつくろひたまへど、いよいよ背きてものも聞こえたまはず。

「いといたく若びたまへるは、誰がならはしきこえたるぞ」

とて、「常なき世に、かくまで心置かるるもあぢきなわぎや」と、かつはうち眺めたまふ。

「齋院にはかなしごと聞こゆるや、もし思しひがむる方ある。それは、いともて離れたることぞよ。おのづから見たまひてむ。昔よりこよなうけどほき御心ばへなるを、さうぎうしき折々、ただならで聞こえ悩ますに、かしこもつれづれにもものしたまふ所なれば、たまさかの応へなどしたまへど、まめまめしきさまにもあらぬを、かくなむあるとしも、愁へきこゆべきことにやは。うしろめたうはあらじとを、思ひ直したまへ」

心地したまへば、

「いとかく、世の例になりぬべきありさま、漏らしたまふなよ。ゆめゆめ。いさら川などもなれなれしや」

とて、せちにうちささめき語らひたまへど、何ごとにかあらむ。人びとも、  
「あな、かたじけな。あながちに情けおくれても、もてなしきこえたまふらむ」

「軽らかにおし立ちてなどは見えたまはぬ御けしきを。心苦しう」と言ふ。

げに、人のほどの、をかしきにも、あはれにも、思し知らぬにはあらねど、  
「もの思ひ知るさまに見えたてまつるとて、おしなべての世の人のめできこゆるむ列にや思ひなされむ。かつは、軽々しき心のほども見知りたまひぬべく、恥づかしげなめる御ありさまを」と思せば、「なつかしからむ情けも、いとあいなし。よその御返りなどは、うち絶えで、おぼつかかなかるまじきほどに聞こえたまひ、人伝ての御応へ、はしたなからで過ぐしてむ。年ごろ、沈みつる罪失ふばかり御行なひを」とは思し立てど、「にはかにかかる御ことをしも、もて離れ顔にあらむも、なかなか今めかしきやうに見え聞こえて、人のとりなさじやは」と、世の人の口さがなさを思し知りにしかば、かつ、さぶらふ人にもうちとけたまはず、いたう御心づかひしたまひつつ、やうやう御行なひをのみしたまふ。

御兄弟の君達あまたものしたまへど、ひとつ御腹ならねば、いとうとうとしく、宮のうちいとかすかになり行くままに、さばかりめでたき人の、ねむごろに御心を尽くしきこえたまへば、皆人、心を寄せきこゆるも、ひとつ心と見ゆ。

大臣は、あながちに思しいらるるにしもあらねど、つれなき御けしきのうれたきに、負けてやみなむも口惜しく、げにはた、人の御ありさま、世のおぼえ

と思し出でられて、をかしくなむ。今宵は、いとまめやかに聞こえたまひて、  
「一言、憎しなども、人伝てならでのたまはせむを、思ひ絶ゆるふしにもせむ」

と、おり立ちて責めきこえたまへど、

「昔、われも人も若やかに、罪許されたりし世にだに、故宮などの心寄せ思したりしを、なほあるまじく恥づかしと思ひきこえてやみにしを、世の末に、さだすぎ、つきなきほどにて、一声もいとまばゆからむ」

と思して、さらに動きなき御心なれば、「あさましよう、つらし」と思ひきこえたまふ。

さすがに、はしたなくさし放ちてなどはあらぬ人伝ての御返りなどぞ、心やましきや。夜もいたう更けゆくに、風のけはひ、はげしくて、まことにいともの心細くおぼゆれば、さまよきほど、おし拭ひたまひて、

「つれなさを昔に懲りぬ心こそ

人のつらきに添へてつらけれ

心づからの」

とのたまひすさぶるを、

「げに」

「かたはらいたし」

と、人びと、例の、聞こゆ。

「あらためて何かは見えむ人のうへに

かかりと聞きし心変はりを

昔に変はることは、ならはず」

など聞こえたまへり。

いふかひなくて、いとまめやかに怨じきこえて出でたまふも、いと若々しき

「その世のことは、みな昔語りになりゆくを、はるかに思ひ出づるも、心細きに、うれしき御声かな。親なしに臥せる旅人と、育みたまへかし」

とて、寄りゐたまへる御けはひに、いとど昔思ひ出でつつ、古りがたくなまめかしきさまにもてなして、いたうすげみにたる口つき、思ひやらるる声づかひの、さすがに舌つきにて、うちされむとはなほ思へり。

「言ひこしほどに」など聞こえかかる、まばゆきよ。「今しも来たる老いのやうに」など、ほほ笑まれたまふものから、ひきかへ、これもあはれなり。

「この盛りに挑みたまひし女御、更衣、あるはひたすら亡くなりたまひ、あるはかひなくて、はかなき世にさすらへたまふもあべかめり。入道の宮などの御齢よ。あさましとのみ思さるる世に、年のほど身の残り少なげさに、心ばへなども、ものはかなく見えし人の、生きとまりて、のどやかに行なひをもうちして過ぐしけるは、なほすべて定めなき世なり」

と思すに、ものあはれなる御けしきを、心ときめきに思ひて、若やぐ。

「年経れどこの契りこそ忘れね

親の親とか言ひし一言」

と聞こゆれば、疎ましくて、

「身を変へて後も待ち見よこの世にて

親を忘るるためしありやと

頼もしき契りぞや。今のどかにぞ、聞こえさすべき」

とて、立ちたまひぬ。

西面には御格子参りたれど、厭ひきこえ顔ならむもいかがとて、一間、二間は下ろさず。月さし出でて、薄らかに積もれる雪の光りあひて、なかなかいとおもしろき夜のさまなり。

「ありつる老いらくの心げさうも、良からぬものの世のたとひとか聞きし」

るがこととしきを、人入れさせたまひて、宮の御方に御消息あれば、「今日しも渡りたまはじ」と思しけるを、驚きて開けさせたまふ。

御門守、寒げなるけはひ、うすすき出で来て、とみにもえ開けやらず。これより他の男はたなきなるべし。ごほごほと引きて、

「錠のいといたく錆びにければ、開かず」

と愁ふるを、あはれと聞こし召す。

「昨日今日と思すほどに、三年のあなたにもなりにける世かな。かかるを見つつ、かりそめの宿りをえ思ひ捨てず、本草の色にも心を移すよ」と、思し知らるる。口ずさびに、

「いつのまに蓬がもととむすぼほれ

雪降る里と荒れし垣根ぞ」

やや久しう、ひこしらひ開けて、入りたまふ。

宮の御方に、例の、御物語聞こえたまふに、古事どものそこはかとなきうちはじめ、聞こえ尽くしたまへど、御耳もおどろかず、ねぶたきに、宮も欠伸うちしたまひて、

「宵まどひをしはべれば、ものもえ聞こえやらす」

とのたまふほどもなく、軒とか、聞き知らぬ音すれば、よろこびながら立ち出でたまはむとするに、またいと古めかしきしはぶきうちして、参りたる人あり。

「かしこけれど、聞こし召したらむと頼みきこえさするを、世にある者とも数まへさせたまはぬになむ。院の上は、祖母殿と笑はせたまひし」

など、名のり出づるにぞ、思し出づる。

源典侍といひし人は、尼になりて、この宮の御弟子にてなむ行なふと聞きしかど、今まであらむとも尋ね知りたまはざりつるを、あさましうなりぬ。

しはた、聞こえたまふ。

「女五の宮の悩ましくしたまふなるを、訪らひきこえになむ」

とて、ついゐたまへれど、見もやりたまはず、若君をもてあそび、紛らはしおはする側目の、ただならぬを、

「あやしく、御けしきの変はれるべきころかな。罪もなしや。塩焼き衣のあまり目馴れ、見だてなく思さるるにやとて、とだえ置くを、またいかが」

など聞こえたまへば、

「馴れゆくこそ、げに、憂きこと多かりけれ」

とばかりにて、うち背きて臥したまへるは、見捨てて出でたまふ道、もの憂けれど、宮に御消息聞こえたまひてければ、出でたまひぬ。

「かかりけることもありける世を、うらなくて過ぐしけるよ」

と思ひ続けて、臥したまへり。鈍びたる御衣どもなれど、色合ひ重なり、好ましくなかなか見えて、雪の光にしみじく艶なる御姿を見出だして、

「まことに離れまさりたまはば」

と、忍びあへず思さる。

御前など忍びやかなる限りして、

「内より他の歩きは、もの憂きほどになりにけりや。桃園宮の心細きさまにてもものしたまふも、式部卿宮に年ごろは譲りきこえつるを、今は頼むなど思いのたまふも、ことわりに、いとほしければ」

など、人びとにもものたまひなせど、

「いでや。御好き心の古りがたきぞ、あたら御疵なめる」

「軽々しきことも出で来なむ」

など、つぶやきあへり。

宮には、北面の人しげき方なる御門は、入りたまはむも軽々しければ、西な

ばへを、世の人に変はり、めづらしくもねたくも思ひきこえたまふ。

世の中に漏り聞こえて、

「前齋院を、ねむごろに聞こえたまへばなむ、女五の宮などもよろしく思したなり。似げなからぬ御あはひならむ」

など言ひけるを、対の上は伝へ聞きたまひて、しばしは、

「さりとも、さやうならむこともあらば、隔てては思したらじ」

と思しけれど、うちつけに目とどめきこえたまふに、御けしきなども、例ならずあくがれたるも心憂く、

「まめまめしく思しなるらむことを、つれなく戯れに言ひなしたまひけむよと、同じ筋にはものしたまへど、おぼえことに、昔よりやむごとなく聞こえたまふを、御心など移りなば、はしたなくもあべいかな。年ごろの御もてなしなどは、立ち並ぶ方なく、さすがにならひて、人に押し消たれむこと」

など、人知れず思し嘆かる。

「かき絶え名残なきさまにはもてなしたまはずとも、いとものはかなきさまにて見馴れたまへる年ごろの睦び、あなづらはしき方にこそはあらめ」

など、さまざまに思ひ乱れたまふに、よろしきことこそ、うち怨じなど憎からず聞こえたまへ、まめやかにつらしと思せば、色にも出だしたまはず。

端近う眺めがちに、内住みしげくなり、役とは御文を書きたまへば、

「げに、人の言葉むなしかるまじきなめり。けしきをだにかすめたまへかし」と、疎ましくのみ思ひきこえたまふ。

夕つ方、神事なども止まりてさうざうしきに、つれづれと思しあまりて、五の宮に例の近づき参りたまふ。雪うち散りて艶なるたそかれ時に、なつかしきほどに馴れたる御衣どもを、いよいよたきしめたまひて、心ことに化粧じ暮らしたまへれば、いとど心弱からむ人はいかがと見えたり。さすがに、まかり申

どいかが御覧じけむと、ねたく。されど、

見し折のつゆ忘れぬ朝顔の

花の盛りは過ぎやしぬらむ

年ごろの積もりも、あはれとばかりは、さりとも、思し知るらむやとなむ、  
かつは」

など聞こえたまへり。おとなびたる御文の心ばへに、「おぼつかかなからむも、  
見知らぬやうにや」と思し、人びとも御硯とりまかなひて、聞こゆれば、

「秋果てて霧の籬にむすぼほれ

あるかなきかに移る朝顔

似つかはしき御よそへにつけても、露けく」

とのみあるは、何のをかきふしもなきを、いかなるにか、置きがたく御覧  
ずめり。青鈍の紙の、なよびかなる墨つきはしも、をかしく見ゆめり。人の御  
ほど、書きざまなどに繕はれつつ、その折は罪なきことも、つきづきしくまね  
びなすには、ほほゆがむこともあめればこそ、さかしらに書き紛らはしつつ、  
おぼつかなきことも多かりけり。

立ち返り、今さらに若々しき御文書きなども、似げなきこと、と思せども、  
なほかく昔よりも離れぬ御けしきながら、口惜しくて過ぎぬるを思ひつつ、  
えやむまじくて思さるれば、さらがへりて、まめやかに聞こえたまふ。

東の対に離れおはして、宣旨を迎へつつ語らひたまふ。さぶらふ人びとの、  
さしもあらぬ際のことをだに、なびきやすなるなどは、過ちもしつべく、めで  
きこゆれど、宮は、そのかみだにこよなく思し離れたりしを、今は、まして、  
誰も思ひなかるべき御齡、おぼえにて、「はかなき本草につけたる御返りなどの、  
折過ぎさぬも、軽々しくや、とりなさるらむ」など、人の物言ひを憚りたまひ  
つつ、うちとけたまふべき御けしきもなければ、古りがたく同じさまなる御心

きけさへ添ひたまひにけり。さるは、いといたう過ぐしたまへど、御位のほどには合はざめり。

「なべて世のあはればかりを問ふからに

誓ひしことと神やいさめむ」

とあれば、

「あな、心憂。その世の罪は、みな科戸の風にたぐへてき」

とのたまふ愛敬も、こよなし。

「みそぎを、神は、いかがはべりけむ」

など、はかなきことを聞こゆるも、まめやかには、いとかたはらいたし。世づかぬ御ありさまは、年月に添へても、もの深くのみ引き入りたまひて、え聞こえたまはぬを、見たてまつり惱めり。

「好き好きしきやうになりぬるを」

など、浅はかならずうち嘆きて立ちたまふ。

「齢の積もりには、面なくこそなるわざなりけれ。世に知らぬやつれを、今ぞ、とだに聞こえさすべくやは、もてなしたまひける」

とて、出でたまふ名残、所狭きまで、例の聞こえあへり。

おほかたの、空もをかしきほどに、木の葉の音なひにつけても、過ぎにしものあはれとり返しつつ、その折々、をかしくもあはれにも、深く見えたまひし御心ばへなども、思ひ出できこえさす。

心やましくて立ち出でたまひぬるは、まして、寢覚がちに思し続けらる。とく御格子参らせたまひて、朝霧を眺めたまふ。枯れたる花どもの中に、朝顔のこれかれにはひまつはれて、あるかなきかに咲きて、匂ひもことに変はれるを、折らせたまひてたてまつれたまふ。

「けぎやかなりし御もてなしに、人悪ろき心地しはべりて、うしろでもいと

と、恨めしげにけしきばみきこえたまふ。

あなたの御前を見やりたまへば、枯れ枯れなる前裁の心ばへもことに見渡されて、のどやかに眺めたまふらむ御ありさま、容貌も、いとゆかしくあはれて、え念じたまはで、

「かくさぶらひたるついでを過ぐしはべらむは、心ざしなきやうなるを、あなたの御訪らひ聞こゆべかりけり」

とて、やがて簀子より渡りたまふ。

暗うなりたるほどなれど、鈍色の御簾に、黒き御几帳の透影あはれに、追風なまめかしく吹き通し、けはひあらまほし。簀子はかたはらいたければ、南の廂に入れたてまつる。

宣旨、対面して、御消息は聞こゆ。

「今さらに、若々しき心地する御簾の前かな。神さびにける年月の労数へらはべるに、今は内外も許させたまひてむとぞ頼みはべりける」

とて、飽かず思したり。

「ありし世は皆夢に見なして、今なむ、覚めてはかなきにやと、思ひたまへ定めがたくはべるに、労などは、静かにやと定めきこえさすべうはべらむ」

と、聞こえ出だしたまへり。「げにこそ定めがたき世なれ」と、はかなきことにつけても思し続けらる。

「人知れず神の許しを待ちし間に

ここらつれなき世を過ぐすかな

今は、何のいさめにか、かこたせたまはむとすらむ。なべて、世にわづらはしきことさへはべりしのち、さまざまに思ひたまへ集めしかな。いかで片端をだに」

と、あながちに聞こえたまふ、御用意なども、昔よりも今すこしなまめかし

「いともいともあさましく、いづ方につけても定めなき世を、同じさまにて見たまへ過ぐす命長きの恨めしきこと多くはべれど、かくて、世に立ち返りたまへる御よろこびになむ、ありし年ごろを見たてまつりさしてましかば、口惜しからましとおぼえはべり」

と、うちわななきたまひて、

「いときよらにねびまさりたまひにけるかな。童にもものしたまへりしを見てまつりそめし時、世にかかる光の出でおはしたることと驚かれはべりしを、時々見たてまつるごとに、ゆゆしくおぼえはべりてなむ。内の上なむ、いとよく似たてまつらせたまへりと、人びと聞こゆるを、さりとも、劣りたまへらむとこそ、推し量りはべれ」

と、長々と聞こえたまへば、

「ことにかくさし向かひて人のほめぬわざかな」と、をかしく思す。

「山賤になりて、いたう思ひくづほれはべりし年ごろののち、こよなく衰へてはべるものを。内の御容貌は、いにしへの世にも並ぶ人なくやとこそ、ありがたく見たてまつりはべれ。あやしき御推し量りになむ」

と聞こえたまふ。

「時々見たてまつらば、いとどしき命や延びはべらむ。今日は老いも忘れ、憂き世の嘆きみな去りぬる心地なむ」

とても、また泣いたまふ。

「三の宮うらやましく、さるべき御ゆかり添ひて、親しく見たてまつりたまふを、うらやみはべる。この亡せたまひぬるも、さやうにこそ悔いたまふ折々ありしか」

とのたまふにぞ、すこし耳とまりたまふ。

「さも、さぶらひ馴れなましかば、今に思ふさまにはべらまし。皆さし放たせたまひて」

齋院は、御服にて下りゐたまひにきかし。大臣、例の、思しそめつること、絶えぬ御癖にて、御訪らひなどいとしげう聞こえたまふ。宮、わづらはしかりしことを思せば、御返りもうちとけて聞こえたまはず。いと口惜しと思しわたる。

長月になりて、桃園宮に渡りたまひぬるを聞きて、女五の宮のそこにおはすれば、そなたの御訪らひにことづけて参うでたまふ。故院の、この御子たちをば、心ことにやむごとなく思ひきこえたまへりしかば、今も親しく次々に聞こえ交はしたまふめり。同じ寝殿の西東にぞ住みたまひける。ほどもなく荒れにける心地して、あはれにけはひしめやかなり。

宮、対面したまひて、御物語聞こえたまふ。いと古めきたる御けはひ、しはぶきがちにおはす。年長におはすれど、故大殿の宮は、あらまほしく古りがたき御ありさまなるを、もて離れ、声ふつつかに、こちごちしくおぼえたまへるも、さるかたなり。

「院の上、隠れたまひてのち、よろづ心細くおぼえはべりつるに、年の積もるままに、いと涙がちにて過ぐしはべるを、この宮さへかくうち捨てたまへれば、いよいよあるかなきかに、とまりはべるを、かく立ち寄り訪はせたまふになむ、もの忘れしぬべくはべる」

と聞こえたまふ。

「かしこくも古りたまへるかな」と思へど、うちかしこまりて、

「院隠れたまひてのちは、さまざまにつけて、同じ世のやうにもはべらず、おぼえぬ罪に当たりはべりて、知らぬ世に惑ひはべりしを、たまたま、朝廷に数まへられたてまつりては、またとり乱り暇なくなとして、年ごろも、参りていにしへの御物語をだに聞こえうけたまはらぬを、いぶせく思ひたまへわたりつつなむ」

など聞こえたまふを、

朝 顏

朝

顏

と聞こゆれば、

「浅からぬしたの思ひを知らねばや

なほ篝火の影は騒げる

誰れ憂きもの」

と、お返し恨みたまへる。

おほかたもの静かに思さるるころなれば、尊きことどもに御心とまりて、例よりは日ごろ経たまふにや、すこし思ひ紛れけむ、とぞ。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

御心ひとつにもものむつかしうて、悩ましげにさへしたまふを、いとすぐよかに  
つれなくて、常よりも親がりありきたまふ。

女君に、

「女御の、秋に心を寄せたまへりしもあはれに、君の、春の曙に心しめたま  
へるもことわりにこそあれ。時々につけたる木草の花によせても、御心とまる  
ばかりの遊びなどしてしがなと、公私のいとなみしげき身こそふさはしからぬ、  
いかで思ふこととしてしがなと、ただ、御ためさうぎうしくやと思ふこそ、心苦  
しけれ」

など語らひきこえたまふ。

「山里の人も、いかに」など、絶えず思しやれど、所狭さのみまさる御身に  
て、渡りたまふこと、いとかたし。

「世の中をあぢきなく憂しと思ひ知るけしき、などかさしも思ふべき。心や  
すぐ立ち出でて、おほぞうの住まひはせじと思へる」を、「おほけなし」とは思  
すものから、いとほしくて、例の、不断の御念仏にことつけて渡りたまへり。

住み馴るるままに、いと心すぐげなる所のさまに、いと深からざらむことに  
てだに、あはれ添ひぬべし。まして、見たてまつるにつけても、つらかりける  
御契りの、さすがに、浅からぬを思ふに、なかなかにて慰めがたきけしきなれ  
ば、こしらへかねたまふ。

いと木繁き中より、篝火どもの影の、遣水の螢に見えまがふもをかし。

「かかる住まひにしほじまざらましかば、めづらかにおぼえまし」

とのたまふに、

「漁りせし影忘れぬ篝火は

身の浮舟や慕ひ来にけむ

思ひこそ、まがへられはべれ」

と聞こえたまふに、「いづこの御応へかはあらむ。心得ず」と思したる御けしきなり。このついでに、え籠めたまはで、恨みきこえたまふことどもあるべし。今すこし、ひがこともしたまひつべけれども、いとうたてと思いたるも、こわりに、わが御心も、「若々しうけしからず」と思し返して、うち嘆きたまへるさまの、もの深うなまめかしきも、心づきなうぞ思しなりぬる。やをらづつひき入りたまひぬるけしきなれば、

「あさましようも、疎ませたまひぬるかな。まことに心深き人は、かくこそあらざなれ。よし、今よりは、憎ませたまふなよ。つらからむ」とて、渡りたまひぬ。

うちしめりたる御匂ひのとまりたるさへ、疎ましく思さる。人びと、御格子など参りて、

「この御茵の移り香、言ひ知らぬものかな」

「いかでかく取り集め、柳の枝に咲かせたる御ありさまならむ」

「ゆゆしう」

と聞こえあへり。

対に渡りたまひて、とみにも入りたまはず、いたう眺めて、端近う臥したまへり。燈籠遠くかけて、近く人びとさぶらはせたまひて、物語などせさせたまふ。

「かうあながちなることに胸ふたがる癖の、なほありけるよ」

と、わが身ながら思し知らる。

「これはいと似げなきことなり。恐ろしう罪深き方は多うまさりけめど、いにしへの好きは、思ひやりすくなきほどの過ちに、仏神も許したまひけむ」と、思しきまますも、「なほ、この道は、うしろやすく深き方のまさりけるかな」と、思し知られたまふ。

女御は、秋のあはれを知り顔に応へ聞こえてけるも、「悔しう恥づかし」と、

はべる、生ひ先いと待ち遠なりや。かたじけなくとも、なほ、この門広げさせたまひて、はべらずなりなむ後にも、数まへさせたまへ」  
など聞こえたまふ。

御応へは、いとおほどかなるさまに、からうして一言ばかりかすめたまへるけはひ、いとなつかしげなるに聞きつきて、しめじめと暮るるまでおはす。

「はかばかしき方の望みはさるものにて、年のうち行き交はる時々の花紅葉、空のけしきにつけても、心の行くこともしはべりにしがな。春の花の林、秋の野の盛りを、とりどりに人争ひはべりける、そのころの、げにと心寄るばかりあらはなる定めこそはべらぎなれ。

唐土には、春の花の錦に如くものなしと言ひはべめり。大和言の葉には、秋のあはれを取り立てて思へる。いづれも時々につけて見たまふに、目移りて、えこそ花鳥の色をも音をもわきまへはべらね。

狭き垣根のうちなりとも、その折の心見知るばかり、春の花の木をも植ゑわたり、秋の草をも掘り移して、いたづらなる野辺の虫をも棲ませて、人に御覽ぜさせむと思ひたまふるを、いづ方にか御心寄せはべるべからむ」

と聞こえたまふに、いと聞こえにくきことと思せど、むげに絶えて御応へ聞こえたまはざらむうたてあれば、

「まして、いかが思ひ分きはべらむ。げに、いつとなきなかに、あやしと聞きし夕べこそ、はかなう消えたまひにし露のよすがにも、思ひたまへられぬべけれ」

と、しどけなげにのたまひ消つも、いとらうたげなるに、え忍びたまはで、  
「君もさはあはれを交はせ人知れず

わが身にしむる秋の夕風

忍びがたき折々もはべりかし」

ち身じろきたまふほども、あさましくやはらかななまめきておはすべかめる。「見たてまつらぬこそ、口惜しけれ」と、胸のうちつぶるるぞ、うたてあるや。

「過ぎにし方、ことに思ひ悩むべきこともなくてはべりぬべかりし世の中にも、なほ心から、好き好きしきことにつけて、もの思ひの絶えずもはべりけるかな。さるまじきことどもの、心苦しきが、あまたはべりし中に、つひに心も解けず、むすぼほれて止みぬること、二つなむはべる。

一つは、この過ぎたまひにし御ことよ。あさましうのみ思ひつめて止みたまひにしが、長き世の愁はしきふしと思ひたまへられしを、かうまでも仕うまつり、御覽ぜらるるをなむ、慰めに思うたまへなせど、燃えし煙の、むすぼほれたまひけむは、なほいぶせうこそ思ひたまへらるれ」

とて、今一つはのたまひさしつ。

「中ごろ、身のなきに沈みはべりしほど、方々に思ひたまへしことは、片端づつかなひにたり。東の院にもものする人の、そこはかとなくて、心苦しうおぼえわたりはべりしも、おだしう思ひなりにてはべり。心ばへの憎からぬなど、我も人も見たまへあきらめて、いとこそさはやかなれ。

かく立ち返り、朝廷の御後見仕うまつるよろこびなどは、さしも心に深く染まず、かやうなる好きがましき方は、静めがたうのみはべるを、おぼろげに思ひ忍びたる御後見とは、思し知らせたまふらむや。あはれとだにのたまはせずは、いかにかひなくはべらむ」

とのたまへば、むつかしうて、御応へもなければ、

「さりや。あな心憂」

とて、異事に言ひ紛らはしたまひつ。

「今は、いかでのどやかに、生ける世の限り、思ふこと残さず、後の世の勤めも心にまかせて、籠もりるなむと思ひはべるを、この世の思ひ出にしつべきふしのはべらぬこそ、さすがに口惜しうはべりぬべけれ。かならず、幼き人の

とやありし」

と案内したまへど、

「さらに。かけても聞こし召さむことを、いみじきことに思し召して、かつは、罪得ることにやと、主上の御ためを、なほ思し召し嘆きたりし」

と聞こゆるにも、ひとかたならず心深くおはせし御ありさまなど、尽きせず恋ひきこえたまふ。

齋宮の女御は、思しもしるき御後見にて、やむごとなき御おぼえなり。御用意、ありさまなども、思ふさまにあらまほしう見えたまへれば、かたじけなきものにもてかしづききこえたまへり。

秋のころ、二条院にまかだたまへり。寝殿の御しつらひ、いとど輝くばかりしたまひて、今はむげの親さまにもてなして、扱ひきこえたまふ。

秋の雨いと静かに降りて、御前の前裁の色々乱れたる露のしげさに、いにしへのことどもかき続け思し出でられて、御袖も濡れつつ、女御の御方に渡りたまへり。こまやかなる鈍色の御直衣姿にて、世の中の騒がしきなどことつけたまひて、やがて御精進なれば、数珠ひき隠して、さまよくもてなしたまへる、尽きせすなまめかしき御ありさまにて、御簾の内に入りたまひぬ。

御几帳ばかりを隔てて、みづから聞こえたまふ。

「前裁どもこそ残りなく紐解きはべりにけれ。いとものすさまじき年なるを、心やりて時知り顔なるも、あはれにこそ」

とて、柱に寄りゐたまへる夕ばえ、いとめでたし。昔の御ことども、かの野の宮に立ちわづらひし曙などを、聞こえ出でたまふ。いとものあはれと思したり。

宮も、「かくれば」とにや、すこし泣きたまふけはひ、いとらうたげにて、う

など、よろづにぞ思しける。

秋の司召に、太政大臣になりたまふべきこと、うちうちに定め申したまふついでになむ、帝、思し寄する筋のこと、漏らしきこえたまひけるを、大臣、いとまばゆく、恐ろしう思して、さらにあるまじきよしを申し返したまふ。

「故院の御心ざし、あまたの皇子たちの御中に、とりわきて思し召しながら、位を譲らせたまはむことを思し召し寄らずなりにけり。何か、その御心改めて、及ばぬ際には昇りはべらむ。ただ、もとの御おきてのままに、朝廷に仕うまつりて、今すこしの齢かさなりはべりなば、のどかなる行なひに籠もりはべりなむと思ひたまふる」

と、常の御言の葉に変はらず奏したまへば、いと口惜しうなむ思しける。

太政大臣になりたまふべき定めあれど、しばし、と思すところありて、ただ御位添ひて、牛車聴されて参りまかでしたまふを、帝、飽かず、かたじけなきものに思ひきこえたまひて、なほ親王になりたまふべきよしを思しのたまはずれど、

「世の中の御後見したまふべき人なし。権中納言、大納言になりて、右大将かけたまへるを、今一際あがりなむに、何ごとも譲りてむ。さて後に、ともかくも、静かなるさまに」

とぞ思しける。なほ思しめぐらすに、

「故宮の御ためにもいとほしう、また主上のかく思し召し悩めるを見たてまつりたまふもかたじけなきに、誰れかかかすることを漏らし奏しけむ」

と、あやしう思さる。

命婦は、御匣殿の替はりたる所に移りて、曹司たまはりて参りたり。大臣、対面したまひて、

「このことを、もし、ものついでに、露ばかりにても漏らし奏したまふこ

が国にもさなむはべる。まして、ことわりの齡どもの、時至りぬるを、思し嘆くべきことにもはべらず」

など、すべて多くのことどもを聞こえたまふ。片端まねぶも、いとかたはらいたしや。

常よりも黒き御装ひに、やつしたまへる御容貌、違ふところなし。主上も、年ごろ御鏡にも、思しよることなれど、聞こし召ししことの後は、またこまかに見たてまつりたまひつつ、ことにいとあはれに思し召さるれば、「いかで、このことをかすめ聞こえばや」と思せど、さすがに、はしたなくも思しぬべきことなれば、若き御心地につつましくて、ふともえうち出できこえたまはぬほどは、ただおほかたのことどもを、常よりことになつかしう聞こえさせたまふ。

うちかしまりたまへるさまにて、いと御けしきことなるを、かしこき人の御目には、あやしと見たてまつりたまへど、いとかく、さださだと聞こし召したらむとは思さざりけり。

主上は、王命婦に詳しきことは、問はまほしう思し召せど、

「今さらに、しか忍びたまひけむこと知りにけりと、かの人にも思はれじ。

ただ、大臣にいかでほのめかし問ひきこえて、先々のかかる事の例はありけりやと問ひ聞かむ」

とぞ思せど、さらについてでもなければ、いよいよ御学問をせさせたまひつつ、さまざまの書どもを御覧ずるに、

「唐土には、現はれても忍びても、乱りがはしき事いと多かりけり。日本には、さらに御覧じ得るところなし。たとひあらむにても、かやうに忍びたらむことをば、いかでか伝へ知るやうのあらむとする。一世の源氏、また納言、大臣になりて後に、さらに親王にもなり、位にも即きたまひつるも、あまたの例ありけり。人柄のかしこきにごよせて、さもや譲りきこえまし」

なれ。何の罪とも知らし召さぬが恐ろしきにより、思ひたまへ消ちてしことを、さらに心より出しはべりぬること」

と、泣く泣く聞こゆるほどに、明け果てぬれば、まかでぬ。

主上は、夢のやうにいみじきことを聞かせたまひて、いろいろに思し乱れさせたまふ。

「故院の御ためもうしろめたく、大臣のかくただ人にて世に仕へたまふも、あはれにかたじけなかりける事」

かたがた思し悩みて、日たくるまで出でさせたまはねば、「かくなむ」と聞きたまひて、大臣も驚きて参りたまへるを、御覧するにつけても、いとど忍びがたく思し召されて、御涙のこぼれさせたまひぬるを、

「おほかた故宮の御事を、干る世なく思し召したるころなればなめり」と見たてまつりたまふ。

その日、式部卿の親王亡せたまひぬるよし奏するに、いよいよ世の中の騒がしきことを嘆き思したり。かかるころなれば、大臣は里にもえまかでたまはで、つとさぶらひたまふ。

しめやかなる御物語のついでに、

「世は尽きぬるにやあらむ。もの心細く例ならぬ心地なむするを、天の下もかくのどかならぬに、よろづあわたたしくなむ。故宮の思さむところによりてこそ、世間のことも思ひ憚りつれ、今は心やすきさまにても過ぐさまほしくなむ」

と語らひきこえたまふ。

「いとあるまじき御ことなり。世の静かならぬことは、かならず政事の直く、ゆがめるにもよりはべらず。さかしき世にしもなむ、よからぬことどももはべりける。聖の帝の世にも、横様の乱れ出で来ること、唐土にもはべりける。わ

べらむ。

これは来し方行く先の大事とはべることを、過ぎおはしましにし院、後の宮、ただ今世をまつりごちたまふ大臣の御ため、すべて、かへりてよからぬ事にや漏り出ではべらむ。かかる老法師の身には、たとひ愁へはべりとも、何の悔かはべらむ。仏天の告げあるによりて奏しはべるなり。

わが君は生まれおはしましたりし時より、故宮の深く思し嘆くことありて、御祈り仕うまつらせたまふゆるなむはべりし。詳しくは法師の心にえ悟りはべらず。事の違ひめありて、大臣横様の罪に当たりたまひし時、いよいよ懼ぢ思し召して、重ねて御祈りども承はりはべりしを、大臣も聞こし召してなむ、またさらに言加へ仰せられて、御位に即きおはしましまで仕うまつることどもはべりし。

その承りしさま」

とて、詳しく奏するを聞こし召すに、あさましうめづらかにて、恐ろしうも悲しうも、さまざまに御心乱れたり。

とばかり、御応へもなければ、僧都、「進み奏しつるを便なく思し召すにや」と、わづらはしく思ひて、やをらかしこまりてまかづるを、召し止めて、

「心に知らで過ぎなましかば、後の世までの咎めあるべかりけることを、今まで忍び籠められたりけるをなむ、かへりてはうしろめたき心なりと思ひぬる。またこの事を知りて漏らし伝ふるたぐひやあらむ」

とのたまはず。

「さらに、なにがしと王命婦とより他の人、この事のけしき見たるはべらず。さるによりなむ、いと恐ろしうはべる。天変しきりにさとし、世の中静かならぬは、このけなり。いときなく、ものの心知ろし召すまじかりつるほどこそはべりつれ、やうやう御齡足りおはしまして、何事もわきまへさせたまふべき時に至りて、咎をも示すなり。よろづのこと、親の御世より始まるにこそはべる

の宮の御母後の御世より伝はりて、次々の御祈りの師にてさぶらひける僧都、故宮にもいとやむごとなく親しきものに思したりしを、朝廷にも重き御おぼえにて、いかめしき御願ども多く立てて、世にかしこき聖なりける、年七十ばかりにて、今は終りの行なひをせむとて籠もりたるが、宮の御事によりて出でたるを、内裏より召しありて、常にさぶらはせたまふ。

このごろは、なほもとのごとく参りさぶらはるべきよし、大臣も勧めのたまへば、

「今は、夜居など、いと堪へがたうおぼえはべれど、仰せ言のかしこきにより、古き心ざしを添へて」

とて、さぶらふに、静かなる暁に、人も近くさぶらはず、あるはまかでなどしぬるほどに、古代にうちしはぶきつつ、世の中のことも奏したまふついでに、

「いと奏しがたく、かへりては罪にもやまかり当たらむと思ひたまへ憚る方多かれど、知ろし召さぬに、罪重くて、天眼恐ろしく思ひたまへらるることを、心にむせびはべりつつ、命終りはべりなば、何の益かははべらむ。仏も心ぎたなしとや思し召さむ」

とばかり奏しきして、えうち出でぬことあり。

主上、「何事ならむ。この世に恨み残るべく思ふことやあらむ。法師は、聖といへども、あるまじき横様の嫉み深く、うたてあるものを」と思して、

「いはけなかりし時より、隔て思ふことなきを、そこには、かく忍び残されたることありけるをなむ、つらく思ひぬる」

とのたまはすれば、

「あなかしこ。さらに、仏の諫め守りたまふ真言の深き道をだに、隠しとどむることなく広め仕うまつりはべり。まして、心に隈あること、何ごとにかは

よろづに心乱れはべりて、世にはべらむことも、残りなき心地なむしはべる」  
など聞こえたまふほどに、燈火などの消え入るやうにて果てたまひぬれば、  
いふかひなく悲しきことを思し嘆く。

かしこき御身のほどと聞こゆるなかにも、御心ばへなどの、世のためしにも  
あまねくあはれにおはしまして、豪家にことよせて、人の愁へとあることなど  
もおのづからうち混じるを、いささかもさやうなる事の乱れなく、人の仕うま  
つることをも、世の苦しみとあるべきことをば、止めたまふ。

功德の方とても、勧むるによりたまひて、いかめしうめづらしうしたまふ人  
なども、昔のさかしき世に皆ありけるを、これは、さやうなることなく、ただ  
もとよりの宝物、得たまふべき年官、年爵、御封の物のさるべき限りして、ま  
ことに心深きことどもの限りをし置かせたまへれば、何とわくまじき山伏など  
まで惜しみきこゆ。

をさめたてまつるにも、世の中響きて、悲しと思はぬ人なし。殿上人など、  
なべてひとつ色に黒みわたりて、ものの栄なき春の暮なり。二条院の御前の桜  
を御覧じても、花の宴の折など思し出づ。「今年ばかりは」と、一人ごちたまひ  
て、人の見とがめつべければ、御念誦堂に籠もりゐたまひて、日一日泣き暮ら  
したまふ。夕日はなやかにさして、山際の梢あらはなるに、雲の薄くわたれる  
が、鈍色なるを、何ごとも御目とどまらぬころなれど、いともあはれに思さ  
る。

「入り日さす峰にたなびく薄雲は

もの思ふ袖に色やまがへる」

人聞かぬ所なれば、かひなし。

御わぎなども過ぎて、事ども静まりて、帝、もの心細く思したり。この入道

も人にまさりける身」と思し知らる。主上の、夢のうちにも、かかる事の心を知らせたまはぬを、さすがに心苦しう見たてまつりたまひて、これのみぞ、うしろめたくむすぼはれたることに、思し置かるべき心地したまひける。

大臣は、朝廷方ざまにても、かくやむごとなき人の限り、うち続き亡せたまひなむことを思し嘆く。人知れぬあはれ、はた、限りなくて、御祈りなど思し寄らぬことなし。年ごろ思し絶えたりつる筋さへ、今一度、聞こえずなりぬるが、いみじく思さるれば、近き御几帳のもとに寄りて、御ありさまなども、さるべき人びとに問ひ聞きたまへば、親しき限りさぶらひて、こまかに聞こゆ。

「月ごろ悩ませたまへる御心地に、御行なひを時の間もたゆませたまはずさせたまふ積もりの、いとどいたうくづほれさせたまふに、このころとなりては、柑子などをだに、触れさせたまはずなりにたれば、頼みどころなくならせたまひにたること」

と、泣き嘆く人びと多かり。

「院の御遺言にかなひて、内裏の御後見仕うまつりたまふこと、年ごろ思ひ知りはべること多かれど、何につけてかは、その心寄せことなるさまをも、漏らしきこえむとのみ、のどかに思ひはべりけるを、今なむあはれに口惜しく」と、ほのかにのたまはするも、ほのぼの聞こゆるに、御応へも聞こえやりたまはず、泣きたまふさま、いといみじ。「などかうしも心弱きさまに」と、人目を思し返せど、いにしへよりの御ありさまを、おほかたの世につけても、あたらしく惜しき人の御さまを、心になふわぎならねば、かけとどめきこえむ方なく、いふかひなく思さるること限りなし。

「はかばかしからぬ身ながらも、昔より、御後見仕うまつるべきことを、心のいたる限り、おろかならず思ひたまふるに、太政大臣の隠れたまひぬるをだに、世の中、心あわたたしく思ひたまへらるるに、また、かくおはしませば、

やしく世になべてならぬことども混じりたり。内の大臣のみなむ、御心のうちに、わづらはしく思し知らるることありける。

入道後の宮、春のはじめより悩みわたらせたまひて、三月にはいと重くならせたまひぬれば、行幸などあり。院に別れたてまつらせたまひしほどは、いといはけなくて、もの深くも思されざりしを、いみじう思し嘆きたる御けしきなれば、宮もいと悲しく思し召さる。

「今年は、かならず逃るまじき年と思ひたまへつれど、おどろおどろしき心地にもはべらざりつれば、命の限り知り顔にはべらむも、人やうたて、ことごとしう思はむと憚りてなむ、功德のことなども、わざと例よりも取り分きてしもはべらずなりにける。

参りて、心のどかに昔の御物語もなど思ひたまへながら、うつしぎまなる折少くはべりて、口惜しく、いぶせて過ぎはべりぬること」

と、いと弱げに聞こえたまふ。

三十七にぞおはしましける。されど、いと若く盛りにおはしますさまを、惜しく悲しと見たてまつらせたまふ。

「慎ませたまふべき御年なるに、晴れ晴れしからで、月ごろ過ぎさせたまふことをだに、嘆きわたりはべりつるに、御慎みなどをも、常よりことにせさせたまはざりけること」

と、いみじう思し召したり。ただこのころぞ、おどろきて、よろづのことせさせたまふ。月ごろは、常の御悩みとのみうちたゆみたりつるを、源氏の大臣も深く思し入りたり。限りあれば、ほどなく帰らせたまふも、悲しきこと多かり。

宮、いと苦しうて、はかばかしうものも聞こえさせたまはず。御心のうちに思し続けるに、「高き宿世、世の栄えも並ぶ人なく、心のうちに飽かず思ふこと

おぼろげにやむごとなき所にてだに、かばかりもうちとけたまふことなく、  
気高き御もてなしを聞き置きたれば、

「近きほどに交じらひては、なかなかいと目馴れて、人あなづられなること  
どももぞあらまし。たまさかにて、かやうにふりはへたまへるこそ、たけき心  
地すれ」

と思ふべし。

明石にも、さこそ言ひしか、この御心おきて、ありさまをゆかしがりて、お  
ぼつかなからず、人は通はしつつ、胸つぶるることもあり、また、おもだたし  
く、うれしと思ふことも多くなむありける。

そのころ、太政大臣亡せたまひぬ。世の重しとおはしつる人なれば、朝廷に  
も思し嘆く。しばし、籠もりたまひしほどをだに、天の下の騒ぎなりしかば、  
まして、悲しと思ふ人多かり。源氏の大臣も、いと口惜しく、よろづこと、お  
し譲りきこえてこそ、暇もありつるを、心細く、事しげくも思されて、嘆きお  
はす。

帝は、御年よりはこよなう大人大人しうねびさせたまひて、世の政事も、う  
しろめたく思ひきこえたまふべきにはあらねども、またとりたてて御後見した  
まふべき人もなきを、「誰れに譲りてかは、静かなる御本意もかなはむ」と思す  
に、いと飽かず口惜し。

後の御わぎなどにも、御子ども孫に過ぎてなむ、こまやかに弔らひ、扱ひた  
まひける。

その年、おほかた世の中騒がしくて、朝廷ぎまに、もののさとししげく、の  
どかならで、

「天つ空にも、例に違へる月日星の光見え、雲のたたずまひあり」

とのみ、世の人おどろくこと多くて、道々の勘文どもたてまつれるにも、あ

と、うちまもりつつ、ふところに入れて、うつくしげなる御乳をくくめたまひつつ、戯れぬたまへる御さま、見どころ多かり。御前なる人びとは、

「などか、同じくは」

「いでや」

など、語らひあへり。

かしこには、いとのだやかに、心ばせあるけはひに住みなして、家のありさまも、やう離れめづらしきに、みづからのけはひなどは、見るたびごとに、やむごとなき人びとなどに劣るけぢめこよなからず、容貌、用意あらまほしうねびまさりゆく。

「ただ、世の常のおぼえにかき紛れたらば、さるたぐひなくやはと思ふべきを、世に似ぬひがものなる親の聞こえなどこそ、苦しけれ。人のほどなどは、さてもあるべきを」など思す。

はつかに、飽かぬほどにのみあればにや、心のどかならず立ち降りたまふも苦しくて、「夢のわたりの浮橋か」とのみ、うち嘆かれて、箏の琴のあるを引き寄せて、かの明石にて、小夜更けたりし音も、例の思し出でらるれば、琵琶をわりなく責めたまへば、すこし掻き合はせたる、「いかで、かうのみひき具しけむ」と思さる。若君の御ことなど、こまやかに語りたまひつつおはす。

ここは、かかる所なれど、かやうに立ち泊りたまふ折々あれば、はかなき果物、強飯ばかりはきこしめす時もあり。近き御寺、桂殿などにおはしまし紛らはしつつ、いとまほには乱れたまはねど、また、いとけぎやかにはしたなく、おしなべてのさまにはもてなしたまはぬなどこそは、いとおぼえことには見ゆめれ。

女も、かかる御心のほどを見知りきこえて、過ぎたりと思すばかりのことはし出でず、また、いたく卑下せずなどして、御心おきてにもて違ふことなく、いとめやすくぞありける。

ど、夜たち泊りなどやうに、わざとは見えたまはず。

ただ御心ぎまのおいらかにこめきて、「かばかりの宿世なりける身にこそあらめ」と思ひなしつつ、ありがたきまでうしろやすくのどかにものしたまへば、をりふしの御心おきてなども、こなたの御ありさまに劣るけぢめこよなからずもてなしたまひて、あなづりきこゆべうはあらねば、同じごと、人参り仕うまつりて、別当どもも事おこたらず、なかなか乱れたるところなく、目やすき御ありさまなり。

山里のつれづれをも絶えず思しやれば、公私もの騒がしきほど過ぐして、渡りたまふとて、常よりことにうち化粧じたまひて、桜の御直衣に、えならぬ御衣ひき重ねて、たきしめ、装束きたまひて、まかり申したまふさま、隈なき夕日に、いとどしくきよらに見えたまふ。女君、ただならず見たてまつり送りましたまふ。

姫君は、いはけなく御指貫の裾にかかりて、慕ひきこえたまふほどに、外にも出でたまひぬべければ、立ちとまりて、いとあはれと思したり。こしらへおきて、「明日帰り来む」と、口ずさびて出でたまふに、渡殿の戸口に待ちかけて、中将の君して聞こえたまへり。

「舟とむる遠方人のなくはこそ

明日帰り来む夫と待ち見め」

いたう馴れて聞こゆれば、いとにほひやかにほほ笑みて、

「行きて見て明日もさね来むなかなか

遠方人は心置くとも」

何事とも聞き分かでされありきたまふ人を、上はうつくしと見たまへば、遠方人のめざましきも、こよなく思しゆるされにたり。

「いかに思ひおこすらむ。われにて、いみじう恋しかりぬべきさまを」

乳ある、添へて参りたまふ。

御袴着は、何ばかりわざと思しいそぐことはなけれど、けしきことなり。御しつらひ、雛遊びの心地してをかしう見ゆ。参りたまへる客人ども、ただ明け暮れのけぢめしなれば、あながちに目も立たざりき。ただ、姫君の襷引き結ひたまへる胸つきぞ、うつくしげき添ひて見えたまひつる。

大堰には、尽きせず恋しきにも、身のおこたりを嘆き添へたり。さこそ言ひしか、尼君もいとど涙もろなれど、かくもてかしづかれたまふを聞くはうれしかりけり。何ごとをか、なかなか訪らひきこえたまはむ、ただ御方の人びとに、乳母よりはじめて、世になき色あひを思ひいそぎてぞ、贈りきこえたまひける。

「待ち遠ならむも、いとどさればよ」と思はむに、いとほしければ、年の内に忍びて渡りたまへり。

いとどさびしき住まひに、明け暮れのかしづきぐさをさへ離れきこえて、思ふらむことの心苦しければ、御文なども絶え間なく遣はす。

女君も、今はことに怨じきこえたまはず、うつくしき人に罪ゆるしきこえたまへり。

年も返りぬ。うららかなる空に、思ふことなき御ありさまは、いとどめでたく、磨き改めたる御よそひに、参り集ひたまふめる人の、おとなしきほどの、七日、御よろこびなどしたまふ、ひき連れたまへり。

若やかなるは、何ともなく心地よげに見えたまふ。次々の人も、心のうちには思ふこともやあらむ、うはべは誇りかに見ゆる、ころほひなりかし。

東の院の対の御方も、ありさまは好ましよう、あらまほしきさまに、さぶらふ人びと、童女の姿など、うちとけず、心づかひしつ過ぐしたまふに、近きしるしはこよなくて、のどかなる御暇の隙などには、ふとはひ渡りなどしたまへ

「さりや。あな苦し」と思して、

「生ひそめし根も深ければ武隈の

松に小松の千代をならべむ

のどかにを」

と、慰めたまふ。さることとは思ひ静むれど、えなむ堪へざりける。乳母の少将とて、あてやかなる人ばかり、御佩刀、天児やうの物取りて乗る。人だまひによろしき若人、童女など乗せて、御送りに参らす。

道すがら、とまりつる人の心苦しさを、「いかに。罪や得らむ」と思す。

暗うおはし着きて、御車寄するより、はなやかにけはひことなるを、田舎びたる心地どもは、「はしたなくてや交じらはむ」と思ひつれど、西表をことにしつらはせたまひて、小さき御調度ども、うつくしげに調へさせたまへり。乳母の局には、西の渡殿の、北に当れるをせさせたまへり。

若君は、道にて寝たまひにけり。抱き下ろされて、泣きなどはしたまはず。こなたにて御くだもの参りなどしたまへど、やうやう見めぐらして、母君の見えぬをもとめて、らうたげにうちひそみたまへば、乳母召し出でて、慰め紛らはしきこえたまふ。

「山里のつれづれ、ましていかに」と思しやるはいとほしけれど、明け暮れ思すさまにかしづきつつ、見たまふは、ものあひたる心地したまふらむ。

「いかにぞや、人の思ふべき瑕なきことは、このわたりに出でおはせで」と、口惜しく思さる。

しばしは、人びともとめて泣きなどしたまひしかど、おほかた心やすくをかしき心ざまなれば、上にいとよくつき睦びきこえたまへれば、「いみじううつくしきもの得たり」と思しけり。こと事なく抱き扱ひ、もてあそびきこえたまひて、乳母も、おのづから近う仕うまつり馴れにけり。また、やむごとなき人の

「雪深み深山の道は晴れずとも  
なほ文かよへ跡絶えずして」

とのたまへば、乳母、うち泣きて、

「雪間なき吉野の山を訪ねても

心のかよふ跡絶えめやは」

と言ひ慰む。

この雪すこし解けて渡りたまへり。例は待ちきこゆるに、さならむとおぼゆることにより、胸うちつぶれて、人やりならず、おぼゆ。

「わが心にこそあらめ。いなびきこえむをしひてやは、あぢきな」とおぼゆれど、「軽々しきやうなり」と、せめて思ひ返す。

いとうつくしげにて、前にみたまへるを見たまふに、

「おろかには思ひがたかりける人の宿世かな」

と思ほす。この春より生ふす御髪、尼削ぎのほどにて、ゆらゆらとめでたく、つらつき、まみの薫れるほどなど、言へばさらなり。よそのものに思ひやらむほどの心の闇、推し量りたまふに、いと心苦しければ、うち返しのたまひ明かす。

「何か。かく口惜しき身のほどならずだにもてなしたまはば」

と聞こゆるものから、念じあへずうち泣くけはひ、あはれなり。

姫君は、何心もなく、御車に乗らむことを急ぎたまふ。寄せたる所に、母君みづから抱きて出でたまへり。片言の、声はいとうつくしうて、袖をとらへて、  
「乗りたまへ」と引くも、いみじうおぼえて、

「末遠き二葉の松に引き別れ

いつか木高きかげを見るべき」

えも言ひやらず、いみじう泣けば、

「よろづのこと、かひなき身にたぐへきこえては、げに生ひ先もいとほしかるべくおぼえはべるを、たち交じりても、いかに人笑へにや」

と聞こえたるを、いとどあはれに思す。

日など取らせたまひて、忍びやかに、さるべきことなどのたまひおきてさせたまふ。放ちきこえむことは、なほいとあはれにおぼゆれど、「君の御ためによるべきことをこそは」と念ず。

「乳母をもひき別れなむこと。明け暮れのもの思はしき、つれづれをもうち語らひて、慰めならひつるに、いとどたつきなきことさへ取り添へ、いみじくおぼゆべきこと」と、君も泣く。

乳母も、

「さるべきにや、おぼえぬさまにて、見たてまつりそめて、年ごろの御心ばへの、忘れがたう恋しうおぼえたまふべきを、うち絶えきこゆることはよもはべらじ。つひにはと頼みながら、しばしにても、よそよそに、思ひのほかの交じらひしはべらむが、安からずもはべるべきかな」

など、うち泣きつつ過ぐすほどに、師走にもなりぬ。

雪、霰がちに、心細さまさりて、「あやしくさまさまに、もの思ふべかりける身かな」と、うち嘆きて、常よりもこの君を撫でつくろひつつ見たり。

雪かきくらし降りつもる朝、来し方行く末のこと、残らず思ひつづけて、例はことに端近なる出で居などもせぬを、汀の氷など見やりて、白き衣どものなよよかなるあまた着て、眺めたる様体、頭つき、うしろでなど、「限りなき人と聞こゆとも、かうこそはおはすらめ」と人びとも見る。落つる涙をかき払ひて、

「かやうならむ日、ましていかにおぼつかなからむ」と、らうたげにうち嘆きて、

また、「手を放ちて、うしろめたからむこと。つれづれも慰む方なくては、い  
かが明かし暮らすべからむ。何につけてか、たまさかの御立ち寄りもあらむ」  
など、さまざまに思ひ乱るるに、身の憂きこと、限りなし。

尼君、思ひやり深き人にて、

「あぢきなし。見たてまつらざらむことは、いと胸いたかりぬべけれど、つ  
ひにこの御ためによかるべからむことをこそ思はめ。浅く思してのたまふこと  
にはあらじ。ただうち頼みきこえて、渡したてまつりたまひてよ。母方からこ  
そ、帝の御子も際々におはすめれ。この大臣の君の、世に二つなき御ありさま  
ながら、世に仕へたまふは、故大納言の、今ひときぎみなり劣りたまひて、更  
衣腹と言はれたまひし、けぢめにこそはおはすめれ。まして、ただ人はなずら  
ふべきことにもあらず。また、親王たち、大臣の御腹といへど、なほさし向か  
ひたる劣りの所には、人も思ひ落とし、親の御もてなしも、え等しからぬもの  
なり。まして、これは、やむごとなき御方々にかかる人、出でものしたまはば、  
こよなく消たれたまひなむ。ほどほどにつけて、親にもひとふしもてかしづか  
れぬる人こそ、やがて落としめられぬはじめとはなれ。御袴着のほども、いみ  
じき心を尽くすとも、かかる深山隠れにては、何の栄かあらむ。ただ任せきこ  
えたまひて、もてなしきこえたまはむありさまをも、聞きたまへ」

と教ふ。

さかしき人の心の占どもにも、もの問はせなどするにも、なほ「渡りたまひ  
てはまさるべし」とのみ言へば、思ひ弱りにたり。

殿も、しか思しながら、思はむところのいとほしきに、しひてもえのたまは  
で、

「御袴着のことは、いかやうにか」

とのたまへる御返りに、

冬になりゆくままに、川づらの住まひ、いとど心細さまさりて、うはの空なる心地のみしつ々明かし暮らすを、君も、

「なほ、かくては、え過ぐさじ。かの、近き所に思ひ立ちね」

と、すすめたまへど、「つらき所多く心見果てむも、残りなき心地すべきを、いかに言ひてか」などいふやうに思ひ乱れたり。

「さらば、この若君を。かくてのみは、便なきことなり。思ふ心あれば、かたじけなし。対に聞き置きて、常にゆかしがるを、しばし見ならはさせて、袴着の事なども、人知れぬさまならずしなさむとなむ思ふ」

と、まめやかに語らひたまふ。「さ思すらむ」と思ひわたることなれば、いとど胸つぶれぬ。

「改めてやむごとなき方にもてなされたまふとも、人の漏り聞かむことは、なかなかや、つくろひがたく思されむ」

とて、放ちがたく思ひたる、ことわりにはあれど、

「うしろやすからぬ方にやなどは、な疑ひたまひそ。かしこには、年経ぬれど、かかる人もなきが、さうさうしくおぼゆるままに、前斎宮のおとなびものしたまふをだにこそ、あながちに扱ひきこゆめれば、まして、かく憎みがたげなめるほどを、おろかには見放つまじき心ばへに」

など、女君の御ありさまの思ふやうなることも語りたまふ。

「げに、いにしへは、いかばかりのことに定まりたまふべきにかと、つてもほの聞こえし御心の、名残なく静まりたまへるは、おぼろけの御宿世にもあらず、人の御ありさまも、ここらの御なかにすぐれたまへるにこそは」と思ひやられて、「数ならぬ人の並びきこゆべきおぼえにもあらぬを、さすがに、立ち出でて、人もめざましと思すことやあらむ。わが身は、とてもかくても同じこと。生ひ先遠き人の御うへも、つひには、かの御心にかかるべきにこそあめれ。さりとならば、げにかう何心なきほどにや譲りきこえまし」と思ふ。

薄 雲

薄

雲

まへかし」

と聞こえたまふ。

「思はずにのみとりなしたまふ御心の隔てを、せめて見知らず、うらなくやはとてこそ。いはけなからむ御心には、いとよかなひぬべくなむ。いかにうつくしきほどに」

とて、すこしうち笑みたまひぬ。稚児をわりなうらうたきものにしたまふ御心なれば、「得て、抱きかしづかばや」と思す。

「いかにせまし。迎へやせまし」と思し乱る。渡りたまふこといとかたし。嵯峨野の御堂の念仏など待ち出でて、月に二度ばかりの御契りなめり。年のわたりには、立ちまさりぬべかめるを、及びなきことと思へども、なほいかがもの思はしからぬ。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

いといたう強ひとどめしに、引かされて。今朝は、いとなやまし」

とて、大殿籠もれり。例の、心とけず見えたまへど、見知らぬやうにて、

「なずらひならぬほどを、思し比ぶるも、悪きわざなめり。我は我と思ひなしたまへ」

と、教へきこえたまふ。

暮れかかるほどに、内へ参りたまふに、ひきそばめて急ぎ書きたまふは、かしこへなめり。側目こまやかに見ゆ。うちささめきて遣はすを、御達など、憎みきこゆ。

その夜は、内にもさぶらひたまふべけれど、解けざりつる御けしきとりに、夜更けぬれど、まかでたまひぬ。ありつる御返り持て参れり。え引き隠したまはで、御覧ず。ことに憎かるべきふしも見えねば、

「これ、破り隠したまへ。むつかしや。かかるものの散らむも、今はつきなきほどになりにつけり」

とて、御脇息に寄りゐたまひて、御心のうちには、いとあはれに恋しう思しやられるれば、燈をうち眺めて、ことにものものたまはず。文は広がりながらあれど、女君、見たまはぬやうなるを、

「せめて、見隠したまふ御目尻こそ、わづらはしけれ」

とて、うち笑みたまへる御愛敬、所狭きまでこぼれぬべし。

さし寄りたまひて、

「まことは、らうたげなるものを見しかば、契り浅くも見えぬを、さりとて、ものめかさむほども憚り多かるに、思ひなむわづらひぬる。同じ心に思ひめぐらして、御心に思ひ定めたまへ。いかがすべき。ここにて育みたまひてむや。蛭の子が齢にもなりにけるを、罪なきさまなるも思ひ捨てがたうこそ。いはけなげなる下つ方も、紛らはさむなど思ふを、めざましと思さずは、引き結ひた

朝夕霧も晴れぬ山里」

行幸待ちきこえたまふ心ばへなるべし。「中に生ひたる」と、うち誦んじたまふついでに、かの淡路島を思し出でて、躬恒が「所からか」とおぼめきけむことなど、のたまひ出でたるに、ものあはれなる酔ひ泣きどもあるべし。

「めぐり来て手に取るばかりさやけきや

淡路の島のあはと見し月」

頭中将、

「浮雲にしばしまがひし月影の

すみはつる夜ぞのどけかるべき」

左大弁、すこしおとなびて、故院の御時にも、むつまじう仕うまつりなれし人なりけり。

「雲の上のすみかを捨てて夜半の月

いづれの谷にかけ隠しけむ」

心々にあまたあめれど、うるさくてなむ。

気近うち静まりたる御物語、すこしうち乱れて、千年も見聞かまほしき御ありさまなれば、斧の柄も朽ちぬべけれど、今日さへはとて、急ぎ帰りたまふ。

物ども品々にかづけて、霧の絶え間に立ち混じりたるも、前栽の花に見えまがひたる色あひなど、ことにめでたし。近衛府の名高き舎人、物の節どもなどさぶらふに、さうぎうしければ、「其駒」など乱れ遊びて、脱ぎかけたまふ色々、秋の錦を風の吹きおほふかと思ゆ。

ののしりて帰らせたまふ響き、大堰にはもの隔てて聞きて、名残さびしう眺めたまふ。「御消息をだにせで」と、大臣も御心にかかれり。

殿におはして、とばかりうち休みたまふ。山里の御物語など聞こえたまふ。

「暇聞こえしほど過ぎつれば、いと苦しうこそ。この好き者どもの尋ね来て、

応と騒ぎて、鵜飼ども召したるに、海人のさへづり思し出でらる。

野に泊りぬる君達、小鳥しるしばかりひき付けさせたる荻の枝など、苞にして参れり。大御酒あまたたび順流れて、川のわたり危ふげなれば、酔ひに紛れておはしまし暮らしつ。

おのおの絶句など作りわたして、月はなやかにさし出づるほどに、大御遊び始まりて、いと今めかし。

弾きもの、琵琶、和琴ばかり、笛ども上手の限りして、折に合ひたる調子吹き立つるほど、川風吹き合はせておもしろきに、月高くさし上がり、よろづのこと澄める夜のやや更くるほどに、殿上人、四、五人ばかり連れて参れり。

上にさぶらひけるを、御遊びありけるついでに、

「今日は、六日の御物忌明日にて、かならず参りたまふべきを、いかなれば」

と仰せられければ、ここに、かう泊らせたまひにけるよし聞こし召して、御消息あるなりけり。御使は、蔵人弁なりけり。

「月のすむ川のをちなる里なれば

桂の影はのどけかるらむ

うらやましよう」

とあり。かしこまりきこえさせたまふ。

上の御遊びよりも、なほ所からの、すごさ添へたるものの音をめでて、また酔ひ加はりぬ。ここにはまうけの物もさぶらはざりければ、大堰に、

「わざとならぬまうけの物や」

と、言ひつかはしたり。取りあへたるに従ひて参らせたり。衣櫃二荷にてあるを、御使の弁はとく帰り参れば、女の装束かづけたまふ。

「久方の光に近き名のみして

御指貫の裾まで、なまめかしう愛敬のこぼれ出づるぞ、あながちなる見なしなるべき。

かの、解けたりし蔵人も、還りなりにけり。鞆負尉にて、今年かうぶり得てけり。昔に改め、心地よげにて、御佩刀取りに寄り来たり。人影を見つけて、「来し方のもの忘れしはべらねど、かしこければえこそ。浦風おぼえはべりつる暁の寢覚にも、おどろかしきこえさすべきよすがだになくて」

と、けしきばむを、

「八重立つ山は、さらに島隠れにも劣らざりけるを、松も昔のと、たどられつるに、忘れぬ人もものしたまひけるに、頼もし」

など言ふ。

「こよなしや。我も思ひなきにしもあらざりしを」  
など、あさましうおぼゆれど、

「今、ことさらに」  
と、うちけぎやぎて、参りぬ。

いとよそほしくさし歩みたまふほど、かしかましう追ひ払ひて、御車の尻に、頭中将、兵衛督乗せたまふ。

「いと軽々しき隠れ家、見あらはされぬるこそ、ねたう」  
と、いたうからがりたまふ。

「昨夜の月に、口惜しう御供に後れはべりにけると思ひたまへられしかば、今朝、霧を分けて参りはべりつる。山の錦は、まだしうはべりけり。野辺の色こそ、盛りにはべりけれ。なにがしの朝臣の、小鷹にかかづらひて、立ち後れはべりぬる、いかがなりぬらむ」  
など言ふ。

「今日は、なほ桂殿に」とて、そなたさまにおはしましたぬ。にはかなる御饗

これより出でたまふべきを、桂の院に人びと多く参り集ひて、ここにも殿上人あまた参りたり。御装束などしたまひて、

「いとほしたなきわざかな。かく見あらはさるべき隈にもあらぬを」

とて、騒がしきに引かれて出でたまふ。心苦しければ、さりげなく紛らはして立ちとまりたまへる戸口に、乳母、若君抱きてさし出でたり。あはれなる御けしきに、かき撫でたまひて、

「見では、いと苦しかりぬべきこそ、いとうちつけなれ。いかがすべき。いと里遠しや」

と

のたまへば、

「遙かに思ひたまへ絶えたりつる年ごろよりも、今からの御もてなしの、おぼつかなうはべらむは、心尽くしに」

など聞こゆ。若君、手をさし出でて、立ちたまへるを慕ひたまへば、ついゐたまひて、

「あやしう、もの思ひ絶えぬ身にこそありけれ。しばしにても苦しや。いづら。など、もろともに出でては、惜しみたまはぬ。さらばこそ、人心地もせめ」  
とのたまへば、うち笑ひて、女君に「かくなむ」と聞こゆ。

なかなかもの思ひ乱れて臥したれば、とみにしも動かれず。あまり上衆めかしと思したり。人びともかたはらいたがれば、しぶしぶにゐざり出でて、几帳にはた隠れたるかたはら目、いみじうなまめいてよしあり、たをやぎたるけはひ、皇女たちといはむにも足りぬべし。

帷子引きやりて、こまやかに語らひたまふとて、とばかり返り見たまへるに、さこそ静めつれ、見送りきこゆ。

いはむかたなき盛りの御容貌なり。いたうそびやぎたまへりしが、すこしなりあふほどになりたまひにける御姿など、「かくてこそものものしかりけれ」と、

と、うち眺めて、立ちたまふ姿、にほひ、世に知らず、とのみ思ひきこゆ。

御寺に渡りたまうて、月ごとの十四、五日、晦日の日、行はるべき普賢講、阿弥陀、釈迦の念仏の三昧をばさるものにて、またまた加へ行はせたまふべきことなど、定め置かせたまふ。堂の飾り、仏の御具など、めぐらし仰せらる。月の明きに帰りたまふ。

ありし夜のこと、思し出でらるる、折過ぐさず、かの琴の御琴さし出でたり。そこはかたなくものあはれなるに、え忍びたまはで、搔き鳴らしたまふ。まだ調べも変はらず、ひきかへし、その折今の心地したまふ。

「契りしに変はらぬ琴の調べにて

絶えぬ心のほどは知りきや」

女、

「変はらじと契りしことを頼みにて

松の響きに音を添へしかな」

と聞こえ交はしたるも、似げなからぬこそは、身にあまりたるありさまなめれ。こよなうねびまさりにける容貌、けはひ、え思ほし捨つまじう、若君、はた、尽きもせずまぼられたまふ。

「いかにせまし。隠ろへたるさまにて生ひ出でむが、心苦しう口惜しきを、二条の院に渡して、心のゆく限りもてなさば、後のおぼえも罪免れなむかし」  
と思ほせど、また、思はむこといとほしくて、えうち出でたまはで、涙ぐみて見たまふ。幼き心地に、すこし恥ぢらひたりしが、やうやううちとけて、もの言ひ笑ひなどして、むつれたまふを見るままに、匂ひまさりてうつくし。抱きておはするさま、見るかひありて、宿世こよなしと見えたり。

またの日は京へ帰らせたまふべければ、すこし大殿籠もり過ぐして、やがて

尼君、のぞきて見たてまつるに、老いも忘れ、もの思ひも晴るる心地してうち笑みぬ。

東の渡殿の下より出づる水の心ばへ、繕はせたまふとて、いとなまめかしき桂姿うちとけたまへるを、いとめでたううれしと見たてまつるに、闕伽の具などのあるを見たまふに、思し出でて、

「尼君は、こなたにか。いとしどけなき姿なりけりや」

とて、御直衣召し出でて、たてまつる。几帳のもとに寄りたまひて、

「罪軽く生ほし立てたまへる、人のゆゑは、御行なひのほどあはれにこそ、思ひなしきこゆれ。いといたく思ひ澄ましたまへりし御住みかを捨てて、憂き世に帰りたまへる心ざし、浅からず。またかしこには、いかにとまりて、思ひおこせたまふらむと、さまざまになむ」

と、いとなつかしうのたまふ。

「捨てはべりし世を、今さらにたち帰り、思ひたまへ乱るるを、推し量らせたまひければ、命長さのしるしも、思ひたまへ知られぬる」と、うち泣きて、「荒磯蔭に、心苦しう思ひきこえさせはべりし二葉の松も、今は頼もしき御生ひ先と、祝ひきこえさするを、浅き根ざしゆゑや、いかがと、かたがた心尽くされはべる」

など聞こゆるけはひ、よしなからねば、昔物語に、親王の住みたまひけるありさまなど、語らせたまふに、繕はれたる水の音なひ、かことがましう聞こゆ。

「住み馴れし人は帰りてたどれども

清水は宿の主人顔なる」

わざとはなくて、言ひ消つさま、みやびかによし、と聞きたまふ。

「いさらるはやくのことも忘れじを

もとの主人や面変はりせる

あはれ」

まして、さる御心してひきつくろひたまへる御直衣姿、世になくなまめかしうまばゆき心地すれば、思ひむせべる心の闇も晴るるやうなり。

めづらしう、あはれにて、若君を見たまふも、いかが浅く思されむ。今まで隔てける年月だに、あさましく悔しきまで思ほす。

「大殿腹の君をうつくしげなりと、世人もて騒ぐは、なほ時世によれば、人の見なすなりけり。かくこそは、すぐれたる人の山口はしるかりけれ」

と、うち笑みたる顔の何心なきが、愛敬づき、匂ひたるを、いみじうらうたしと思す。

乳母の、下りしほどは衰へたりし容貌、ねびまさりて、月ごろの御物語など、馴れ聞こゆるを、あはれに、さる塩屋のかたはらに過ぐしつらむことを、思しのたまふ。

「ここにも、いと里離れて、渡らむこともかたきを、なほ、かの本意ある所に移ろひたまへ」

とのたまへど、

「いとうひうひしきほど過ぐして」

と聞こゆるも、ことわりなり。夜一夜、よろづに契り語らひ、明かしたまふ。

繕ふべき所、所の預かり、今加へたる家司などに仰せらる。桂の院に渡りたまふべしとありければ、近き御荘の人びと、参り集まりたりけるも、皆尋ね参りたり。前裁どもの折れ伏したるなど、繕はせたまふ。

「ここかしこの立石どもも皆転び失せたるを、情けありてしなさば、をかしかりぬべき所かな。かかる所をわざと繕ふも、あいなきわざなり。さても過ぐし果てねば、立つ時もの憂く、心とまる、苦しかりき」

など、来し方のことものたまひ出でて、泣きみ笑ひみ、うちとけのたまへる、いとめでたし。

御形見の琴を掻き鳴らす。折の、いみじう忍びがたければ、人離れたる方にうちとけてすこし弾くに、松風はしたなく響きあひたり。尼君、もの悲しげにて寄り臥したまへるに、起き上がりて、

「身を変へて一人帰れる山里に  
聞きしに似たる松風ぞ吹く」

御方、

「故里に見し世の友を恋ひわびて  
さへづることを誰れか分くらむ」

かやうにものはかなくて明かし暮らすに、大臣、なかなか静心なく思さるれば、人目をもえ憚りあへたまはで、渡りたまふを、女君は、かくなむとたしかに知らせたてまつりたまはざりけるを、例の、聞きもや合はせたまふとて、消息聞こえたまふ。

「桂に見るべきことはべるを、いさや、心にもあらでほど経にけり。訪らはむと言ひし人さへ、かのわたり近く来るて、待つなれば、心苦しくてなむ。嵯峨野の御堂にも、飾りなき仏の御訪らひすべければ、二、三日ははべりなむ」と聞こえたまふ。

「桂の院といふ所、にはかに造らせたまふと聞くは、そこに据ゑたまへるにや」と思すに、心づきなければ、「斧の柄さへ改めたまはむほどや、待ち遠にと、心ゆかぬ御けしきなり。

「例の、比べ苦しき御心、いにしへのありさま、名残なしと、世人も言ふなるものを」、何やかやと御心とりたまふほどに、日たけぬ。

忍びやかに、御前疎きは混ぜで、御心づかひして渡りたまひぬ。たそかれ時におはし着きたり。狩の御衣にやつれたまへりしだに世に知らぬ心地せしを、

らぬ別れに、御心動かしたまふな」と言ひ放つものから、「煙ともならむ夕べまで、若君の御ことをなむ、六時の勤めにも、なほ心ぎたなく、うち交ぜはべりぬべき」

とて、これにぞ、うちひそみぬる。

御車は、あまた続けむも所狭く、片へづつ分けむもわづらはしとて、御供の人びとも、あながちに隠ろへ忍ぶれば、舟にて忍びやかにと定めたり。辰の時に舟出したまふ。昔の人もあはれと言ひける浦の朝霧隔たりゆくままに、いともの悲しくて、入道は、心澄み果つまじく、あくがれ眺めたり。ここら年を経て、今さらに帰るも、なほ思ひ尽きせず、尼君は泣きたまふ。

「かの岸に心寄りにし海人舟の

背きし方に漕ぎ帰るかな」

御方、

「いくかへり行きかふ秋を過ぐしつつ

浮木に乗りてわれ帰るらむ」

思ふ方の風にて、限りける日違へず入りたまひぬ。人に見咎められじの心もあれば、路のほども軽らかにしなしたり。

家のさまもおもしろうて、年ごろ経つる海づらにおぼえたれば、所変へたる心地もせず。昔のこと思ひ出でられて、あはれなること多かり。造り添へたる廊など、ゆゑあるさまに、水の流れもをかしうしなしたり。まだこまやかなるにはあらねども、住みつかばさてもありぬべし。

親しき家司に仰せ賜ひて、御まうけのことせさせたまひけり。渡りたまはむことは、とかう思したばかりほどに、日ごろ経ぬ。

なかなかも思ひ続けられて、捨てし家居も恋しう、つれづれなれば、かの

「いきてまたあひ見むことをいつとてか  
限りも知らぬ世をば頼まむ

送りにだに」

と切にのたまへど、方々につけて、えさるまじきよしを言ひつつ、さすがに道のほども、いとうしろめたなきけしきなり。

「世の中を捨てはじめしに、かかる人の国に思ひ下りはべりしことども、ただ君の御ためと、思ふやうに明け暮れの御かしづきも心になふやうもやと、思ひたまへ立ちしかど、身のつたなかりける際の思ひ知らるること多かりしかば、さらに、都に帰りて、古受領の沈めるたぐひにて、貧しき家の蓬蘽、元のありさま改むることもなきものから、公私に、をこがましき名を広めて、親の御なき影を恥づかしめむことのいみじきになむ、やがて世を捨てつる門出なりけりと人にも知られにしを、その方につけては、よう思ひ放ちてけりと思ひはべるに、君のやうやう大人びたまひ、もの思ほし知るべきに添へては、など、かう口惜しき世界にて錦を隠しきこゆらむと、心の闇晴れ間なく嘆きわたりはべりしままに、仏神を頼みきこえて、さりとも、かうつたなき身に引かれて、山賤の庵には混じりたまはじ、と思ふ心一つを頼みはべりしに、思ひ寄りかたくて、うれしきことどもを見たてまつりそめても、なかなか身のほどを、とぎまかうぎまに悲しう嘆きはべりつれど、若君のかう出でおはしましたる御宿世の頼もしきに、かかる渚に月日を過ぐしたまはむも、いとかたじけなう、契りことにおぼえたまへば、見たてまつらざらむ心惑ひは、静めがたけれど、この身は長く世を捨てし心はべり。君達は、世を照らしたまふべき光しるければ、しばし、かかる山賤の心を乱りたまふばかりの御契りこそはありけめ。天に生まるる人の、あやしき三つの途に帰るらむ一時に思ひなずらへて、今日、長く別れたてまつりぬ。命尽きぬと聞こしめすとも、後のこと思しいとなむな。さ

はかなる語らひだに、見なれそなれて、別るるほどは、ただならざめるを、まして、もてひがめたる頭つき、心おきてこそ頼もしげなけれど、またさるかたに、「これこそは、世を限るべき住みかなれ」と、あり果てぬ命を限りに思ひて、契り過ぐし来つるを、にはかに行き離れなむも心細し。

若き人びとの、いぶせう思ひ沈みつるは、うれしきものから、見捨てがたき浜のさまを、「または、えしも帰らじかし」と、寄する波に添へて、袖濡れがちなり。

秋のころほひなれば、もののはれ取り重ねたる心地して、その日とある暁に、秋風涼しくて、虫の音もとりあへぬに、海の方を見出だしてゐるに、入道、例の、後夜より深く起きて、鼻すすりうちして、行なひいましたり。いみじう言忌すれど、誰も誰もいとしのびがたし。

若君は、いともいともうつくしげに、夜光りけむ玉の心地して、袖よりほかに放ちきこえざりつるを、見馴れてまつはしたまへる心ざまなど、ゆゆしきままで、かく、人に違へる身をいまいまして思ひながら、「片時見たてまつらでは、いかでか過ぐさむとすらむ」と、つつみあへず。

「行く先をはるかに祈る別れ路に

堪へぬは老いの涙なりけり

いともゆゆしや」

とて、おしのごひ隠す。尼君、

「もろともに都は出で来このたびや

ひとり野中の道に惑はむ」

とて、泣きたまふさま、いとことわりなり。ここら契り交はして積もりぬる年月のほどを思へば、かう浮きたることを頼みて、捨てし世に帰るも、思へばはかなしや。御方、

ず思し、「若君の、さてつくづくともものしたまふを、後の世に人の言ひ伝へむ、今一際、人悪ろき疵にや」と思ほすに、造り出でてぞ、「しかしかの所をなむ思ひ出でたる」と聞こえさせける。「人に交じらはむことを苦しげにのみものするは、かく思ふなりけり」と心得たまふ。「口惜しからぬ心の用意かな」と思しなりぬ。

惟光朝臣、例の忍ぶる道は、いつとなくいろひ仕うまつる人なれば、遣はして、さるべきさまに、ここかしこの用意などせさせたまひけり。

「あたり、をかしうて、海づらに通ひたる所のさまになむはべりける」と聞こゆれば、「さやうの住まひに、よしなからずはありぬべし」と思す。

造らせたまふ御堂は、大覚寺の南にあたりて、滝殿の心ばへなど、劣らずおもしろき寺なり。

これは、川面に、えもいはぬ松蔭に、何のいたはりもなく建てたる寝殿のこそぎたるさまも、おのづから山里のあはれを見せたり。内のしつらひなどまで思し寄る。

親しき人びと、いみじう忍びて下し遣はす。逃れがたくて、今はと思ふに、年経つる浦を離れなむこと、あはれに、入道の心細くて一人止まらむことを思ひ乱れて、よろづに悲し。「すべて、など、かく、心尽くしになりはじめけむ身にか」と、露のかからぬたぐひうらやましくおぼゆ。

親たちも、かかる御迎へにて上る幸ひは、年ごろ寝ても覚めても、願ひわたりし心ざしのかなふと、いとうれしけれど、あひ見で過ぐさむいぶせさの堪へがたう悲しければ、夜昼思ひほれて、同じことをのみ、「さらば、若君をば見たてまつらでは、はべるべきか」と言ふよりほかのことなし。

母君も、いみじうあはれなり。年ごろだに、同じ庵にも住まずかけ離れつれば、まして誰れによりてかは、かけ留まらむ。ただ、あだにうち見る人のあさ

となむ思ひ寄る。さるべき物は上げ渡さむ。修理などして、かたのごと人住みぬべくは繕ひなされなむや」

と言ふ。預り、

「この年ごろ、領ずる人もものしたまはず、あやしきやうになりてはべれば、下屋にぞ繕ひて宿りはべるを、この春のころより、内の大殿の造らせたまふ御堂近くて、かのわたりなむ、いと気騒がしうなりにてはべる。いかめしき御堂ども建てて、多くの人なむ、造りいとなみはべるめる。静かなる御本意ならば、それや違ひはべらむ」

「何か。それも、かの殿の御蔭に、かたかけてと思ふことありて。おのづから、おひおひに内のことどもはしてむ。まづ、急ぎておほかたのことどもをものせよ」

と言ふ。

「みづから領ずる所にはべらねど、また知り伝へたまふ人もなければ、かごかなるならひにて、年ごろ隠ろへはべりつるなり。御荘の田畠などいふことの、いたづらに荒れはべりしかば、故民部大輔の君に申し賜はりて、さるべき物などたてまつりてなむ、領じ作りはべる」

など、そのあたりの貯へのことどもを危ふげに思ひて、髭がちにつなしくき顔を、鼻などうち赤めつつ、はちぶき言へば、

「さらに、その田などやうのことは、ここに知るまじ。ただ年ごろのやうに思ひてものせよ。券などはここになむあれど、すべて世の中を捨てたる身にて、年ごろともかくも尋ね知らぬを、そのことも今詳しくしたためむ」

など言ふにも、大殿のけはひをかくれば、わづらはしくて、その後、物など多く受け取りてなむ、急ぎ造りける。

かやうに思ひ寄るらむとも知りたまはで、上らむことをもの憂がるも、心得

東の院造りたてて、花散里と聞こえし、移ろはしたまふ。西の対、渡殿などかけて、政所、家司など、あるべきさまにし置かせたまふ。東の対は、明石の御方と思しおきてたり。北の対は、ことに広く造らせたまひて、かりにても、あはれと思して、行く末かけて契り頼めたまひし人びと集ひ住むべきさまに、隔て隔てしつらはせたまへるしも、なつかしう見所ありてこまかなる。寝殿は塞げたまはず、時々渡りたまふ御住み所にして、さるかたなる御しつらひどもし置かせたまへり。

明石には御消息絶えず、今はなほ上りたまひぬべきことをばのたまへど、女は、なほ、わが身のほどを思ひ知るに、

「こよなくやむごとなき際の人びとだに、なかなかかけて離れぬ御ありさまのつれなきを見つつ、もの思ひまさりぬべく聞くを、まして、何ばかりのおぼえなりとてか、さし出でまじらはむ。この若君の御面伏せに、数ならぬ身のほどこそ現はれぬ。たまさかにはひ渡りたまふついでを待つことにて、人笑へに、はしたなきこと、いかにあらむ」

と思ひ乱れても、また、さりとて、かかる所に生ひ出で、数まへられたまはざらむも、いとあはれなれば、ひたすらにもえ恨み背かず。親たちも、「げに、ことわり」と思ひ嘆くに、なかなか、心も尽き果てぬ。

昔、母君の御祖父、中務宮と聞こえけるが領じたまひける所、大堰川のわたりにありけるを、その御後、はかばかしうあひ継ぐ人もなくて、年ごろ荒れまどふを思ひ出でて、かの時より伝はりて宿守のやうにてある人を呼び取りて語らふ。

「世の中を今はと思ひ果てて、かかる住まひに沈みそめしかども、末の世に、思ひかけぬこと出で来てなむ、さらに都の住みか求むるを、にはかにまばゆき人中、いとはしたなく、田舎びにける心地も静かなるまじきを、古き所尋ねて、

松 風

松

風

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文  
(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

そのころのことには、この絵の定めをしたまふ。

「かの浦々の巻は、中宮にさぶらはせたまへ」

と聞こえさせたまひければ、これが初め、残りの巻々ゆかしがらせたまへど、

「今、次々に」

と聞こえさせたまふ。主上にも御心ゆかせたまひて思し召したるを、うれしく見たてまつりたまふ。

はかなきことにつけても、かうもてなしきこえたまへば、権中納言は、「なほ、おぼえ圧さるべきにや」と、心やましう思さるべかめり。主上の御心ざしは、もとより思ししみにければ、なほ、こまやかに思し召したるさまを、人知れず見たてまつり知りたまひてぞ、頼もしく、「さりとも」と思されける。

さるべき節会どもにも、「この御時よりと、末の人の言ひ伝ふべき例を添へむ」と思し、私ざまのかかるはかなき御遊びも、めづらしき筋にせさせたまひて、いみじき盛りの御世なり。

大臣ぞ、なほ常なきものに世を思して、今すこしおとなびおはしますと見たてまつりて、なほ世を背きなむと深く思ほすべかめる。

「昔のためしを見聞くにも、齢足らで、官位高く昇り、世に抜けぬる人の、長くえ保たぬわぎなりけり。この御世には、身のほどおぼえ過ぎにたり。中ごろなきになりて沈みたりし愁へに代はりて、今までもながらふるなり。今より後の栄えは、なほ命うしろめたし。静かに籠もりて、後の世のことをつとめ、かつは齢をも延べむ」と思ほして、山里ののどかなるを占めて、御堂を造らせたまひ、仏経のいとなみ添へてせさせたまふめるに、末の君たち、思ふさまにかしづき出だして見むと思し召すにぞ、とく捨てたまはむことは、かたげなる。いかに思しおきつるにかと、いと知りがたし。

と、親王に申したまへば、

「何の才も、心より放ちて習ふべきわざならねど、道々に物の師あり、学び所あらむは、事の深き浅きは知らねど、おのづから移さむに跡ありぬべし。筆取る道と碁打つこととぞ、あやしう魂のほど見ゆるを、深き労なく見ゆるおれ者も、さるべきにて、書き打つたぐひも出で来れど、家の子の中には、なほ人に抜けぬる人、何ごとをも好み得けるとぞ見えたる。院の御前にて、親王たち、内親王、いづれかは、さまざまとりどりの才習はさせたまはざりけむ。その中にも、とり立てたる御心に入れて、伝へ受けとらせたまへるかひありて、『文才をばさるものにて言はず、さらぬことの中には、琴弾かせたまふことなむ一の才にて、次には横笛、琵琶、箏の琴をなむ、次々に習ひたまへる』と、主上も思しのたまはせき。世の人、しか思ひきこえさせたるを、絵はなほ筆のついでにすさびさせたまふあだこととこそ思ひたまへしか、いとかう、まさなきまで、いにしへの墨がきの上手ども、跡をくらうなしつべかめるは、かへりて、けしからぬわざなり」

と、うち乱れて聞こえたまひて、酔ひ泣きにや、院の御こと聞こえ出でて、皆うちしほれたまひぬ。

二十日あまりの月さし出でて、こなたは、まださやかならねど、おほかたの空をかしきほどなるに、書司の御琴召し出でて、和琴、権中納言賜はりたまふ。さはいへど、人にまさりてかき立てたまへり。親王、箏の御琴、大臣、琴、琵琶は少将の命婦仕うまつる。上人の中にすぐれたるを召して、拍子賜はず。いみじうおもしろし。

明け果つるままに、花の色も人の御容貌ども、ほのかに見えて、鳥のさへづるほど、心地ゆき、めでたき朝ぼらけなり。祿どもは、中宮の御方より賜はず。親王は、御衣また重ねて賜はりたまふ。

れたるを選び置きたまへるに、かかるいみじきものの上手の、心の限り思ひすまして静かに描きたまへるは、たとふべきかたなし。

親王よりはじめてたてまつりて、涙とどめたまはず。その世に、「心苦し悲し」と思ほししほどよりも、おはしけむありさま、御心に思ししことども、ただ今のやうに見え、所のさま、おぼつかなき浦々、磯の隠れなく描きあらはしたまへり。

草の手に仮名の所々に書きまぜて、まほの詳しき日記にはあらず、あはれなる歌などもまじれる、たぐひゆかし。誰もこと事思ほさず、さまざまの御絵の興、これに皆移り果てて、あはれにおもしろし。よろづ皆おしゆづりて、左、勝つになりぬ。

夜明け方近くなるほどに、ものいとあはれに思されて、御土器など参るついでに、昔の御物語ども出で来て、

「いはけなきほどより、学問に心を入れてはべりしに、すこしも才などつきぬべくや御覧じけむ、院ののたまはせしやう、『才学といふもの、世にいと重くするものなればにやあらむ、いたう進みぬる人の、命、幸ひと並びぬるは、いとかたきものになむ。品高く生まれ、さらでも人に劣るまじきほどにて、あながちにこの道な深く習ひそ』と、諫めさせたまひて、本才の方々のもの教へさせたまひしに、つたなきこともなく、またとり立ててこのことと心得ることもはべらざりき。絵描くことのみなむ、あやしくはかなきものから、いかにしてかは心ゆくばかり描きて見るべきと、思ふ折々はべりしを、おぼえぬ山賤になりて、四方の海の深き心を見しに、さらに思ひ寄らぬ隈なく至られにしかど、筆のゆく限りありて、心よりはことゆかずなむ思うたまへられしを、ついでなくて、御覧ぜさすべきならねば、かう好き好きしきやうなる、後の聞こえやあらむ」

れてさぶらふ。殿上人は、後涼殿の簀子に、おのおの心寄せつつさぶらふ。

左は、紫檀の箱に蘇芳の花足、敷物には紫地の唐の錦、打敷は葡萄染の唐の綺なり。童六人、赤色に桜襲の汗衫、相は紅に藤襲の織物なり。姿、用意など、なべてならず見ゆ。

右は、沈の箱に浅香の下机、打敷は青地の高麗の錦、あしゆひの組、花足の心ばへなど、今めかし。童、青色に柳の汗衫、山吹襲の相着たり。

皆、御前に昇き立つ。主上の女房、前後と、装束き分けたり。

召しありて、内大臣、権中納言、参りたまふ。その日、帥宮も参りたまへり。いとよしありておはするうちに、絵を好みたまへば、大臣の、下にすすめたまへるやうやあらむ、ことことしき召しにはあらで、殿上におはするを、仰せ言ありて御前に参りたまふ。

この判仕うまつりたまふ。いみじう、げに描き尽くしたる絵どもあり。さらにえ定めやりたまはず。

例の四季の絵も、いにしへの上手どものおもしろきことどもを選びつつ、筆とどこほらず描きながしたるさま、たとへむかたなしと見るに、紙絵は限りありて、山水のゆたかなる心ばへを見せ尽くさぬものなれば、ただ筆の飾り、人の心に作り立てられて、今のあさはかなるも、昔のあと恥なく、にぎははしく、あなおもしろと見ゆる筋はまさりて、多くの争ひども、今日は方々に興あることも多かり。

朝餉の御障子を開けて、中宮もおはしませば、深うしろしめしたらむと思ふに、大臣もいと優におぼえたまひて、所々の判ども心もとなき折々に、時々さし応へたまひけるほど、あらまほし。

定めかねて夜に入りぬ。左はなほ数一つある果てに、「須磨」の巻出で来たるに、中納言の御心、騒ぎにけり。あなたにも心して、果ての巻は心ことにすぐ

まへり。

年の内の節会どものおもしろく興あるを、昔の上手どものとりどりに描けるに、延喜の御手づから事の心書かせたまへるに、またわが御世の事も描かせたまへる巻に、かの齋宮の下りたまひし日の大極殿の儀式、御心にしみて思しければ、描くべきやう詳しく仰せられて、公茂が仕うまつれるが、いといみじきをたてまつらせたまへり。

艶に透きたる沈の箱に、同じき心葉のさまなど、いと今めかし。御消息はただ言葉にて、院の殿上にさぶらふ左近中将を御使にてあり。かの大極殿の御輿寄せたる所の、神々しきに、

「身こそかくしめの外なれそのかみの

心のうちを忘れしもせず」

とのみあり。聞こえたまはざらむも、いとかたじけなければ、苦しう思しながら、昔の御簪の端をいささか折りて、

「しめのうちは昔にあらぬ心地して

神代のことも今ぞ恋しき」

とて、縹の唐の紙に包みて参らせたまふ。御使の禄など、いとなまめかし。

院の帝御覧ずるに、限りなくあはれと思すにぞ、ありし世を取り返さまほしく思ほしける。大臣をもつらしと思ひきこえさせたまひけむかし。過ぎにし方の御報いにやありけむ。

院の御絵は、後の宮より伝はりて、あの女御の御方にも多く参るべし。尚侍の君も、かやうの御好ましきは人にすぐれて、をかしきさまにとりなしつつ集めたまふ。

その日と定めて、にはかなるやうなれど、をかしきさまにはかなうしなして、左右の御絵ども参らせたまふ。女房のさぶらひに御座よそはせて、北南方々別

世の常のあだことのひきつくろひ飾れるに圧されて、業平が名をや朽たすべ  
き」

と、争ひかねたり。右の典侍、

「雲の上に思ひのぼれる心には

千尋の底もはるかにぞ見る」

「兵衛の大君の心高きは、げに捨てがたけれど、在五中将の名をば、え朽た  
さじ」

とのたまはせて、宮、

「みるめこそうらふりぬらめ年経にし

伊勢をの海人の名をや沈めむ」

かやうの女言にて、乱りがはしく争ふに、一卷に言の葉を尽くして、えも言  
ひやらず。ただ、あさはかなる若人どもは、死にかへりゆかしがれど、主上の  
も、宮のも片端をだにえ見ず、いといたう秘めさせたまふ。

大臣参りたまひて、かくとりどりに争ひ騒ぐ心ばへども、をかしく思して、

「同じくは、御前にて、この勝負定めむ」

と

、のたまひなりぬ。かかることもやと、かねて思しければ、中にもことなるは  
選りとどめたまへるに、かの「須磨」「明石」の二巻は、思すところありて、取  
り交ぜさせたまへり。

中納言も、その御心劣らず。このころの世には、ただかくおもしろき紙絵を  
ととのふることを、天の下いとなみたり。

「今あらため描かむことは、本意なきことなり。ただありけむ限りをこそ」

とのたまへど、中納言は人にも見せで、わりなき窓を開けて、描かせたまひ  
けるを、院にも、かかること聞かせたまひて、梅壺に御絵どもたてまつらせた

の世の濁りにも穢れず、はるかに思ひのぼれる契り高く、神代のことなめれば、あさはかなる女、目及ばぬならむかし」

と言ふ。右は、

「かぐや姫ののぼりけむ雲居は、げに、及ばぬことなれば、誰も知りがたし。この世の契りは竹の中に結びければ、下れる人のこととこそは見ゆめれ。ひとつ家の内は照らしけめど、百敷のかしこき御光には並ばずなりにけり。阿部のおほしが千々の黄金を捨てて、火鼠の思ひ片時に消えたるも、いとあへなし。車持の親王の、まことの蓬萊の深き心も知りながら、いつはりて玉の枝に疵をつけたるをあやまち」となす。

絵は、巨勢相覧、手は、紀貫之書けり。紙屋紙に唐の綺をばいして、赤紫の表紙、紫檀の軸、世の常の装ひなり。

「俊蔭は、はげしき波風におぼほれ、知らぬ国に放たれしかど、なほ、さして行きける方の心ざしもかなひて、つひに、人の朝廷にもわが国にも、ありがたき才のほどを広め、名を残しける古き心を言ふに、絵のさまも、唐土と日の本とを取り並べて、おもしろきことども、なほ並びなし」

と言ふ。白き色紙、青き表紙、黄なる玉の軸なり。絵は、常則、手は、道風なれば、今めかしうをかしげに、目もかかやくまで見ゆ。左は、そのことわりなし。

次に、『伊勢物語』に『正三位』を合はせて、また定めやらす。これも、右はおもしろくにぎははしく、内わたりよりうちはじめ、近き世のありさまを描きたるは、をかしう見所まさる。

平内侍、

「伊勢の海の深き心をたどらずて

ふりにし跡と波や消つべき

中宮ばかりには、見せたてまつるべきものなり。かたはなるまじき一帖づつ、さすがに浦々のありさまやかに見えたるを、選りたまふついでにも、かの明石の家居ぞ、まづ、「いかに」と思しやらぬ時の間なき。

かう絵ども集めらると聞きたまひて、権中納言、いと心を尽くして、軸、表紙、紐の飾り、いよいよ調へたまふ。

弥生の十日のほどなれば、空もうららかにて、人の心ものび、ものおもしろき折なるに、内わたりも、節会どものひまなれば、ただかやうのことどもにて、御方々暮らしたまふを、同じくは、御覧じ所もまさりぬべくてたてまつらむの御心つきて、いとわざと集め参らせたまへり。

こなたかなたと、さまざまに多かり。物語絵は、こまやかになつかしさまざるめるを、梅壺の御方は、いにしへの物語、名高くゆゑある限り、弘徽殿は、そのころ世にめづらしく、をかしき限りを選び描かせたまへれば、うち見る目の今めかしきはなやかさは、いとこよなくまされり。

主上の女房なども、よしある限り、「これは、かれは」など定めあへるを、このころのことにすめり。

中宮も参らせたまへるころにて、方々、御覧じ捨てがたく思ほすことなれば、御行なひも怠りつつ御覧ず。この人びとのとりどりに論ずるを聞こし召して、左右と方分かたせたまふ。

梅壺の御方には、平典侍、侍従の内侍、少将の命婦。右には、大弐の典侍、中将の命婦、兵衛の命婦を、ただ今は心にくき有職どもにて、心々に争ふ口つきどもを、をかしと聞こし召して、まづ、物語の出で来はじめの祖なる『竹取の翁』に『宇津保の俊蔭』を合はせて争ふ。

「なよ竹の世々に古りにけること、をかしきふしもなければ、かくや姫のこ

とて、おもしろく心ばへある限りを選びつつ描かせたまふ。例の月次の絵も、見馴れぬさまに、言の葉を書き続けて、御覽ぜさせたまふ。

わざとをかしうしたれば、また、こなたにてもこれを御覽ずるに、心やすくも取り出でたまはず、いといたく秘めて、この御方へ持て渡らせたまふを惜しみ、領じたまへば、大臣、聞きたまひて、

「なほ、権中納言の御心ばへの若々しきこそ、改まりがたかめれ」  
など笑ひたまふ。

「あながちに隠して、心やすくも御覽ぜさせず、悩ましきこゆる、いとめざましや。古代の御絵どものはべる、参らせむ」

と奏したまひて、殿に古きも新しきも、絵ども入りたる御厨子ども開かせたまひて、女君ともろともに、「今めかしきは、それぞれ」と、選り調べさせたまふ。

「長恨歌」「王昭君」などやうなる絵は、おもしろくあはれなれど、「事の忌みあるは、こたみはたてまつらじ」と選り止めたまふ。

かの旅の御日記の箱をも取り出でさせたまひて、このついでにぞ、女君にも見せたてまつりたまひける。御心深く知らで今見む人だに、すこしもの思ひ知らむ人は、涙惜しむまじくあはれなり。まいて、忘れがたく、その世の夢を思し覚ます折なき御心どもには、取りかへし悲しう思し出でらる。今まで見せたまはざりける恨みをぞ聞こえたまひける。

「一人ゐて嘆きしよりは海人の住む  
かたをかくてぞ見るべかりける

おぼつかなさは、慰みなましものを」  
とのたまふ。いとあはれと、思して、

「憂きめ見しその折よりも今日はまた  
過ぎにしかたにかへる涙か」

まひ出づるに、あはれなる御けしき、あさはかならず見ゆれば、いといとほしく思す。

「めでたしと、思ほししみにける御容貌、いかやうなるをかしさにか」と、ゆかしう思ひきこえたまへど、さらにえ見たてまつりたまはぬを、ねたう思ほす。

いと重りかにて、夢にもいはけたる御ふるまひなどのあらばこそ、おのづからほの見たまふついでもあらめ、心にき御けはひのみ深さまされば、見たてまつりたまふままに、いとあらまほしと思ひきこえたまへり。

かく隙間なくて、二所さぶらひたまへば、兵部卿宮、すがすがともえ思ほし立たず、「帝、おとなびたまひなば、さりとも、え思ほし捨てじ」とぞ、待ち過ぐしたまふ。二所の御おぼえども、とりどりに挑みたまへり。

主上は、よろづのことに、すぐれて絵を興あるものに思したり。立てて好ませたまへばにや、二なく描かせたまふ。斎宮の女御、いとをかしう描かせたまふべければ、これに御心移りて、渡らせたまひつつ、描き通はさせたまふ。

殿上の若き人びとも、このことまねぶをば、御心とどめてをかしきもの思ほしたれば、まして、をかしげなる人の、心ばへあるさまに、まほならず描きすさび、なまめかしう添ひ臥して、とかく筆うちやすらひたまへる御さま、らうたげさに御心しみて、いとしげう渡らせたまひて、ありしよりけに御思ひまされるを、権中納言、聞きたまひて、あくまでかどかどしく今めきたまへる御心にて、「われ人に劣りなむや」と思しはげみて、すぐれたる上手どもを召し取りて、いみじくいましめて、またなきさまなる絵どもを、二なき紙どもに描き集めさせたまふ。

の御心ざま思し出づるに、「おほかたの世につけては、惜しうあたらしかりし人の御ありさまぞや。さこそえあらぬものなりけれ。よしありし方は、なほすぐれて」、物の折ごとに思ひ出できこえたまふ。

中宮も内にぞおはしましける。主上は、めづらしき人参りたまふと聞こし召しければ、いとつくしう御心づかひしておはします。ほどよりはいみじうされおとなびたまへり。宮も、

「かく恥づかしき人参りたまふを、御心づかひして、見えたてまつらせたまへ」  
と聞こえたまひけり。

人知れず、「大人は恥づかしうやあらむ」と思しけるを、いたう夜更けて参り上りたまへり。いとつつましげにおほどかにて、ささやかにあえかなるけはひのしたまへれば、いとをかし、と思しけり。

弘徽殿には、御覧じつきたれば、睦ましうあはれに心やすく思ほし、これは、人ざまもいたうしめり、恥づかしげに、大臣の御もてなしもやむごとなくよそほしければ、あなづりにくく思されて、御宿直などは等しくしたまへど、うちとけたる御童遊びに、昼など渡らせたまふことは、あなたがちにおはします。

権中納言は、思ふ心ありて聞こえたまひけるに、かく参りたまひて、御女にきしろふさまにてさぶらひたまふを、方々にやすからず思すべし。

院には、かの櫛の筥の御返り御覧ぜしにつけても、御心離れがたかりけり。

そのころ、大臣の参りたまへるに、御物語こまやかなり。ことのついでに、齋宮の下りたまひしこと、先々ものたまひ出づれば、聞こえ出でたまひて、さ思ふ心なむありしなどは、えあらはしたまはず。大臣も、かかる御けしき聞き顔にはあらで、ただ「いかが思したる」とゆかしきに、とかうかの御事をのた

が

など、聞こえたまへど、いとかたはらいたければ、御文はえ引き出でず。宮は悩ましげに思ほして、御返りいとの憂くしたまへど、

「聞こえたまはざらむも、いと情けなく、かたじけなかるべし」

と、人びとそそのかしわづらひきこゆるけはひを聞きたまひて、

「いとあるまじき御ことなり。しるしばかり聞こえさせたまへ」

と聞こえたまふも、いと恥づかしけれど、いにしへ思し出づるに、いとなまめき、きよらにて、いみじう泣きたまひし御さまを、そこはかとなくあはれと見たてまつりたまひし御幼心も、ただ今のこととおぼゆるに、故御息所の御ことなど、かきつらねあはれに思されて、ただかく、

「別るとて遙かに言ひし一言も

かへりてものは今ぞ悲しき」

とばかりやありけむ。御使の禄、品々に賜はず。大臣は、御返りをいとゆかしう思せど、え聞こえたまはず。

「院の御ありさまは、女にて見たてまつらまほしきを、この御けはひも似げなからず、いとよき御あはひなめるを、内は、まだいといはけなくおはしますめるに、かく引き違へきこゆるを、人知れず、ものしとや思すらむ」など、憎きことをさへ思しやりて、胸つぶれたまへど、今日になりて思し止むべきことにしあらねば、事どもあるべきさまにのたまひおきて、むつまじう思す修理宰相を詳しく仕うまつるべくのたまひて、内に参りたまひぬ。

「うけばりたる親さまには、聞こし召されじ」と、院をつつみきこえたまひて、御訪らひばかりと、見せたまへり。よき女房などは、もとより多かる宮なれば、里がちなりしも参り集ひて、いと二なく、けはひあらまほし。

「あはれ、おはせましかば、いかにかひありて、思しいたづかまし」と、昔

前齋宮の御参りのこと、中宮の御心に入れてもよほしきこえたまふ。こまかなる御とぶらひまで、とり立てたる御後見もなしと思しやれど、大殿は、院に聞こし召さむことを憚りたまひて、二条院に渡したてまつらむことをも、このたびは思し止まりて、ただ知らず顔にもてなしたまへれど、おほかたのことどもは、とりもちて親めききこえたまふ。

院はいと口惜しく思し召せど、人悪ろければ、御消息など絶えにたるを、その日になりて、えならぬ御よそひども、御櫛の筥、打乱の筥、香壺の筥ども、世の常ならず、くさぐさの御薰物ども、薰衣香、またなきさまに、百歩の外を多く過ぎ匂ふまで、心ことに調へさせたまへり。大臣見たまひもせむにと、かねてよりや思しまうけけむ、いとわざとがましかむめり。

殿も渡りたまへるほどにて、「かくなむ」と、女別当御覽ぜさす。ただ、御櫛の筥の片つ方を見たまふに、尽きせずこまかになまめきて、めづらしきさまなり。挿櫛の筥の心葉に、

「別れ路に添へし小櫛をかことにて

遥けき仲と神やいさめし」

大臣、これを御覽じつけて、思しめぐらすに、いとかたじけなくいとほしくて、わが御心のならひ、あやにくなる身を抓みて、

「かの下りたまひしほど、御心に思ほしけむこと、かう年経て帰りたまひて、その御心ざしをも遂げたまふべきほどに、かかる違ひ目のあるを、いかに思すらむ。御位を去り、もの静かにて、世を恨めしとや思すらむ」など、「我になりて心動くべきふしかな」と、思し続けたまふに、いとほしく、「何にかくあながちなることを思ひはじめて、心苦しく思ほし悩ますらむ。つらしとも、思ひきこえしかど、また、なつかしうあはれなる御心ばへを」など、思ひ乱れたまひて、とばかりうち眺めたまへり。

「この御返りは、いかやうにか聞こえさせたまふらむ。また、御消息もいか

絵 合

絵

合

と、聞こえ知らせたまへば、うれしきことに思して、御渡りのことをいそぎたまふ。

入道の宮、兵部卿宮の、姫君をいつしかとかしづき騒ぎたまふめるを、「大臣の隙ある仲にて、いかがもてなしたまはむ」と、心苦しく思す。

権中納言の御女は、弘徽殿の女御と聞こゆ。大殿の御子にて、いとよそほしうもてかしづきたまふ。主上もよき御遊びがたきに思いたり。

「宮の中の君も同じほどにおはすれば、うたて雛遊びの心地すべきを、おとなしき御後見は、いとうれしかべいこと」

と思しのたまひて、さる御けしき聞こえたまひつつ、大臣のよろづに思し至らぬことなく、公方の御後見はさらにもいはず、明け暮れにつけて、こまかなる御心ばへの、いとあはれに見えたまふを、頼もしきものに思ひきこえたまひて、いとあつしくのみおはしませば、参りなどしたまひても、心やすくさぶらひたまふこともかたきを、すこしおとなびて、添ひさぶらはむ御後見は、かならずあるべきことなりけり。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

大臣、聞きたまひて、「院より御けしきあらむを、引き違へ、横取りたまはむを、かたじけなきこと」と思すに、人の御ありさまのいとらうたげに、見放たむはまた口惜しうて、入道の宮にぞ聞こえたまひける。

「かうかうのことをなむ、思うたまへわづらふに、母御息所、いと重々しく心深きさまにものしはべりしを、あぢきなき好き心にまかせて、さるまじき名をも流し、憂きものに思ひ置かれはべりにしをなむ、世にいとほしく思ひたまふる。この世にて、その恨みの心とけず過ぎはべりにしを、今はとなりての際に、この齋宮の御ことをなむ、ものせられしかば、さも聞き置き、心にも残すまじうこそは、さすがに見おきたまひけめ、と思ひたまふるにも、忍びがたう。おほかたの世につけてだに、心苦しきことは見聞き過ぐされぬわざにはべるを、いかで、なき蔭にても、かの恨み忘るばかり、と思ひたまふるを、内にも、さこそおとなびさせたまへど、いときなき御齡におはしますを、すこし物の心知る人はさぶらはれてもよくやと思ひたまふるを、御定め」

など聞こえたまへば、

「いとよう思し寄りけるを、院にも、思さむことは、げにかたじけなう、いとほしかるべけれど、かの御遺言をかこちて、知らず顔に参らせたてまつりたまへかし。今はた、さやうのこと、わざとも思しとどめず、御行なひがちになりたまひて、かう聞こえたまふを、深うしも思しとがめじと思ひたまふる」

「さらば、御けしきありて、数まへさせたまはば、もよほしばかりの言を、添ふるになしはべらむ。とぎまかうぎまに、思ひたまへ残すことなきに、かくまでさばかりの心構へも、まねびはべるに、世人やいかにとこそ、憚りはべれ」

など聞こえたまで、後には、「げに、知らぬやうにて、ここに渡したてまつりてむ」と思す。

女君にも、しかなむ思ひ語らひきこえて、

「過ぐいたまはむに、いとよきほどなるあはひならむ」

と思すも、うちとくべき御親心にはあらずやありけむ。

わが御心も定めがたければ、かく思ふといふことも、人にも漏らしたまはず。御わざなどの御ことをも取り分きてせさせたまへば、ありがたき御心を、宮人もよろこびあへり。

はかなく過ぐる月日に添へて、いとどさびしく、心細きことのみまさるに、さぶらふ人びとも、やうやうあかれ行きなどして、下つ方の京極わたりなれば、人気遠く、山寺の入相の声々に添へても、音泣きがちにてぞ、過ぐしたまふ。同じき御親と聞こえしなにも、片時の間も立ち離れたてまつりたまはで、ならはしたてまつりたまひて、齋宮にも親添ひて下りたまふことは、例なきことなるを、あながちに誘ひきこえたまひし御心に、限りある道にては、たぐひきこえたまはずなりにしを、干る世なう思し嘆きたり。

さぶらふ人びと、貴きも賤しきもあまたあり。されど、大臣の、「御乳母たちだに、心にまかせたること、引き出だし仕うまつるな」

など、親がり申したまへば、「いと恥づかしき御ありさまに、便なきこと聞こし召しつけられじ」と言ひ思ひつつ、はかなきことの情けも、さらにつくらず。

院にも、かの下りたまひし大極殿のいつかしかりし儀式に、ゆゆしきまで見えたまひし御容貌を、忘れがたう思しおきければ、

「参りたまひて、齋院など、御はらからの宮々おはしますたぐひにて、さぶらひたまへ」

と、御息所にも聞こえたまひき。されど、「やむごとなき人びとさぶらひたまふに、数々なる御後見もなくてや」と思しつづみ、「主上は、いとあつしうおはしますも恐ろしう、またもの思ひや加へたまはむ」と、憚り過ぐしたまひしを、今は、まして誰かは仕うまつらむと、人びと思ひたるを、ねむごろに院には思しのためはせけり。

と責めきこゆれば、鈍色の紙の、いと香ばしう艶なるに、墨つきなど紛らはして、

「消えがてにふるぞ悲しきかきくらし

わが身それとも思ほえぬ世に」

つつましげなる書きざま、いとおほどかに、御手すぐれてはあらねど、らうたげにあてはかなる筋に見ゆ。

下りたまひしほどより、なほあらず思したりしを、「今は心にかけて、ともかくも聞こえ寄りぬべきぞかし」と思すには、例の、引き返し、

「いとほしくこそ。故御息所の、いとうしろめたげに心おきたまひしを。ことわりなれど、世の中の人も、さやうに思ひ寄りぬべきことなるを、引き違へ、心清くてあつかひきこえむ。主上の今すこしもの思し知る齢にならせたまひなば、内住みせさせたまつりて、さうぎうしきに、かしづきぐさにこそ」と思しなる。

いとまめやかにねむごろに聞こえたまひて、さるべき折々は渡りなどしたまふ。

「かたじけなくとも、昔の御名残に思しなずらへて、気遠からずもてなさせたまはばなむ、本意なる心地すべき」

など聞こえたまへど、わりなくもの恥ぢをしたまふ奥まりたる人ざまにて、ほのかにも御声など聞かせたまつらむは、いと世になくめづらかなることと思したれば、人びとも聞こえわづらひて、かかる御心ざまを愁へきこえあへり。

「女別当、内侍などいふ人びと、あるは、離れたてまつらぬわかむどほりなどにて、心ばせある人々多かるべし。この、人知れず思ふ方のまじらひをせさせたまつらむに、人に劣りたまふまじかめり。いかでさやかに、御容貌を見てしがな」

七、八日ありて亡せたまひにけり。あへなう思さるるに、世もいとほかなくて、もの心細く思されて、内へも参りたまはず、とかくの御ことなど掟てさせたまふ。また頼もしき人もことにおはせざりけり。古き齋宮の宮司など、仕うまつり馴れたるぞ、わづかにことども定めける。

御みづからも渡りたまへり。宮に御消息聞こえたまふ。

「何ごともおぼえはべらでなむ」

と、女別当して、聞こえたまへり。

「聞こえさせ、のたまひ置きしこともはべしを、今は、隔てなきさまに思されば、うれしくなむ」

と聞こえたまひて、人びと召し出でて、あるべきことども仰せたまふ。いと頼もしげに、年ごろの御心ばへ、取り返しつべう見ゆ。いといかめしう、殿の人びと、数もなう仕うまつらせたまへり。あはれにうち眺めつつ、御精進にて、御簾下ろしこめて行はせたまふ。

宮には、常に訪らひきこえたまふ。やうやう御心静まりたまひては、みづから御返りなど聞こえたまふ。つつましう思したれど、御乳母など、「かたじけなし」と、そそのかしきこゆるなりけり。

雪、霽、かき乱れ荒るる日、「いかに、宮のありさま、かすかに眺めたまふらむ」と思ひやりきこえたまひて、御使たてまつれたまへり。

「ただ今の空を、いかに御覧ずらむ。

降り乱れひまなき空に亡き人の

天翔るらむ宿ぞ悲しき」

空色の紙の、曇らはしきに書いたまへり。若き人の御目にとどまるばかりと、心してつくろひたまへる、いと目もあやなり。

宮は、いと聞こえにくくしたまへど、これかれ、

「人づてには、いと便なきこと」

火影に、御髪いとをかしげにはなやかにそぎて、寄りゐたまへる、絵に描きたらむさまして、いみじうあはれなり。帳の東面に添ひ臥したまへるぞ、宮ならむかし。御几帳のしどけなく引きやられたるより、御目とどめて見通したまへれば、頬杖つきて、いともの悲しと思いたるさまなり。はつかなれど、いとうつくしげならむと見ゆ。

御髪のかかりたるほど、頭つき、けはひ、あてに気高きものから、ひちちかに愛敬づきたまへるけはひ、しるく見えたまへば、心もとなくゆかしきにも、「さばかりのたまふものを」と、思し返す。

「いと苦しきさまよりはべる。かたじけなきを、はや渡らせたまひね」とて、人にかき臥せられたまふ。

「近く参り来たるしるしに、よろしう思さればうれしかるべきを、心苦しきわざかな。いかに思さるるぞ」

とて、覗きたまふけしきなれば、

「いと恐ろしげにはべるや。乱り心地のいとかく限りなる折しも渡らせたまへるは、まことに浅からずなむ。思ひはべることを、すこしも聞こえさせつれば、さりともと、頼もしくなむ」

と聞こえさせたまふ。

「かかる御遺言の列に思しけるも、いとどあはれになむ。故院の御子たち、あまたものしたまへど、親しくむつび思ほすも、をさをさなきを、主上の同じ御子たちのうちに数まへきこえたまひしかば、さこそは頼みきこえはべらめ。すこしおとなしきほどになりぬる齢ながら、あつかふ人もなければ、さうざうしきを」

など聞こえて、帰りたまひぬ。御訪らひ、今すこしたちまさりて、しばしば聞こえたまふ。

も、いたう弱りたまへるけはひなれば、「絶えぬ心ぎしのほどは、え見えたてまつらでや」と、口惜しうて、いみじう泣いたまふ。

かくまでも思しとどめたりけるを、女も、よろづにあはれに思して、齋宮の御ことをぞ聞こえたまふ。

「心細くてとまりたまはむを、かならず、ことに触れて数まへきこえたまへ。また見ゆづる人もなく、たぐひなき御ありさまになむ。かひなき身ながらも、今しばし世の中を思ひのどむるほどは、とぎまかうさまにものを思し知るまで、見たてまつらむことこそ思ひたまへつれ」

とても、消え入りつつ泣いたまふ。

「かかる御ことなくてだに、思ひ放ちきこえさすべきにもあらぬを、まして、心の及ばむに従ひては、何ごともし後見きこえむとなむ思うたまふる。さらに、うしろめたくな思ひきこえたまひこそ」

など聞こえたまへば、

「いとかたきこと。まことにうち頼むべき親などにて、見ゆづる人だに、女親に離れぬるは、いとあはれなることにこそはべるめれ。まして、思ほし人めかさむにつけても、あぢきなき方やうち交り、人に心も置かれたまはむ。うたである思ひやりごとなれど、かけてさやうの世づいたる筋に思し寄るな。憂き身を抓みはべるにも、女は、思ひの外にても思ひを添ふるものになむはべりければ、いかでさる方をもて離れて、見たてまつらむと思うたまふる」

など聞こえたまへば、「あいなくものたまふかな」と思せど、

「年ごろに、よろづ思うたまへ知りにたるものを、昔の好き心の名残あり顔にのたまひなすも本意なくなむ。よし、おのづから」

とて、外は暗うなり、内は大殿油のほのかにもものより通りて見ゆるを、「もしもや」と思して、やをら御几帳のほころびより見たまへば、心もとなきほどの

へむことをぞのたまへる。

「いと頼もしげに、数まへのたまふめれど、いさや、また、島漕ぎ離れ、中空に心細きことやあらむ」

と、思ひわづらふ。

入道も、さて出だし放たむは、いとうしろめたう、さりとて、かく埋もれ過ぐさむを思はむも、なかなか来し方の年ごろよりも、心尽くしなり。よろづにつつましう、思ひ立ちがたきことを聞こゆ。

まことや、かの齋宮も替はりたまひにしかば、御息所上りたまひてのち、変はらぬさまに何ごとも訪らひきこえたまふことは、ありがたきまで、情けを尽くしたまへど、「昔だにつれなかりし御心ばへの、なかなかならむ名残は見じ」と、思ひ放ちたまへれば、渡りたまひなどすることはことになし。

あながちに動かしきこえたまひても、わが心ながら知りがたく、とかくかかづらはむ御歩きなども、所狭う思しなりにたれば、強ひたるさまにもおはせず。

齋宮をぞ、「いかにねびなりたまひぬらむ」と、ゆかしう思ひきこえたまふ。

なほ、かの六条の旧宮をいとよく修理しつくりひたりければ、みやびかにて住みたまひけり。よしづきたまへること、旧りがたくて、よき女房など多く、好いたる人の集ひ所にて、ものさびしきやうなれど、心やれるさまにて経たまふほどに、にはかに重くわづらひたまひて、もののいと心細く思されければ、罪深き所ほとりに年経つるも、いみじう思して、尼になりたまひぬ。

大臣、聞きたまひて、かけかけしき筋にはあらねど、なほさる方のものをも聞こえあはせ、人に思ひきこえつるを、かく思しなりにけるが口惜しうおぼえたまへば、おどろきながら渡りたまへり。飽かずあはれなる御訪らひ聞こえたまふ。

近き御枕上に御座よそひて、脇息におしかかりて、御返りなど聞こえたまふ

御車とどむる所にてたてまつれり。「をかし」と思して、畳紙に、

「みをつくし恋ふるしるしにここまで

めぐり逢ひけるえには深しな

とて、たまへれば、かしの心知れる下人して遣りけり。駒並めて、うち過ぎたまふにも、心のみ動くに、露ばかりなれど、いとあはれにかたじけなくおぼえて、うち泣きぬ。

「数ならで難波のこともかひなきに

などみをつくし思ひそめけむ

田蓑の島に御禊仕うまつる、御祓への物につけてたてまつる。日暮れ方になりゆく。

夕潮満ち来て、入江の鶴も声惜しまぬほどのあはれなる折からなればにや、人目もつつまず、あひ見まほしくさへ思さる。

「露けきの昔に似たる旅衣

田蓑の島の名には隠れず

道のままに、かひある逍遥遊びののしりたまへど、御心にはなほかかりて思しやる。遊女どもの集ひ参れる、上達部と聞こゆれど、若やかにこと好ましげなるは、皆、目とどめたまふべかめり。されど、「いでや、をかしきことも、ものあはれも、人からこそあべけれ。なのめなることをだに、すこしあはき方に寄りぬるは、心とどむるたよりもなきものを」と思すに、おのが心をやりて、よしめきあへるも疎ましう思しけり。

か人は、過ぐしきこえて、またの日ぞ吉ろしかりければ、御幣たてまつる。ほどにつけたる願どもなど、かつがつ果たしける。また、なかなかもの思ひ添はりて、明け暮れ、口惜しき身を思ひ嘆く。

今や京におはし着くらむと思ふ日数も経ず、御使あり。このころのほどに迎

へをだにせむ」

とて、漕ぎ渡りぬ。

君は、夢にも知りたまはず、夜一夜、いろいろのことをせさせたまふ。まことに、神の喜びたまふべきことを、し尽くして、来し方の御願にもうち添へ、ありがたきまで、遊びののしり明かしたまふ。

惟光やうの人は、心のうちに神の御徳をあはれにめでたしと思ふ。あからさまに立ち出でたまへるに、さぶらひて、聞こえ出でたり。

「住吉の松こそものはかなしけれ

神代のことをかけて思へば」

げに、と思し出でて、

「荒かりし波のまよひに住吉の

神をばかけて忘れやはする

験ありな」

とのたまふも、いとめでたし。

かの明石の舟、この響きに圧されて、過ぎぬることも聞こゆれば、「知らざりけるよ」と、あはれに思す。神の御するべを思し出づるも、おろかならねば、「いささかなる消息をだにして、心慰めばや。なかなか思ふらむかし」と思す。

御社立ちたまで、所々に逍遙を尽くしたまふ。難波の御祓へ、七瀬によそほしう仕まつる。堀江のわたりを御覧じて、

「今はた同じ難波なる」

と、御心にもあらで、うち誦じたまへるを、御車のもと近き惟光、うけたまはりやしつらむ、さる召しもやと、例にならひて懐にまうけたる柄短き筆など、

るに、何の罪深き身にて、心にかけておぼつかなく思ひきこえつつ、かかりける御響きをも知らず、立ち出でつらむ」

など思ひ続くるに、いと悲しうて、人知れずしほたれけり。

松原の深緑なるに、花紅葉をこき散らしたると見ゆる表の衣の、濃き薄き、数知らず。六位のなかにも蔵人は青色しるく見えて、かの賀茂の瑞垣恨みし右近将監も鞆負になりて、ことごとしげなる隨身具したる蔵人なり。

良清も同じ佐にて、人よりことにももの思ひなきけしきにて、おどろおどろしき赤衣姿、いときよげなり。

すべて見し人びと、引き変へはなやかに、何ごと思ふらむと見えて、うち散りたるに、若やかなる上達部、殿上人の、我も我もと思ひいどみ、馬鞍などまで飾りを整へ磨きたまへるは、いみじき物に、田舎人も思へり。

御車を遙かに見やれば、なかなか、心やましくて、恋しき御影をもえ見たてまつらず。河原大臣の御例をまねびて、童隨身を賜りたまひける、いとをかしげに装束き、みづら結ひて、紫裾濃の元結なまめかしう、丈姿ととのひ、うつくしげにて十人、さまことに今めかしう見ゆ。

大殿腹の若君、限りなくかしづき立てて、馬添ひ、童のほど、皆作りあはせて、やう変へて装束きわけたり。

雲居遙かにめでたく見ゆるにつけても、若君の数ならぬさまにてもものしたまふを、いみじと思ふ。いよいよ御社の方を拝みきこゆ。

国の守参りて、御まうけ、例の大臣などの参りたまふよりは、ことに世になく仕うまつりけむかし。

いとほしたなければ、

「立ち交じり、数ならぬ身の、いささかのことせむに、神も見入れ、数まへたまふべきにもあらず。帰らむにも中空なり。今日は難波に舟さし止めて、祓

思し憚りたまひしことを、大臣は憂きものに思しおきて、昔のやうにもむつびきこえたまはず。

なべての世には、あまねくめでたき御心なれど、この御あたりは、なかなか情けなき節も、うち交ぜたまふを、入道の宮は、いとほしう本意なきことに見たてまつりたまへり。

世の中のこと、ただなかばを分けて、太政大臣、この大臣の御ままなり。

権中納言の御女、その年の八月に参らせたまふ。祖父殿るたちて、儀式などいとあらまほし。

兵部卿宮の中の君も、さやうに心ざしてかしづきたまふ名高きを、大臣は、人よりまさりたまへとしも思さずなむありける。いかがしたまはむとすらむ。

その秋、住吉に詣でたまふ。願ども果たしたまふべければ、いかめしき御ありきにて、世の中ゆすりて、上達部、殿上人、我も我もと仕うまつりたまふ。折しも、かの明石の人、年ごとの例のことにて詣づるを、去年今年は障ることありて、おこたりける、かしこまり取り重ねて、思ひ立ちけり。

舟にて詣でたり。岸にさし着くるほど、見れば、ののしりて詣でたまふ人のけはひ、渚に満ちて、いつくしき神宝を持て続けたり。楽人、十列など、装束をととのへ、容貌を選びたり。

「誰が詣でたまへるぞ」

と問ふめれば、

「内大臣殿の御願果たしに詣でたまふを、知らぬ人もありけり」

とて、はかなきほどの下衆だに、心地よげにうち笑ふ。

「げに、あさましよう、月日もこそあれ。なかなか、この御ありさまを遙かに見るも、身のほど口惜しうおぼゆ。さすがに、かけ離れたてまつらぬ宿世ながら、かく口惜しき際の者だに、もの思ひなげにて、仕うまつるを色節に思ひた

を思ひ絶えたり。

心やすき殿造りしては、「かやうの人集へても、思ふさまにかしづきたまふべき人も出でものしたまはば、さる人の後見にも」と思す。

かの院の造りざま、なかなか見どころ多く、今めいたり。よしある受領などを選びて、当て当てに催したまふ。

尚侍の君、なほえ思ひ放ちきこえたまはず。こりずまに立ち返り、御心ばへもあれど、女は憂きに懲りたまひて、昔のやうにもあひしらへきこえたまはず。なかなか、所狭う、さうぎうしう世の中、思さる。

院はのどやかに思しなりて、時々につけて、をかしき御遊びなど、好ましげにておはします。女御、更衣、みな例のごときぶらひたまへど、春宮の御母女御のみぞ、とり立てて時めきたまふこともなく、尚侍の君の御おぼえにおし消たれたまへりしを、かく引き変へ、めでたき御幸ひにて、離れ出でて宮に添ひたてまつりたまへる。

この大臣の御宿直所は、昔の淑景舎なり。梨壺に春宮はおはしませば、近隣の御心寄せに、何ごとも聞こえ通ひて、宮をも後見たてまつりたまふ。

入道後の宮、御位をまた改めたまふべきならねば、太上天皇になずらへて、御封賜らせたまふ。院司どもなりて、さまことにいつくし。御行なひ、功德のことを、常の御いとなみにておはします。年ごろ、世に憚りて出で入りも難く、見たてまつりたまはぬ嘆きをいぶせく思しけるに、思すさまにて、参りまかたたまふもいとめでたければ、大后は、「憂きものは世なりけり」と思し嘆く。

大臣はことに触れて、いと恥づかしげに仕まつり、心寄せきこえたまふも、なかなかいとほしげなるを、人もやすからず、聞こえけり。

兵部卿親王、年ごろの御心ばへのつらく思はずにて、ただ世の聞こえをのみ

ふべきならねば、心やすげなり。年ごろに、いよいよ荒れまさり、すごげにておはす。

女御の君に御物語聞こえたまひて、西の妻戸に夜更かして立ち寄りたまへり。月おぼろにさし入りて、いとど艶なる御ふるまひ、尽きもせず見えたまふ。いとどつつましけれど、端近うち眺めたまひけるさまながら、のどやかにてものしたまふけはひ、いとめやすし。水鶏のいと近う鳴きたるを、

「水鶏だにおどろかさずはいかにして

荒れたる宿に月を入れまし」

と、いとなつかしう、言ひ消ちたまへるぞ、

「とりどりに捨てがたき世かな。かかるこそ、なかなか身も苦しけれ」と思す。

「おしなべてたたく水鶏におどろかば

うはの空なる月もこそ入れ

うしろめたう」

とは、なほ言に聞こえたまへど、あだあだしき筋など、疑はしき御心ばへにはあらず。年ごろ、待ち過ぐしきこえたまへるも、さらにおろかには思されざりけり。「空な眺めそ」と、頼めきこえたまひし折のことも、のたまひ出でて、

「などで、たぐひあらじと、いみじうものを思ひ沈みけむ。憂き身からは、同じ嘆かしさにこそ」

とのたまへるも、おいらかにらうたげなり。例の、いづこの御言の葉にかあらむ、尽きせず語らひ慰めきこえたまふ。

かやうのついでにも、五節を思し忘れず、「また見てしがな」と、心にかけたまへれど、いとかたきことにて、え紛れたまはず。

女、もの思ひ絶えぬを、親はよろづに思ひ言ふこともあれど、世に経むこと

と、思ひ続けられるれど、「乳母のことはいかに」など、こまやかに訪らはせたまへるも、かたじけなく、何ごとも慰めけり。

御返りには、

「数ならぬみ島隠れに鳴く鶴を

今日もいかにと問ふ人ぞなき

よろづに思うたまへ結ばほるるありさまを、かくたまさかの御慰めにかけてはべる命のほども、はかなくなむ。げに、後ろやすく思うたまへ置くわぎもがな」とまめやかに聞こえたり。

うち返し見たまひつつ、「あはれ」と、長やかにひとりごちたまふを、女君、しり目に見おこせて、

「浦よりをちに漕ぐ舟の」

と、忍びやかにひとりごち、眺めたまふを、

「まことは、かくまでとりなしたまふよ。こは、ただ、かばかりのあはれぞや。所のさまなど、うち思ひやる時々、来し方のこと忘れがたき独り言を、ようこそ聞き過ぎいたまはね」

など、恨みきこえたまひて、上包ばかりを見せたてまつらせたまふ。筆などのいとゆゑづきて、やむごとなき人苦しげなるを、「かかればなめり」と、思す。

かく、この御心とりたまふほどに、花散里などを離れ果てたまひぬるこそ、いとほしけれ。公事も繁く、所狭き御身に、思し憚るに添へても、めづらしく御目おどろくことのなきほど、思ひしづめたまふなめり。

五月雨つれづれなるころ、公私もの静かなるに、思し起こして渡りたまへり。よそながらも、明け暮れにつけて、よろづに思しやり訪らひきこえたまふを頼みにて、過ぐいたまふ所なれば、今めかしう心にくきさまに、そばみ恨みたま

と思す。「男君ならましかば、かうしも御心にかけてたまふまじきを、かたじけなういとほしう、わが御宿世も、この御ことにつけてぞかたほなりけり」と思さるる。

御使出だし立てたまふ。

「かならずその日違へずまかり着け」

とのたまへば、五日に行き着きぬ。思しやることも、ありがたうめでたきさまにて、まめまめしき御訪らひもあり。

「海松や時ぞともなき蔭にゐて

何のあやめもいかにわくらむ

心のおくがるるまでなむ。なほ、かくてはえ過ぐすまじきを、思ひ立ちたまひぬ。さりとも、うしろめたきことは、よも」

と書いたまへり。

入道、例の、喜び泣きしてゐたり。かかる折は、生けるかひもつくり出でたる、ことわりなりと見ゆ。

ここにも、よろづ所狭きまで思ひ設けたりけれど、この御使なくは、闇の夜にてこそ暮れぬべかりけれ。乳母も、この女君のあはれに思ふやうなるを、語らひ人にて、世の慰めにしけり。をさをさ劣らぬ人も、類に触れて迎へ取りてあらずれど、こよなく衰へたる宮仕へ人などの、巖の中尋ぬるが落ち止まれるなどこそあれ、これは、こよなうこめき思ひあがり。

聞きどころある世の物語などして、大臣の君の御ありさま、世にかしづかれたまへる御おぼえのほども、女心地にまかせて限りなく語り尽くせば、げに、かく思し出づばかりの名残とどめたる身も、いとたけくやうやう思ひなりけり。御文ももろともに見て、心のうちに、

「あはれ、かうこそ思ひの外に、めでたき宿世はありけれ。憂きものはわが身こそありけれ」

「人がらのをかしかりしも、所からにや、めづらしうおぼえきかし」  
など語りきこえたまふ。

あはれなりし夕べの煙、言ひしことなど、まほならねど、その夜の容貌ほの見し、琴の音のなまめきたりしも、すべて御心とまれるさまにのたまひ出づるにも、

「われはまたなくこそ悲しと思ひ嘆きしか、すさびにても、心を分けたまひけむよ」

と、ただならず、思ひ続けたまひて、「われは、われ」と、うち背き眺めて、「あはれなりし世のありさま」など、独り言のやうにうち嘆きて、

「思ふどちなびく方にはあらずとも

われぞ煙に先立ちなまし」

「何とか。心憂や。」

誰れにより世を海山に行きめぐり

絶えぬ涙に浮き沈む身ぞ

いでや、いかでか見えたてまつらむ。命こそかなひがたかべいものなめれ。はかなきことにて、人に心おかれじと思ふも、ただ一つゆるぎぞや」

とて、箏の御琴引き寄せて、掻き合せすさびたまひて、そそのかしきこえたまへど、かの、すぐれたりけむもねたきにや、手も触れたまはず。いとおほどかにうつくしう、たをやぎたまへるものから、さすがに執念きところつきて、もの怨じしたまへるが、なかなか愛敬づきて腹立ちなしたまふを、をかしう見どころありと思す。

「五月五日にぞ、五十日には当たるらむ」と、人知れず数へたまひて、ゆかしうあはれに思しやる。「何ごと、いかにかひあるさまにもてなし、うれしからまし。口惜しのわざや。さる所にしも、心苦しきさまにて、出で来たるよ」

らむとおぼえざりつるを、この御おきての、すこしもの思ひ慰めらるるにぞ、  
頭もたげて、御使にも二なきさまの心ざしを尽くす。とく参りなむと急ぎ苦し  
がれば、思ふことどもすこし聞こえ続けて、

「ひとりして撫づるは袖のほどなきに

覆ふばかりの蔭をしぞ待つ」

と聞こえたり。あやしきまで御心にかかり、ゆかしう思さる。

女君には、言にあらはしてをさをさ聞こえたまはぬを、聞きあはせたまふこ  
ともこそ、と思して、

「さこそあなれ。あやしうねぢけたるわざなりや。さもおはせなむと思ふあ  
たりには、心もとなくて、思ひの外に、口惜しくなむ。女にてあなれば、いと  
こそものしけれ。尋ね知らでもありぬべきことなれど、さはえ思ひ捨つまじき  
わざなりけり。呼びにやりて見せたてまつらむ。憎みたまふなよ」

と聞こえたまへば、面うち赤みて、

「あやしう、つねにかやうなる筋のたまひつくる心のほどこそ、われながら  
疎ましけれ。もの憎みは、いつならふべきにか」

と怨じたまへば、いとよくうち笑みて、

「そよ。誰がならはしにかあらむ。思はずにぞ見えたまふや。人の心より外  
なる思ひやりごととして、もの怨じなどしたまふよ。思へば悲し」

とて、果て果ては涙ぐみたまふ。年ごろ飽かず恋しと思ひきこえたまひし御  
心のうちども、折々の御文の通ひなど思し出づるには、「よろづのこと、すさび  
にこそあれ」と思ひ消たれたまふ。

「この人を、かうまで思ひやり言問ふは、なほ思ふやうのはべるぞ。まだき  
に聞こえれば、またひが心得たまふべければ」

とのたまひさして、

慕ひやしなまし」

とのたまへば、うち笑ひて、

「うちつけの別れを惜しむかことにて

思はむ方に慕ひやはせぬ」

馴れて聞こゆるを、いたしと思す。

車にてぞ京のほどは行き離れける。いと親しき人さし添へたまひて、ゆめ漏らすまじく、口がためたまひて遣はず。御佩刀、さるべきものなど、所狭きまで思しやらぬ隈なし。乳母にも、ありがたうこまやかなる御いたはりのほど、浅からず。

入道の思ひかしづき思ふらむありさま、思ひやるも、ほほ笑まれたまふこと多く、また、あはれに心苦しうも、ただこのことの御心にかかるも、浅からぬにこそは。御文にも、「おろかにもてなし思ふまじ」と、返す返すいましめたまへり。

「いつしかも袖うちかけむをとめ子が

世を経て撫づる岩の生ひ先」

津の国までは舟にて、それよりあなたは馬にて、急ぎ行き着きぬ。

入道待ちとり、喜びかしこまりきこゆること、限りなし。そなたに向きて拝みきこえて、ありがたき御心ばへを思ふに、いよいよいたはしう、恐ろしきまで思ふ。

稚児のいとゆゆしきまでうつくしうおはすること、たぐひなし。「げに、かしこき御心に、かしづききこえむと思したるは、むべなりけり」と見たてまつるに、あやしき道に出で立ちて、夢の心地しつる嘆きもさめにけり。いとうつくしうらうたうおぼえて、扱ひきこゆ。

子持ちの君も、月ごろものをのみ思ひ沈みて、いとど弱れる心地に、生きた

さる所に、はかばかしき人しもありがたからむを思して、故院にさぶらひし宣旨の娘、宮内卿の宰相にて亡くなりし人の子なりしを、母なども亡せて、かすかなる世に経けるが、はかなきさまにて子産みたりと、聞こしめしつけたるを、知る便りありて、ことのついでにまねびきこえける人召して、さるべきさまにのたまひ契る。

まだ若く、何心もなき人にて、明け暮れ人知れぬあばら家に、眺むる心細きなれば、深うも思ひたどらず、この御あたりのことをひとへにめでたう思ひきこえて、参るべきよし申させたり。いとあはれにかつは思して、出だし立てたまふ。

もののついでに、いみじう忍びまぎれておはしまいたり。さは聞こえながら、いかにせましと思ひ乱れけるを、いとかたじけなきに、よろづ思ひ慰めて、

「ただ、のたまはせむままだに」  
と聞こゆ。吉ろしき日なりければ、急がし立てたまひて、

「あやしう、思ひやりなきやうなれど、思ふさま殊なることにてなむ。みづからもおぼえぬ住まひに結ばれたりし例を思ひよそへて、しばし念じたまへ」など、ことのありやう詳しく語らひたまふ。

主上の宮仕へ時々せしかば、見たまふ折もありしを、いたう衰へにけり。家のさまも言ひ知らず荒れまどひて、さすがに、大きな所の、木立など疎ましげに、「いかで過ぐしつらむ」と見ゆ。人のさま、若やかにをかしければ、御覧じ放たれず。とかく戯れたまひて、

「取り返しつべき心地こそすれ。いかに」  
とのたまふにつけても、「げに、同じうは、御身近うも仕うまつり馴れば、憂き身も慰みなまし」と見たてまつる。

「かねてより隔てぬ仲とならねど  
別れは惜しきものにぞありける

まことや、「かの明石に、心苦しげなりしことはいかに」と、思し忘るる時なれば、公、私いそがしき紛れに、え思すままにも訪ひたまはざりけるを、三月朔日のほど、「このころや」と思しやるに、人知れずあはれにて、御使ありけり。とく帰り参りて、

「十六日になむ。女にて、たひらかにものしたまふ」

と告げきこゆ。めづらしきさまにてさへあなるを思すに、おろかならず。「などて、京に迎へて、かかることをもせさせざりけむ」と、口惜しう思さる。

宿曜に、

「御子三人。帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは、太政大臣にて位を極むべし」

と、勘へ申したりしこと、さしてかなふなめり。おほかた、上なき位に昇り、世をまつりごちたまふべきこと、さばかりかしこかりしあまたの相人どもの聞こえ集めたるを、年ごろは世のわづらはしきにみな思し消ちつるを、当帝のかく位にかなひたまひぬることを、思ひのごとうれしと思す。みづからも、「もて離れたまへる筋は、さらにあるまじきこと」と思す。

「あまたの皇子たちのなかに、すぐれてらうたきものに思したりしかど、ただ人に思しおきてける御心を思ふに、宿世遠かりけり。内のかくておはしますを、あらはに人の知ることならねど、相人の言むなしからず」

と、御心のうちに思しけり。今、行く末のあらましごとを思すに、

「住吉の神のしるべ、まことにかの人も世になべてならぬ宿世にて、ひがひがしき親も及びなき心をつかふにやありけむ。さるにては、かしこき筋にもなるべき人の、あやしき世界にて生まれたらむは、いとほしうかたじけなくもあるべきかな。このほど過ぐして迎へてむ」

と、思して、東の院、急ぎ造らすべきよし、もよほし仰せたまふ。

かしきことはべらじ」

と、受けひき申したまはず。「人の国にも、こと移り世の中定まらぬ折は、深き山に跡を絶えたる人だにも、治まれる世には、白髪も恥ぢず出で仕へけるをこそ、まことの聖にはしけれ。病に沈みて、返し申したまひける位を、世の中変はりてまた改めたまはむに、さらに咎あるまじう」、公、私定めらる。さる例もありければ、すまひ果てたまはで、太政大臣になりたまふ。御年も六十三にぞなりたまふ。

世の中すさまじきにより、かつは籠もりゐたまひしを、とりかへし花やぎたまへば、御子どもなど沈むやうにもしたまへるを、皆浮かびたまふ。とりわきて、宰相中将、権中納言になりたまふ。かの四の君の御腹の姫君、十二になりたまふを、内に参らせむとかしづきたまふ。かの「高砂」歌ひし君も、かうぶりせさせて、いと思ふさまなり。腹々に御子どもいとあまた次々に生ひ出でつつ、にぎははしげなるを、源氏の大臣は羨みたまふ。

大殿腹の若君、人よりことにうつくしうて、内、春宮の殿上したまふ。故姫君の亡せたまひにし嘆きを、宮、大臣、またさらに改めて思し嘆く。されど、おはせぬ名残も、ただこの大臣の御光に、よろづもてなされたまひて、年ごろ、思し沈みつる名残なきまで栄えたまふ。なほ昔に御心ばへ変はらず、折節ごとに渡りたまひなどしつつ、若君の御乳母たち、さらぬ人びとも、年ごろのほどまかで散らざりけるは、皆さるべきことに触れつつ、よすがつけむことを思しおきつるに、幸ひ人多くなりぬべし。

二条院にも、同じごと待ちきこえける人を、あはれなるものに思して、年ごろの胸あくばかりと思せば、中将、中務やうの人びとには、ほどほどにつけつつ情けを見えたまふに、御いとまなくて、他歩きもしたまはず。

二条院の東なる宮、院の御処分なりしを、二なく改め造らせたまふ。「花散里などやうの心苦しき人びと住ませむ」など、思し当てて繕はせたまふ。

のためには、今見出でたまひてむと思ふも、口惜しや。限りあれば、ただ人にてぞ見たまはむかし」

など、行く末のことをさへのたまはするに、いと恥づかしうも悲しうもおぼえたまふ。御容貌など、なまめかしうきよらにて、限りなき御心ぎしの年月に添ふやうにもてなさせたまふに、めでたき人なれど、さしも思ひたまへらざりしけしき、心ばへなど、もの思ひ知られたまふままに、「などて、わが心の若くいはけなきにまかせて、さる騒ぎをさへ引き出でて、わが名をばさらにもいはず、人の御ためさへ」など思し出づるに、いと憂き御身なり。

明くる年の如月に、春宮の御元服のことあり。十一になりたまへど、ほどよりに大きに、おとなしうきよらにて、ただ源氏の大納言の御顔を二つに写したらむやうに見えたまふ。いとまばゆきまで光りあひたまへるを、世人めでたきものに聞こゆれど、母宮、いみじうかたはらいたきことに、あいなく御心を尽くしたまふ。

内にも、めでたしと見たてまつりたまひて、世の中譲りきこえたまふべきことなど、なつかしう聞こえ知らせたまふ。

同じ月の二十余日、御国譲りのことにはかなれば、太后思しあわてたり。

「かひなきさまながらも、心のどかに御覧ぜらるべきことを思ふなり」

とぞ、聞こえ慰めたまひける。

坊には承香殿の皇子ゐたまひぬ。世の中改まりて、引き変へ今めかしきことも多かり。源氏の大納言、内大臣になりたまひぬ。数定まりて、くつろぐ所もなかりければ、加はりたまふなりけり。

やがて世の政事をしたまふべきなれど、「さやうの事しげき職には堪へずなむ」とて、致仕の大臣、摂政したまふべきよし、譲りきこえたまふ。

「病によりて、位を返したてまつりてしを、いよいよ老のつもり添ひて、さ

さやかに見えたまひし夢の後は、院の帝の御ことを心にかけてきこえたまひて、「いかで、かの沈みたまふらむ罪、救ひたてまつることをせむ」と、思し嘆きけるを、かく帰りたまひては、その御急ぎしたまふ。神無月に御八講したまふ。世の人なびき仕うまつること、昔のやうなり。

大后、御悩み重くおはしますうちにも、「つひにこの人をえ消たずなりなむ」とと、心病み思しけれど、帝は院の御遺言を思ひきこえたまふ。ものの報いありぬべく思しけるを、直し立てたまひて、御心地涼しくなむ思しける。時々おこり悩ませたまひし御目も、さはやぎたまひぬれど、「おほかた世にえ長くあるまじう、心細きこと」とのみ、久しからぬことを思しつつ、常に召しありて、源氏の君は参りたまふ。世の中のことなども、隔てなくのたまはせつつ、御本意のやうなれば、おほかたの世の人も、あいなく、うれしきことに喜びきこえける。

下りみなむの御心づかひ近くなりぬるにも、尚侍、心細げに世を思ひ嘆きたまひつる、いとあはれに思されけり。

「大臣亡せたまひ、大宮も頼もしげなくのみ篤いたまへるに、我が世残り少なき心地するになむ、いといとほしう、名残なきさまにてとまりたまはむとすらむ。昔より、人には思ひ落としたまへれど、みづからの心ざしのまたなきならひに、ただ御ことのみなむ、あはれにおぼえける。立ちまさる人、また御本意ありて見たまふとも、おろかならぬ心ざしはしも、なずらはざらむと思ふさへこそ、心苦しけれ」

とて、うち泣きたまふ。

女君、顔はいと赤く匂ひて、こぼるばかりの御愛敬にて、涙もこぼれぬるを、よろづの罪忘れて、あはれにらうたしと御覽ぜらる。

「などか、御子をだに持たまへるまじき。口惜しうもあるかな。契り深き人

滯 標

滯

標

かの帥の娘五節、あいなく、人知れぬもの思ひさめぬる心地して、まくなぎ  
つくらせてさし置かせけり。

「須磨の浦に心を寄せし舟人の

やがて朽たせる袖を見せばや」

「手などこよなくまさりにけり」と、見おほせたまひて、遣はず。

「帰りてはかことやせまし寄せたりし

名残に袖の干がたかりしを」

「飽かずをかし」と思しし名残なれば、おどろかされたまひて、いどと思し  
出づれど、このごろは、さやうの御振る舞ひ、さらにつつみたまふめり。

花散里などにも、ただ御消息などばかりにて、おぼつかなく、なかなか恨め  
しげなり。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

出でおはします。御心地、例ならで、日ごろ経させたまひければ、いたう衰へさせたまへるを、昨日今日ぞ、すこしよろしう思されける。御物語しめやかにありて、夜に入りぬ。

十五夜の月おもしろう静かなるに、昔のこと、かき尽くし思し出でられて、しほたれさせたまふ。もの心細く思さるるなるべし。

「遊びなどもせず、昔聞きし物の音なども聞かで、久しうなりにけるかな」とのたまはするに、

「わたつ海にしなえうらぶれ蛭の児の

脚立たざりし年は経にけり」

と聞こえたまへり。いとあはれに心恥づかしう思されて、

「宮柱めぐりあひける時しあれば

別れし春の恨み残すな」

いとなまめかしき御ありさまなり。

院の御ために、八講行はるべきこと、まづ急がせたまふ。春宮を見たてまつりたまふに、こよなくおよすげさせたまひて、めづらしう思しよろこびたるを、限りなくあはれと見たてまつりたまふ。御才もこよなくまさらせたまひて、世をたもたせたまはむに、憚りあるまじく、かしく見えさせたまふ。

入道の宮にも、御心すこし静めて、御対面のほどにも、あはれなることどもあらむかし。

まことや、かの明石には、返る波に御文遣はす。ひき隠してこまやかに書きたまふめり。

「波のよるよるいかに、

嘆きつつ明石の浦に朝霧の

立つやと人を思ひやるかな」

君は、難波の方に渡りて御被へしたまひて、住吉にも、平らかにて、いろいろの願果たし申すべきよし、御使して申させたまふ。にはかに所狭うて、みづからはこのたびえ詣でたまはず、ことなる御逍遥などなくて、急ぎ入りたまひぬ。

二条院におはしまし着きて、都の人も、御供の人も、夢の心地して行き合ひ、喜び泣きどもゆゆしきまで立ち騒ぎたり。

女君も、かひなきものに思し捨てつる命、うれしう思さるらむかし。いとうつくしげにねびととのほりて、御もの思ひのほどに、所狭かりし御髪のすこしへがれたるしも、いみじうめでたきを、「今はかくて見るべきぞかし」と、御心落ちるるにつけては、また、かの飽かず別れし人の思へりしさま、心苦しう思しやらる。なほ世とともに、かかる方にて御心の暇ぞなきや。

その人のことどもなど聞こえ出でたまへり。思し出でたる御けしき浅からず見ゆるを、ただならずや見たてまつりたまふらむ、わざとならず、「身をば思はず」など、ほのめかしたまふぞ、をかしうらく思ひきこえたまふ。かつ、「見るにだに飽かぬ御さまを、いかで隔てつる年月ぞ」と、あさましきまで思ほすに、取り返し、世の中もいと恨めしうなむ。

ほどもなく、元の御位あらたまりて、員より外の権大納言になりたまふ。次々の人も、さるべき限りは元の官返し賜はり、世に許さるるほど、枯れたりし木の春にあへる心地して、いとめでたげなり。

召しありて、内に参りたまふ。御前にさぶらひたまふに、ねびまさりて、「いかで、さるものむつかしき住まひに年経たまひつらむ」と見たてまつる。女房などの、院の御時さぶらひて、老いしらへるどもは、悲しくて、今さらに泣き騒ぎめできこゆ。

主上も、恥づかしうさへ思し召されて、御よそひなどことに引きつくろひて

みかこそ見捨てがたけれ。いかがすべき」とて、

「都出でし春の嘆きに劣らめや

年経る浦を別れぬる秋」

とて、おし拭ひたまへるに、いとどものおぼえず、しほたれまさる。立ちるもあさましうよろぼふ。

正身の心地、たとふべき方なくて、かうしも人に見えじと思ひ沈むれど、身の憂きをもとにて、わりなきことなれど、うち捨てたまへる恨みのやる方なきに、たけきこととは、ただ涙に沈めり。母君も慰めわびては、

「何に、かく心尽くしなることを思ひそめけむ。すべて、ひがひがしき人に従ひける心のおこたりぞ」

と言ふ。

「あなかまや。思し捨つまじきこともものしたまふめれば、さりとも、思すところあらむ。思ひ慰めて、御湯などをだに参れ。あな、ゆゆしや」

とて、片隅に寄りゐたり。乳母、母君など、ひがめる心を言ひ合はせつつ、「いつしか、いかで思ふさまにて見たてまつらむと、年月を頼み過ぐし、今や、思ひ叶ふところ頼みきこえつれ、心苦しきことをも、もののはじめに見るかな」

と嘆くを見るにも、いとほしければ、いとどほけられて、昼は日一日、寝のみ寝暮らし、夜はすくよかに起きゐて、「数珠の行方も知らずなりにけり」とて、手をおしすりて仰ぎゐたり。

弟子どもにあはめられて、月夜に出でて行道するものは、遣水に倒れ入りにけり。よしある岩の片側に腰もつきそこなひて、病み臥したるほどになむ、すこしもの紛れける。

うれしきにも、「げに、今日を限りに、この渚を別るること」などあはれがりて、口々しほたれ言ひあへることどもあめり。されど、何かはとてなむ。

入道、今日の御まうけ、いといかめしう仕うまつれり。人びと、下の品まで、旅の装束めづらしきさまなり。いつの間にかしあへけむと見えたり。御よそひは言ふべくもあらず。御衣櫃あまたかけさぶらはす。まことの都の苞にしつべき御贈り物ども、ゆゑづきて、思ひ寄らぬ隈なし。今日たてまつるべき狩の御装束に、

「寄る波に立ちかさねたる旅衣

しほどけしとや人の厭はむ」

とあるを御覧じつけて、騒がしけれど、

「かたみにぞ換ふべかりける逢ふことの

日数隔てむ中の衣を」

とて、「心ざしあるを」とて、たてまつり替ふ。御身になれたるどもを遣はす。げに、今一重偲ばれたまふべきことを添ふる形見なめり。えならぬ御衣に匂ひの移りたるを、いかが人の心にも染めざらむ。

入道、

「今はと世を離ればべりにし身なれども、今日の御送りに仕うまつらぬこと」など申して、かひをつくるもいとほしながら、若き人は笑ひぬべし。

「世をうみにここらしほじむ身となりて

なほこの岸をえこそ離れね

心の闇は、いとど惑ひぬべくはべれば、境までだに」と聞こえて、

「好き好きしきさまなれど、思し出でさせたまふ折はべらば」

など、御けしき賜はる。いみじうものをあはれと思して、所々うち赤みたまへる御まみのわたりなど、言はむかたなく見えたまふ。

「思ひ捨てがたき筋もあめれば、今いととく見直したまひてむ。ただこの住

らむ」と、悔しう思さる。心の限り行く先の契りをのみしたまふ。

「琴は、また掻き合はするまでの形見に」

とのたまふ。女、

「なほざりに頼め置くめる一ことを

尽きせぬ音にやかけて偲ばむ」

言ふともなき口すさびを、恨みたまひて、

「逢ふまでのかたみに契る中の緒の

調べはことに変はらざらなむ

この音違はぬさきにかならずあひ見む」

と頼めたまふめり。されど、ただ別れむほどのわりなさを思ひ咽せたるも、

いとことわりなり。

立ちたまふ暁は、夜深く出でたまひて、御迎への人びとも騒がしければ、心も空なれど、人まをはからひて、

「うち捨てて立つも悲しき浦波の

名残いかにと思ひやるかな」

御返り、

「年経つる苦屋も荒れて憂き波の

返る方にや身をたぐへまし」

と、うち思ひけるままなるを見たまふに、忍びたまへど、ほろほろとこぼれぬ。心知らぬ人びとは、

「なほかかる御住まひなれど、年ごろといふばかり馴れたまへるを、今はと思すは、さもあることぞかし」

など見たてまつる。

良清などは、「おろかならず思すなめりかし」と、憎くぞ思ふ。

男の御容貌、ありさまはた、さらにも言はず。年ごろの御行なひにいたく面瘦せたまへるしも、言ふ方なくめでたき御ありさまにて、心苦しげなるけしきにうち涙ぐみつつ、あはれ深く契りたまへるは、「ただかばかりを、幸ひにても、などか止まざらむ」とまでぞ見ゆめれど、めでたきにしも、我が身のほどを思ふも、尽きせず。波の声、秋の風には、なほ響きことなり。塩焼く煙かすかにたなびきて、とりあつめたる所のさまなり。

「このたびは立ち別るとも藻塩焼く

煙は同じ方になびかむ」

とのたまへば、

「かきつめて海人のたく藻の思ひにも

今はかひなき恨みだにせじ」

あはれにうち泣きて、言少ななるものから、さるべき節の御応へなど浅からず聞こゆ。この、常にゆかしがりたまふ物の音など、さらに聞かせたてまつらざりつるを、いみじう恨みたまふ。

「さらば、形見にも偲ぶばかりの一琴をだに」

とのたまひて、京より持ておはしたりし琴の御琴取りに遣はして、心ことなる調べをほのかにかき鳴らしたまへる、深き夜の澄めるは、たとへむ方なし。

入道、え堪へで箏の琴取りてさし入れたり。みづからも、いとど涙さへそそのかされて、とどむべき方なきに、誘はるるなるべし、忍びやかに調べたるほど、いと上衆めきたり。入道の宮の御琴の音を、ただ今のまたなきものに思ひきこえたるは、「今めかしう、あなめでた」と、聞く人の心ゆきて、容貌さへ思ひやらるることは、げに、いと限りなき御琴の音なり。

これはあくまで弾き澄まし、心にくくねたき音ぞまされる。この御心にだに、初めてあはれになつかしう、まだ耳なれたまはぬ手など、心やましきほどに弾きさしつつ、飽かず思さるるにも、「月ごろ、など強ひても、聞きならざざりつ

て悩みけり。かく別れたまふべきほどなれば、あやにくなるにやありけむ、ありしよりもあはれに思して、「あやしうもの思ふべき身にもありけるかな」と思し乱る。

女は、さらにも言はず思ひ沈みたり。いとことわりなりや。思ひの外に悲しき道に出で立ちたまひしかど、「つひには行きめぐり来なむ」と、かつは思し慰めき。

このたびはうれしき方の御出で立ちの、「またやは帰り見るべき」と思すに、あはれなり。

さぶらふ人びと、ほどほどにつけてはよろこび思ふ。京よりも御迎へに人びと参り、心地よげなるを、主人の入道、涙にくれて、月も立ちぬ。

ほどさへあはれなる空のけしきに、「なぞや、心づから今も昔も、すずろなることにて身をはふらかすらむ」と、さまざまに思し乱れたるを、心知れる人びとは、

「あな憎、例の御癖ぞ」

と、見たてまつりむつかるめり。

「月ごろは、つゆ人にけしき見せず、時々はひ紛れなどしたまへるつれなきを」

「このころ、あやにくに、なかなかの、人の心づくしにか」

と、つきしろふ。少納言、しるべして聞こえ出でし初めのことなど、ささめきあへるを、ただならず思へり。

明後日ばかりになりて、例のやうにいたくも更かさで渡りたまへり。さやかにもまだ見たまはぬ容貌など、「いとよしよしう、気高きさまして、めざましうもありけるかな」と、見捨てがたく口惜しう思さる。「さるべきさまにして迎へむ」と思しなりぬ。さやうにぞ語らひ慰めたまふ。

月を過ぐしたまひ、ただならずうち思ひおこせたまふらむが、いと心苦しければ、独り臥しがちにて過ぐしたまふ。

絵をさまざま描き集めて、思ふことどもを書きつけ、返りこと聞くべきさまにしなしたまへり。見む人の心に染みぬべきものさまなり。いかでか、空に通ふ御心ならむ、二条の君も、ものあはれに慰む方なくおぼえたまふ折々、同じやうに絵を描き集めたまひつつ、やがて我が御ありさま、日記のやうに書きたまへり。いかなるべき御さまどもにかあらむ。

年変はりぬ。内に御葉のことありて、世の中さまざまにのしる。当代の御子は、右大臣の女、承香殿の女御の御腹に男御子生まれたまへる、二つになりたまへば、いといはけなし。春宮にこそは譲りきこえたまはめ。朝廷の御後見をし、世をまつりごつべき人を思しめぐらすに、この源氏のかく沈みたまふこと、いとあたらしうあるまじきことなれば、つひに後の御諫めを背きて、赦されたまふべき定め出で来ぬ。

去年より、後も御もののけ悩みたまひ、さまざまのものとししきり、騒がしきを、いみじき御つつしみどもをしたまふしるしにや、よろしうおはしましける御目の悩みさへ、このころ重くならせたまひて、もの心細く思されければ、七月二十余日のほどに、また重ねて、京へ帰りたまふべき宣旨下る。

つひのことと思ひしかど、世の常なきにつけても、「いかになり果つべきにか」と嘆きたまふを、かうにはかなれば、うれしきに添へても、また、この浦を今とは思ひ離れむことを思し嘆くに、入道、さるべきことと思ひながら、うち聞くより胸ふたがりておぼゆれど、「思ひのごと栄えたまはばこそは、我が思ひの叶ふにはあらめ」など、思ひ直す。

そのころは、夜離れなく語らひたまふ。六月ばかりより心苦しきけしきあり

あながちなる御心ざしのほどなりかし。「かかる方のことをば、さすがに、心とどめて怨みたまへりし折々、などで、あやなきすさびごとにつけても、さ思はれたてまつりけむ」など、取り返さまほしう、人のありさまを見たまふにつけても、恋しさの慰む方なければ、例よりも御文こまやかに書きたまひて、

「まことや、我ながら心より外なるなほざりごとにて、疎まれたてまつりし節々を、思ひ出づるさへ胸いたきに、また、あやしうものはかなき夢をこそ見はべりしか。かう聞こゆる問はず語りに、隔てなき心のほどは思し合はせよ。『誓ひしことも』」など書きて、

「何事につけても、

しほしほとまづぞ泣かるるかりそめの

みるめは海人のすさびなれども」

とある御返り、何心なくらうたげに書きて、

「忍びかねたる御夢語りにつけても、思ひ合はせらるること多かるを、うらなくも思ひけるかな契りしを

松より波は越えじものぞと」

おいらかなるものから、ただならずかすめたまへるを、いとあはれに、うち置きがたく見たまひて、名残久しう、忍びの旅寝もしたまはず。

女、思ひしもしるきに、今ぞまことに身も投げつべき心地する。

「行く末短げなる親ばかりを頼もしきものにて、いつの世に人並々になるべき身と思はざりしかど、ただそこはかたなくて過ぐしつる年月は、何ごとをか心をも悩ましけむ、かういみじうもの思はしき世にこそありけれ」

と、かねて推し量り思ひしよりも、よろづに悲しけれど、なだらかにもてなして、憎からぬさまに見えたてまつる。

あはれとは月日に添へて思しませど、やむごとなき方の、おぼつかなくて年

けながら掻きまきぐりけるほど見えてをかしければ、

「この、聞きならしたる琴をさへや」  
など、よろづにのたまふ。

「むつごとを語りあはせむ人もがな  
憂き世の夢もなかば覚むやと」

「明けぬ夜にやがて惑へる心には  
いづれを夢とわきて語らむ」

ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとようおぼえたり。何心もなくうちとけてゐたりけるを、かうものおぼえぬに、いとわりなくて、近かりける曹司の内に入りて、いかで固めけるにか、いと強きを、しひてもおし立ちたまはぬさまなり。されど、さのみもいかでかあらむ。

人ざま、いとあてに、そびえて、心恥づかしきはひぞしたる。かうあながちなりける契りを思すにも、浅からずあはれなり。御心ぎしの、近まさりするなるべし、常は厭はしき夜の長さも、とく明けぬる心地すれば、「人に知られじ」と思すも、心あわたたしうて、こまかに語らひ置きて、出でたまひぬ。

御文、いと忍びてぞ今日はある。あいなき御心の鬼なりや。ここにも、かかることいかで漏らさじとつつみて、御使ことことうももてなさぬを、胸いたく思へり。

かくて後は、忍びつつ時々おはす。「ほどもすこし離れたるに、おのづからもの言ひさがなき海人の子もや立ちまじらむ」と思し憚るほどを、「さればよ」と思ひ嘆きたるを、「げに、いかならむ」と、入道も極楽の願ひをば忘れて、ただこの御けしきを待つことにはす。今さらに心を乱るも、いといとほしげなり。

二条の君の、風のつてにも漏り聞きたまはむことは、「たはぶれにても、心の隔てありけると、思ひ疎まれたてまつらむ、心苦しう恥づかしう」思さるるも、

のはなやかにさし出でたるに、ただ「あたら夜の」と聞こえたり。

君は、「好きのさまや」と思せど、御直衣たてまつりひきつくろひて、夜更かして出でたまふ。御車は二なく作りたれど、所狭しとて、御馬にて出でたまふ。惟光などばかりをさぶらはせたまふ。やや遠く入る所なりけり。道のほども、四方の浦々見わたしたまひて、思ふどち見まほしき入江の月影にも、まづ恋しき人の御ことを思ひ出できこえたまふに、やがて馬引き過ぎて、赴きぬべく思す。

「秋の夜の月毛の駒よ我が恋ふる

雲居を翔れ時の間も見む」

と、うちひとりごたれたまふ。

造れるさま、木深く、いたき所まさりて、見どころある住まひなり。海のつらはいかめしうおもしろく、これは心細く住みたるさま、「ここにゐて、思ひ残すことはあらじ」と、思しやらるるに、ものあはれなり。三昧堂近くて、鐘の聲、松風に響きあひて、もの悲しう、岩に生ひたる松の根ざしも、心ばへあるさまなり。前裁どもに虫の声を尽くしたり。ここかしこのありさまなど御覽ず。娘住ませたる方は、心ことに磨きて、月入れたる真木の戸口、けしきばかり押し開けたり。

うちやすらひ、何かとのたまふにも、「かうまでは見えたてまつらじ」と深く思ふに、もの嘆かしうて、うちとけぬ心さまを、「こよなうも人めきたるかな。さしもあるまじき際の人だに、かばかり言ひ寄りぬれば、心強うしもあらずならひたりしを、いとかくやつれたるに、あなづらはしきにや」とねたう、さまさまに思し悩み。「情けなうおし立たむも、ことのさまに違へり。心比べに負けむこそ、人悪ろけれ」など、乱れ怨みたまふさま、げにももの思ひ知らむ人こそ見せまほしけれ。

近き几帳の紐に、箏の琴の弾き鳴らされたるも、けはひしどけなく、うちと

とのたまひて、渡りたまはむことをばあるまじう思したるを、正身はた、さらに思ひ立つべくもあらず。

「いと口惜しき際の田舎人こそ、仮に下りたる人のうちとけ言につきて、さやうに軽らかに語らふわざをもすなれ、人数にも思されざらむものゆゑ、我はいみじきもの思ひをや添へむ。かく及びなき心を思へる親たちも、世籠もりて過ぐす年月こそ、あいな頼みに、行く末心にくく思ふらめ、なかなかなる心をや尽くさむ」と思ひて、「ただこの浦におはせむほど、かかる御文ばかりを聞こえかはさむこそ、おろかならね。年ごろ音にのみ聞きて、いつかはさる人の御ありさまをほのかにも見たてまつらむなど、思ひかけざりし御住まひにて、まほならねどほのかにも見たてまつり、世になきものと聞き伝へし御琴の音をも風につけて聞き、明け暮れの御ありさまおぼつかなからで、かくまで世にあるものと思し尋ぬるなどこそ、かかる海人のなかに朽ちぬる身にあまることなれ」など思ふに、いよいよ恥づかしくて、つゆも気近きことは思ひ寄らず。

親たちは、ここの年のごろの祈りの叶ふべきを思ひながら、

「ゆくりかに見せたてまつりて、思し数まへざらむ時、いかなる嘆きをかせむ」

と思ひやるに、ゆゆしくて、

「めでたき人と聞こゆとも、つらういみじうもあるべきかな。目にも見えぬ仏、神を頼みたてまつりて、人の御心をも、宿世をも知らで」

など、うち返し思ひ乱れたり。君は、

「このころの波の音に、かの物の音を聞かばや。さらずは、かひなくこそ」  
など、常はのたまふ。

忍びて吉しき日見て、母君のとかく思ひわづらふを聞き入れず、弟子どもなどにだに知らせず、心一つに立ちゐ、かかやくばかりしつらひて、十三日の月

その年、朝廷に、もののさとしきりて、もの騒がしきこと多かり。三月十三日、雷鳴りひらめき、雨風騒がしき夜、帝の御夢に、院の帝、御前の御階のもとに立たせたまひて、御けしきいと悪しうて、にらみきこえさせたまふを、かしこまりておはします。聞こえさせたまふことも多かり。源氏の御事なりけむかし。

いと恐ろしう、いとほしと思して、后に聞こえさせたまひければ、

「雨など降り、空乱れたる夜は、思ひなしなることはさぞはべる。軽々しきやうに、思し驚くまじきこと」

と聞こえたまふ。

にらみたまひしに、目見合はせたまふと見しけにや、御目患ひたまひて、堪へがたう悩みたまふ。御つつしみ、内にも宮にも限りなくせさせたまふ。

太政大臣亡せたまひぬ。ことわりの御齡なれど、次々におのづから騒がしきことあるに、大宮もそこはかとなう患ひたまひて、ほど経れば弱りたまふやうなる、内に思し嘆くこと、さまざまなり。

「なほ、この源氏の君、まことに犯しなきにてかく沈むならば、かならずこの報いありなむとなむおぼえはべる。今は、なほもとの位をも賜ひてむ」とたびたび思しのたまふを、

「世のもどき、軽々しきやうなるべし。罪に懼ぢて都を去りし人を、三年をだに過ぐさず許されむことは、世の人もいかが言ひ伝へはべらむ」

など、后かたく諫めたまふに、思し憚るほどに月日かさなりて、御悩みども、さまざまに重りまさらせたまふ。

明石には、例の、秋、浜風のことなるに、一人寝もまめやかにものわびしうて、入道にも折々語らはせたまふ。

「とかく紛らはして、こち参らせよ」

やよやいかにと問ふ人もなみ

『言ひがたみ』

と、このたびは、いといたうなよびたる薄様に、いとうつくしげに書きたまへり。若き人のめでざらむも、いとあまり埋れいたからむ。めでたしとは見れど、なずらひならぬ身のほどの、いみじうかひなければ、なかなか、世にあるものと、尋ね知りたまふにつけて、涙ぐまれて、さらに例の動なきを、せめて言はれて、浅からず染めたる紫の紙に、墨つき濃く薄く紛らはして、

「思ふらむ心のほどややよいかに

まだ見ぬ人の聞きか悩まむ」

手のさま、書きたるさまなど、やむごとなき人にいたう劣るまじう、上衆めきたり。

京のことおぼえて、をかしと見たまへど、うちしきりて遣はさむも、人目つつましければ、二、三日隔てつつ、つれづれなる夕暮れ、もしは、ものあはれる曙などやうに紛らはして、折々、同じ心に見知りぬべきほど推し量りて、書き交はしたまふに、似げなからず。

心深う思ひ上がりたるけしきも、見ではやまじと思すものから、良清が領じて言ひしけしきもめざましう、年ごろ心つけてあらむを、目の前に思ひ違へむもいとほしう思しめぐらされて、「人進み参らば、さる方にも、紛らはしてむ」と思せど、女はた、なかなかやむごとなき際の人よりも、いたう思ひ上がりて、ねたげにもてなしきこえたれば、心比べにてぞ過ぎける。

京のことを、かく関隔たりては、いよいよおぼつかなく思ひきこえたまひて、「いかにせまし。たはぶれにくくもあるかな。忍びてや、迎へたてまつりてまし」と、思し弱る折々あれど、「さりとも、かくてやは、年を重ねむと、今さらに人悪ろきことをば」と、思し静めたり。

思ふこと、かつがつ叶ひぬる心地して、涼しう思ひるたるに、またの日の昼つ方、岡辺に御文つかはす。心恥づかしきさまなめるも、なかなか、かかるものの隈にぞ、思ひの外なることも籠もるべかめると、心づかひしたまひて、高麗の胡桃色の紙に、えならずひきつくろひて、

「をちこちも知らぬ雲居に眺めわび

かすめし宿の梢をぞ訪ふ

『思ふには』

とばかりやありけむ。

入道も、人知れず待ちきこゆとて、かの家に来りたりけるもしるければ、御使いとまばゆきまで酔はず。

御返り、いと久し。内に入りてそそのかせど、娘はさらに聞かず。恥づかしげなる御文のさまに、さし出でむ手つきも、恥づかしうつつまし。人の御ほど、わが身のほど思ふに、こよなくて、心地悪しとて寄り臥しぬ。

言ひわびて、入道ぞ書く。

「いとかしこきは、田舎びてはべる袂に、つつみあまりぬるにや。さらに見たまへも、及びはべらぬかしこさになむ。さるは、

眺むらむ同じ雲居を眺むるは

思ひも同じ思ひなるらむ

となむ見たまふる。いと好き好きしや」

と聞こえたり。陸奥紙に、いたう古めきたれど、書きざまよしばみたり。「げにも、好きたるかな」と、めざましう見たまふ。御使に、なべてならぬ玉裳などかづけたり。

またの日、

「宣旨書きは、見知らずなむ」とて、

「いぶせくも心にものを悩むかな

は狭き衣にもはぐくみはべりなむ。かくながら見捨てはべりなば、波のなかにも交り失せね、となむ掟てはべる」

など、すべてまねぶべくもあらぬことどもを、うち泣きうち泣き聞こゆ。君も、ものをさまさま思し続ける折からは、うち涙ぐみつつ聞こしめす。

「横さまの罪に当たりて、思ひかけぬ世界にただよふも、何の罪にかとおぼつかなく思ひつる、今宵の御物語に聞き合はすれば、げに浅からぬ前の世の契りにこそはと、あはれになむ。などかは、かくさだかに思ひ知りたまひけることを、今までは告げたまはざりつらむ。都離れし時より、世の常なきもあぢきなう、行なひより他のことなくて月日を経るに、心も皆くづほれにけり。かかる人ものしたまふとは、ほの聞きながら、いたづら人をばゆゆしきものにこそ思ひ捨てたまふらめと、思ひ屈しつるを、さらば導きたまふべきにこそあなれ。心細き一人寝の慰めにも」

などのたまふを、限りなくうれしと思へり。

「一人寝は君も知りぬやつれづれと

思ひ明かしの浦さびしさを

まして年月思ひたまへわたるいぶせさを、推し量らせたまへ」

と聞こゆるけはひ、うちわななきたれど、さすがにゆゑなからず。

「されど、浦なれたまへらむ人は」とて、

「旅衣うら悲しさに明かしかね

草の枕は夢も結ばず」

と、うち乱れたまへる御さまは、いとぞ愛敬づき、言ふよしなき御けはひなる。数知らぬことども聞こえ尽くしたれど、うるさしや。ひがことどもに書きなしたれば、いとど、をこにかたくなしき入道の心ばへも、あらはれぬべかめり。

ひいといたう唐めき、ゆの音深う澄ましたり。「伊勢の海」ならねど、「清き渚に貝や拾はむ」など、声よき人に歌はせて、我も時々拍子とりて、声うち添へたまふを、琴弾きさしつつ、めできこゆ。御くだものなど、めづらしきさまにて参らせ、人びとに酒強ひそしなどして、おのづからもの忘れしぬべき夜のさまなり。

いたく更けゆくままに、浜風涼しうて、月も入り方になるままに、澄みまさり、静かなるほどに、御物語残りなく聞こえて、この浦に住みはじめしほどの心づかひ、後の世を勤むるさま、かきくづし聞こえて、この娘のありさま、問はず語りに聞こゆ。をかしきものの、さすがにあはれと聞きたまふ節もあり。

「いと取り申しがたきことなれど、わが君、かうおぼえなき世界に、仮にても、移ろひおはしましたるは、もし、年ごろ老法師の祈り申しはべる神仏のあはれびおはしまして、しばしのほど、御心をも悩ましたてまつるにやとなむ思うたまふる。

その故は、住吉の神を頼みはじめたてまつりて、この十八年になりはべりぬ。女の童いときなうはべりしより、思ふ心はべりて、年ごとの春秋ごとに、かならずかの御社に参ることなむはべる。昼夜の六時の勤めに、みづからの蓮の上の願ひをば、さるものにて、ただこの人を高き本意叶へたまへと、なむ念じはべる。

前の世の契りつたなくてこそ、かく口惜しき山賤となりはべりけめ、親、大臣の位を保ちたまへりき。みづからかく田舎の民となりてはべり。次々、さのみ劣りまからば、何の身にかなりはべらむと、悲しく思ひはべるを、これは、生れし時より頼むところなむはべる。いかにして都の貴き人にたてまつらむと思ふ心、深きにより、ほどほどにつけて、あまたの人の嫉みを負ひ、身のためからき目を見る折々も多くはべれど、さらに苦しみと思ひはべらず。命の限り

と、おほかたにのたまふを、入道はあいなくうち笑みて、

「あそばすよりなつかしきさまなるは、いづこのかはべらむ。なにがし、延喜の御手より弾き伝へたること、四代になむなりはべりぬるを、かうつたなき身にて、この世のことは捨て忘れはべりぬるを、もののせちにいぶせき折々は、かき鳴らしはべりしを、あやしう、まねぶ者のはべるこそ、自然にかの先大王の御手に通ひてはべれ。山伏のひが耳に、松風を聞きわたしはべるにやあらむ。いかで、これも忍びて聞こしめさせてしかな」

と聞こゆるままに、うちわななきて、涙落とすべかめり。

君、

「琴を琴とも聞きたまふまじかりけるあたりに、ねたきわざかな」

とて、押しやりたまふに、

「あやしう、昔より箏は、女なむ弾き取るものなりける。嵯峨の御伝へにて、女五の宮、さる世の中の上手にもしたまひけるを、その御筋にて、取り立てて伝ふる人なし。すべて、ただ今世に名を取れる人びと、搔き撫での心やりばかりにのみあるを、ここにかう弾きこめたまへりける、いと興ありけることかな。いかでかは、聞くべき」

とのたまふ。

「聞こしめさむには、何の憚りかはべらむ。御前に召しても。商人の中にてだにこそ、古琴聞きはやす人は、はべりけれ。琵琶なむ、まことの音を弾きしづむる人、いにしへも難うはべりしを、をさをさとどこほることなうなつかしき手など、筋ことになむ。いかでたどるにかはべらむ。荒き波の声に交るは、悲しくも思うたまへられながら、かき積むるもの嘆かしき、紛るる折々もはべり」

など好きむたれば、をかしと思して、箏の琴取り替へて賜はせたり。

げに、いとすぐしてかい弾きたり。今の世に聞こえぬ筋弾きつけて、手づか

久しう手触れたまはぬ琴を、袋より取り出でたまひて、はかなくかき鳴らしたまへる御さまを、見たてまつる人もやすからず、あはれに悲しう思ひあへり。

「広陵」といふ手を、ある限り弾きすましたまへるに、かの岡辺の家も、松の響き波の音に合ひて、心ばせある若人は身にしみて思ふべかめり。何とも聞きわくまじきこのもかのものはふる人どもも、すずろはしくて、浜風をひきありく。

入道もえ堪へで、供養法たゆみて、急ぎ参れり。

「さらに、背きにし世の中も取り返し思ひ出でぬべくはべり。後の世に願ひはべる所のありさまも、思うたまへやらるる夜の、さまかな」と泣く泣く、めできこゆ。

わが御心にも、折々の御遊び、その人かの人の子笛、もしは声の出でしさまに、時々につけて、世にめでられたまひしありさま、帝よりはじめたてまつりて、もてかしづきあがめたてまつりたまひしを、人の上もわが御身のありさまも、思し出でられて、夢の心地したまふままに、かき鳴らしたまへる声も、心すぐく聞こゆ。

古人は涙もとどめあへず、岡辺に、琵琶、箏の琴取りにやりて、入道、琵琶の法師になりて、いとをかしう珍しき手一つ二つ弾きたり。

箏の御琴参りたれば、少し弾きたまふも、さまざまいみじうのみ思ひきこえたり。いと、さしも聞こえぬ物の音だに、折からこそはまさるものなるを、はるばると物のとどこほりなき海づらなるに、なかなか、春秋の花紅葉の盛りなるよりは、ただそこはかとなう茂れる蔭ども、なまめかしきに、水鶏のうちたたきたるは、「誰が門さして」と、あはれにおぼゆ。

音もいと二なう出づる琴どもを、いとなつかしう弾き鳴らしたるも、御心とまりて、

「これは、女のなつかしきさまにてしどけなう弾きたるこそ、をかしけれ」

年は六十ばかりになりたれど、いとときよげにあらまほしう、行なひさらばひて、人のほどのあてはかなればにやあらむ、うちひがみほればれしきことはあれど、いにしへのことをも知りて、ものきたなからず、よしづきたることも交れば、昔物語などせさせて聞きたまふに、すこしつれづれの紛れなり。年ごろ、公私御暇なくて、さしも聞き置きたまはぬ世の古事どもくづし出でて、「かかる所をも人をも、見ざらましかば、さうざうしくや」とまで、興ありと思すことも交る。

かうは馴れきこゆれど、いと気高う心恥づかしき御ありさまに、さこそ言ひしか、つつましうなりて、わが思ふことは心のままにもえうち出できこえぬを、「心もとなう、口惜し」と、母君と言ひ合はせて嘆く。

正身は、「おしなべての人だに、めやすきは見えぬ世界に、世にはかかる人もおはしけり」と見たてまつりしにつけて、身のほど知られて、いと遙かにぞ思ひきこえける。親たちのかく思ひあつかふを聞くにも、「似げなきことかな」と思ふに、ただなるよりはものあはれなり。

四月になりぬ。更衣の御装束、御帳の帷子など、よしあるさまにし出でつつ、よろづに仕うまつりいとなむを、「いとほしう、すずろなり」と思せど、人さまのあくまで思ひ上がりたるさまのあてなるに、思しゆるして見たまふ。

京よりも、うちしきりたる御とぶらひども、たゆみなく多かり。のどやかなる夕月夜に、海の上曇りなく見えわたれるも、住み馴れたまひし故郷の池水、思ひまがへられたまふに、言はむかたなく恋しきこと、何方となく行方なき心地したまひて、ただ目の前に見やらるるは、淡路島なりけり。

「あはと、遙かに」などのたまひて、

「あはと見る淡路の島のあはれきへ

残るくまなく澄める夜の月」

思ひ離るる心のみまさりはべれど、『鏡を見ても』とのたまひし面影の離るる世なきを、かくおぼつかかなながらやと、ここら悲しきさまぎまのうれはしきは、さしおかれて、

遙かにも思ひやるかな知らざりし

浦よりをちに浦伝ひして

夢のうちなる心地のみして、覚め果てぬほど、いかにひがこと多からむ」

と、げに、そこはかたなく書き乱りたまへるしもぞ、いと見まほしき側目なるを、「いとこよなき御心ざしのほど」と、人びと見たてまつる。

おのおの、故郷に心細げなる言伝てすべかめり。

を止みなかりし空のけしき、名残なく澄みわたりて、漁する海人ども誇らしげなり。須磨はいと心細く、海人の岩屋もまれなりしを、人しげき厭ひはしたまひしかど、ここはまた、さまことにあはれなること多くて、よろづに思し慰まる。

明石の入道、行なひ勤めたるさま、いみじう思ひ澄ましたるを、ただこの娘一人をもてわづらひたるけしき、いとかたはらいたきまで、時々漏らし愁へきこゆ。御心地にも、をかしと聞きおきたまひし人なれば、「かくおぼえなくてめぐりおはしたるも、さるべき契りあるにや」と思しながら、「なほ、かう身を沈めたるほどは、行なひより他のことは思はじ。都の人も、ただなるよりは、言ひしに違ふと思さむも、心恥づかしう」思さるれば、けしきだちたまふことなし。ことに触れて、「心ばせ、ありさま、なべてならずもありけるかな」と、ゆかしう思されぬにしもあらず。

ここにはかしこまりて、みづからもをさをさ参らず、もの隔たりたる下の屋にさぶらふ。さるは、明け暮れ見たてまつらまほしう、飽かず思ひきこえて、「思ふ心を叶へむ」と、仏、神をいよいよ念じたてまつる。

かすべき渚の苦屋、行なひをして後の世のことを思ひ澄ましつべき山水のつらに、いかめしき堂を建てて三昧を行なひ、この世のまうけに、秋の田の実を刈り収め、残りの齡積むべき稲の倉町どもなど、折々、所につけたる見どころありてし集めたり。

高潮に怖ぢて、このころ、娘などは岡辺の宿に移して住ませければ、この浜の館に心やすくおはします。

舟より御車にたてまつり移るほど、日やうやうさし上がりて、ほのかに見たてまつるより、老忘れ、齡延ぶる心地して、笑みさかえて、まづ住吉の神を、かつがつ拝みたてまつる。月日の光を手を得たてまつりたる心地して、いとなみ仕うまつること、ことわりなり。

所のさまをばさらにも言はず、作りなしたる心ばへ、木立、立石、前栽などありさま、えも言はぬ入江の水など、絵に描かば、心のいたり少なからむ絵師は描き及ぶまじと見ゆ。月ごろの御住まひよりは、こよなくあきらかに、なつかしき。御しつらひなど、えならずして、住まひけるさまなど、げに都のやむごとなき所々に異ならず、艶にまばゆきさまは、まさりざまにぞ見ゆる。

すこし御心静まりては、京の御文ども聞こえたまふ。参れりし使は、今は、「いみじき道に出で立ちて悲しき目を見る」

と泣き沈みて、あの須磨に留まりたるを召して、身にあまれる物ども多くたまひて遣はす。むつましき御祈りの師ども、さるべき所々には、このほどの御ありさま、詳しく言ひ遣はすべし。

入道の宮ばかりには、めづらかにてよみがへるさまなど聞こえたまふ。二条院のあはれなりしほどの御返りは、書きもやりたまはず、うち置きうち置き、おしのごひつつ聞こえたまふ御けしき、なほことなり。

「返す返すいみじき目の限りを尽くし果てつるありさまなれば、今はと世を

もししろしめすことやばりつらむ、とてなむ。いと憚り多くはべれど、このよし、申したまへ」

と言ふ。良清、忍びやかに伝へ申す。

君、思しまはすに、夢うつつさまさま静かならず、さとしのやうなることどもを、来し方行く末思し合はせて、

「世の人の聞き伝へむ後のそしりもやすからざるべきを憚りて、まことの神の助けにもあらむを、背くものならば、またこれよりまさりて、人笑はれなる目をや見む。うつつさまの人の心だになほ苦し。はかなきことをもつつみて、我より齡まさり、もしは位高く、時世の寄せ今一際まさる人には、なびき従ひて、その心むけをたどるべきものなりけり。退きて咎なしとこそ、昔、さかしき人も言ひ置きけれ。げに、かく命を極め、世にまたなき目の限りを見尽くしつ。さらに後のあとの名をはぶくとても、たけきこともあらじ。夢の中にも父帝の御教へありつれば、また何ごとか疑はむ」

と思して、御返りのたまふ。

「知らぬ世界に、めづらしき愁への限り見つれど、都の方よりとて、言問ひおこする人もなし。ただ行方なき空の月日の光ばかりを、故郷の友と眺めはべるに、うれしき釣舟をなむ。かの浦に、静やかに隠ろふべき隈はべりなむや」

とのたまふ。限りなくよろこび、かしこまり申す。

「ともあれ、かくもあれ、夜の明け果てぬ先に御舟にたてまつれ」

とて、例の親しき限り、四、五人ばかりして、たてまつりぬ。

例の風出で来て、飛ぶやうに明石に着きたまひぬ。ただはひ渡るほどに片時の間といへど、なほあやしきまで見ゆる風の心なり。

浜のさま、げにいと心ことなり。人しげう見ゆるのみなむ、御願ひに背きける。入道の領占めたる所々、海のつらにも山隠れにも、時々につけて、興をさ

こと、限りなし。

胸つとふたがりて、なかなかなる御心惑ひに、うつつの悲しきこともうち忘れ、「夢にも御応へを今すこし聞こえずなりぬること」といふせきに、「またや見えたまふ」と、ことさらに寝入りたまへど、さらに御目も合はで、暁方になりにけり。

渚に小さやかなる舟寄せて、人二、三人ばかり、この旅の御宿りをさして参る。何人ならむと問へば、

「明石の浦より、前の守新発意の、御舟装ひて参れるなり。源少納言、さぶらひたまはば、対面してことの心とり申さむ」

と言ふ。良清、おどろきて、

「入道は、かの国の得意にて、年ごろあひ語らひはべりつれど、私に、いささかあひ恨むることはべりて、ことなる消息をだに通はさで、久しうなりはべりぬるを、波の紛れに、いかなることかあらむ」

と、おぼめく。君の、御夢なども思し合はすることもありて、「はや会へ」とのたまへば、舟に行きて会ひたり。「さばかり激しかりつる波風に、いつの間にか舟出しつらむ」と、心得がたく思へり。

「去ぬる朔日の日、夢にさま異なるものの告げ知らすることはべりしかば、信じがたきことと思うたまへしかど、『十三日にあらたなるしるし見せむ。舟装ひまうけて、かならず、雨風止まば、この浦にを寄せよ』と、かねて示すことのはべりしかば、試みに舟の装ひをまうけて待ちはべりしに、いかめしき雨、風、雷のおどろかしはべりつれば、人の朝廷にも、夢を信じて国を助くるたぐひ多うはべりけるを、用るさせたまはぬまでも、このいましめの日を過ぐさず、このよしを告げ申しはべらむとて、舟出だしはべりつるに、あやしき風細う吹きて、この浦に着きはべること、まことに神のしるべ違はずなむ。ここにも、

「海にます神の助けにかからずは

潮の八百会にさすらへなまし」

ひねもすにいりもみつる雷の騒ぎに、さこそいへ、いたう困じたまひにければ、心にもあらずうちまどろみたまふ。かたじけなき御座所なれば、ただ寄りゐたまへるに、故院、ただおはしまししさまながら立ちたまひて、

「など、かくあやしき所にもものするぞ」

とて、御手を取りて引き立てたまふ。

「住吉の神の導きたまふままには、はや舟出して、この浦を去りね」

とのたまはず。いとうれしくて、

「かしこき御影に別れたてまつりにしこなた、さまざま悲しきことのみ多くはべれば、今はこの渚に身をや捨てはべりなまし」

と聞こえたまへば、

「いとあるまじきこと。これは、ただいささかなる物の報いなり。我は、位に在りし時、あやまつことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふるほど暇なくて、この世を顧みざりつれど、いみじき愁へに沈むを見るに、堪へがたくて、海に入り、渚に上り、いたく困じにたれど、かかるついでに内に奏すべきことのあるによりなむ、急ぎ上りぬる」

とて、立ち去りたまひぬ。

飽かず悲しくて、「御供に参りなむ」と泣き入りたまひて、見上げたまへれば、人もなく、月の顔のみきらきらとして、夢の心地もせず、御けはひ止まれる心地して、空の雲あはれにたなびけり。

年ごろ、夢のうちにも見たてまつらで、恋しうおぼつかなき御さまを、ほのかなれど、さだかに見たてまつりつるのみ、面影におぼえたまひて、「我かく悲しびを極め、命尽きなむとしつるを、助けに翔りたまへる」と、あはれに思すに、「よくぞかかる騒ぎもありける」と、名残頼もしう、うれしうおぼえたまふ

安き空なく、嘆きたまふに、かく悲しき目をさへ見、命尽きなむとするは、前の世の報いか、この世の犯しか、神、仏、明らかにましまさば、この愁へやすめたまへ」

と、御社の方に向きて、さまざまの願を立てたまふ。

また、海の中の龍王、よろづの神たちに願を立てさせたまふに、いよいよ鳴りとどろきて、おはしますに続きたる廊に落ちかかりぬ。炎燃え上がりて、廊は焼けぬ。心魂なくて、ある限り惑ふ。後の方なる大炊殿とおぼしき屋に移したてまつりて、上下となく立ち込みて、いとらうがはしく泣きとよむ声、雷にも劣らず。空は墨をすりたるやうにて、日も暮れにけり。

やうやう風なほり、雨の脚しめり、星の光も見ゆるに、この御座所のいとめづらかなるも、いとかたじけなくて、寢殿に返し移したてまつらむとするに、

「焼け残りたる方も疎ましげに、そこらの人の踏みとどろかし惑へるに、御簾などもみな吹き散らしてけり」

「夜を明してこそは」

とたどりあへるに、君は御念誦したまひて、思しめぐらすに、いと心あわたし。

月さし出でて、潮の近く満ち来ける跡もあらはに、名残なほ寄せ返る波荒きを、柴の戸押し開けて、眺めおはします。近き世界に、ものの心を知り、来し方行く先のことうちおぼえ、とやかくやとはかばかしう悟る人もなし。あやしき海人どもなどの、貴き人おはする所とて、集り参りて、聞きも知りたまはぬことどもをさへづりあへるも、いとめづらかなれど、え追ひも払はず。

「この風、今しばし止まざらましかば、潮上りて残る所なからまし。神の助けおろかならざりけり」

と言ふを聞きたまふも、いと心細しといへばおろかなり。

「ただ、例の雨のを止みなく降りて、風は時々吹き出でて、日ごろになりはべるを、例ならぬことに驚きはべるなり。いとかく、地の底徹るばかりの氷降り、雷の静まらぬことははべらざりき」

など、いみじきさまに驚き懼ぢてをる顔のいとからきにも、心細さまさりける。

「かくしつ世は尽きぬべきにや」と思さるるに、そのまたの日の暁より、風いみじう吹き、潮高う満ちて、波の音荒きこと、巖も山も残るまじきけしきなり。雷の鳴りひらめくさま、さらに言はむ方なくて、「落ちかかりぬ」とおぼゆるに、ある限りさかしき人なし。

「我はいかなる罪を犯して、かく悲しき目を見るらむ。父母にもあひ見ず、かなしき妻子の顔をも見で、死ぬべきこと」

と嘆く。君は御心を静めて、「何ばかりのあやまちにてか、この渚に命をば極めむ」と、強う思しなせど、いともの騒がしければ、色々の幣帛ささげさせたまひて、

「住吉の神、近き境を鎮め守りたまふ。まことに迹を垂れたまふ神ならば、助けたまへ」

と、多くの大願を立てたまふ。おのおのみづからの命をば、さるものにて、かかる御身のまたなき例に沈みたまひぬべきことはいみじう悲しき、心を起こして、すこしものおぼゆる限りは、「身に代へてこの御身一つを救ひたてまつらむ」と、とよみて、諸声に仏、神を念じたてまつる。

「帝王の深き宮に養はれたまひて、いろいろの楽しみにおごりたまひしかど、深き御慈しみ、大八洲にあまねく、沈める輩をこそ多く浮かべたまひしか。今、何の報いにか、ここら横様なる波風には溺ほれたまはむ。天地、ことわりたまへ。罪なくて罪に当たり、官、位を取られ、家を離れ、境を去りて、明け暮れ

なほ雨風やまず、雷鳴り静まらず、日ごろになりぬ。いとどものわびしきこと、数知らず、来し方行く先、悲しき御ありさまに、心強うしもえ思しなさず、「いかにせまし。かかりとて、都に帰らむことも、まだ世に許されもなくては、人笑はれなることこそまさらめ。なほ、これより深き山を求めてや、あと絶えなまし」と思すにも、「波風に騒がれてなど、人の言ひ伝へむこと、後の世まで、いと軽々しき名や流し果てむ」と思し乱る。

夢にも、ただ同じさまなる物のみ来つつ、まつはしきこゆと見たまふ。雲間なくて、明け暮るる日数に添へて、京の方もいとおぼつかなく、「かくながら身をはふらかしつるにや」と、心細う思せど、頭さし出づべくもあらぬ空の乱れに、出で立ち参る人もなし。

二条院よりぞ、あながちにあやしき姿にて、そほち参れる。道かひにてだに、人か何ぞとだに御覧じわくべくもあらず、まづ追ひ払ひつべき賤の男の、むつまじうあはれに思さるるも、我ながらかたじけなく、屈しにける心のほど思ひ知らる。御文に、

「あさましくを止みなきころのけしきに、いとど空さへ閉づる心地して、眺めやる方なくなむ。

浦風やいかに吹くらむ思ひやる

袖うち濡らし波間なきころ」

あはれに悲しきことども書き集めたまへり。いとど汀まさりぬべく、かきくらす心地したまふ。

「京にも、この雨風、あやしき物のさとしなりとて、仁王会など行はるべしとなむ聞こえはべりし。内に参りたまふ上達部なども、すべて道閉ぢて、政事も絶えてなむはべる」

など、はかばかしうもあらず、かたくなしう語りなせど、京の方のことと思せばいぶかしうて、御前に召し出でて、問はせたまふ。

明 石

明

石

「多く立てつる願の力なるべし」

「今しばし、かくあらば、波に引かれて入りぬべかりけり」

「高潮といふものになむ、とりあへず人そこなはるとは聞けど、いと、かかることは、まだ知らず」

と言ひあへり。

暁方、みなうち休みたり。君もいささか寝入りたまへれば、そのさまとも見えぬ人来て、

「など、宮より召しあるには参りたまはぬ」

とて、たどりありくと見るに、おどろきて、「きは、海の中の龍王の、いといたうものめでするものにて、見入れたるなりけり」と思すに、いともものむつかしう、この住まひ堪へがたく思しなりぬ。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

弥生の朔日に出で来たる巳の日、

「今日なむ、かく思ふことある人は、御禊したまふべき」

と、なまさかしき人の聞こゆれば、海づらもゆかしうて出でたまふ。いとおろそかに、軟障ばかりを引きめぐらして、この国に通ひける陰陽師召して、祓へせさせたまふ。舟にこととしき人形乗せて流すを見たまふに、よそへられて、

「知らざりし大海の原に流れ来て

ひとかたにやはものは悲しき」

とて、ゐたまへる御さま、さる晴れに出でて、言ふよしなく見えたまふ。

海の面うらうらと凧ぎわたりて、行方も知らぬに、来し方行く先思し続けられて、

「八百よろづ神もあはれと思ふらむ

犯せる罪のそれとなければ」

とのたまふに、にはかに風吹き出でて、空もかき暮れぬ。御祓へもし果てず、立ち騒ぎたり。肱笠雨とか降りきて、いとあわたたしければ、みな帰りたまはむとするに、笠も取りあへず。さる心もなきに、よろづ吹き散らし、またなき風なり。波いといかめしう立ちて、人びとの足をそらなり。海の面は、袞を張りたらむやうに光り満ちて、雷鳴りひらめく。落ちかかる心地して、からうしてたどり来て、

「かかる目は見ずもあるかな」

「風などは吹くも、けしきづきてこそあれ。あさましうめづらかなり」

と惑ふに、なほ止まず鳴りみちて、雨の脚当たる所、徹りぬべく、はらめき落つ。「かくて世は尽きぬるにや」と、心細く思ひ惑ふに、君は、のどやかに経うち誦じておはす。

暮れぬれば、雷すこし鳴り止みて、風ぞ、夜も吹く。

「あかなくに雁の常世を立ち別れ

花の都に道や惑はむ」

さるべき都の苞など、由あるさまにてあり。主人の君、かくかたじけなき御送りにとて、黒駒たてまつりたまふ。

「ゆゆしう思されぬべけれど、風に当たりては、嘶えぬべければなむ」

と申したまふ。世にありがたげなる御馬のさまなり。

「形見に偲びたまへ」

とて、いみじき笛の名ありけるなどばかり、人咎めつべきことは、かたみにえしたまはず。

日やうやうさし上がりて、心あわたたしければ、顧みのみしつつ出でたまふを、見送りましたまふけしき、いとなかなかなり。

「いつまた対面は」

と申したまふに、主人、

「雲近く飛び交ふ鶴も空に見よ

我は春日の曇りなき身ぞ

かつは頼まれながら、かくなりぬる人、昔のかしこき人だに、はかばかしう世にまたまじらふこと難くはべりければ、何か、都のさかひをまた見むとなむ思ひはべらぬ」

などのたまふ。宰相、

「たづかなき雲居にひとり音をぞ鳴く

翼並べし友を恋ひつつ

かたじけなく馴れきこえはべりて、いとしもと悔しう思ひたまへらるる折多く」

など、しめやかにあらで帰りましたまひぬる名残、いとど悲しう眺め暮らしたまふ。

ことさらに田舎びもてなしたまへるしも、いみじう、見るに笑まれてきよらなり。

取り使ひたまへる調度も、かりそめにしなして、御座所もあらは見入れらる。碁、双六盤、調度、弾棊の具など、田舎わざにしなして、念誦の具、行なひ勤めたまひけりと見えたり。もの参れるなど、ことさら所につけ、興ありてしなしたり。

海人ども漁りして、貝つ物持て参れるを、召し出でて御覧ず。浦に年経るさまなど問はせたまふに、さまざま安げなき身の愁へを申す。そこはかとなくさへづるも、「心の行方は同じこと。何か異なる」と、あはれに見たまふ。御衣どもなどかづけさせたまふを、生けるかひありと思へり。御馬ども近う立てて、見やりなる倉か何ぞなる稲取り出でて飼ふなど、めづらしう見たまふ。

「飛鳥井」すこし歌ひて、月ごろの御物語、泣きみ笑ひみ、

「若君の何とも世を思きでものしたまふ悲しきを、大臣の明け暮れにつけて思し嘆く」

など語りたまふに、堪へがたく思したり。尽きすべくもあらねば、なかなか片端もえまねばず。

夜もすがらまどろまず、文作り明かしたまふ。さ言ひながらも、ものの聞こえをつつみて、急ぎ帰りたまふ。いとなかなかなり。御土器参りて、

「酔ひの悲しび涙そそく春の盃の裏」

と、諸声に誦じたまふ。御供の人も涙を流す。おのがじし、はつかなる別れ惜しむべかめり。

朝ぼらけの空に雁連れて渡る。主人の君、

「故郷をいづれの春か行きて見む

うらやましきは帰る雁がね」

宰相、さらに立ち出でむ心地せで、

きものに思ひ知りて、

「高き人は、我を何の数にも思さじ。ほどにつけたる世をばさらに見じ。命長くて、思ふ人びとに後れなば、尼にもなりなむ、海の底にも入りなむ」

などぞ思ひける。

父君、所狭く思ひかしづきて、年に二たび、住吉に詣でさせけり。神の御しるしをぞ、人知れず頼み思ひける。

須磨には、年返りて、日長くつれづれなるに、植ゑし若木の桜ほのかに咲き初めて、空のけしきうらかなるに、よろづのこと思し出でられて、うち泣きたまふ折多かり。

二月二十日あまり、去にし年、京を別れし時、心苦しかりし人びとの御ありさまなど、いと恋しく、「南殿の桜、盛りになりぬらむ。一年の花の宴に、院の御けしき、内の主上のいときよらになまめいて、わが作れる句を誦じたまひし」も、思ひ出できこえたまふ。

「いつとなく大宮人の恋しきに

桜かざしし今日も来にけり」

いとつれづれなるに、大殿の三位中将は、今は宰相になりて、人柄のいとよければ、時世のおぼえ重くてもおぼえたまへど、世の中あはれにあぢきなく、もの折ごとに恋しくおぼえたまへば、「この聞こえありて罪に当たるともいかがはせむ」と思しなして、にはかに参うでたまふ。

うち見るより、めづらしううれしきにも、ひとつ涙ぞこぼれける。

住まひたまへるさま、言はむかたなく唐めいたり。所のさま、絵に描きたらむやうなるに、竹編める垣しわたして、石の階、松の柱、おろそかなるものから、めづらかにをかす。

山賤めきて、ゆるし色の黄がちなるに、青鈍の狩衣、指貫、うちやつれて、

の浦にもものしたまふなれ。吾子の御宿世にて、おぼえぬことのあるなり。いかでかかるついでに、この君にをたてまつらむ」

と言ふ。母、

「あな、かたはや。京の人の語るを聞けば、やむごとなき御妻ども、いと多く持ちたまひて、そのあまり、忍び忍び帝の御妻さへあやまちたまひて、かくも騒がれたまふなる人は、まさにかくあやしき山賤を、心とどめたまひてむや」と言ふ。腹立ちて、

「え知りたまはじ。思ふ心ことなり。さる心をしたまへ。ついでして、ここにもおはしませむ」

と、心をやりて言ふもかたくなしく見ゆ。まばゆきまでしつらひかしづきけり。母君、

「などか、めでたくとも、ものの初めに、罪に当たりて流されておはしたらむ人をしも思ひかけむ。さても心をとどめたまふべくはこそあらめ、たはぶれにてもあるまじきことなり」

と言ふを、いといたくつぶやく。

「罪に当たるとは、唐土にも我が朝廷にも、かく世にすぐれ、何ごとも人にことになりぬる人の、かならずあることなり。いかにものしたまふ君ぞ。故母御息所は、おのが叔父にもものしたまひし按察使大納言の娘なり。いとかうぎくなる名をとりて、宮仕へに出だしたまへりしに、国王すぐれて時めかしたまふこと、並びなかりけるほどに、人の嫉み重くて亡せたまひにしかど、この君のとまりたまへる、いとめでたしかし。女は心高くつかふべきものなり。おのれ、かかる田舎人なりとて、思し捨てじ」

など言ひるたり。

この娘、すぐれたる容貌ならねど、なつかしうあてはかに、心ばせあるさまなどぞ、げに、やむごとなき人に劣るまじかりける。身のありさまを、口惜し

「霜の後の夢」

と誦じたまふ。

月いと明うさし入りて、はかなき旅の御座所、奥まで隈なし。床の上に夜深き空も見ゆ。入り方の月影、すぐく見ゆるに、

「ただ是れ西に行くなり」

と、ひとりごちたまで、

「いづ方の雲路に我も迷ひなむ

月の見るらむことも恥づかし」

とひとりごちたまひて、例のまどろまれぬ暁の空に、千鳥いとあはれに鳴く。

「友千鳥諸声に鳴く暁は

ひとり寝覚の床も頼もし」

また起きたる人もなければ、返す返すひとりごちて臥したまへり。

夜深く御手水参り、御念誦などしたまふも、めづらしきことのやうに、めでたうのみおぼえたまへば、え見たてまつり捨てず、家にあからさまにもえ出でざりけり。

明石の浦は、ただはひ渡るほどなれば、良清の朝臣、かの入道の娘を思ひ出でて、文など遣りけれど、返り事もせず、父入道ぞ、

「聞こゆべきことなむ。あからさまに对面もがな」

と言ひけれど、「うけひかざらむものゆゑ、行きかかりて、むなしく帰らむ後手もをこなるべし」と、屈指いたうて行かず。

世に知らず心高く思へるに、国の内は守のゆかりのみこそはかしこきことにすめれど、ひがめる心はさらにさも思はで年月を経けるに、この君かくておはすと聞きて、母君に語らふやう、

「桐壺の更衣の御腹の、源氏の光る君こそ、朝廷の御かしこまりにて、須磨

など、悪しきことども聞こえければ、わづらはしとて、消息聞こえたまふ人なし。

二条院の姫君は、ほど経るままに、思し慰む折なし。東の対にさぶらひし人びとも、みな渡り参りし初めは、「などかさしもあらむ」と思ひしかど、見たてまつり馴るるままに、なつかしうをかしき御ありさま、まめやかなる御心ばへも、思ひやり深うあはれなれば、まかで散るもなし。なべてならぬ際の人びとには、ほの見えなどしたまふ。「そこのなかにすぐれたる御心ざしもことわりなりけり」と見たてまつる。

かの御住まひには、久しくなるままに、え念じ過ぐすまじうおぼえたまへど、「我が身だにあさましき宿世とおぼゆる住まひに、いかでかは、うち具しては、つきなからむ」さまを思ひ返したまふ。所につけて、よろづのことさま変はり、見たまへ知らぬ下人のうへをも、見たまひ慣らはぬ御心地に、めざましうかたじけなう、みづから思さる。煙のいと近く時々立ち来るを、「これや海人の塩焼くならむ」と思しわたるは、おはします後の山に、柴といふものふすぶるなりけり。めづらかにて、

「山賤の庵に焚けるしばしばも

言問ひ来なむ恋ふる里人」

冬になりて雪降り荒れたるころ、空のけしきもことにすぐく眺めたまひて、琴を弾きすさびたまひて、良清に歌うたはせ、大輔、横笛吹きて、遊びたまふ。心とどめてあはれなる手など弾きたまへるに、他物の声どもはやめて、涙のごひあへり。

昔、胡の国に遣しけむ女を思しやりて、「ましていかなりけむ。この世に我が思ひきこゆる人などをさやうに放ちやりたらむこと」など思ふも、あらむことのやうにゆゆしうて、

かくわざと立ち寄りものしたること」

とのたまふ。御返りもさやうになむ。

守、泣く泣く帰りて、おはする御ありさま語る。帥よりはじめ、迎への人びと、まがまがしう泣き満ちたり。五節は、とかくして聞こえたり。

「琴の音に弾きとめらるる綱手縄

たゆたふ心君知るらめや

好き好きしさも、人な咎めそ」

と聞こえたり。ほほ笑みて見たまふ、いと恥づかしげなり。

「心ありて引き手の綱のたゆたはば

うち過ぎましや須磨の浦波

いさりせむとは思はざりしはや」

とあり。駅の長に句詩取らする人もありけるを、まして、落ちとまりぬべくなむおぼえける。

都には、月日過ぐるままに、帝を初めたてまつりて、恋ひきこゆる折ふし多かり。春宮は、まして、常に思し出でつつ忍びて泣きたまふ。見たてまつる御乳母、まして命婦の君は、いみじうあはれに見たてまつる。

入道の宮は、春宮の御ことをゆゆしうのみ思ししに、大将もかくさすらへたまひぬるを、いみじう思し嘆かる。

御兄弟の親王たち、むつまじう聞こえたまひし上達部など、初めつ方はとぶらひきこえたまふなどありき。あはれなる文を作り交はし、それにつけても、世の中へのみめでられたまへば、後の宮聞こしめして、いみじうのたまひけり。

「朝廷の勤事なる人は、心に任せてこの世のあぢはひをだに知ること難うこそあなれ。おもしろき家居して、世の中を誹りもどきて、かの鹿を馬と言ひけむ人のひがめるやうに追従する」

月の都は遙かなれども」

その夜、主上のいとなつかしう昔物語などしたまひし御さまの、院に似たてまつりたまへりしも、恋しく思ひ出できこえたまひて、

「恩賜の御衣は今此に在り」

と誦じつつ入りたまひぬ。御衣はまことに身を放たず、かたはらに置きたまへり。

「憂しとのみひとへにものは思ほえで

左右にも濡るる袖かな」

そのころ、大式は上りける。いかめしく類広く、娘がちにて所狭かりければ、北の方は舟にて上る。浦づたひに逍遙しつつ来るに、他よりもおもしろきわたりなれば、心とまるに、「大将かくておはす」と聞けば、あいなう、好いたる若き娘たちは、舟の内さへ恥づかしく、心懸想せらる。まして、五節の君は、綱手引き過ぐるも口惜しきに、琴の声、風につきて遙かに聞こゆるに、所のさま、人の御ほど、物の音の心細さ、取り集め、心ある限りみな泣きにけり。

帥、御消息聞こえたり。

「いと遙かなるほどよりまかり上りては、まづいつしかさぶらひて、都の御物語もところそ、思ひたまへはべりつれ、思ひの外に、かくておはしましたける御宿をまかり過ぎはべる、かたじけなう悲しうもはべるかな。あひ知りてはべる人びと、さるべきこれかれ、参で来向ひてあまたはべれば、所狭さを思ひたまへ憚りはべることもはべりて、えさぶらはぬこと。ことさらに参りはべらむ」

など聞こえたり。子の筑前守ぞ参れる。この殿の、蔵人になし顧みたまひし人なれば、いとも悲し、いみじと思へども、また見る人びとのあれば、聞こえを思ひて、しばしもえ立ち止まらず。

「都離れて後、昔親しかりし人びと、あひ見ること難うのみなりにたるに、

「初雁は恋しき人の列なれや  
旅の空飛ぶ声の悲しき」

とのたまへば、良清、

「かきつらね昔のことぞ思ほゆる  
雁はその世の友ならねども」

民部大輔、

「心から常世を捨てて鳴く雁を  
雲のよそにも思ひけるかな」

前右近将督、

「常世出でて旅の空なる雁がねも

列に遅れぬほどぞ慰む

友まどはしては、いかにはべらまし」

と言ふ。親の常陸になりて、下りしにも誘はれで、参れるなりけり。下には  
思ひくたくべかめれど、ほこりかにもてなして、つれなきさまにしありく。

月のいとほなやかにさし出でたるに、「今宵は十五夜なりけり」と思し出でて、  
殿上の御遊び恋しく、「所々眺めたまふらむかし」と思ひやりたまふにつけても、  
月の顔のみまもられたまふ。

「二千里外故人心」

と誦じたまへる、例の涙もとどめられず。入道の宮の、「霧や隔つる」とのた  
まはせしほど、言はむ方なく恋しく、折々のこと思ひ出でたまふに、よよと、  
泣かれたまふ。

「夜更けはべりぬ」

と聞こゆれど、なほ入りたまはず。

「見るほどぞしばし慰むめぐりあはむ

と歌ひたまへるに、人びとおどろきて、めでたうおぼゆるに、忍ばれで、あいなう起きゐつつ、鼻を忍びやかにかみわたす。

「げに、いかに思ふらむ。我が身ひとつにより、親、兄弟、片時立ち離れがたく、ほどにつけつつ思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへる」と思すに、いみじくて、「いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむ」と思せば、昼は何くれとうちのたまひ紛らはし、つれづれなるままに、色々の紙を継ぎつつ、手習ひをしたまひ、めづらしきさまなる唐の綾などに、さまさまの絵どもを描きすさびたまへる屏風の面どもなど、いとめでたく見所あり。

人びとの語り聞こえし海山のありさまを、遙かに思しやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたたずまひ、二なく描き集めたまへり。

「このころの上手にすめる千枝、常則などを召して、作り絵仕うまつらせばや」

と、心もとながりあへり。なつかしうめでたき御さまに、世のもの思ひ忘れて、近う馴れ仕うまつるをうれしきことにて、四、五人ばかりぞ、つとさぶらひける。

前裁の花、色々咲き乱れ、おもしろき夕暮れに、海見やらるる廊に出でたまひて、たたずみたまふさまの、ゆゆしうきよらなること、所からは、ましてこの世のものと見えたまはず。白き綾のなよやかなる、紫苑色などたてまつりて、こまやかなる御直衣、帯しどけなくうち乱れたまへる御さまにて、

「釈迦牟尼仏の弟子」

と名のりて、ゆるるかに読みたまへる、また世に知らず聞こゆ。

沖より舟どもの歌ひののしりて漕ぎ行くなども聞こゆ。ほのかに、ただ小さき鳥の浮かべると見やらるるも、心細げなるに、雁の連ねて鳴く声、楫の音にまがへるを、うち眺めたまひて、涙こぼるるをかき払ひたまへる御手つき、黒き御数珠に映えたまへる、故郷の女恋しき人びと、心みな慰みにけり。

何ごとも光なき心地するかな」とのたまはせて、「院の思しのたまはせし御心を違へつるかな。罪得らむかし」

とて、涙ぐませたまふに、え念じたまはず。

「世の中こそ、あるにつけてもあぢきなきものなりけれ、と思ひ知るままに、久しく世にあらむものとなむ、さらに思はぬ。さもなりなむに、いかが思さるべき。近きほどの別れに思ひ落とされむこそ、ねたけれ。生ける世には、げに、よからぬ人の言ひ置きけむ」

と、いとなつかしき御さまにて、ものをまことにあはれと思し入りてのたまはするにつけて、ほろほろとこぼれ出づれば、

「さりや。いづれに落つるにか」

とのたまはず。

「今まで御子たちのなきこそ、さうぎうしけれ。春宮を院ののたまはせしさまに思へど、よからぬことども出で来れば、心苦しう」

など、世を御心のほかにまつりごちなしたまふ人びとのあるに、若き御心の、強きところなきほどにて、いとほしと思したることも多かり。

須磨には、いとど心尽くしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平中納言の、「関吹き越ゆる」と言ひけむ浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれるものは、かかる所の秋なりけり。

御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、一人目を覚まして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただここもとに立ちくる心地して、涙落つともおぼえぬに、枕浮くばかりになりけり。琴をすこしかき鳴らしたまへるが、我ながらいとすごう聞こゆれば、弾きさしたまひて、

「恋ひわびて泣く音にまがふ浦波は

思ふ方より風や吹くらむ」

海人がつむなげきのなかに塩垂れて

いつまで須磨の浦に眺めむ

聞こえさせむことの、いつともはべらぬこそ、尽きせぬ心地しはべれ」  
などぞありける。かやうに、いづこにもおぼつかかなからず聞こえかはしたまふ。

花散里も、悲しと思しけるままに書き集めたまへる御心々見たまふ、をかきも目なれぬ心地して、いづれもうち見つつ慰めたまへど、もの思ひのもよほしぐさなめり。

「荒れまさる軒のしのぶを眺めつつ

しげくも露のかかる袖かな」

とあるを、「げに、葎よりほかの後見もなきさまにておはすらむ」と思しやりて、「長雨に築地所々崩れてなむ」と聞きたまへば、京の家司のもとに仰せつかはして、近き国々の御荘の者などもよほさせて、仕うまつるべき由のたまはず。

尚侍の君は、人笑へにいみじう思しくづほるるを、大臣いとかなしうしたまふ君にて、せちに、宮にも内にも奏したまひければ、「限りある女御、御息所にもおはせず、公ぎまの宮仕へ」と思し直り、また、「かの憎かりしゆゑこそ、いかめしきことも出で来しか」。許されたまひて、参りたまふべきにつけても、なほ心に染みにし方ぞ、あはれにおぼえたまける。

七月になりて参りたまふ。いみじかりし御思ひの名残なれば、人のそしりもしろしめされず、例の、主上につとさぶらはせたまひて、よろづに怨み、かつはあはれに契らせたまふ。

御さま容貌もいとなまめかしうきよらなれど、思ひ出づることのみ多かる心のうちぞ、かたじけなき。御遊びのついでに、

「その人のなきこそ、いとさうぎうしけれ。いかにましてさ思ふ人多からむ。

ありけり。かれよりも、ふりはへ尋ね参れり。浅からぬことども書きたまへり。言の葉、筆づかひなどは、人よりことになまめかしく、いたり深う見えたり。

「なほうつつとは思ひたまへられぬ御住ひをうけたまはるも、明けぬ夜の心惑ひかとなむ。さりとも、年月隔てたまはじと、思ひやりきこえさするにも、罪深き身のみこそ、また聞こえさせむこともはるかなるべけれ。

うきめかる伊勢をの海人を思ひやれ

藻塩垂るてふ須磨の浦にて

よろづに思ひたまへ乱るる世のありさまも、なほいかになり果つべきにか」と多かり。

「伊勢島や潮干の潟に漁りても

いふかひなきは我が身なりけり」

ものをあはれと思しけるままに、うち置きうち置き書きたまへる、白き唐の紙、四、五枚ばかりを巻き続けて、墨つきなど見所あり。

「あはれに思ひきこえし人を、ひとふし憂しと思ひきこえし心あやまりに、かの御息所も思ひ倦じて別れたまひにし」と思せば、今にいとほしくかたじけなきものに思ひきこえたまふ。折からの御文、いとあはれなれば、御使さへむつまじうて、二、三日据ゑさせたまひて、かしこの物語などせさせて聞こしめす。

若やかにけしきある侍の人なりけり。かくあはれなる御住まひなれば、かやうの人もおのづからもの遠からで、ほの見たてまつる御さま、容貌を、いみじうめでたし、と涙落しをりけり。御返り書きたまふ、言の葉、思ひやるべし。

「かく世を離るべき身と、思ひたまへましかば、同じくは慕ひきこえましものを、などなむ。つれづれと、心細きままに、

伊勢人の波の上漕ぐ小舟にも

うきめは刈らで乗らましものを

も、いかが思し出でざらむ。御返りも、すこしこまやかにて、

「このころは、いとど、

塩垂るることをやくにて松島に

年ふる海人も嘆きをぞつむ」

尚侍君の御返りには、

「浦にたく海人だにつつむ恋なれば

くゆる煙よ行く方ぞなき

さらなることどもは、えなむ」

とばかり、いささか書きて、中納言の君の中にあり。思し嘆くさまなど、いみじう言ひたり。あはれと思ひきこえたまふ節々もあれば、うち泣かれたまひぬ。

姫君の御文は、心ことにこまかなりし御返りなれば、あはれなること多くて、

「浦人の潮くむ袖に比べ見よ

波路へだつる夜の衣を」

ものの色、したまへるさまなど、いときよらなり。何ごともらうらうじうものしたまふを、思ふさまにて、「今は他事に心あわたたしう、行きかかづらふ方もなく、しめやかにてあるべきものを」と思すに、いみじう口惜しう、夜昼面影におぼえて、堪へがたう思ひ出でられたまへば、「なほ忍びてや迎へまし」と思す。またうち返し、「なぞや、かく憂き世に、罪をだに失はむ」と思せば、やがて御精進にて、明け暮れ行なひておはす。

大殿の若君の御事などあるにも、いと悲しけれど、「おのづから逢ひ見てむ。頼もしき人びともしたまへば、うしろめたうはあらず」と、思しなざるは、なかなか、子の道の惑はれぬにやあらむ。

まことや、騒がしかりしほどの紛れに漏らしてけり。かの伊勢の宮へも御使

大殿にも、宰相の乳母にも、仕うまつるべきことなど書きつかはす。

京には、この御文、所々に見たまひつつ、御心乱れたまふ人びとのみ多かり。二条院の君は、そのままに起きも上がりたまはず、尽きせぬさまに思しこがれば、さぶらふ人びともこしらへわびつつ、心細う思ひあへり。

もてならしたまひし御調度ども、弾きならしたまひし御琴、脱ぎ捨てたまひつる御衣の匂ひなどにつけても、今はと世になからむ人のやうにのみ思したれば、かつはゆゆしうて、少納言は、僧都に御祈りのことなど聞こゆ。二方に御修法などせさせたまふ。かつは、「思し嘆く御心静めたまひて、思ひなき世にあらせたてまつりたまへ」と、心苦しきままに祈り申したまふ。

旅の御宿直物など、調べてたてまつりたまふ。かとの御直衣、指貫、さま変はりたる心地するもいみじきに、「去らぬ鏡」とのたまひし面影の、げに身に添ひたまへるもかひなし。

出で入りたまひし方、寄りゐたまひし真木柱などを見たまふにも、胸のみふたがりて、ものをとかう思ひめぐらし、世にしほじみぬる齢の人だにあり、まして、馴れむつびきこえ、父母にもなりて生ほし立てならはしたまへれば、恋しう思ひきこえたまへる、ことわりなり。ひたすら世になくなりなむは、言はむ方なくて、やうやう忘れ草も生ひやすらむ、聞くほどは近けれど、いつまでと限りある御別れにもあらで、思すに尽きせずなむ。

入道宮にも、春宮の御事により思し嘆くさま、いとさらなり。御宿世のほどを思すには、いかが浅く思されむ。年ごろはただものの聞こえなどのつつましさ、「すこし情けあるけしき見せば、それにつけて人のとがめ出づることこそそ」とのみ、ひとへに思し忍びつつ、あはれをも多う御覧じ過ぐし、すくすくしうもてなしたまひしを、「かばかり憂き世の人言なれど、かけてもこの方には言ひ出づることなくて止みぬるばかりの、人の御おもむけも、あながちなりし心の引く方にまかせず、かつはめやすくもて隠しつるぞかし」。あはれに恋しう

おはすべき所は、行平の中納言の、「藻塩垂れつつ」侘びける家居近きわたりなりけり。海づらはやや入りて、あはれにすぐげなる山中なり。

垣のさまよりはじめて、めづらかに見たまふ。茅屋ども、葦葺ける廊めく屋など、をかしうしつらひなしたり。所につけたる御住まひ、やう変はりて、「からぬ折ならば、をかしうもありなまし」と、昔の御心のすさび思し出づ。

近き所々の御荘の司召して、さるべきことどもなど、良清朝臣、親しき家司にて、仰せ行なふもあはれなり。時の間に、いと見所ありてしなさせたまふ。水深う遣りなし、植木どもなどして、今はと静まりたまふ心地、うつつならず。国の守も親しき殿人なれば、忍びて心寄せ仕うまつる。かかる旅所ともなう、人騒がしけれども、はかばかしう物をものたまひあはすべき人しなければ、知らぬ国の心地して、いと埋れいたく、「いかで年月を過ぐさまし」と思しやらる。

やうやう事静まりゆくに、長雨のころになりて、京のことも思しやらるるに、恋しき人多く、女君の思したりしさま、春宮の御事、若君の何心もなく紛れたまひしなどをはじめ、ここかしこ思ひやりきこえたまふ。

京へ人出だし立てたまふ。二条院へたてまつりたまふと、入道の宮のとは、書きもやりたまはず、昏されたまへり。宮には、

「松島の海人の苦屋もいかならむ

須磨の浦人しほたるるころ

いつとはべらぬなかにも、来し方行く先かきくらし、『汀まさりて』なむ

尚侍の御もとに、例の、中納言の君の私事のやうにて、中なるに、

「つれづれと過ぎにし方の思ひたまへ出でらるるにつけても、

こりずまの浦のみるめのゆかしきを

塩焼く海人やいかが思はむ」

さまざま書き尽くしたまふ言の葉、思ひやるべし。

たまへり。「わが身かくてはかなき世を別れなば、いかなるさまにさすらへたまはむ」と、うしろめたく悲しけれど、思し入りたるに、いとどしかるべければ、

「生ける世の別れを知らで契りつつ

命を人に限りけるかな

はかなし」

など、あきはかに聞こえなしたまへば、

「惜しからぬ命に代へて目の前の

別れをしぼしとどめてしがな」

「げに、さぞ思さるらむ」と、いと見捨てがたけれど、明け果てなば、はしたなかるべきにより、急ぎ出でたまひぬ。

道すがら、面影につと添ひて、胸もふたがりながら、御舟に乗りたまひぬ。

日長きころなれば、追風さへ添ひて、まだ申の時ばかりに、かの浦に着きたまひぬ。かりそめの道にても、かかる旅をならひたまはぬ心地に、心細さもをかしまもめづらかなり。大江殿と言ひける所は、いたう荒れて、松ばかりぞしるしなる。

「唐国に名を残しける人よりも

行方知られぬ家居をやせむ」

渚に寄る波のかつ返るを見たまひて、「うらやましくも」と、うち誦じたまへるさま、さる世の古言なれど、珍しう聞きなされ、悲しとのみ御供の人びと思へり。うち顧みたまへるに、来し方の山は霞はるかにて、まことに「三千里の外」の心地するに、權の雫も堪へがたし。

「故郷を峰の霞は隔つれど

眺むる空は同じ雲居か」

つらからぬものなくなむ。

花の都を立ち帰り見よ

時しあらば」

と聞こえて、名残もあはれなる物語をしつつ、一宮のうち、忍びて泣きあへり。

一目も見たてまつれる人は、かく思しくづほれぬる御ありさまを、嘆き惜しみきこえぬ人なし。まして、常に参り馴れたりしは、知り及びたまふまじき長女、御厠人まで、ありがたき御顧みの下なりつるを、「しばしにても、見たてまつらぬほどや経む」と、思ひ嘆きけり。

おほかたの世の人も、誰かはよろしく思ひきこえむ。七つになりたまひしこのかた、帝の御前に夜昼さぶらひたまひて、奏したまふことのならぬはなかりしかば、この御いたはりにかからぬ人なく、御徳をよろこばぬやありし。やむごとなき上達部、弁官などのなかにも多かり。それより下は数知らぬを、思ひ知らぬにはあらねど、さしあたりて、いちはやき世を思ひ憚りて、参り寄るもなし。世ゆすりて惜しみきこえ、下に朝廷をそしり、恨みたてまつれど、「身を捨ててとぶらひ参らむにも、何のかひかは」と思ふにや、かかる折は人悪ろく、恨めしき人多く、「世の中はあぢきなきものかな」とのみ、よろづにつけて思す。

その日は、女君に御物語のどかに聞こえ暮らしたまひて、例の、夜深く出でたまふ。狩の御衣など、旅の御よそひ、いたくやつしたまひて、

「月出でにけりな。なほすこし出でて、見だに送りたまへかし。いかに聞こゆべきこと多くつもりにけりとおぼえむとすらむ。一日、二日たまさかに隔たる折だに、あやしういぶせき心地するものを」

とて、御簾巻き上げて、端にいぎなひきこえたまへば、女君、泣き沈みたまへるを、ためらひて、ゐざり出でたまへる、月影に、いみじうをかしげにてゐ

御墓は、道の草茂くなりて、分け入りたまふほど、いとど露けきに、月も隠れて、森の木立、木深く心すごし。帰り出でむ方もなき心地して、拝みたまふに、ありし御面影、さやかに見えたまへる、そぞろ寒きほどなり。

「亡き影やいかが見るらむよそへつつ

眺むる月も雲隠れぬる」

明け果つるほどに帰りたまひて、春宮にも御消息聞こえたまふ。王命婦を御代はりにてさぶらはせたまへば、「その御局に」とて、

「今日なむ、都離れはべる。また参りはべらずなりぬるなむ、あまたの憂へにまさりて思うたまへられはべる。よろづ推し量りて啓したまへ。

いつかまた春の都の花を見む

時失へる山賤にして」

桜の散りすぎたる枝につけたまへり。「かくなむ」と御覽ぜさすれば、幼き御心地にもまめだちておはします。

「御返りいかがものしたまふらむ」

と啓すれば、

「しばし見ぬだに恋しきものを、遠くはましていかに、と言へかし」

とのたまはず。「ものはかなの御返りや」と、あはれに見たてまつる。あぢきなきことに御心をくだきたまひし昔のこと、折々の御ありさま、思ひ続けらるるにも、もの思ひなくて我も人も過ぐいたまひつべかりける世を、心と思し嘆きけるを悔しう、わが心ひとつにかからむことのやうにぞおぼゆる。御返りは、

「さらに聞こえさせやりはべらず。御前には啓しはべりぬ。心細げに思し召したる御けしきもいみじくなむ」

と、そこはかとなく、心の乱れけるなるべし。

「咲きてとく散るは憂けれどゆく春は

いみじき御心惑ひどもに、思し集むることどもも、えぞ続けさせたまはぬ。

「別れしに悲しきことは尽きにしを

またぞこの世の憂さはまされる」

月待ち出でて出でたまふ。御供にただ五、六人ばかり、下人もむつまじき限りして、御馬にてぞおはする。さらなることなれど、ありし世の御ありきに異なり、皆いと悲しう思ふなり。なかに、かの御禊の日、仮の御隨身にて仕うまつりし右近の将監の蔵人、得べきかうぶりもほど過ぎつるを、つひに御簡削られ、官も取られて、はしたなければ、御供に参るうちなり。

賀茂の下の御社を、かれと見渡すほど、ふと思ひ出でられて、下りて、御馬の口を取る。

「ひき連れて葵かざししそのかみを

思へばつらし賀茂の瑞垣」

と言ふを、「げに、いかに思ふらむ。人よりけにはなやかなりしものを」と思すも、心苦し。

君も、御馬より下りたまひて、御社のかた拝みたまふ。神にまかり申したまふ。

「憂き世をば今ぞ別るとどまらむ

名をば糺の神にまかせて」

とのたまふさま、ものめでする若き人にて、身にしみてあはれにめでたしと見たてまつる。

御山に詣うでたまひて、おはしましし御ありさま、ただ目の前のやうに思し出でらる。限りなきにても、世に亡くなりぬる人ぞ、言はむかたなく口惜しきわざなりける。よろづのことを泣く泣く申したまひても、そのことわりをあらはに承りたまはねば、「さばかり思しのたまはせしさまさまの御遺言は、いつちか消え失せにけむ」と、いふかひなし。

流れて後の瀬をも待たずて」

泣く泣く乱れ書きたまへる御手、いとをかしげなり。今ひとたび対面なくやと思すは、なほ口惜しけれど、思し返して、憂しと思しなすゆかり多うて、おぼろけならず忍びたまへば、いとあながちにも聞こえたまはずなりぬ。

明日とて、暮には、院の御墓拝みたてまつりたまふとて、北山へ詣でたまふ。暁かけて月出づるころなれば、まづ、入道の宮に参うでたまふ。近き御簾の前に御座参りて、御みづから聞こえさせたまふ。春宮の御事をいみじうしろめたきものに思ひきこえたまふ。

かたみに心深きどちの御物語は、よろづあはれまさりけむかし。なつかしうめでたき御けはひの昔に変はらぬに、つらかりし御心ばへも、かすめきこえさせまほしけれど、今さらにうたてと思さるべし、わが御心にも、なかなか今ひとときは乱れまさりぬべければ、念じ返して、ただ、

「かく思ひかけぬ罪に当たりはべるも、思うたまへあはすることの一節になむ、空も恐ろしうはべる。惜しげなき身はなきになしても、宮の御世にだに、ことなくおはしまさば」

とのみ聞こえたまふぞ、ことわりなるや。

宮も、みな思し知らるることにしあれば、御心のみ動きて、聞こえやりたまはず。大将、よろづのことかき集め思し続けて、泣きたまへるけしき、いと尽きせずなまめきたり。

「御山に参りはべるを、御ことつてや」

と聞こえたまふに、とみにものも聞こえたまはず、わりなくためらひたまふ御けしきなり。

「見しはなくあるは悲しき世の果てを

背きしかひもなくなくぞ経る」

琴一つぞ持たせたまふ。所狭き御調度、はなやかなる御よそひなど、さらに具したまはず、あやしの山賤めきてもてなしたまふ。

さぶらふ人びとよりはじめ、よろづのこと、みな西の対に聞こえわたしたまふ。領じたまふ御莊、御牧よりはじめて、さるべき所々、券など、みなたてまつり置きたまふ。それよりほかの御倉町、納殿などいふことまで、少納言をはかばかしきものに見置きたまへれば、親しき家司ども具して、しろしめすべきさまどものたまひ預く。

わが御方の中務、中将などやうの人びと、つれなき御もてなしながら、見たてまつるほどこそ慰めつれ、「何ごとにつけてか」と思へども、

「命ありてこの世にまた帰るやうもあらむを、待ちつけむと思はむ人は、あなたにさぶらへ」

とのたまひて、上下、皆参う上らせたまふ。

若君の御乳母たち、花散里なども、をかしきさまのはさるものにて、まめまめしき筋に思し寄らぬことなし。

尚侍の御もとに、わりなくして聞こえたまふ。

「問はせたまはぬも、ことわりに思ひたまへながら、今はと、世を思ひ果つるほどの憂さもつらさも、たぐひなきことにこそはべりけれ。

逢ふ瀬なき涙の河に沈みしや

流るる瀾の初めなりけむ

と思ひたまへ出づるのみなむ、罪逃れがたうはべりける」

道のほども危ふければ、こまかには聞こえたまはず。

女、いといみじうおぼえたまひて、忍びたまへど、御袖よりあまるも所狭うなむ。

「涙河浮かぶ水泡も消えぬべし

月おぼろにさし出でて、池広く、山木深きわたり、心細げに見ゆるにも、住み離れたらむ巖のなか、思しやらる。

西面は、「かうしも渡りたまはずや」と、うち屈して思しけるに、あはれ添へたる月影の、なまめかしうしめやかなるに、うち振る舞ひたまへるにほひ、似るものなくて、いと忍びやかに入りたまへば、すこしるぎり出でて、やがて月を見ておはす。またここに御物語のほどに、明け方近うなりにけり。

「短夜のほどや。かばかりの対面も、またはえしもやと思ふこそ、ことなしにて過ぐしつる年ごろも悔しう、来し方行く先のためしになるべき身にて、何となく心のどまる世なくこそありけれ」

と、過ぎにし方のことどものたまひて、鶏もしばしば鳴けば、世につつみて急ぎ出でたまふ。例の、月の入り果つるほど、よそへられて、あはれなり。女君の濃き御衣に映りて、げに、漏るる顔なれば、

「月影の宿れる袖はせばくとも

とめても見ばやあかぬ光を」

いみじと思いたるが、心苦しければ、かつは慰めきこえたまふ。

「行きめぐりつひにすむべき月影の

しばし雲らむ空な眺めそ

思へば、はかなしや。ただ、知らぬ涙のみこそ、心を昏らすものなれ」

などのたまひて、明けぐれのほどに出でたまひぬ。

よろづのことどもしたためさせたまふ。親しう仕まつり、世になびかぬ限りの人びと、殿の事とり行なふべき上下、定め置かせたまふ。御供に慕ひきこゆる限りは、また選り出でたまへり。

かの山里の御住みかの具は、えさらずとり使ひたまふべきものども、ことさらよそひもなくことそぎて、さるべき書ども『文集』など入りたる箱、さては

日たくるまで大殿籠もれり。帥宮、三位中将などおはしたり。対面したまはむとて、御直衣などたてまつる。

「位なき人は」

とて、無紋の直衣、なかなか、いとなつかしきを着たまひて、うちやつれたまへる、いとめでたし。御鬢かきたまふとて、鏡台に寄りたまへるに、面痩せたまへる影の、我ながらいとあてにきよらなれば、

「こよなうこそ、衰へにけれ。この影のやうにや痩せてはべる。あはれなるわぎかな」

とのたまへば、女君、涙一目うけて、見おこせたまへる、いと忍びがたし。

「身はかくてさすらへぬとも君があたり

去らぬ鏡の影は離れじ」

と、聞こえたまへば、

「別れても影だにとまるものならば

鏡を見ても慰めてまし」

柱隠れに隠れて、涙を紛らはしたまへるさま、「なほ、ここら見るなかにたぐひなかりけり」と、思し知らるる人の御ありさまなり。

親王は、あはれなる御物語聞こえたまひて、暮るるほどに帰りたまひぬ。

花散里の心細げに思して、常に聞こえたまふもことわりにて、「かの人も、今ひとたび見ずは、つらしとや思はむ」と思せば、その夜は、また出でたまふものから、いともの憂くて、いたう更かしておはしたれば、女御、

「かく数まへたまひて、立ち寄せたまへること」

と、よろこびきこえたまふさま、書き続けむもうるさし。

いといみじう心細き御ありさま、ただ御蔭に隠れて過ぐいたまへる年月、いとど荒れまさらむほど思しやられて、殿の内、いとかすかなり。

を見たまふにも、心細う、「年月経ば、かかる人びとも、えしもあり果てでや、行き散らむ」など、さしもあるまじきことさへ、御目のみとまりけり。

「昨夜は、しかしかして夜更けにしかばなむ。例の思はずなるさまにや思しなしつる。かくてはべるほどだに御目離れずと思ふを、かく世を離るる際には、心苦しきことのおのづから多かりける、ひたやごもりにてやは。常なき世に、人にも情けなきものと心おかれ果てむと、いとほしうてなむ」

と聞こえたまへば、

「かかる世を見るよりほかに、思はずなることは、何ごとにか」

とばかりのたまひて、いみじと思し入れたるさま、人よりことなるを、ことわりぞかし、父親王、いとおろかにもとより思しつきにけるに、まして、世の聞こえをわづらはしがりて、訪れきこえたまはず、御とぶらひにだに渡りたまはぬを、人の見るらむことも恥づかしく、なかなか知られたてまつらでやみなましを、継母の北の方などの、

「にはかなりし幸ひのあわたたしき。あな、ゆゆしや。思ふ人、方々につけて別れたまふ人かな」

とのたまひけるを、さる便りありて漏り聞きたまふにも、いみじう心憂ければ、これよりも絶えて訪れきこえたまはず。また頼もしき人もなく、げにぞ、あはれなる御ありさまなる。

「なほ世に許されがたうて、年月を経ば、巖の中にも迎へたてまつらむ。ただ今は、人聞きのいとつきなかるべきなり。朝廷にかしこまりきこゆる人は、明らかなる月日の影をだに見ず、安らかに身を振る舞ふことも、いと罪重かなり。過ちなけれど、さるべきにこそかかることもあらめと思ふに、まして思ふ人具するは、例なきことなるを、ひたおもむきにもものぐるほしき世にて、立ちまさることもありなむ」

など聞こえ知らせたまふ。

「聞こえさせまほしきことも、返す返す思うたまへながら、ただに結ばほれはべるほど、推し量らせたまへ。いぎたなき人は、見たまへむにつけても、なかなか、憂き世逃れがたう思うたまへられぬべければ、心強う思うたまへなして、急ぎまかではべり」

と聞こえたまふ。

出でたまふほどを、人びと覗きて見たてまつる。

入り方の月いと明きに、いとどなまめかしうきよらにて、ものを思いたるさま、虎、狼だに泣きぬべし。まして、いはけなくおはせしほどより見たてまつりそめてし人びとなれば、たとしへなき御ありさまをいみじと思ふ。

まことや、御返り、

「亡き人の別れやいとど隔たらむ

煙となりし雲居ならでは」

取り添へて、あはれのみ尽きせず、出でたまひぬる名残、ゆゆしきまで泣きあへり。

殿におはしたれば、わが御方の人びとも、まどろまざりけるけしきにて、所々に群れゐて、あさましとのみ世を思へるけしきなり。侍には、親しう仕まつる限りは、御供に参るべき心まうけして、私の別れ惜しむほどにや、人もなし。さらぬ人は、とぶらひ参るも重き咎めあり、わづらはしきことまされば、所狭く集ひし馬、車の方もなく、寂しきに、「世は憂きものなりけり」と、思し知る。

台盤なども、かたへは塵ばみて、畳、所々引き返したり。「見るほどだにかかり。ましていかに荒れゆかむ」と思す。

西の対に渡りたまへれば、御格子も参らで、眺め明かしたまひければ、簀子などに、若き童女、所々に臥して、今ぞ起き騒ぐ。宿直姿どもをかしうてゐる

まりたまひて、人びと御前にさぶらはせたまひて、物語などせさせたまふ。人よりはこよなう忍び思す中納言の君、言へばえに悲しう思へるさまを、人知れずあはれと思す。人皆静まりぬるに、とりわきて語らひたまふ。これにより泊まりたまへるなるべし。

明けぬれば、夜深う出でたまふに、有明の月いとをかし。花の木どもやうやう盛り過ぎて、わづかなる木蔭の、いと白き庭に薄く霧りわたりたる、そこはかとなく霞みあひて、秋の夜のあはれにおほくたちまされり。隅の高欄におしかかりて、とばかり、眺めたまふ。

中納言の君、見たてまつり送らむとにや、妻戸おし開けてゐたり。

「また対面あらむことこそ、思へばいと難けれ。かかりける世を知らで、心やすくもありぬべかりし月ごろ、さしも急がで、隔てしよ」  
などのたまへば、ものも聞こえず泣く。

若君の御乳母の宰相の君して、宮の御前より御消息聞こえたまへり。

「身づから聞こえまほしきを、かきくらす乱り心地ためらひはべるほどに、いと夜深う出でさせたまふなるも、さま変はりたる心地のみしはべるかな。心苦しき人のいぎたなきほどは、しばしもやすらはせたまはで」

と聞こえたまへれば、うち泣きたまひて、

「鳥辺山燃えし煙もまがふやと

海人の塩焼く浦見にぞ行く」

御返りともなくうち誦じたまひて、

「暁の別れは、かうのみや心尽くしなる。思ひ知りたまへる人もあらむかし」  
とのたまへば、

「いつとなく、別れといふ文字こそうたてはべるなるなかにも、今朝はなほたぐひあるまじう思うたまへらるるほどかな」

と、鼻声にて、げに浅からず思へり。

と聞こえたまひて、いたうしほたれたまふ。

「とあることも、かかることも、前の世の報いにこそはべるなれば、言ひもてゆけば、ただ、みづからのおこたりになむはべる。さして、かく、官爵を取られず、あさはかなることにかかづらひてだに、朝廷のかしこまりなる人の、うつしぎまにて世の中にあり経るは、咎重きわざに人の国にもしはべるなるを、遠く放ちつかはすべき定めなどもはべるなるは、さま異なる罪に当たるべきにこそはべるなれ。濁りなき心にまかせて、つれなく過ぐしはべらむも、いと憚り多く、これより大きな恥にのぞまぬさきに、世を逃れなむと思うたまへ立ちぬる」

など、こまやかに聞こえたまふ。

昔の御物語、院の御こと、思しのたまはせし御心ばへなど聞こえ出でたまひて、御直衣の袖もえ引き放ちたまはぬに、君も、え心強くもてなしたまはず。若君の何心なく紛れありきて、これかれに馴れきこえたまふを、いみじと思いたり。

「過ぎはべりにし人を、世に思うたまへ忘るる世なくのみ、今に悲しびはべるを、この御ことになむ、もしはべる世ならましかば、いかやうに思ひ嘆きはべらまし。よくぞ短くて、かかる夢を見ずなりにけると、思うたまへ慰めはべり。幼くものしたまふが、かく齡過ぎぬるなかにとまりたまひて、なづさひきこえぬ月日や隔たりたまはむと思ひたまふるをなむ、よろづのことよりも、悲しうはべる。いにしへの人も、まことに犯しあるにても、かかることに当たらざりけり。なほさるべきにて、人の朝廷にもかかるたぐひ多うはべりけり。されど、言ひ出づる節ありてこそ、さることもはべりけれ、とぎまかうぎまに、思ひたまへ寄らむかたなくなむ」

など、多くの御物語聞こえたまふ。

三位中将も参りあひたまひて、大御酒など参りたまふに、夜更けぬれば、泊

をも見せたまはましかば」と、うち思ひ出でたまふにも、「さも、さまざまに、心をみ尽くすべかりける人の御契りかな」と、つらく思ひきこえたまふ。

三月二十日あまりのほどになむ、都を離れたまひける。人にいつとしも知らせたまはず、ただいと近う仕うまつり馴れたる限り、七、八人ばかり御供にて、いとかすかに出で立ちたまふ。さるべき所々に、御文ばかりうち忍びたまひしにも、あはれと忍ぶるばかり尽くいたまへるは、見どころもありぬべかりしかど、その折の、心地の紛れに、はかばかしうも聞き置かずなりにけり。

二、三日かねて、夜に隠れて、大殿に渡りたまへり。網代車のうちやつれたるにて、女車のやうにて隠ろへ入りたまふも、いとあはれに、夢とのみ見ゆ。御方、いと寂しげにうち荒れたる心地して、若君の御乳母ども、昔さぶらひし人のなかに、まかで散らぬ限り、かく渡りたまへるをめぐらしがりきこえて、参う上り集ひて見たてまつるにつけても、ことにも深からぬ若き人びとさへ、世の常なさ思ひ知られて、涙にくれたり。

若君はいとうつくしうて、され走りおはしたり。

「久しきほどに、忘れぬこそ、あはれなれ」

とて、膝に据ゑたまへる御けしき、忍びがたげなり。

大臣、こなたに渡りたまひて、対面したまへり。

「つれづれに籠もらせたまへらむほど、何とはべらぬ昔物語も、参りて、聞こえさせむと思うたまへれど、身の病重きにより、朝廷にも仕うまつらず、位をも返したてまつりてはべるに、私ざまには腰のべてなむと、ものの聞こえひがひがしかるべきを、今は世の中憚るべき身にもはべらねど、いちはやき世のいと恐ろしうはべるなり。かかる御ことを見たまふるにつけて、命長きは心憂く思うたまへらるる世の末にもはべるかな。天の下をさかさまになしても、思うたまへ寄らざりし御ありさまを見たまふれば、よろづいとあぢきなくなむ」

世の中、いとわづらはしく、はしたなきことのみまされば、「せめて知らず顔にあり経ても、これよりまさることもや」と思しなりぬ。

「かの須磨は、昔こそ人の住みかなどもありけれ、今は、いと里離れ心すごくて、海人の家だにまれに」など聞きたまへど、「人しげく、ひたたけたらむ住まひは、いと本意なかるべし。さりとて、都を遠ざからむも、故郷おぼつかなかるべきを」、人悪くぞ思し乱るる。

よろづのこと、来し方行く末、思ひ続けたまふに、悲しきこといとさまざまなり。憂きものと思ひ捨てつる世も、今はと住み離れなむことを思すには、いと捨てがたきこと多かるなかにも、姫君の、明け暮れにそへては、思ひ嘆きたまへるさまの、心苦しうあはれなるを、「行きめぐりても、また逢ひ見むことかならず」と、思さむにてだに、なほ一、二日のほど、よそよそに明かし暮らす折々だに、おぼつかなきものにおぼえ、女君も心細うのみ思ひたまへるを、「幾年そのほどと限りある道にもあらず、逢ふを限りに隔たりゆかむも、定めなき世に、やがて別るべき門出にもや」と、いみじうおぼえたまへば、「忍びてもろともにもや」と、思し寄る折あれど、さる心細からむ海づらの、波風よりほかに立ちまじる人もなからむに、かくらうたき御さまにて、引き具したまへらむも、いとつきなく、わが心にも、「なかなか、もの思ひのつまなるべきを」など思し返すを、女君は、「いみじからむ道にも、後れきこえずだにあらば」と、おもむけて、恨めしげに思いたり。

かの花散里にも、おはし通ふことこそまれなれ、心細くあはれなる御ありさまを、この御蔭に隠れてものしたまへば、思し嘆きたるさまも、いとことわりなり。なほざりにても、ほのかに見たてまつり通ひたまひし所々、人知れぬ心をくだきたまふ人ぞ多かりける。

入道の宮よりも、「ものの聞こえや、またいかがりなきむ」と、わが御ためつつましけれど、忍びつつ御とぶらひ常にあり。「昔、かやうに相思し、あはれ

須 磨

須

磨

花散里

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文  
(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

たまふ。

「橘の香をなつかしみほととぎす

花散る里をたづねてぞとふ

い

にしへの忘れがたき慰めには、なほ参りはべりぬべかりけり。こよなうこそ、紛るることも、数添ふこともはべりけれ。おほかたの世に従ふものなれば、昔語もかきくづすべき人少なうなりゆくを、まして、つれづれも紛れなく思さるらむ」

と聞こえたまふに、いとさらなる世なれど、ものをいとあはれに思し続けたる御けしきの浅からぬも、人の御さまからにや、多くあはれぞ添ひにける。

「人目なく荒れたる宿は橘の

花こそ軒のつまとなりけれ」

とばかりのたまへる、「さはいへど、人にはいとことなりけり」と、思し比べらる。

西面には、わざとなく、忍びやかにうち振る舞ひたまひて、覗きたまへるも、めづらしきに添へて、世に目なれぬ御さまなれば、つらさも忘れぬべし。何やかやと、例の、なつかしく語らひたまふも、思さぬことにあらざるべし。

かりにも見たまふかぎりは、おしなべての際にはあらず、さまざまにつけて、いふかひなしと思さるるはなければにや、憎げなく、我も人も情けを交はしつ、過ぐしたまふなりけり。それをあいなしと思ふ人は、とにかくに変はるも、「ことわりの、世のさが」と、思ひなしたまふ。ありつる垣根も、さやうにて、ありさま変はりにたるあたりなりけり。

し。

「ほととぎす言問ふ声はそれなれど

あなおぼつかかな五月雨の空」

ことさらたどると見れば、

「よしよし、植ゑし垣根も」

とて出づるを、人知れぬ心には、ねたうもあはれにも思ひけり。

「さも、つつむべきことぞかし。ことわりにもあれば、さすがなり。かやうの際に、筑紫の五節が、らうたげなりしはや」

と、まづ思し出づ。

いかなるにつけても、御心の暇なく苦しげなり。年月を経ても、なほかやうに、見しあたり、情け過ぐしたまはぬにしも、なかなか、あまたの人のもの思ひぐさなり。

かの本意の所は、思しやりつるもしるく、人目なく、静かにておはするありさまを見たまふも、いとあはれなり。まづ、女御の御方にて、昔の御物語など聞こえたまふに、夜更けにけり。

二十日の月さし出づるほどに、いとど木高き蔭ども木暗く見えわたりて、近き橘の薫りなつかしく匂ひて、女御の御けはひ、ねびにたれど、あくまで用意あり、あてにらうたげなり。

「すぐれてはなやかなる御おぼえこそなかりしかど、むつまじうなつかしき方には思したりしものを」

など、思ひ出できこえたまふにつけても、昔のことかきつらね思されて、うち泣きたまふ。

ほととぎす、ありつる垣根のにや、同じ声にうち鳴く。「慕ひ来にけるよ」と、思さるるほども、艶なりかし。「いかに知りてか」など、忍びやかにうち誦んじ

人知れぬ、御心づからのもの思はしきは、いつとなきことなめれど、かくおほかたの世につけてさへ、わづらはしう思し乱るることのみまされば、もの心細く、世の中なべて厭はしう思しならるるに、さすがなること多かり。

麗景殿と聞こえしは、宮たちもおはせず、院隠れさせたまひて後、いよいよあはれなる御ありさまを、ただこの大将殿の御心にもて隠されて、過ぐしたまふなるべし。

御おとうとの三の君、内わたりにてはかなうほのめきたまひしなごりの、例の御心なれば、さすがに忘れも果てたまはず、わざともてなしたまはぬに、人の御心のみ尽くし果てたまふべかめるをも、このごろ残ることなく思し乱るる世のあはれのくさはひには、思ひ出でたまふには、忍びがたくて、五月雨の空めづらしく晴れたる雲間に渡りたまふ。

何ばかりの御よそひなく、うちやつして、御前などもなく、忍びて、中川のほどおはし過ぐるに、ささやかなる家の、木立などよしばめるに、よく鳴る琴を、あづまに調べて、掻き合はせ、にぎははしく弾きなすなり。

御耳とまりて、門近なる所なれば、すこしきし出でて見入れたまへば、大きな桂の木の追ひ風に、祭のころ思し出でられて、そこはかとなくけはひをかしきを、「ただ一目見たまひし宿りなり」と見たまふ。ただならず、「ほど経にける、おぼめかしくや」と、つつましかれど、過ぎがてにやすらひたまふ、折しも、ほととぎす鳴きて渡る。もよほしきこえ顔なれば、御車おし返させて、例の、惟光入れたまふ。

「をちかへりえぞ忍ばれぬほととぎす

ほの語らひし宿の垣根に」

寢殿とおぼしき屋の西の妻に人びとゐたり。先々も聞きし声なれば、声づくりけしきとりて、御消息聞こゆ。若やかなるけしきどもして、おぼめくなるべ

花散里

花  
散  
里

当たりはべらむ」

など、聞こえ直したまへど、ことに御けしきも直らず。

「かく、一所におはして隙もなきに、つつむところなく、さて入りものせらるらむは、ことさらに軽め弄ぜらるるにこそは」と思しなすに、いとどいみじうめざましく、「このついでに、ちるべきことも構へ出でむに、よきたよりなり」と、思しめぐらすべし。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

て、うけばりたる女御なども言はせたまはぬをだに、飽かず口惜しう思ひたまふるに、また、かかることさへはべりければ、さらにいと心憂くなむ思ひなりはべりぬる。男の例とはいひながら、大将もいとけしからぬ御心なりけり。齋院をもなほ聞こえ犯しつつ、忍びに御文通はしなどして、けしきあることなど、人の語りはべりしをも、世のためのみにもあらず、我がためもよかるまじきことなれば、よもさる思ひやりなきわざ、し出でられじとなむ、時の有職と天の下をなびかしたまへるさま、ことなめれば、大将の御心を、疑ひはべらざりつる」

などのたまふに、宮は、いとどしき御心なれば、いとものしき御けしきにて、「帝と聞こゆれど、昔より皆人思ひ落としきこえて、致仕の大臣も、またなくかしづく一つ女を、兄の坊にておはするにはたてまつらで、弟の源氏にて、いとさなきが元服の副臥にとり分き、また、この君をも宮仕へにと心ざしてはべりしに、をこがましかりしありさまなりしを、誰れも誰れもあやしとやは思したりし。皆、かの御方にこそ御心寄せはべるめりしを、その本意違ふさまにてこそは、かくてもさぶらひたまふめれど、いとほしさに、いかでさる方にても、人に劣らぬさまにもてなしきこえむ、さばかりねたげなりし人の見るところもあり、などこそは思ひはべりつれど、忍びて我が心の入る方に、なびきたまふにこそははべらめ。齋院の御ことは、ましてさもあらむ。何ごとにつけても、朝廷の御方にうしろやすからず見ゆるは、春宮の御世、心寄せ殊なる人なれば、ことわりになむあめる」

と、すすすすくしうのたまひ続くるに、さすがにいとほしう、「など、聞こえつることぞ」と、思さるれば、

「さはれ、しばし、このこと漏らしはべらじ。内にも奏せさせたまふな。かくのごと、罪はべりとも、思し捨つまじきを頼みにて、あまえてはべるなるべし。うちうちに制しのたまはむに、聞きはべらずは、その罪に、ただみづから

とのたまふに、薄二藍なる帯の、御衣にまつはれて引き出でられたるを見つけたまひて、あやしと思すに、また、畳紙の手習ひなどしたる、御几帳のもとに落ちたり。「これはいかなる物どもぞ」と、御心おどろかれて、

「かれは、誰れがぞ。けしき異なるものさまかな。たまへ。それ取りて誰がぞと見はべらむ」

とのたまふにぞ、うち見返りて、我も見つけたまへる。紛らはすべきかたもなければ、いかがは応へきこえたまはむ。我にもあらでおはするを、「子ながらも恥づかしと思すらむかし」と、さばかりの人は、思し憚るべきぞかし。されど、いと急に、のどめたるところおはせぬ大臣の、思しもまはさずなりて、畳紙を取りたまふままに、几帳より見入れたまへるに、いといたうなよびて、慎ましからず添ひ臥したる男もあり。今ぞ、やをら顔ひき隠して、とかう紛らはす。あさましう、めざましう心やましけれど、直面には、いかでか現はしたまはむ。目もくるる心地すれば、この畳紙を取りて、寝殿に渡りたまひぬ。

尚侍の君は、我かの心地して、死ぬべく思さる。大将殿も、「いとほしう、つひに用なき振る舞ひのつもりて、人のもどきを負はむとすること」と思せど、女君の心苦しき御けしきを、とかく慰めきこえたまふ。

大臣は、思ひのままに、籠めたるところおはせぬ本性に、いとど老いの御ひがみさへ添ひたまふに、これは何ごとにかはとどこほりたまはむ。ゆくゆくと、宮にも愁へきこえたまふ。

「かうかうのことなむはべる。この畳紙は、右大将の御手なり。昔も、心宥されでありそめにけることなれど、人柄によろづの罪を宥して、さても見むと、言ひはべりし折は、心もとどめず、めざましげにもてなされにしかば、やすからず思ひたまへしかど、さるべきにこそはとて、世に穢れたりとも、思し捨つまじきを頼みにて、かく本意のごとくたてまつりながら、なほ、その憚りあり

誰も誰も、うれしう思すに、例の、めづらしき隙なるをと、聞こえ交はしたまひて、わりなきさまにて、夜な夜な対面したまふ。

いと盛りに、にぎははしきけはひしたまへる人の、すこしうち悩みて、痩せ瘦せになりたまへるほど、いとをかしげなり。

後の宮も一所におはするころなれば、けはひいと恐ろしけれど、かかることしもまさる御癖なれば、いと忍びて、たび重なりゆけば、けしき見る人びともあるべかめれど、わづらはしうて、宮には、さなむと啓せず。

大臣、はた思ひかけたまはぬに、雨にはかにおどろおどろしう降りて、神いたう鳴りさわぐ暁に、殿の君達、宮司など立ちさわぎて、こなたかなたの人目しげく、女房どもも怖ぢまどひて、近う集ひ参るに、いとわりなく、出でたまはむ方なくて、明け果てぬ。

御帳のめぐりにも、人びとしげく並みたるれば、いと胸つぶらはしく思さる。心知りの人二人ばかり、心を惑はす。

神鳴り止み、雨すこしを止みぬるほどに、大臣渡りたまひて、まづ、宮の御方におはしけるを、村雨のまぎれにてえ知りたまはぬに、軽らかにふとはひ入りたまひて、御簾引き上げたまふままに、

「いかにぞ。いとうたてありつる夜のさまに、思ひやりきこえながら、参り来でなむ。中将、宮の亮など、さぶらひつや」

など、のたまふけはひの、舌疾にあはつけきを、大将は、もののまぎれにも、左の大臣の御ありさま、ふと思し比べられて、たとしへなうぞ、ほほ笑まれたまふ。げに、入り果ててもものたまへかしな。

尚侍の君、いとわびしう思されて、やをらるざり出でたまふに、面のいたう赤みたるを、「なほ悩ましう思さるるにや」と見たまひて、

「など、御けしきの例ならぬ。もののけなどのむつかしきを、修法延べさすべかりけり」

だして謡ふ、いとうつくし。大将の君、御衣脱ぎてかづけたまふ。

例よりは、うち乱れたまへる御顔の匂ひ、似るものなく見ゆ。薄物の直衣、単衣を着たまへるに、透きたまへる肌つき、ましていみじう見ゆるを、年老いたる博士どもなど、遠く見たてまつりて、涙落しつゝるたり。「逢はましものを、小百合ばの」と謡ふとぢめに、中将、御土器参りたまふ。

「それもがと今朝開けたる初花に  
劣らぬ君が匂ひをぞ見る」

ほほ笑みて、取りたまふ。

「時ならで今朝咲く花は夏の雨に  
しをれにけらし匂ふほどなく

衰へにたるものを」

と、うちさうどきて、らうがはしく聞こし召しなすを、咎め出でつつ、しひきこえたまふ。

多かめりし言どもも、かうやうなる折のまほならぬこと、数々に書きつくる、心地なきわざとか、貫之が諫め、たうるる方にて、むつかしければ、とどめつ。皆、この御ことをほめたる筋にのみ、大和のも唐のも作り続けたり。わが御心地にも、いたう思しおごりて、

「文王の子、武王の弟」

と、うち誦じたまへる御名のりさへぞ、げに、めでたき。「成王の何」とか、のたまはむとすらむ。そればかりや、また心もとなからむ。

兵部卿宮も常に渡りたまひつつ、御遊びなども、をかしうおはする宮なれば、今めかしき御遊びどもなり。

そのころ、尚侍の君まかだたまへり。瘧病に久しう悩みたまひて、まじなひなども心やすくせむとてなりけり。修法など始めて、おこたりたまひぬれば、

韻塞ぎなどやうのすさびわざどもをもしなど、心をやりて、宮仕へをもをさをさしたまはず、御心にまかせてうち遊びておはするを、世の中には、わづらはしきことどもやうやう言ひ出づる人びとあるべし。

夏の雨、のどかに降りて、つれづれなるころ、中将、さるべき集どもあまた持たせて参りたまへり。殿にも、文殿開けさせたまひて、まだ開かぬ御厨子どもの、めづらしき古集のゆゑなからぬ、すこし選り出でさせたまひて、その道の人びと、わざとはあらねどあまた召したり。殿上人も大学のも、いと多う集ひて、左右にこまどりに方分かせたまへり。賭物どもなど、いと二なくて、挑みあへり。

塞ぎもて行くままに、難き韻の文字どもいと多くて、おぼえある博士どもなどの惑ふところどころを、時々うちのたまふさま、いとこよなき御才のほどなり。

「いかで、かうしもたらひたまひけむ」

「なほさるべきにて、よろづのこと、人にすぐれたまへるなりけり」

と、めできこゆ。つひに、右負けにけり。

二日ばかりありて、中将負けわざしたまへり。ことことしうはあらで、なまめきたる桧破籠ども、賭物などさまさまにて、今日も例の人びと、多く召して、文など作らせたまふ。

階のもとの薔薇、けしきばかり咲きて、春秋の花盛りよりもしめやかにをかしきほどなるに、うちとけ遊びたまふ。

中将の御子の、今年初めて殿上する、八つ、九つばかりにて、声いとおもしろく、笙の笛吹きなどするを、うつくしびもてあそびたまふ。四の君腹の二郎なりけり。世の人の思へる寄せ重くて、おぼえことにかしづけり。心ばへもかどかどしう、容貌もをかしくて、御遊びのすこし乱れゆくほどに、「高砂」を出

人知れず危ふくゆゆしう思ひきこえさせたまふことしあれば、「我にその罪を軽めて、宥したまへ」と、仏を念じきこえたまふに、よろづを慰めたまふ。

大将も、しか見たてまつりたまひて、ことわりに思す。この殿の人どもも、また同じきさまに、からきことのみあれば、世の中はしたなく思されて、籠もりおはす。

左の大臣も、公私ひき変へたる世のありさまに、もの憂く思して、致仕の表たてまつりたまふを、帝は、故院のやむごとなく重き御後見と思して、長き世のかためと聞こえ置きたまひし御遺言を思し召すに、捨てがたきものに思ひきこえたまへるに、かひなきことと、たびたび用ゐさせたまはねど、せめて返さひ申したまひて、籠もりゐたまひぬ。

今は、いとど一族のみ、返す返す栄えたまふこと、限りなし。世の重しとものでしたまへる大臣の、かく世を逃がれたまへば、朝廷も心細う思され、世の人も、心ある限りは嘆きけり。

御子どもは、いづれともなく人がらめやすく世に用ゐられて、心地よげにものしたまひしを、こよなう静まりて、三位中将なども、世を思ひ沈めるさま、こよなし。かの四の君をも、なほ、かれがれにうち通ひつつ、めざましうもてなされたれば、心解けたる御婿のうちにも入れたまはず。思ひ知れとにや、このたびの司召にも漏れぬれど、いとしも思ひ入れず。

大将殿、かう静かにておはするに、世ははかなきものと見えぬるを、ましてことわり、と思しなして、常に参り通ひたまひつつ、学問をも遊びをももろともにしたまふ。

いにしへも、もの狂ほしきまで、挑みきこえたまひしを思し出でて、かたみに今もはかなきことにつけつつ、さすがに挑みたまへり。

春秋の御読経をばさるものにて、臨時にも、さまざま尊き事どもをせさせたまひなどして、また、いたづらに暇ありげなる博士ども召し集めて、文作り、

まへる、またなうなまめかし。

「ながめかる海人のすみかを見るからに

まづしほたるる松が浦島」

と聞こえたまへば、奥深うもあらず、みな仏に譲りきこえたまへる御座所なれば、すこしけ近き心地して、

「ありし世のなごりだになき浦島に

立ち寄る波のめづらしきかな」

とのたまふも、ほの聞こゆれば、忍ぶれど、涙ほろほろとこぼれたまひぬ。世を思ひ澄ましたる尼君たちの見るらむも、はしたなければ、言少なにて出でたまひぬ。

「さも、たぐひなくねびまさりたまふかな」

「心もとなきところなく世に栄え、時にあひたまひし時は、さる一つものにて、何につけてか世を思し知らむと、推し量られたまひしを」

「今はいといたう思ししづめて、はかなきことにつけても、ものあはれなるけしきさへ添はせたまへるは、あいなう心苦しうもあるかな」

など、老いしらへる人びと、うち泣きつつ、めできこゆ。宮も思し出づること多かり。

司召のころ、この宮の人は、賜はるべき官も得ず、おほかたの道理にても、宮の御賜はりにても、かならずあるべき加階などをだにせずなどして、嘆くたぐひいと多かり。かくても、いつしかと御位を去り、御封などの停まるべきにもあらぬを、ことつけて変はること多かり。皆かねて思し捨ててし世なれど、宮人どもも、よりどころなげに悲しと思へるけしきどもにつけてぞ、御心動く折々あれど、「わが身をなきになしても、春宮の御代をたひらかにおはしまさば」とのみ思しつつ、御行なひたゆみなくつとめさせたまふ。

「今は、かかるかたぎまの御調度どもをこそは」と思せば、年の内にと、急がせたまふ。命婦の君も御供になりければ、それも心深うとぶらひたまふ。詳しく言ひ続けむに、ことごとしきさまなれば、漏らしてけるなめり。さるは、かうやうの折こそ、をかしき歌など出で来るやうもあれ、さうざうしや。参りたまふも、今はつつましさ薄らぎて、御みづから聞こえたまふ折もありけり。思ひしめてしことは、さらに御心に離れねど、まして、あるまじきことなりかし。

年も変はりぬれば、内わたりはなやかに、内宴、踏歌など聞きたまふも、もののみあはれにて、御行なひしめやかにしたまひつつ、後の世のことをのみ思すに、頼もしく、むつかしかりしこと、離れて思ほさる。常の御念誦堂をば、さるものにて、ことに建てられたる御堂の、西の対の南にあたりて、すこし離れたるに渡らせたまひて、とりわきたる御行なひせさせたまふ。

大将、参りたまへり。改まるしるしもなく、宮の内のどかに、人目まれにて、宮司どもの親しきばかり、うちうなだれて、見なしにやあらむ、屈しいたげに思へり。

白馬ばかりぞ、なほ牽き変へぬものにて、女房などの見ける。所狭う参り集ひたまひし上達部など、道を避きつつひき過ぎて、向かひの大殿に集ひたまふを、かかるべきことなれど、あはれに思さるるに、千人にも変へつべき御さまにて、深うたづね参りたまへるを見るに、あいなく涙ぐまる。

客人も、いとものあはれなるけしきに、うち見まはしたまひて、とみに物ものたまはず。さま変はれる御住まひに、御簾の端、御几帳も青鈍にて、隙々よりほの見えたる薄鈍、梶子の袖口など、なかなかなまめかしう、奥ゆかしう思ひやられたまふ。「解けわたる池の薄氷、岸の柳のけしきばかりは、時を忘れぬ」など、さまざま眺められたまひて、「むべも心ある」と、忍びやかにうち誦じた

風、はげしう吹きふぶきて、御簾のうちの匂ひ、いともの深き黒方にしみて、名香の煙もほのかなり。大将の御匂ひさへ薰りあひ、めでたく、極楽思ひやるる夜のさまなり。

春宮の御使も参れり。のたまひさま、思ひ出できこえさせたまふにぞ、御心強さも堪へがたくて、御返りも聞こえさせやられたまはねば、大将ぞ、言加はへ聞こえたまひける。

誰も誰も、ある限り心収まらぬほどなれば、思すことどもも、えうち出でたまはず。

「月のすむ雲居をかけて慕ふとも

この世の闇になほや惑はむ

と思ひたまへらるこそ、かひなく。思し立たせたまへる恨めしきは、限りなう」

とばかり聞こえたまひて、人びと近うさぶらへば、さまざま乱るる心のうちをだに、え聞こえあらはしたまはず、いぶせし。

「おほふかたの憂きにつけては厭へども

いつかこの世を背き果つべき

かつ、濁りつつ」

など、かたへは御使の心しらひなるべし。あはれのみ尽きせねば、胸苦しうてまかでたまひぬ。

殿にても、わが御方に一人うち臥したまひて、御目もあはず、世の中厭はしう思さるるにも、春宮の御ことのみぞ心苦しき。

「母宮をだに朝廷がたさまにと、思しおきしを、世の憂さに堪へず、かくなりたまひにたれば、もとの御位にてもえおはせじ。我さへ見たてまつり捨てては」など、思し明かすこと限りなし。

に、皆人びと驚きたまひぬ。兵部卿宮、大将の御心も動きて、あさましと思す。

親王は、なかばのほどに立ちて、入りたまひぬ。心強う思し立つさまのたまひて、果つるほどに、山の座主召して、忌むこと受けたまふべきよし、のたまはず。御伯父の横川の僧都、近う参りたまひて、御髪下ろしたまふほどに、宮の内ゆすりて、ゆゆしう泣きみちたり。何となき老い衰へたる人だに、今はと世を背くほどは、あやしうあはれなるわざを、まして、かねての御けしきにも出だしたまはざりつることなれば、親王もいみじう泣きたまふ。

参りたまへる人びとも、おほかたのこのさまも、あはれに尊ければ、みな、袖濡らしてぞ帰りたまひける。

故院の御子たちは、昔の御ありさまを思し出づるに、いとど、あはれに悲しう思されて、みな、とぶらひきこえたまふ。大将は、立ちとまりたまひて、聞こえ出でたまふべきかたもなく、暮れまどひて思さるれど、「などか、さしも」と、人見たてまつるべければ、親王など出でたまひぬる後にぞ、御前に参りたまへる。

やうやう人静まりて、女房ども、鼻うちかみつ、所々に群れるたり。月は隈なきに、雪の光りあひたる庭のありさまも、昔のこと思ひやらるるに、いと堪へがたう思さるれど、いとよう思し静めて、

「いかやうに思し立たせたまひて、かうにはかには  
と聞こえたまふ。

「今はじめて、思ひたまふることにもあらぬを、ものさわがしきやうなりつれば、心乱れぬべく」

など、例の、命婦して聞こえたまふ。

御簾のうちのけはひ、そこら集ひさぶらふ人の衣の音なひ、しめやかに振る舞ひなして、うち身じろきつつ、悲しげさの慰めがたげに漏り聞こゆるけしき、ことわりに、いみじと聞きたまふ。

ひせさせたまひけり。

霜月の朔日ごろ、御国忌なるに、雪いたう降りたり。大将殿より宮に聞こえたまふ。

「別れにし今日は来れども見し人に

行き逢ふほどをいつと頼まむ」

いづこにも、今日はもの悲しう思さるるほどにて、御返りあり。

「ながらふるほどは憂けれど行きめぐり

今日はその世に逢ふ心地して」

ことにつくろひてもあらぬ御書きざまなれど、あてに気高きは思ひなしなるべし。筋変はり今めかしうはあらねど、人にはことに書かせたまへり。今日は、この御ことも思ひ消ちて、あはれなる雪の雫に濡れ濡れ行ひたまふ。

十二月十余日ばかり、中宮の御八講なり。いみじう尊し。日々に供養せさせたまふ御経よりはじめ、玉の軸、羅の表紙、帙篋の飾りも、世になきさまにととのへさせたまへり。さらぬことのきよらだに、世の常ならずおはしませば、ましてことわりなり。仏の御飾り、花机のおほひなどまで、まことの極楽思ひやらる。

初めの日は、先帝の御料。次の日は、母后の御ため。またの日は、院の御料。五巻の日なれば、上達部なども、世のつつましさをえしも憚りたまはで、いとあまた参りたまへり。今日の講師は、心ことに選らせたまへれば、「薪こる」ほどよりうちはじめ、同じう言ふ言の葉も、いみじう尊し。親王たちも、さまざまの捧物ささげてめぐりたまふに、大将殿の御用意など、なほ似るものなし。常におなじことのやうなれど、見たてまつるたびごとに、めづらしからむをば、いかがはせむ。

果ての日、わが御ことを結願にて、世を背きたまふよし、仏に申させたまふ

ど、深うも思し入れたらぬを、いとうしろめたく思ひきこえたまふ。例は、いとく大殿籠もるを、「出でたまふまでは起きたらむ」と思すなるべし。恨めしげに思したれど、さすがに、え慕ひきこえたまはぬを、いとあはれと、見たてまつりたまふ。

大将、頭の弁の誦じつることを思ふに、御心の鬼に、世の中わづらはしうおぼえたまひて、尚侍の君にも訪れきこえたまはで、久しうなりにけり。

初時雨、いつしかとけしきだつに、いかが思しけむ、かれより、

「木枯の吹くにつけつつ待ちし間に

おぼつかなきのころも経にけり」

と聞こえたまへり。折もあはれに、あながちに忍び書きたまへらむ御心ばへも、憎からねば、御使とどめさせて、唐の紙ども入れさせたまへる御厨子開けさせたまひて、なべてならぬを選び出でつつ、筆なども心ことにひきつくろひたまへるけしき、艶なるを、御前なる人びと、「誰ればかりならむ」とつきしろふ。

「聞こえさせても、かひなきもの懲りにこそ、むげにくづほれにけれ。身の  
みもの憂きほどに、

あひ見ずてしのぶるころの涙をも

なべての空の時雨とや見る

心の通ふならば、いかに眺めの空ももの忘れしはべらむ」

など、こまやかになりにけり。

かうやうにおどろかしきこゆるたぐひ多かめれど、情けなからずうち返りごちたまひて、御心には深う染まざるべし。

中宮は、院の御はてのことにうち続き、御八講のいそぎをさまざまに心づか

ど、まだ、いと片なりに」

など、その御ありさまも奏したまひて、まかでたまふに、大宮の御兄の藤大納言の子の、頭の弁といふが、世にあひ、はなやかなる若人にて、思ふことなきなるべし、妹の麗景殿の御方に行くに、大将の御前駆を忍びやかに追へば、しばし立ちとまりて、

「白虹日を貫けり。太子畏ぢたり」

と、いとゆるるかにうち誦じたるを、大将、いとまばゆしと聞きたまへど、咎むべきことかは。後の御けしきは、いと恐ろしう、わづらはしげにのみ聞こゆるを、かう親しき人びとも、けしきだち言ふべかめることどももあるに、わづらはしう思されけれど、つれなうのみもてなしたまへり。

「御前にさぶらひて、今まで、更かしはべりにける」

と、聞こえたまふ。

月のはなやかなるに、「昔、かうやうなる折は、御遊びせさせたまひて、今めかしうもてなさせたまひし」など、思し出づるに、同じ御垣の内ながら、変はれること多く悲し。

「九重に霧や隔つる雲の上の

月をはるかに思ひやるかな」

と、命婦して、聞こえ伝へたまふ。ほどなければ、御けはひも、ほのかなれど、なつかしう聞こゆるに、つらさも忘られて、まづ涙ぞ落つる。

「月影は見し世の秋に変はらぬを

隔つる霧のつらくもあるかな

霞も人のとか、昔もはべりけることにや」

など聞こえたまふ。

宮は、春宮を飽かず思ひきこえたまひて、よろづのことを聞こえさせたまへ

しなまめかしき氣添ひて、なつかしうなごやかにぞおはします。かたみにあはれと見たてまつりたまふ。

尚侍の君の御ことも、なほ絶えぬさまに聞こし召し、けしき御覽ずる折もあれど、

「何かは、今はじめたることならばこそあらめ。さも心交はさむに、似げなかるまじき人のあはひなりかし」

とぞ思しなして、咎めさせたまはざりける。

よろづの御物語、文の道のおぼつかなく思さるることどもなど、問はせたまひて、また、好き好きしき歌語りなども、かたみに聞こえ交はさせたまふついでに、かの齋宮の下りたまひし日のこと、容貌のをかしくおはせしなど、語らせたまふに、我もうちとけて、野の宮のあはれなりし曙も、みな聞こえ出でたまひてけり。

二十日の月、やうやうさし出でて、をかしきほどなるに、

「遊びなども、せまほしきほどかな」

とのたまはす。

「中宮の、今宵、まかでたまふなる、とぶらひにものしはべらむ。院のたまはせおくことはべりしかば。また、後見仕うまつる人もはべらざめるに。春宮の御ゆかり、いとほしう思ひたまへられはべりて」

と奏したまふ。

「春宮をば、今の皇子になしてなど、のたまはせ置きしかば、とりわきて心ざしものすれど、ことにさしわきたるさまにも、何ごとをかはとてこそ。年のほどよりも、御手などのわざとかしこうこそものしたまふべけれ。何ごとにも、はかばかしからぬみづからの面起こしになむ」

と、のたまはすれば、

「おほかた、したまふわざなど、いとさとく大人びたるさまにもしたまへ

たまへば、あいなき心のさまさま乱るるやしるからむ、「色変はる」とありしも  
らうたうおぼえて、常よりことに語らひきこえたまふ。

山づとに持たせたまへりし紅葉、御前に御覧じ比ぶれば、ことに染めまし  
ける露の心も見過ぐしがたう、おぼつかなきも、人悪るきまでおぼえたまへば、  
ただおほかたにて宮に参らせたまふ。命婦のもとに、

「入らせたまひにけるを、めづらしきこととうけたまはるに、宮の間の事、  
おぼつかなくなりはべりにければ、静心なく思ひたまへながら、行ひもつとめ  
むなど、思ひ立ちはべりし日数を、心ならずやとてなむ、日ごろになりはべり  
にける。紅葉は、一人見はべるに、錦暗う思ひたまふればなむ。折よく御覧  
ぜさせたまへ」

などあり。

げに、いみじき枝どもなれば、御目とまるに、例の、いささかなるものあり  
けり。人びと見たてまつるに、御顔の色も移ろひて、

「なほ、かかる心の絶えたまはぬこそ、いと疎ましけれ。あたり思ひやり深  
うものしたまふ人の、ゆくりなく、かうやうなること、折々混ぜたまふを、人  
もあやしと見るらむかし」

と、心づきなく思されて、瓶に挿させて、廂の柱のもとにおしやらせたまひ  
つ。

おほかたのことども、宮の御事に触れたることなどをば、うち頼めるさまに、  
すくよかなる御返りばかり聞こえたまへるを、「さも心かしこく、尽きせずも」  
と、恨めしうは見たまへど、何ごとも後見きこえならひたまひにたれば、「人あ  
やしと、見とがめもこそすれ」と思して、まかでたまふべき日、参りたまへり。

まづ、内の御方に参りたまへれば、のどやかにおはしますほどにて、昔今の  
御物語聞こえたまふ。御容貌も、院にいとよう似たてまつりたまひて、今すこ

近き世に」

とぞある。

「御手、こまやかにあらねど、らうらうじう、草などをかしうなりにけり。まして、朝顔もねびまさりたまへらむかし」と思ほゆるも、ただならず、恐ろしや。

「あはれ、このころぞかし。野の宮のあはれなりしこと」と思し出でて、「あやう、やうのもの」と、神恨めしう思さるる御癖の、見苦しきぞかし。わりなう思さば、さもありぬべかりし年ごろは、のどかに過ぐいたまひて、今は悔しう思さるべかめるも、あやしき御心なりや。

院も、かくなべてならぬ御心ばへを見知りきこえたまへれば、たまさかなる御返りなどは、えしももて離れきこえたまふまじかめり。すこしあいなきことなりかし。

六十巻といふ書、読みたまひ、おぼつかなきところどころ解かせなどしておはしますを、「山寺には、いみじき光行なひ出だしたてまつれり」と、「仏の御面目あり」と、あやしの法師ばらまでよろこびあへり。しめやかにて、世の中を思ほしつづくるに、帰らむことももの憂かりぬべけれど、人一人の御こと思しやるがほだしなれば、久しうもえおはしまさで、寺にも御誦経いかめしうせさせたまふ。あるべき限り、上下の僧ども、そのわたりの山賤まで物賜び、尊きことの限りを尽くして出でたまふ。見たてまつり送るとて、このもかのもに、あやしきはふるひどもも集りてゐて、涙を落としつつ見たてまつる。黒き御車のうちにて、藤の御袂にやつれたまへれば、ことに見えたまはねど、ほのかなる御ありさまを、世になく思ひきこゆべかめり。

女君は、日ごろのほどに、ねびまさりたまへる心地して、いといたうしづまりたまひて、世の中いかがあらむと思へるけしきの、心苦しうあはれにおぼえ

四方の嵐ぞ静心なき」

など、こまやかなるに、女君もうち泣きたまひぬ。御返し、白き色紙に、

「風吹けばまづぞ乱るる色変はる

浅茅が露にかかるささがに」

とのみありて、「御手はいとをかしうのみなりまさるものかな」と、独りごちて、うつくしとほほ笑みたまふ。

常に書き交はしたまへば、わが御手にいとよく似て、今すこしなまめかしう、女しきところ書き添へたまへり。「何ごとにつけても、けしうはあらず生ほし立てたりかし」と思ほす。

吹き交ふ風も近きほどにて、齋院にも聞こえたまひけり。中将の君に、

「かく、旅の空になむ、もの思ひにあくがれにけるを、思し知るにもあらずかし」

など、怨みたまひて、御前には、

「かけまくはかしこけれどもそのかみの

秋思ほゆる木綿櫛かな

昔を今に、と思ひたまふるもかひなく、とり返されむもののやうに」

と、なれなれしげに、唐の浅緑の紙に、榊に木綿つけなど、神々しうしなして参らせたまふ。

御返し、中将、

「紛るることなくて、来し方のことを思ひたまへ出づるつれづれのままには、思ひやりきこえさすること多くはべれど、かひなくのみなむ」

と、すこし心とどめて多かり。御前のは、木綿の片端に、

「そのかみやいかがはありし木綿櫛

心にかけてしのぶらむゆゑ

大将の君は、宮をいと恋しう思ひきこえたまへど、「あさましき御心のほどを、時々、思ひ知るさまにも見せたてまつらむ」と、念じつつ過ぐしたまふに、人悪ろく、つれづれに思さるれば、秋の野も見たまひがてら、雲林院に詣でたまへり。

「故母御息所の御兄の律師の籠もりたまへる坊にて、法文など読み、行なひせむ」と思して、二、三日おはするに、あはれなること多かり。

紅葉やうやう色づきわたりて、秋の野のいとなまめきたるなど見たまひて、故里も忘れぬべく思さる。法師ばらの、才ある限り召し出でて、論議せさせて聞こしめさせたまふ。所からに、いとど世の中の常なきを思し明かしても、なほ、「憂き人しもぞ」と、思し出でらるるおし明け方の月影に、法師ばらの闕伽たてまつるとて、からからと鳴らしつつ、菊の花、濃き薄き紅葉など、折り散らしたるも、はかなげなれど、

「このかたのいとなみは、この世もつれづれならず、後の世はた、頼もしげなり。さも、あぢきなき身をもて悩むかな」

など、思し続けたまふ。律師の、いと尊き声にて、

「念仏衆生摂取不捨」

と、うちのべて行なひたまへるは、いとうらやましければ、「なぞや」と思しなるに、まづ、姫君の心にかかりて思ひ出でられたまふぞ、いと悪ろき心なるや。

例ならぬ日数も、おぼつかなくのみ思さるれば、御文ばかりぞ、しげう聞こえたまふめる。

「行き離れぬべしやと、試みはべる道なれど、つれづれも慰めがたう、心細さまさりてなむ。聞きさしたることありて、やすらひはべるほど、いかに」  
など、陸奥紙にうちとけ書きたまへるさへぞ、めでたき。

「浅茅生の露のやどりに君をおきて

は、同じやうなれど、「むげに、思し屈しにける」と、心知るどちは、いとほしがりきこゆ。

宮は、いみじうつくしうおとなびたまひて、めづらしううれしと思して、むつれきこえたまふを、かなしと見たてまつりたまふにも、思し立つ筋はいとかたけれど、内わたりを見たまふにつけても、世のありさま、あはれにはかなく、移り変はることのみ多かり。

大後の御心もいとわづらはしくて、かく出で入りたまふにも、はしたなく、事に触れて苦しければ、宮の御ためにも危ふくゆゆしう、よろづにつけて思ほし乱れて、

「御覽ぜで、久しからむほどに、容貌の異さまにてうたてげに変はりてはべらば、いかが思さるべき」

と聞こえたまへば、御顔うちまもりたまひて、

「式部がやうにや。いかでか、さはなりたまはむ」と、笑みてのたまふ。いふかひなくあはれにて、

「それは、老いてはべれば醜きぞ。さはあらで、髪はそれよりも短くて、黒き衣などを着て、夜居の僧のやうになりはべらむとすれば、見たてまつらむことも、いとど久しかるべきぞ」

とて泣きたまへば、まめだちて、

「久しうおはせぬは、恋しきものを」

とて、涙の落つれば、恥づかしと思して、さすがに背きたまへる、御髪はゆるらとよきよらにて、まみのなつかしげに匂ひたまへるさま、おとなびたまふままに、ただかの御顔を脱ぎすべたまへり。御齒のすこし朽ちて、口の内黒みて、笑みたまへる薫りうつくしきは、女にて見たてまつらまほしうきよらなり。

「いと、かうしもおぼえたまへるこそ、心憂けれ」と、玉の瑕に思さるるも、世のわづらはしきの、空恐ろしうおぼえたまふなりけり。

かつは心をあだと知らなむ」

はかなく言ひなさせたまへるさまの、言ふよしなき心地すれど、人の思さむところも、わが御ためも苦しければ、我にもあらで、出でたまひぬ。

「いづこを面にてかは、またも見えたてまつらむ。いとほしと思し知るばかり」と思して、御文も聞こえたまはず。うち絶えて、内、春宮にも参りたまはず、籠もりおはして、起き臥し、「いみじかりける人の御心かな」と、人悪ろく恋しう悲しきに、心魂も失せにけるにや、悩ましうさへ思さる。もの心細く、「なぞや、世に経れば憂さこそまされ」と、思し立つには、この女君のいとらうたげにて、あはれにうち頼みきこえたまへるを、振り捨てむこと、いとかたし。

宮も、その名残、例にもおはしまさず。かうことさらめきて籠もりゐ、おとづれたまはぬを、命婦などはいとほしがりきこゆ。宮も、春宮の御ためを思すには、「御心置きたまはむこと、いとほしく、世をあぢきなきものに思ひなりたまはば、ひたみちに思し立つこともや」と、さすがに苦しう思さるべし。

「かかること絶えずは、いとどしき世に、憂き名さへ漏り出でなむ。大后の、あるまじきことにのたまふなる位をも去りなむ」と、やうやう思しなる。院の思しのたまはせしさまの、なのめならざりしを思し出づるにも、「よろづのこと、ありしにもあらず、変はりゆく世にこそあめれ。戚夫人の見けむ目のやうにはあらずとも、かならず、人笑へなることは、ありぬべき身にこそあめれ」など、世の疎ましく、過ぐしがたう思さるれば、背きなむことを思し取るに、春宮、見たてまつらで面変はりせむこと、あはれに思さるれば、忍びやかにて参りたまへり。

大将の君は、さらぬことだに、思し寄らぬことなく仕うまつりたまふを、御心地悩ましきのことつけて、御送りにも参りたまはず。おほかたの御とぶらひ

御衣をすべし置きて、みざりのきたまふに、心にもあらず、御髪の取り添へられたりければ、いと心憂く、宿世のほど、思し知られて、いみじ、と思したり。男も、こころ世をもてしづめたまふ御心、みな乱れて、うつしぎまにもあらず、よろづのことを泣く泣く怨みきこえたまへど、まことに心づきなし、と思して、いらへも聞こえたまはず。ただ、

「心地の、いと悩ましきを。かからぬ折もあらば、聞こえてむ」とのたまへど、尽きせぬ御心のほどを言ひ続けたまふ。

さすがに、いみじと聞きたまふふしもまじるらむ。あらざりしことにはあらねど、改めて、いと口惜しう思さるれば、なつかしきものから、いとようのたまひ逃れて、今宵も明け行く。

せめて従ひきこえざらむもかたじけなく、心恥づかしき御けはひなれば、「ただ、かばかりにても、時々、いみじき愁へをだに、はるけはべりぬべくは、何のおほけなき心もはべらじ」

など、たゆめきこえたまふべし。なのめなることだに、かやうなる仲らひは、あはれなることも添ふなるを、まして、たぐひなげなり。

明け果つれば、二人して、いみじきことどもを聞こえ、宮は、半ばは亡きやうなる御けしきの心苦しければ、

「世の中にありと聞こし召されむも、いと恥づかしければ、やがて亡せはべりなむも、また、この世ならぬ罪となりはべりぬべきこと」

など聞こえたまふも、むくつけきまで思し入れり。

「逢ふことのかたきを今日に限らずは

今幾世をか嘆きつつ経む

御ほだしにもこそ」

と聞こえたまへば、さすがに、うち嘆きたまひて、

「長き世の恨みを人に残しても

ぞおこたりたまへる。

かく籠もりゐたまへらむとは思しもかけず、人びとも、また御心惑はさじとて、かくなむとも申さぬなるべし。昼の御座にみぎり出でておはします。よろしう思さるるなめりとて、宮もまかでたまひなどして、御前人少なになりぬ。例もけ近くならさせたまふ人少なければ、ここかしこの物のうしろなどにぞさぶらふ。命婦の君などは、

「いかにたばかりて、出だしたてまつらむ。今宵さへ、御気上がらせたまはむ、いとほしう」

など、うちささめき扱ふ。

君は、塗籠の戸の細めに開きたるを、やをらおし開けて、御屏風のはさまに伝ひ入りたまひぬ。めづらしくうれしきにも、涙落ちて見たてまつりたまふ。

「なほ、いと苦しうこそあれ。世や尽きぬらむ」

とて、外の方を見出だしたまへるかたはら目、言ひ知らずなまめかしう見ゆ。御くだものをだに、とて参り据ゑたり。箱の蓋などにも、なつかしきさまにてあれど、見入れたまはず。世の中をいたう思し悩めるけしきにて、のどかに眺め入りたまへる、いみじうらうたげなり。髪ざし、頭つき、御髪のかかりたるさま、限りなき匂はしさなど、ただ、かの対の姫君に違ふところなし。年ごろ、すこし思ひ忘れたまへりつるを、「あさましきまでおぼえたまへるかな」と見たまふままに、すこしもの思ひのはるけどころある心地したまふ。

気高う恥づかしげなるさまなども、さらに異人とも思ひ分きがたきを、なほ、限りなく昔より思ひしめきこえてし心の思ひなしにや、「さまことに、いみじうねびまさりたまひにけるかな」と、たぐひなくおぼえたまふに、心惑ひして、やをら御帳のうちにかかづらひ入りて、御衣の裾を引きならしたまふ。けはひしるく、さと匂ひたるに、あさましうむくつけう思されて、やがてひれ伏したまへり。「見だに向きたまへかし」と心やましうつらうて、引き寄せたまへるに、

かやうのことにつけても、もて離れつれなき人の御心を、かつはめでたしと思ひきこえたまふものから、わが心の引くかたにては、なほつらう心憂し、とおぼえたまふ折多かり。

内に参りたまはむことは、うひうひしく、所狭く思しなりて、春宮を見たてまつりたまはぬを、おぼつかなく思ほえたまふ。また、頼もしき人もものしたまはねば、ただこの大将の君をぞ、よろづに頼みきこえたまへるに、なほ、この憎き御心のやまぬに、ともすれば御胸をつぶしたまひつつ、いささかもけしきを御覧じ知らずなりにしを思ふだに、いと恐ろしきに、今さらにまた、さる事の聞こえありて、わが身はさるものにて、春宮の御ためにならずよからぬこと出で来なむ、と思すに、いと恐ろしければ、御祈りをさへせさせて、このこと思ひやませたてまつらむと、思しいたらぬことなく逃れたまふを、いかなる折にかありけむ、あさましうて、近づき参りたまへり。心深くたばかりたまひけむことを、知る人なかりければ、夢のやうにぞありける。

まねぶべきやうなく聞こえ続けたまへど、宮、いとこよなくもて離れきこえたまひて、果て果ては、御胸をいたう悩みたまへば、近うさぶらひつる命婦、弁などぞ、あさましう見たてまつりあつかふ。男は、憂し、つらし、と思ひきこえたまふこと、限りなきに、来し方行く先、かきくらす心地して、うつし心失せにければ、明け果てにけれど、出でたまはずなりぬ。

御悩みにおどろきて、人びと近う参りて、しげうまがへば、我にもあらで、塗籠に押し入れられておはす。御衣ども隠し持たる人の心地ども、いとむつかし。宮は、ものをいとわびし、と思しけるに、御氣上がりて、なほ悩ましうせさせたまふ。兵部卿宮、大夫など参りて、

「僧召せ」

など騒ぐを、大将、いとわびしう聞きおはす。からうして、暮れゆくほどに

をうかがひて、例の、夢のやうに聞こえたまふ。かの、昔おぼえたる細殿の局に、中納言の君、紛らはして入れたてまつる。人目もしげきころなれば、常よりも端近なる、そら恐ろしうおぼゆ。

朝夕に見たてまつる人だに、飽かぬ御さまなれば、まして、めづらしきほどにのみある御対面の、いかでかはおろかならむ。女の御さまも、げにぞめでたき御盛りなる。重りかなるかたは、いかがあらむ、をかしうなまめき若びたる心地して、見まほしき御けはひなり。

ほどなく明け行くにや、とおぼゆるに、ただここにしも、

「宿直申し、さぶらふ」

と、声づくるなり。「また、このわたりに隠ろへたる近衛司ぞあるべき。腹ぎたなきかたへの教へおこするぞかし」と、大将は聞きたまふ。をかしきものから、わづらはし。

ここかしこ尋ねありきて、

「寅一つ」

と申すなり。女君、

「心からかたがた袖を濡らすかな

明くと教ふる声につけても」

とのたまふさま、はかなだちて、いとをかし。

「嘆きつつわが世はかくて過ぐせとや

胸のあくべき時ぞともなく」

静心なくて、出でたまひぬ。

夜深き暁月夜の、えもいはず霧りわたれるに、いといたうやつれて、振る舞ひなしたまへるしも、似るものなき御ありさまにて、承香殿の御兄の藤少将、藤壺より出でて、月の少し隈ある立蔭のもとに立てりけるを、知らで過ぎたまひけむこそいとほしけれ。もどききこゆるやうもありなむかし。

なかにこまかに思しおきて、若君をかしづき思ひきこえたまへること、限りなければ、あはれにありがたき御心と、いとどいたつききこえたまふことども、同じさまなり。限りなき御おぼえの、あまりもの騒がしきまで、暇なげに見えたまひしを、通ひたまひし所々も、かたがたに絶えたまふことどもあり、軽々しき御忍びありきも、あいなう思しなりて、ことにしたまはねば、いとのどやかに、今しもあらまほしき御ありさまなり。

西の対の姫君の御幸ひを、世人もめできこゆ。少納言なども、人知れず、「故尼上の御祈りのしるし」と見たてまつる。父親王も思ふさまに聞こえ交はしたまふ。嫡腹の、限りなくと思すは、はかばかしうもえあらぬに、ねたげなること多くて、継母の北の方は、やすからず思すべし。物語にことさらに作り出でたるやうなる御ありさまなり。

齋院は、御服にて下りゐたまひにしかば、朝顔の姫君は、替はりにゐたまひにき。賀茂のいつきには、孫王のゐたまふ例、多くもあらざりけれど、さるべき女御子やおはせざりけむ。大将の君、年月経れど、なほ御心離れたまはざりつるを、かう筋ことになりたまひぬれば、口惜しくと思す。中將におとづれたまふことも、同じことにて、御文などは絶えざるべし。昔に変わる御ありさまなどをば、ことに何とも思したらず、かやうのはかなしごとどもを、紛るることなきままに、こなたかなたと思し悩み。

帝は、院の御遺言違へず、あはれに思したれど、若うおはしますうちにも、御心なよびたるかたに過ぎて、強きところおはしまさぬなるべし、母后、祖父大臣とりどりしたまふことは、え背かせたまはず、世のまつりごと、御心にかなはぬやうなり。

わづらはしきのみまされど、尚侍の君は、人知れぬ御心し通へば、わりなくと、おぼつかなくはあらず。五壇の御修法の初めにて、慎しみおはします隙

年かへりぬれど、世の中今めかしきことなく静かなり。まして大将殿は、もの憂くて籠もりゐたまへり。除目のころなど、院の御時をばさらにもいはず、年ごろ劣るけぢめなくて、御門のわたり、所なく立ち込みたりし馬、車うすらぎて、宿直物の袋をさをさ見えぬ、親しき家司どもばかり、ことに急ぐことなげにてあるを見たまふにも、「今よりは、かくこそは」と思ひやられて、ものすさまじくなむ。

御匣殿は、二月に、尚侍になりたまひぬ。院の御思ひにやがて尼になりたまへる、替はりなりけり。やむごとなくもてなし、人がらもいとよくおはすれば、あまた参り集りたまふなかにも、すぐれて時めきたまふ。后は、里がちにおはしまして、参りたまふ時の御局には梅壺をしたれば、弘徽殿には尚侍の君住みたまふ。登花殿の埋れたりつるに、晴れ晴れしうなりて、女房なども数知らず集ひ参りて、今めかしう花やぎたまへど、御心のうちは、思ひのほかなりしことどもを忘れがたく嘆きたまふ。いと忍びて通はしたまふことは、なほ同じさまなるべし。「ものの聞こえもあらばいかならむ」と思しながら、例の御癖なれば、今しも御心ざしまさるべかめり。

院のおはしましたる世こそ憚りたまひつれ、後の御心いちはやくて、かたがた思しつめたることどもの報いせむ、と思すべかめり。ことにふれて、はしたなきことのみ出で来れば、かかるべきこととは思ししかど、見知りたまはぬ世の憂さに、立ちまふべくも思されず。

左の大殿も、すさまじき心地したまひて、ことに内にも参りたまはず。故姫君を、引きよきて、この大将の君に聞こえつけたまひし御心を、后は思しおきて、よろしうも思ひきこえたまはず。大臣の御仲も、もとよりそばそばしうおはするに、故院の御世にはわがままにおはせしを、時移りて、したり顔におはするを、あぢきなしと思したる、ことわりなり。

大将は、ありしに変はらず渡り通ひたまひて、さぶらひし人びとをも、なか

にも、まづ思し立たるることはあれど、また、さまざまの御ほだし多かり。

御四十九日までは、女御、御息所たち、みな、院に集ひたまへりつるを、過ぎぬれば、散り散りにまかだたまふ。師走の二十日なれば、おほかたの世の中とどむる空のけしきにつけても、まして晴るる世なき、中宮の御心のうちなり。大后の御心も知りたまへれば、心にまかせたまへらむ世の、はしたなく住み憂からむを思すよりも、馴れきこえたまへる年ごろの御ありさまを、思ひ出できこえたまはぬ時の間なきに、かくてもおはしますまじう、みな他々へと出でたまふほどに、悲しきこと限りなし。

宮は、二条の宮に渡りたまふ。御迎へに兵部卿宮参りたまへり。雪うち散り、風はげしうて、院の内、やうやう人目かれゆきて、しめやかなるに、大将殿、こなたに参りたまひて、古き御物語聞こえたまふ。御前の五葉の雪にしをれて、下葉枯れたるを見たまひて、親王、

「蔭ひろみ頼みし松や枯れにけむ  
下葉散りゆく年の暮かな」

何ばかりのことにもあらぬに、折から、ものあはれにて、大将の御袖、いたう濡れぬ。池の隙なう氷れるに、

「さえわたる池の鏡のさやけきに  
見なれし影を見ぬぞ悲しき」

と、思すままに、あまり若々しうぞあるや。王命婦、

「年暮れて岩井の水もこほりとぢ  
見し人影のあせもゆくかな」

そのついでに、いと多かれど、さのみ書き続くべきことかは。

渡らせたまふ儀式、変はらねど、思ひなしにあはれにて、旧き宮は、かへりて旅心地したまふにも、御里住み絶えたる年月のほど、思しめぐらさるべし。

かなること多くなむ。

春宮も、一度にと思し召しけれど、ものさわがしきにより、日を変へて、渡らせたまへり。御年のほどよりは、大人びうつくしき御さまにて、恋しと思ひきこえさせたまひけるつもりに、何心もなくうれしと思し、見たてまつりたまふ御けしき、いとあはれなり。

中宮は、涙に沈みたまへるを、見たてまつらせたまふも、さまざま御心乱れて思し召さる。よろづのことを聞こえ知らせたまへど、いとものはかなき御ほどなれば、うしろめたく悲しと見たてまつらせたまふ。

大将にも、朝廷に仕うまつりたまふべき御心づかひ、この宮の御後見したまふべきことを、返す返すのたまはず。

夜更けてぞ帰らせたまふ。残る人なく仕うまつりてののしるさま、行幸に劣るけぢめなし。飽かぬほどにて帰らせたまふを、いみじう思し召す。

大后も、参りたまはむとするを、中宮のかく添ひおはするに、御心置かれて、思しやすらふほどに、おどろおどろしきさまにもおはしまさで、隠れさせたまひぬ。足を空に、思ひ惑ふ人多かり。

御位を去らせたまふといふばかりにこそあれ、世のまつりごとをしづめさせたまへることも、我が御世の同じことにておはしまいつるを、帝はいと若うおはします、祖父大臣、いと急にさがなくおはして、その御ままになりなむ世を、いかならむと、上達部、殿上人、皆思ひ嘆く。

中宮、大将殿などは、ましてすぐれて、ものも思しわかれず、後々の御わざなど、孝じ仕うまつりたまふさまも、そこらの親王たちの御中にすぐれたまへるを、ことわりながら、いとあはれに、世人も見たてまつる。藤の御衣にやつれたまへるにつけても、限りなくきよらに心苦しげなり。去年、今年とうち続き、かかることを見たまふに、世もいとあぢきなう思さるれど、かかるついで

と聞こえたまへれど、いと暗う、ものさわがしきほどなれば、またの日、関のあなたよりぞ、御返しある。

「鈴鹿川八十瀬の波に濡れ濡れず

伊勢まで誰れか思ひおこせむ」

ことそぎて書きたまへるしも、御手いとよしよしくなまめきたるに、「あはれなるけをすこし添へたまへらましかば」と思す。

霧いたう降りて、ただならぬ朝ぼらけに、うち眺めて独りごちおはす。

「行く方を眺めもやらむこの秋は

逢坂山を霧な隔てそ」

西の対にも渡りたまはで、人やりならず、もの寂しげに眺め暮らしたまふ。まして、旅の空は、いかに御心尽くしなること多かりけむ。

院の御悩み、神無月になりては、いと重くおはします。世の中に惜しみきこえぬ人なし。内にも、思し嘆きて行幸あり。弱き御心地にも、春宮の御事を、返す返す聞こえさせたまひて、次には大将の御こと、

「はべりつる世に変はらず、大小のことを隔てず、何ごとも御後見と思せ。齡のほどよりは、世をまつりごたむにも、をさをさ憚りあるまじうなむ、見たまふる。かならず世の中たもつべき相ある人なり。さるによりて、わづらはしさに、親王にもなさず、ただ人にて、朝廷の御後見をせさせむと、思ひたまへしなり。その心違へさせたまふな」

と、あはれなる御遺言ども多かりけれど、女のまねぶべきことにしあらねば、この片端だにかたはらいたし。

帝も、いと悲しと思して、さらに違へきこえさすまじきよしを、返す返す聞こえさせたまふ。御容貌も、いときよらにねびまさらせたまへるを、うれしく頼もしく見たてまつらせたまふ。限りあれば、急ぎ帰らせたまふにも、なかな

宮の御返りのおとなおとなしきを、ほほ笑みて見るたまへり。「御年のほどよりは、をかしうもおはすべきかな」と、ただならず。かうやうに例に違へるわづらはしきに、かならず心かかる御癖にて、「いとよう見たてまつりつべかりしいはけなき御ほどを、見ずなりぬるこそねたけれ。世の中定めなければ、対面するやうもありなむかし」など思す。

心にくくよしある御けはひなれば、物見車多かる日なり。申の時に内に参りたまふ。

御息所、御輿に乗りたまへるにつけても、父大臣の限りなき筋に思し志して、いつきたてまつりたまひしありさま、変はりて、末の世に内を見たまふにも、もののみ尽きせず、あはれに思さる。十六にて故宮に参りたまひて、二十にて後れたてまつりたまふ。三十にてぞ、今日また九重を見たまひける。

「そのかみを今日はかけじと忍ぶれど

心のうちにもぞ悲しき」

齋宮は、十四にぞなりたまひける。いとうつくしうおはするさまを、うるはしうしたてたてまつりたまへるぞ、いとゆゆしきまで見えたまふを、帝、御心動きて、別れの櫛たてまつりたまふほど、いとあはれにて、しほたれさせたまひぬ。

出でたまふを待ちたてまつるとて、八省に立て続けたる出車どもの袖口、色あひも、目馴れぬさまに、心にくきけしきなれば、殿上人どもも、私の別れ惜しむ多かり。

暗う出でたまひて、二条より洞院の大路を折れたまふほど、二条の院の前なれば、大将の君、いとあはれに思されて、櫛にさして、

「振り捨てて今日は行くとも鈴鹿川

八十瀬の波に袖は濡れじや」

きたまひなむとするを、口惜しうもいとほしうも、思し悩むべし。

旅の御装束よりはじめ、人びとのまで、何くれの御調度など、いかめしうめづらしきさまにて、とぶらひきこえたまへど、何とも思されず。あはあはしう心憂き名をのみ流して、あさましき身のありさまを、今はじめたらむやうに、ほど近くなるままに、起き臥し嘆きたまふ。

齋宮は、若き御心地に、不定なりつる御出で立ちの、かく定まりゆくを、うれし、とのみ思したり。世人は、例なきことと、もどきもあはれがりも、さまざまに聞こゆべし。何ごとも、人にもどきあつかはれぬ際はやすげなり。なかなか世に抜け出でぬる人の御あたりは、所狭きこと多くなむ。

十六日、桂川にて御祓へしたまふ。常の儀式にまさりて、長奉送使など、さらぬ上達部も、やむごとなく、おぼえあるを選らせたまへり。院の御心寄せもあればなるべし。出でたまふほどに、大将殿より例の尽きせぬことども聞こえたまへり。「かけまくもかしこき御前にて」と、木綿につけて、

「鳴る神だにこそ、

八洲もる国つ御神も心あらば

飽かぬ別れの仲をことわれ

思うたまふるに、飽かぬ心地しはべるかな」

とあり。いとさわがしきほどなれど、御返りあり。宮の御をば、女別当して書かせたまへり。

「国つ神空にことわる仲ならば

なほざりごとをまづや糾さむ」

大将は、御ありさまゆかしうて、内にも参らまほしく思せど、うち捨てられて見送らむも、人悪ろき心地したまへば、思しとまりて、つれづれに眺めりたまへり。

るに、「さればよ」と、なかなか心動きて、思し乱る。

殿上の若君達などうち連れて、とかく立ちわづらふなる庭のたたずまひも、げに艶なるかたに、うけばりたるありさまなり。思ほし残すことなき御仲らひに、聞こえ交はしたまふことども、まねびやらむかたなし。

やうやう明けゆく空のけしき、ことさらに作り出でたらむやうなり。

「暁の別れはいつも露けきを

こは世に知らぬ秋の空かな」

出でがてに、御手をとらへてやすらひたまへる、いみじうなつかし。

風、いと冷やかに吹きて、松虫の鳴きからしたる声も、折知り顔なるを、さして思ふことなきだに、聞き過ぐしがたげなるに、まして、わりなき御心惑ひどもに、なかなか、こともゆかぬにや。

「おほかたの秋の別れも悲しきに

鳴く音を添へそ野辺の松虫」

悔しきこと多かれど、かひなければ、明け行く空もはしたなうて、出でたまふ。道のほどいと露けし。

女も、え心強からず、名残あはれにて眺めたまふ。ほの見たてまつりたまへる月影の御容貌、なほとまれる匂ひなど、若き人びとは身にしめて、あやまちもしつべく、めできこゆ。

「いかばかりの道にてか、かかる御ありさまを見捨てては、別れきこえむ」と、あいなく涙ぐみあへり。

御文、常よりもこまやかなるは、思しなびくばかりなれど、またうち返し、定めかねたまふべきことならねば、いとかひなし。

男は、さしも思さぬことをだに、情けのためにはよく言ひ続けたまふべかめれば、まして、おしなべての列には思ひきこえたまはざりし御仲の、かくて背

「こなたは、簀子ばかりの許されははべりや」

とて、上りゐたまへり。

はなやかにさし出でたる夕月夜に、うち振る舞ひたまへるさま、匂ひに、似るものなくめでたし。月ごろのつもりを、つきづきしう聞こえたまはむも、まばゆきほどになりになれば、榊をいささか折りて持たまへりけるを、挿し入れて、

「変らぬ色をしるべにてこそ、斎垣も越えはべりにけれ。さも心憂く」

と聞こえたまへば、

「神垣はしるしの杉もなきものを

いかにまがへて折れる榊ぞ」

と聞こえたまへば、

「少女子があたりと思へば榊葉の

香をなつかしみとめてこそ折れ」

おほかたのけはひわづらはしけれど、御簾ばかりはひき着て、長押におしかかりてゐたまへり。

心にまかせて見たてまつりつべく、人も慕ひざまに思したりつる年月は、のどかなりつる御心おごりに、さしも思されざりき。

また、心のうちに、「いかにぞや、疵ありて」、思ひきこえたまひにし後、はた、あはれもさめつつ、かく御仲も隔たりぬるを、めづらしき御対面の昔おぼえたるに、「あはれ」と、思し乱ること限りなし。来し方、行く先、思し続けられて、心弱く泣きたまひぬ。

女は、さしも見えじと思しつつむれど、え忍びたまはぬ御けしきを、いよいよ心苦しう、なほ思しとまるべきさまにぞ、聞こえたまふめる。

月も入りぬるにや、あはれなる空を眺めつつ、怨みきこえたまふに、こころ思ひ集めたまへるつらさも消えぬべし。やうやう、「今は」と、思ひ離れたまへ

とともに聞き分かれぬほどに、物の音ども絶え絶え聞こえたる、いと艶なり。

むつまじき御前、十余人ばかり、御隨身、こととしき姿ならで、いたう忍びたまへれど、ことにひきつくろひたまへる御用意、いとめでたく見えたまへば、御供なる好き者ども、所からさへ身にしみて思へり。御心にも、「などで、今まで立ちならさざりつらむ」と、過ぎぬる方、悔しう思さる。

ものはかなげなる小柴垣を大垣にて、板屋どもあたりいとかりそめなり。黒木の鳥居ども、さすがに神々しう見わたされて、わづらはしきけしきなるに、神司の者ども、ここかしこにうちしはぶきて、おのがどち、物うち言ひたるけはひなども、他にはさま変はりて見ゆ。火焼屋かすかに光りて、人気すくなく、しめじめとして、ここにも思はしき人の、月日を隔てたまへらむほどを思しやるに、いといみじうあはれに心苦し。

北の対のさるべき所に立ち隠れたまひて、御消息聞こえたまふに、遊びはみなやめて、心にくきはひ、あまた聞こゆ。

何くれの人づての御消息ばかりにて、みづからは対面したまふべきさまにもあらねば、「いとものし」と思して、

「かうやうの歩きも、今はつきなきほどになりてはべるを、思ほし知らば、かう注連のほかにはもてなしたまはで。いぶせうはべることをも、あきらめはべりにしがな」

と、まめやかに聞こえたまへば、人びと、

「げに、いとかたはらいたう」

「立ちわづらはせたまふに、いとほしう」

など、あつかひきこゆれば、「いさや。この人目も見苦しう、かの思さむことも、若々しう、出でるむが、今さらにつつましきこと」と思すに、いともの憂けれど、情けなうもてなきむにもたけからねば、とかくうち嘆き、やすらひて、るぎり出でたまへる御けはひ、いと心にくし。

齋宮の御下り、近うなりゆくままに、御息所、もの心細く思ほす。やむごとなくわづらはしきものにおぼえたまへりし大殿の君も亡せたまひて後、さりともと世人も聞こえあつかひ、宮のうちにも心ときめきせしを、その後しも、かき絶え、あさましき御もてなしを見たまふに、まことに憂しと思すことこそありけめと、知り果てたまひぬれば、よろづのあはれを思し捨てて、ひたみちにいで立ちたまふ。

親添ひて下りたまふ例も、ことになけれど、いと見放ちがたき御ありさまなるにことつけて、「憂き世を行き離れむ」と思すに、大将の君、さすがに、今はとかけ離れたまひなむも、口惜しく思されて、御消息ばかりは、あはれなるさまにて、たびたび通ふ。対面したまはむことをば、今さらにあるまじきことと、女君も思す。「人は心づきなしと、思ひ置きたまふこともあらむに、我は、今すこし思ひ乱るることのまさるべきを、あいなし」と、心強く思すなるべし。

もとの殿には、あからさまに渡りたまふ折々あれど、いたう忍びたまへば、大将殿、え知りたまはず。たはやすく御心にまかせて、参うでたまふべき御すみかにはたあらねば、おぼつかなくて月日も隔たりぬるに、院の上、おどろおどろしき御悩みにはあらで、例ならず、時々悩ませたまへば、いとど御心の暇なけれど、「つらき者に思ひ果てたまひなむも、いとほしく、人聞き情けなくや」と思し起して、野の宮に参うでたまふ。

九月七日ばかりなれば、「むげに今日明日」と思すに、女方も心あわたたしけれど、「立ちながら」と、たびたび御消息ありければ、「いでや」とは思しわづらひながら、「いとあまり埋もれいたきを、物越ばかりの対面は」と、人知れず待ちきこえたまひけり。

遙けき野辺を分け入りたまふより、いともものあはれなり。秋の花、みな衰へつつ、浅茅が原も枯れ枯れなる虫の音に、松風、すぐく吹きあはせて、そのこ

賢 木

賢

木

「今日は、いみじく思ひたまへ忍ぶるを、かく渡らせたまへるになむ、なか  
なか」

など聞こえたまひて、

「昔にならひはべりにける御よそひも、月ごろは、いとど涙に霧りふたがり  
て、色あひなく御覧ぜられはべらむと思ひたまふれど、今日ばかりは、なほや  
つれさせたまへ」

とて、いみじくし尽くしたまへるものども、また重ねてたてまつれたまへり。  
かならず今日たてまつるべき、と思しける御下襲は、色も織りざまも、世の常  
ならず、心ことなるを、かひなくやはとて、着替へたまふ。来ざらましかば、  
口惜しう思さましと、心苦し。御返りに、

「春や来ぬるとも、まづ御覧ぜられになむ、参りはべりつれど、思ひたまへ  
出でらるること多くて、え聞こえさせはべらず。

あまた年今日改めし色衣

着ては涙ぞふる心地する

えこそ思ひたまへしづめね」

と聞こえたまへり。御返り、

「新しき年ともいはずふるものは

ふりぬる人の涙なりけり」

おろかなるべきことにぞあらぬや。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

し放たず。

「この姫君を、今まで世人もその人とも知りきこえぬも、物げなきやうなり。父宮に知らせきこえてむ」と、思ほしなりて、御裳着のこと、人にあまねくはのたまはねど、なべてならぬさまに思しまうくる御用意など、いとありがたけれど、女君は、こよなう疎みきこえたまひて、「年ごろよろづに頼みきこえて、まつはしきこえけるこそ、あさましき心なりけれ」と、悔しうのみ思して、さやかに見合はせたてまつりたまはず、聞こえ戯れたまふも、苦しうわりなきものに思しむすぼほれて、ありしにもあらずなりたまへる御ありさまを、をかしうもいとほしうも思されて、

「年ごろ、思ひきこえし本意なく、馴れはまさらぬ御けしきの、心憂きこと」と、怨みきこえたまふほどに、年も返りぬ。

朔日の日は、例の、院に参りたまひてぞ、内、春宮などにも参りたまふ。それより大殿にまかでたまへり。大臣、新しき年ともいはず、昔の御ことども聞こえ出でたまひて、さうぎうしく悲しと思すに、いとどかくさへ渡りたまへるにつけて、念じ返したまへど、堪へがたう思したり。

御年の加はるけにや、ものものしきけさへ添ひたまひて、ありしよりけに、きよらに見えたまふ。立ち出でて、御方に入りたまへれば、人びともめづらしう見たてまつりて、忍びあへず。

若君見たてまつりたまへば、こよなうおよすけて、笑ひがちにおはするも、あはれなり。まみ、口つき、ただ春宮の御同じさまなれば、「人もこそ見たてまつりとがむれ」と見たまふ。

御しつらひなども変はらず、御衣掛の御装束など、例のやうにし掛けられたるに、女のが並ばぬこそ、栄なくさうぎうしく栄なけれ。

宮の御消息にて、

少納言は、「いと、かうしもや」とこそ思ひきこえさせつれ、あはれにかたじけなく、思しいたらぬことなき御心ばへを、まづうち泣かれぬ。

「さて、うちうちのにたまはせよな。かの人も、いかに思ひつらむ」と、ささめきあへり。

かくて後は、内にも院にも、あからさまに参りたまへるほどだに、静心なく、面影に恋しければ、「あやしの心や」と、我ながら思さる。通ひたまひし所々よりは、うらめしげにおどろかしきこえたまひなどすれば、いとほしと思すもあれど、新手枕の心苦しくて、「夜をや隔てむ」と、思しわづらはるれば、いともの憂くて、悩ましげにのみもてなしたまひて、

「世の中のいと憂くおぼゆるほど過ぐしてなむ、人にも見えたてまつるべき」とのみいらへたまひつつ、過ぐしたまふ。

今后は、御匣殿なほこの大将にのみ心つけたまへるを、

「げにはた、かくやむごとなかりつる方も失せたまひぬめるを、さてもあらむに、などか口惜しからむ」

など、大臣のたまふに、「いと憎し」と、思ひきこえたまひて、

「宮仕へも、をさをさしくだにしましたまへらば、などか悪しからむ」と、参らせたてまつらむことを思しはげむ。

君も、おしなべてのさまにはおぼえざりしを、口惜しとは思せど、ただ今なことさまに分くる御心もなくて、

「何かは、かばかり短かめる世に。かくて思ひ定まりなむ。人の怨みも負ふまじかりけり」

と、いとど危ふく思し懲りにたり。

「かの御息所は、いといとほしけれど、まことのよるべと頼みきこえむには、かならず心おかれぬべし。年ごろのやうにて見過ぐしたまはば、さるべき折ふしにも聞こえあはする人にてはあらむ」など、さすがに、ことのほかには思

の子はいくつか仕うまつらすべうはべらむ」

と、まめだちて申せば、

「三つが一つかにもあらむかし」

とのたまふに、心得果てて、立ちぬ。「もの馴れのさまや」と君は思す。人にも言はで、手づからといふばかり、里にてぞ、作りぬたりける。

君は、こしらへわびたまひて、今はじめ盗みもて来たらむ人の心地するも、いとをかしくて、「年ごろあはれと思ひきこえつるは、片端にもあらざりけり。人の心こそうたであるものはあれ。今は一夜も隔てむことのわりなかるべきこと」と思さる。

のたまひし餅、忍びて、いたう夜更かして持て参れり。「少納言はおとなしくて、恥づかしくや思さむ」と、思ひやり深く心しらひて、娘の弁といふを呼び出でて、

「これ、忍びて参らせたまへ」

とて、香壺の筥を一つ、さし入れたり。

「たしかに、御枕上に参らすべき祝ひの物にはべる。あな、かしこ。あだにな」

と言へば、「あやし」と思へど、

「あだなることは、まだならはぬものを」

とて、取れば、

「まことに、今はさる文字忌ませたまへよ。よも混じりはべらじ」

と言ふ。若き人にて、けしきもえ深く思ひ寄らねば、持て参りて、御枕上の御几帳よりさし入れたるを、君ぞ、例の聞こえ知らせたまふらむかし。

人はえ知らぬに、翌朝、この筥をまかでさせたまへるにぞ、親しき限りの人びと、思ひ合はすることどもありける。御皿どもなど、いつのまにかし出でけむ。花足いときよらにして、餅のさまも、ことさらび、いとをかしう調べたり。

昼つかた、渡りたまひて、

「悩ましげにしたまふらむは、いかなる御心地ぞ。今日は、暮も打たで、さうぎょうしや」

とて、覗きたまへば、いよいよ御衣ひきかづきて臥したまへり。人びとは退きつつさぶらへば、寄りたまひて、

「など、かくいぶせき御もてなしぞ。思ひのほか心に心憂くこそおはしけれな。人もいかにあやしと思ふらむ」

とて、御衾をひきやりたまへれば、汗におしひたして、額髪もいたう濡れたまへり。

「あな、うたて。これはいとゆゆしきわざぞよ」

とて、よろづにこしらへきこえたまへど、まことに、いとつらしと思ひたまひて、つゆの御いらへもしたまはず。

「よしよし。さらに見えたてまつらじ。いと恥づかし」

など怨じたまひて、御硯開けて見たまへど、物もなければ、「若の御ありさまや」と、らうたく見たてまつりたまひて、日一日、入りみて、慰めきこえたまへど、解けがたき御けしき、いとどらうたげなり。

その夜さり、亥の子餅参らせたり。かかる御思ひのほどなれば、ことことしきさまにはあらで、こなたばかりに、をかしげなる桧破籠などばかりを、色々にて参れるを見たまひて、君、南のかたに出でたまひて、惟光を召して、

「この餅、かう数々に所狭きさまにはあらで、明日の暮れに参らせよ。今日は忌ま忌ましき日なりけり」

と、うちほほ笑みてのたまふ御けしきを、心とき者にて、ふと思ひ寄りぬ。惟光、たしかにも承らで、

「げに、愛敬の初めは、日選りして聞こし召すべきことにこそ。さても、子

ぬ。

朝には、若君の御もとに御文たてまつりたまふ。あはれなる御返りを見たまふにも、尽きせぬことどものみなむ。

いとつれづれに眺めがちなれど、何となき御歩きも、もの憂く思しなられて、思しも立たれず。

姫君の、何ごともあらまほしうとのひ果てて、いとめでたうのみ見えたまふを、似げなからぬほどに、はた、見なしたまへれば、けしきばみたることなど、折々聞こえ試みたまへど、見も知りたまはぬけしきなり。

つれづれなるままに、ただこなたにて碁打ち、偏つぎなどしつつ、日を暮らしたまふに、心ばへのらうらうじく愛敬づき、はかなき戯れごとのなかにも、うつくしき筋をし出でたまへば、思し放ちたる年月こそ、たださるかたのらうたさのみはありつれ、しのびがたくなりて、心苦しけれど、いかがありけむ、人のけぢめ見たてまつりわくべき御仲にもあらぬに、男君はとく起きたまひて、女君はさらに起きたまはぬ朝あり。

人びと、「いかなれば、かくおはしますならむ。御心地の例ならず思さるるにや」と見たてまつり嘆くに、君は渡りたまふとて、御硯の箱を、御帳のうちにさし入れておはしにけり。

人まにからうして頭もたげたまへるに、引き結びたる文、御枕のもとにあり。何心もなく、ひき開けて見たまへば、

「あやなくも隔てけるかな夜をかさね

さすがに馴れし夜の衣を」

と、書きすさびたまへるやうなり。「かかる御心おはすらむ」とは、かけても思し寄らざりしかば、

「などてかう心憂かりける御心を、うらなく頼もしきものに思ひきこえけむ」と、あさましう思さる。

も、なまめかしきまさりたまへり。

春宮にも久しう参らぬおぼつかなきなど、聞こえたまひて、夜更けてぞ、まかでたまふ。

二条院には、方々払ひみがきて、男女、待ちきこえたり。上臈ども皆参う上りて、我も我もと装束き、化粧じたるを見るにつけても、かのみ並み屈じたりつるけしきどもぞ、あはれに思ひ出でられたまふ。

御装束たてまつり替へて、西の対に渡りたまへり。衣更への御しつらひ、くもりなくあざやかに見えて、よき若人童女の、形、姿めやすくとのへて、「少納言がもてなし、心もとなきところなう、心にくし」と見たまふ。

姫君、いとうつくしうひきつくろひておはす。

「久しかりつるほどに、いとこよなうこそ大人びたまひにけれ」

とて、小さき御几帳ひき上げて見たてまつりたまへば、うちそばみて笑ひたまへる御さま、飽かぬところなし。

「火影の御かたはらめ、頭つきなど、ただ、かの心尽くしきこゆる人に、違ふところなくなりゆくかな」

と見たまふに、いとうれし。

近く寄りたまひて、おぼつかかなりつるほどのことどもなど聞こえたまひて、「日ごろの物語、のどかに聞こえまほしけれど、忌ま忌ましうおぼえはべれば、しばし他方にやすらひて、参り来む。今は、とだえなく見たてまつるべければ、厭はしうさへや思されむ」

と、語らひきこえたまふを、少納言はうれしと聞くものから、なほ危ふく思ひきこゆ。「やむごとなき忍び所多うかかづらひたまへれば、またわづらはしきや立ち代はりたまはむ」と思ふぞ、憎き心なるや。

御方に渡りたまひて、中将の君といふ、御足など参りすさびて、大殿籠もり

添へて、恋しさの堪へがたきと、この大将の君の、今はとよそになりたまはむなむ、飽かずいみじく思ひたまへらるる。一日、二日も見えたまはず、かれがれにおはせしをだに、飽かず胸いたく思ひはべりしを、朝夕の光失ひては、いかでかながらふべからむ」

と、御声もえ忍びあへたまはず泣いたまふに、御前なるおとなおとなしき人など、いと悲しくて、さとうち泣きたる、そぞろ寒き夕べのけしきなり。

若き人びとは、所々に群れるつつ、おのがどち、あはれなることどもうち語らひて、

「殿の思しのたまはするやうに、若君を見たてまつりてこそは、慰むべかれと思ふも、いとはかなきほどの御形見にこそ」

とて、おのおの、「あからさまにまかでて、参らむ」と言ふもあれば、かたみに別れ惜しむほど、おのがじしあはれなることども多かり。

院へ参りたまへれば、

「いといたう面瘦せにけり。精進にて日を経るけにや」

と、心苦しげに思し召して、御前にて物など参らせたまひて、とやかくやと思し扱ひきこえさせたまへるさま、あはれにかたじけなし。

中宮の御方に参りたまへれば、人びと、めづらしがり見たてまつる。命婦の君して、

「思ひ尽きせぬことどもを、ほど経るにつけてもいかに」

と、御消息聞こえたまへり。

「常なき世は、おほかたにも思うたまへ知りにしを、目に近く見はべりつるに、厭はしきこと多く思うたまへ乱れしも、たびたびの御消息に慰めはべりてなむ、今日までも」

とて、さらぬ折だにある御けしき取り添へて、いと心苦しげなり。無紋の表の御衣に、鈍色の御下襲、纓巻きたまへるやつれ姿、はなやかなる御装ひより

あいな頼めしはべりつるを。げにこそ、心細き夕べにはべれ」

とても、泣きたまひぬ。

「いと浅はかなる人びとの嘆きにもはべるなるかな。まことに、いかなりともと、のどかに思ひたまへつるほどは、おのづから御目離るる折もはべりつらむを、なかなか今は、何を頼みにてかはおこたりはべらむ。今御覧じてむ」

とて出でたまふを、大臣見送りきこえたまひて、入りたまへるに、御しつらひよりはじめ、ありしに変はることもなけれど、空蟬のむなしき心地ぞしたまふ。

御帳の前に、御硯などうち散らして、手習ひ捨てたまへるを取りて、目をおししぼりつつ見たまふを、若き人びとは、悲しきなかにも、ほほ笑むあるべし。あはれなる古言ども、唐のも大和のも書きけがしつつ、草にも真名にも、さまざまめづらしきさまに書き混ぜたまへり。

「かしこの御手や」

と、空を仰ぎて眺めたまふ。よそ人に見たてまつりなさむが、惜しきなるべし。「旧き枕故き衾、誰と共にか」とある所に、

「なき魂ぞいとど悲しき寝し床の

あくがれがたき心ならひに」

また、「霜の花白し」とある所に、

「君なくて塵つもりぬる常夏の

露うち払ひいく夜寝ぬらむ」

一日の花なるべし、枯れて混じれり。

宮に御覧ぜさせたまひて、

「いふかひなきことをばさるものにて、かかる悲しき類ひ、世になくやはと、思ひなしつつ、契り長からで、かく心を惑はすべくてこそはありけめと、かへりてはつらく、前の世を思ひやりつつなむ、覚ましはべるを、ただ、日ごろに

大臣ぞ、やがて渡りたまへる。いと堪へがたげに思して、御袖も引き放ちたまはず。見たてまつる人びともいと悲し。

大将の君は、世を思しつづくること、いとさまざまにて、泣きたまふさま、あはれに心深きものから、いとさまよくなまめきたまへり。大臣、久しうためらひたまひて、

「齢のつもりには、さしもあるまじきことにつけてだに、涙もろなるわざにはべるを、まして、干る世なう思ひたまへ惑はれはべる心を、えのどめはべらねば、人目も、いと乱りがはしう、心弱きさまにはべるべければ、院などにも参りはべらぬなり。ことのついでには、さやうにおもむけ奏せさせたまへ。いくばくもはべるまじき老いの末に、うち捨てられたるが、つらうもはべるかな」と、せめて思ひ静めてのたまふけしき、いとわりなし。君も、たびたび鼻うちかみて、

「後れ先立つほどの定めなさは、世のさがと見たまへ知りながら、さしあたりておぼえはべる心惑ひは、類ひあるまじきわざとなむ。院にも、ありさま奏しはべらむに、推し量らせたまひてむ」と聞こえたまふ。

「さらば、時雨も隙なくはべるめるを、暮れぬほどに」と、そそのかしきこえたまふ。

うち見まはしたまふに、御几帳の後、障子のあなたなどのあき通りたるなどに、女房三十人ばかりおしこりて、濃き、薄き鈍色どもを着つつ、皆いみじう心細げにて、うちしほたれつつ集りたるを、いとあはれ、と見たまふ。

「思し捨つまじき人もとまりたまへれば、さりととも、ものついでには立ち寄せたまはじやなど、慰めはべるを、ひとへに思ひやりなき女房などは、今日を限りに、思し捨てつる故里と思ひ屈じて、長く別れぬる悲しびよりも、ただ時々馴れ仕うまつる年月の名残なかるべきを、嘆きはべるめるなむ、ことわりなる。うちとけおはしますことははべらざりつれど、さりとともつひにはと、

萱草の袴など着たるも、をかしき姿なり。

「昔を忘れざらむ人は、つれづれを忍びても、幼なき人を見捨てず、ものしたまへ。見し世の名残なく、人びときへ離れなば、たづきなさままさりぬべくなむ」

など、みな心長かるべきことどもをのたまへど、「いでや、いとど待遠にぞなりたまはむ」と思ふに、いとど心細し。

大殿は、人びとに、際々ほど置きつつ、はかなきもてあそびものども、また、まことにかの御形見なるべきものなど、わざとならぬさまに取りなしつつ、皆配らせたまひけり。

君は、かくてのみも、いかでかはつくづくと過ぐしたまはむとて、院へ参りたまふ。御車さし出でて、御前など参り集るほど、折知り顔なる時雨うちそそきて、木の葉さそふ風、あわたたしう吹き払ひたるに、御前にさぶらふ人びと、ものいと心細くて、すこし隙ありつる袖ども湿ひわたりぬ。

夜さりは、やがて二条院に泊りたまふべしとて、侍ひの人びとも、かしこにて待ちきこえむとなるべし、おのおの立ち出づるに、今日にしもとぢむまじきことなれど、またなくもの悲し。

大臣も宮も、今日のけしきに、また悲しき改めて思さる。宮の御前に御消息聞こえたまへり。

「院におぼつかながりのたまはするにより、今日なむ参りはべる。あからさまに立ち出ではべるにつけても、今日までながらへはべりにけるよと、乱り心地のみ動きてなむ、聞こえさせむもなかなかにはべるべければ、そなたにも参りはべらぬ」

とあれば、いとどしく宮は、目も見えたまはず、沈み入りて、御返りも聞こえたまはず。

「つれなながら、さるべき折々のあはれを過ぐしたまはぬ、これこそ、かたみに情けも見果つべきわざなれ。なほ、ゆゑづきよしづきて、人目に見ゆばかりなるは、あまりの難も出で来けり。対の姫君を、さは生ほし立てじ」と思す。「つれづれにて恋しと思ふらむかし」と、忘るる折なけれど、ただ女親なき子を、置きたらむ心地して、見ぬほど、うしろめたく、「いかが思ふらむ」とおぼえぬぞ、心やすきわざなりける。

暮れ果てぬれば、御殿油近く参らせたまひて、さるべき限りの人びと、御前にて物語などせさせたまふ。

中納言の君といふは、年ごろ忍び思ししかど、この御思ひのほどは、なかなかさやうなる筋にもかけたまはず。「あはれなる御心かな」と見たてまつる。おほかたにはなつかしううち語らひたまひて、

「かう、この日ごろ、ありしよりけに、誰も誰も紛るるかたなく、見なれ見なれて、えしも常にかからずは、恋しからじや。いみじきことをばさるものにて、ただうち思ひめぐらすこそ、耐へがたきこと多かりけれ」

とのたまへば、いとどみな泣きて、

「いふかひなき御ことは、ただかきくらす心地しはべるは、さるものにて、名残なきさまにあくがれ果てさせたまはむほど、思ひたまふるこそ」

と、聞こえもやらず。あはれと見わたしたまひて、

「名残なくは、いかがは。心浅くも取りなしたまふかな。心長き人だにあらば、見果てたまひなむものを。命こそはかなけれ」

とて、灯をうち眺めたまへるまみの、うち濡れたまへるほどぞ、めでたき。とりわきてらうたくしたまひし小さき童の、親どももなく、いと心細げに思へる、ことわりに見たまひて、

「あてきは、今は我をこそは思ふべき人なめれ」

とのたまへば、いみじう泣く。ほどなき相、人よりは黒う染めて、黒き汗衫、

枯れたる下草のなかに、龍胆、撫子などの、咲き出でたるを折らせたまひて、中將の立ちたまひぬる後に、若君の御乳母の宰相の君して、

「草枯れのまがきに残る撫子を

別れし秋のかたみとぞ見る

にほひ劣りてや御覧ぜらるらむ」

と聞こえたまへり。げに何心なき御笑み顔ぞ、いみじうつくしき。宮は、吹く風につけてだに、木の葉よりけにもろき御涙は、まして、とりあへたまはず。

「今も見てなかなか袖を朽たすかな

垣ほ荒れにし大和撫子」

なほ、いみじうつれづれなれば、朝顔の宮に、「今日のあはれは、さりとも見知りたまふらむ」と推し量らるる御心ばへなれば、暗きほどなれど、聞こえたまふ。絶え間遠けれど、さのものとなりたる御文なれば、咎なくて御覧ぜさす。空の色したる唐の紙に、

「わきてこの暮こそ袖は露けけれ

もの思ふ秋はあまた経ぬれど

いつも時雨は」

とあり。御手などの心とどめて書きたまへる、常よりも見どころありて、「過ぐしがたきほどなり」と人も聞こえ、みづからも思されければ、

「大内山を、思ひやりきこえながら、えやは」とて、

「秋霧に立ちおくれぬと聞きしより

しぐるる空もいかがとぞ思ふ」

とのみ、ほのかなる墨つきにて、思ひなし心にくし。

何ごとにつけても、見まきりはかたき世なめるを、つらき人しもこそと、あはれにおぼえたまふ人の御心ざまなる。

へり。

君は、西のつまの高欄におしかかりて、霜枯れの前裁見たまふほどなりけり。風荒らかに吹き、時雨さとしたるほど、涙もあらそふ心地して、

「雨となり雲とやなりにけむ、今は知らず」

と、うちひとりごちて、頬杖つきたまへる御さま、「女にては、見捨てて亡くならむ魂かならずとまりなむかし」と、色めかしき心地に、うちまもられつつ、近うついゐたまへれば、しどけなくうち乱れたまへるさまながら、紐ばかりをさし直したまふ。

これは、今すこしこまやかなる夏の御直衣に、紅のつややかなるひき重ねて、やつれたまへるしも、見ても飽かぬ心地ぞする。

中将も、いとあはれなるまみに眺めたまへり。

「雨となりしぐるる空の浮雲を

いづれの方とわきて眺めむ

行方なしや」

と、独り言のやうなるを、

「見し人の雨となりにし雲居さへ

いとど時雨にかき暮らすころ」

とのたまふ御けしきも、浅からぬほどしるく見ゆれば、

「あやしう、年ごろはいとしもあらぬ御心ざしを、院など、居立ちてのたまはせ、大臣の御もてなしも心苦しう、大宮の御方さまに、もて離るまじきなど、かたがたにさしあひたれば、えしもふり捨てたまはで、もの憂げなる御けしきながら、あり経たまふなめりかすと、いとほしう見ゆる折々ありつるを、まことに、やむごとなく重きかたは、ことに思ひきこえたまひけるなめり」

と見知るに、いよいよ口惜しうおぼゆ。よろづにつけて光失せぬる心地して、屈じいたかりけり。

はしきこえさせたまひて、この齋宮の御ことをも、ねむごろに聞こえつけさせたまひしかば、『その御代はりにも、やがて見たてまつり扱はむ』など、常にのたまはせて、『やがて内住みしたまへ』と、たびたび聞こえさせたまひしをだに、いとあるまじきこと、と思ひ離れにしを、かく心よりほかに若々しきもの思ひをして、つひに憂き名をさへ流し果てつべきこと」

と、思し乱るるに、なほ例のさまにもおはせず。

さるは、おほかたの世につけて、心にくくよしある聞こえありて、昔より名高くものしたまへば、野の宮の御移ろひのほどにも、をかしう今めきたること多くしなして、「殿上人どもの好ましきなどは、朝夕の露分けありくを、そのころの役になむする」など聞きたまひても、大将の君は、「ことわりぞかし。ゆるは飽くまでつきたまへるものを。もし、世の中に飽き果てて下りたまひなば、さうざうしくもあるべきかな」と、さすがに思されけり。

御法事など過ぎぬれど、正日までは、なほ籠もりおはす。ならばぬ御つれづれを、心苦しがりたまひて、三位中将は常に参りたまひつつ、世の中の御物語など、まめやかなるも、また例の乱りがはしきことをも聞こえ出でつつ、慰めきこえたまふに、かの内侍ぞ、うち笑ひたまふくさはひにはなるめる。大将の君は、

「あな、いとほしや。祖母殿の上、ないたう軽めたまひそ」

といさめたまふものから、常にをかしと思したり。

かの十六夜の、さやかならざりし秋のことなど、さらぬも、さまさまの好色事どもを、かたみに隈なく言ひあらはしたまふ、果て果ては、あはれなる世を言ひ言ひて、うち泣きなどもしたまひけり。

時雨うちして、ものあはれなる暮つ方、中将の君、鈍色の直衣、指貫、うすらかに衣更へして、いと雄々しうあざやかに、心恥づかしきさまして参りたま

寝に明かしかねたまへる朝ぼらけの霧りわたれるに、菊のけしきばめる枝に、濃き青鈍の紙なる文つけて、さし置きて往にけり。「今めかしうも」とて、見たまへば、御息所の御手なり。

「聞こえぬほどは、思し知るらむや。

人の世をあはれと聞くも露けきに

後るる袖を思ひこそやれ

ただ今の空に思ひたまへあまりてなむ」

とあり。「常よりも優にも書いたまへるかな」と、さすがに置きがたう見たまふものから、「つれなの御巾ひや」と心憂し。さりとして、かき絶え音なう聞こえざらむもいとほしく、人の御名の朽ちぬべきことを思し乱る。

「過ぎにし人は、とてもかくても、さるべきにこそはものしたまひけめ、何にさることを、さださだとけざやかに見聞きけむ」と悔しきは、わが御心ながら、なほえ思し直すまじきなめりかし。

「齋宮の御きよまはりもわづらはしくや」など、久しう思ひわづらひたまへど、「わざとある御返りなくは、情けなくや」とて、紫のにばめる紙に、

「こよなうほど経はべりにけるを、思ひたまへおこたらずながら、つつましくきほどは、さらば、思し知るらむやとてなむ。

とまる身も消えしもおなじ露の世に

心置くらむほどぞはかなき

かつは思し消ちてよかし。御覽ぜずもやとて、誰れにも」

と聞こえたまへり。

里におはするほどなりければ、忍びて見たまひて、ほのめかしたまへるけしきを、心の鬼にしるく見たまひて、「さればよ」と思すも、いといみじ。

「なほ、いと限りなき身の憂さなりけり。かやうなる聞こえありて、院にもいかに思さむ。故前坊の、同じき御はらからと言ふなかにも、いみじう思ひ交

思すさへ、

「限りあれば薄墨衣浅けれど

涙ぞ袖を淵となしける」

とて、念誦したまへるさま、いとどなまめかしきさまさりて、経忍びやかに誦  
みたまひつつ、「法界三昧普賢大士」とうちのたまへる、行ひ馴れたる法師より  
はけなり。若君を見たてまつりたまふにも、「何に忍ぶの」と、いとど露けけれ  
ど、「かかる形見さへなからましかば」と、思し慰む。

宮はしづみ入りて、そのままに起き上がりたまはず、危ふげに見えたまふを、  
また思し騒ぎて、御祈りなどせさせたまふ。

はかなう過ぎゆけば、御わざのいそぎなどせさせたまふも、思しかげざりし  
ことなれば、尽きせずいみじうなむ。なのめにかたほなるをだに、人の親はい  
かが思ふめる、ましてことわりなり。また、類ひおはせぬをだに、さうざうし  
く思しつるに、袖の上の玉の砕けたりけむよりも、あさましげなり。

大将の君は、二条院にだに、あからさまにも渡りたまはず、あはれに心深う  
思ひ嘆きて、行ひをまめにしたまひつつ、明かし暮らしたまふ。所々には、御  
文ばかりぞたてまつりたまふ。

かの御息所は、齋宮は左衛門の司に入りたまひにければ、いとどいつくしき  
御きよまはりにことつけて、聞こえも通ひたまはず。憂しと思ひ染みにし世も、  
なべて厭はしうなりたまひて、「かかるほだしだに添はざらましかば、願はしき  
さまにもなりなまし」と思すには、まづ対の姫君の、さうざうしくてもものした  
まふらむありさまぞ、ふと思しやらるる。

夜は、御帳の内に一人臥したまふに、宿直の人びとは近うめぐりてさぶらへ  
ど、かたはら寂しくて、「時しもあれ」と寝覚めがちなるに、声すぐれたる限り  
選りさぶらはせたまふ念仏の、暁方など、忍びがたし。

「深き秋のあはれまさりゆく風の音、身にしみけるかな」と、ならはぬ御独

に残ることなく、かつ損なはれたまふことどものあるを見る見るも、尽きせず  
思し惑へど、かひなくて日ごろになれば、いかがはせむとて、鳥辺野に率てた  
てまつるほど、いみじげなること、多かり。

こなたかなたの御送りの人ども、寺々の念仏僧など、そこら広き野に所もな  
し。院をばさらにも申さず、後の宮、春宮などの御使、さらぬ所々のも参りち  
がひて、飽かずいみじき御とぶらひを聞こえたまふ。大臣はえ立ち上がりたま  
はず、

「かかる齡の末に、若く盛りの子に後れたてまつりて、もごよふこと  
と恥ぢ泣きたまふを、ここの人悲しう見たてまつる。

夜もすがらいみじうののしりつる儀式なれど、いともはかなき御屍ばかりを  
御名残にて、暁深く帰りたまふ。

常のことなれど、人一人か、あまたしも見たまはぬことなればにや、類ひな  
く思し焦がれたり。八月二十余日の有明なれば、空もけしきもあはれ少なから  
ぬに、大臣の闇に暮れ惑ひたまへるさまを見たまふも、ことわりにいみじけれ  
ば、空のみ眺められたまひて、

「のぼりぬる煙はそれとわかねども

なべて雲居のあはれなるかな」

殿におはし着きて、つゆまどろまれたまはず。年ごろの御ありさまを思し出  
でつつ、

「などで、つひにはおのづから見直したまひてむと、のどかに思ひて、なほ  
ざりのすきびにつけても、つらしとおぼえられたてまつりけむ。世を経て、疎  
く恥づかしきものに思ひて過ぎ果てたまひぬる」

など、悔しきこと多く、思しつづけられるれど、かひなし。にぼめる御衣たて  
まつれるも、夢の心地して、「われ先立たましかば、深くぞ染めたまはまし」と、

たてまつらば、うれしかるべきを、宮のつとおはするに、心地なくやと、つつみて過ぐしつるも苦しきを、なほやうやう心強く思しなして、例の御座所にこそ。あまり若くもてなしたまへば、かたへは、かくものしたまふぞ」  
など、聞こえおきたまひて、いときよげにうち装束きて出でたまふを、常よりは目とどめて、見出だして臥したまへり。

秋の司召あるべき定めにて、大殿も参りたまへば、君達も労はり望みたまふことどもありて、殿の御あたり離れたまはねば、皆ひき続き出でたまひぬ。

殿の内、人少なにしめやかなるほどに、にはかに例の御胸をせきあげて、いといったう惑ひたまふ。内に御消息聞こえたまふほどもなく、絶え入りたまひぬ。足を空にて、誰も誰も、まかでたまひぬれば、除目の夜なりけれど、かくわりなき御障りなれば、みな事破れたるやうなり。

ののしり騒ぐほど、夜中ばかりなれば、山の座主、何くれの僧都たちも、え請じあへたまはず。今はさりととも、と思ひたゆみたりつるに、あさましければ、殿の内の人、ものにぞあたる。所々の御とぶらひの使など、立ちこみたれど、え聞こえつかず、ゆすりみちて、いみじき御心惑ひども、いと恐ろしきまで見えたまふ。

御もののけのたびたび取り入れたてまつりしを思して、御枕などもさながら、二、三日見たてまつりたまへど、やうやう変はりたまふことどものあれば、限り、と思し果つるほど、誰も誰もいといみじ。

大将殿は、悲しきことに、ことを添へて、世の中をいと憂きものに思し染みぬれば、ただならぬ御あたりの弔ひどもも、心憂しとのみぞ、なべて思さるる。院に、思し嘆き、弔ひきこえさせたまふさま、かへりて面立たしげなるを、うれしき瀬もまじりて、大臣は御涙のいとまなし。

人の申すに従ひて、いかめしきことどもを、生きや返りたまふと、さまざま

む。

若君の御まみのうつくしきなどの、春宮にいみじう似たてまつりたまへるを、見たてまつりたまひても、まづ、恋しう思ひ出でられさせたまふに、忍びがたくて、参りたまはむとて、

「内などにもあまり久しう参りはべらねば、いぶせさに、今日なむ初立ちしはべるを、すこし気近きほどにて聞こえさせばや。あまりおぼつかなき御心の隔てかな」

と、恨みきこえたまへれば、

「げに、ただひとへに艶にのみあるべき御仲にもあらぬを、いたう衰へたまへりと言ひながら、物越にてなどあべきかは」

とて、臥したまへる所に、御座近う参りたれば、入りてものなど聞こえたまふ。

御いらへ、時々聞こえたまふも、なほいと弱げなり。されど、むげに亡き人と思ひきこえし御ありさまを思し出づれば、夢の心地して、ゆゆしかりしほどのことどもなど聞こえたまふついでにも、かのむげに息も絶えたるやうにおはせしが、引き返し、つぶつぶとのたまひしことども思し出づるに、心憂ければ、

「いさや、聞こえまほしきこといと多かれど、まだいとたゆげに思したためればこそ」

とて、「御湯参れ」などさへ、扱ひきこえたまふを、いつならひたまひけむと、人びとあはれ がりきこゆ。

いとをかしげなる人の、いたう弱りそこなはれて、あるかなきかのけしきにて臥したまへるさま、いとらうたげに心苦しげなり。御髪の乱れたる筋もなく、はらはらとかかれる枕のほど、ありがたきまで見ゆれば、「年ごろ、何ごとを飽かぬことありて思ひつらむ」と、あやしきまでうちまもられたまふ。

「院などに参りて、いととうまかでなむ。かやうにて、おぼつかならず見

かでぬ。

多くの人の心を尽くしつる日ごろの名残、すこしうちやすみて、「今はさりと  
も」と思す。御修法などは、またまた始め添へさせたまへど、まづは、興あり、  
めづらしき御かしづきに、皆人ゆるべり。

院をはじめたてまつりて、親王たち、上達部、残るなき産養どもの、めづら  
かにいかめしきを、夜ごとに見ののしる。男にてさへおはすれば、そのほどの  
作法、にぎははしくめでたし。

かの御息所は、かかる御ありさまを聞きたまひても、ただならず。「かねては、  
いと危ふく聞こえしを、たひらかにもはた」と、うち思しけり。

あやしう、我にもあらぬ御心地を思しつづくるに、御衣なども、ただ芥子の  
香に染み返りたるあやしさに、御ゆるする参り、御衣着替へなどしたまひて、試  
みたまへど、なほ同じやうにのみあれば、わが身ながらだに疎ましう思さるる  
に、まして、人の言ひ思はむことなど、人にのたまふべきことならねば、心ひ  
とつに思し嘆くに、いとど御心変はりもまさりゆく。

大将殿は、心地すこしのどめたまひて、あさましかりしほどの問はず語りも、  
心憂く思し出でられつつ、「いとほど経にけるも心苦しう、また気近う見たてま  
つらむには、いかにぞや。うたておぼゆべきを、人の御ためいとほしう」、よろ  
づに思して、御文ばかりぞありける。

いたうわづらひたまひし人の御名残ゆしう、心ゆるびなげに、誰も思した  
れば、ことわりにて、御歩きもなし。なほいと悩ましげにのみしたまへば、例  
のさまにてもまだ対面したまはず。若君のいとゆしきまで見えたまふ御あり  
さまを、今から、いとさまことにもてかしづききこえたまふさま、おろかなら  
ず、ことあひたる心地して、大臣もうれしういみじと思ひきこえたまへるに、  
ただ、この御心地おこたり果てたまはぬを、心もとなく思せど、「さばかりいみ  
じかりし名残にこそは」と思して、いかでかは、さのみは心をも惑はしたまは

「何ごとも、いとかうな思し入れぞ。さりともけしうはおはせじ。いかなりとも、かならず逢ふ瀬あなれば、対面はありなむ。大臣、宮なども、深き契りある仲は、めぐりても絶えざなれば、あひ見るほどありなむと思せ」

と、慰めたまふに、

「いで、あらずや。身の上のいと苦しきを、しばしやすめたまへと聞こえむとてなむ。かく参り来むともさらに思はぬを、もの思ふ人の魂は、げにあくがるるものになむありける」

と、なつかしげに言ひて、

「嘆きわび空に乱るるわが魂を

結びとどめよしたがへのつま」

とのたまふ声、けはひ、その人にもあらず、変はりたまへり。「いとあやし」と思しめぐらすに、ただ、かの御息所なりけり。あさましう、人のとかく言ふを、よからぬ者どもの言ひ出づることも、聞きにくく思して、のたまひ消つを、目に見す見す、「世には、かかることこそはありけれ」と、疎ましうなりぬ。「あな、心憂」と思されて、

「かくのたまへど、誰とこそ知らね。たしかにのたまへ」

とのたまへば、ただそれなる御ありさまに、あさましとは世の常なり。人々近う参るも、かたはらいたう思さる。

すこし御声もしづまりたまへれば、隙おはするにやとて、宮の御湯持て寄せたまへるに、かき起こされたまひて、ほどなく生まれたまひぬ。うれしと思ふこと限りなきに、人に駆り移したまへる御もののけども、ねたがりまどふけはひ、いともの騒がしうて、後の事、またいと心もとなし。

言ふ限りなき願ども立てさせたまふけにや、たひらかに事なり果てぬれば、山の座主、何くれやむごとなき僧ども、したり顔に汗おしのごひつつ、急ぎま

くづくと臥し悩みたまふを、宮人、いみじき大事にて、御祈りなど、さまさま仕うまつる。

おどろおどろしきさまにはあらず、そこはかとなくて、月日を過ぐしたまふ。大将殿も、常にとぶらひきこえたまへど、まさる方のいたうわづらひたまへば、御心のいとまなげなり。

まださるべきほどにもあらずと、皆人もたゆみたまへるに、にはかに御けしきありて、悩みたまへば、いとどしき御祈り、数を尽くしてせさせたまへれど、例の執念き御もののけ一つ、さらに動かず、やむごとなき験者ども、めづらかなりともてなやむ。さすがに、いみじう調ぜられて、心苦しげに泣きわびて、

「すこしゆるべたまへや。大将に聞こゆべきことあり」とのたまふ。

「さればよ。あるやうあらむ」

とて、近き御几帳のもとに入れたてまつりたり。むげに限りのさまにものしたまふを、聞こえ置かまほしきこともおはするにやとて、大臣も宮もすこし退きたまへり。加持の僧ども、声しづめて法華経を誦みたる、いみじう尊し。

御几帳の帷子引き上げて見たてまつりたまへば、いとをかしげにて、御腹はいみじう高うて臥したまへるさま、よそ人だに、見たてまつらむに心乱れぬべし。まして惜しう悲しう思す、ことわりなり。白き御衣に、色あひいとはなやかにて、御髪の毛いと長うちちたきを、引き結ひてうち添へたるも、「かうてこそ、らうたげになまめきたる方添ひてをかしかりけれ」と見ゆ。御手をとらへて、

「あな、いみじ。心憂きめを見せたまふかな」

とて、ものも聞こえたまはず泣きたまへば、例はいとわづらはしう恥づかしげなる御まみを、いとたゆげに見上げて、うちまもりきこえたまふに、涙のこぼるるさまを見たまふは、いかがあはれの浅からむ。

あまりいたう泣きたまへば、「心苦しき親たちの御ことを思し、また、かく見たまふにつけて、口惜しうおぼえたまふにや」と思して、

大殿には、御もののけいたう起こりて、いみじうわづらひたまふ。「この御生  
きすだま、故父大臣の御霊など言ふものあり」と聞きたまふにつけて、思しつ  
づくれば、

「身一つの憂き嘆きよりほかに、人を悪しかれなど思ふ心もなけれど、もの  
思ひにあくがるなる魂は、さもやあらむ」

と思し知らるることもあり。

年ごろ、よろづに思ひ残すことなく過ぐしつれど、かうしも碎けぬを、はか  
なきことの折に、人の思ひ消ち、なきものにもてなすさまなりし御禊の後、ひ  
とふしに思し浮かれにし心、鎮まりがたう思さるるけにや、すこしうちまどろ  
みたまふ夢には、かの姫君とおぼしき人の、いとよらにてある所に行きて、  
とかく引きまさぐり、うつつにも似ず、たけいにかきひたぶる心出で来て、う  
ちかなぐるなど見えたまふこと、度かさなりにけり。

「あな、心憂や。げに、身を捨ててや、往にけむ」と、うつし心ならずおぼ  
えたまふ折々もあれば、「さならぬことだに、人の御ためには、よさまのことを  
しも言ひ出でぬ世なれば、ましてこれは、いとよう言ひなしつべきたよりなり」  
と思すに、いと名だたしう、

「ひたすら世に亡くなりて、後に怨み残すは世の常のことなり。それだに、  
人の上にては、罪深うゆゆしきを、うつつのわが身ながら、さる疎ましきこと  
を言ひつけらるる宿世の憂きこと。すべて、つれなき人にいかで心もかけきこ  
えじ」

と思し返せど、思ふものをなり。

齋宮は、去年内に入りたまふべかりしを、さまざま障はることありて、この  
秋入りたまふ。九月には、やがて野の宮に移ろひたまふべければ、ふたたびの  
御祓へのいそぎ、とりかさねてあるべきに、ただあやしうほけほけしうて、つ

めたる御心ならば、いとうれしうなむ」

など、語らひきこえたまふ。常よりも心苦しげなる御けしきを、ことわりに、あはれに見たてまつりたまふ。

うちとけぬ朝ぼらけに、出でたまふ御さまのをかしきにも、なほふり離れなむことは思し返さる。

「やむごとなき方に、いとど心ざし添ひたまふべきことも出で来にたれば、一つ方に思ししづまりたまひなむを、かやうに待ちきこえつつあらむも、心のみ尽きぬべきこと」

なかなかもの思ひのおどろかさるる心地したまふに、御文ばかりぞ、暮れつ方ある。

「日ごろ、すこしおこたるさまなりつる心地の、にはかにいといたう苦しげにはべるを、え引きよかでなむ」

とあるを、「例のことつけ」と、見たまふものから、

「袖濡るる恋路とかつは知りながら

おりたつ田子のみづからぞ憂き

『山の井の水』もことわりに」

とぞある。「御手は、なほここの人のなかにすぐれたりかし」と見たまひつ、  
「いかにぞやもある世かな。心も容貌も、とりどりに捨つべくもなく、また思ひ定むべきもなきを」苦しう思さる。御返り、いと暗うなりにたれど、

「袖のみ濡るるや、いかに。深からぬ御ことになむ。

浅みにや人はおりたつわが方は

身もそぼつままで深き恋路を

おぼろけにてや、この御返りを、みづから聞こえさせぬ」  
などあり。

なきもの一つあり。いみじき験者どもにも従はず、執念きけしき、おぼろけのものにあらずと見えたり。

大将の君の御通ひ所、ここかしこと思し当つるに、

「この御息所、二条の君などばかりこそは、おしなべてのさまには思したらざめれば、怨みの心も深からめ」

とささめきて、ものなど問はせたまへど、さして聞こえ当つることもなし。もののけとても、わぎと深き御かたきと聞こゆるもなし。過ぎにける御乳母だつ人、もしは親の御方につけつつ伝はりたるものの、弱目に出で来たるなど、むねむねしからずぞ乱れ現はるる。ただつくづくと、音をのみ泣きたまひて、折々は胸をせき上げつつ、いみじう堪へがたげに惑ふわぎをしたまへば、いかにおはすべきにかと、ゆゆしう悲しく思しあわてたり。

院よりも、御とぶらひ隙なく、御祈りのことまで思し寄せたまふさまのかたじけなきにつけても、いとど惜しげなる人の御身なり。

世の中あまねく惜しみきこゆるを聞きたまふにも、御息所はただならず思さる。年ごろはいとかくしもあらざりし御いどみ心を、はかなかりし所の車争ひに、人の御心の動きにけるを、かの殿には、さまでも思し寄せらざりけり。

かかる御もの思ひの乱れに、御心地、なほ例ならずのみ思さるれば、ほかに渡りたまひて、御修法などせさせたまふ。大将殿聞きたまひて、いかなる御心地にかと、いとほしう、思し起して渡りたまへり。

例ならぬ旅所なれば、いたう忍びたまふ。心よりほかなるおこたりなど、罪ゆるされぬべく聞こえつづけたまひて、悩みたまふ人の御ありさまも、憂へきこえたまふ。

「みづからはさしも思ひ入れはべらねど、親たちのいとことしう思ひまどはるるが心苦しきに、かかるほどを見過ぐさむとてなむ。よろづを思しのど

「一日の御ありさまのうるはしかりしに、今日うち乱れて歩きたまふかし。誰ならむ。乗り並ぶ人、けしうはあらじはや」と、推し量りきこゆ。「挑ましからぬ、かざし争ひかな」と、さうぎうしく思せど、かやうにいと面なからぬ人はた、人相ひ乗りたまへるにつつまれて、はかなき御いらへも、心やすく聞こえむも、まばゆしかし。

御息所は、ものを思し乱ること、年ごろよりも多く添ひにけり。つらき方に思ひ果てたまへど、今はとてふり離れ下りたまひなむは、「いと心細かりぬべく、世の人聞きも人笑へにならむこと」と思す。さりとして立ち止まるべく思しなるには、「かくこよなきさまに皆思ひくたすべかめるも、やすからず、釣する海人の浮けなれや」と、起き臥し思しわづらふけにや、御心地も浮きたるやうに思されて、悩ましうしたまふ。

大将殿には、下りたまはむことを、「もて離れてあるまじきこと」なども、妨げきこえたまはず、

「数ならぬ身を、見ま憂く思し捨てむもことわりなれど、今はなほ、いふかひなきにても、御覧じ果てむや、浅からぬにはあらむ」

と、聞こえかかづらひたまへば、定めかねたまへる御心もや慰むと、立ち出でたまへりし御禊河の荒かりし瀬に、いとど、よろづいと憂く思し入れたり。

大殿には、御もののけめきて、いたうわづらひたまへば、誰も誰も思し嘆くに、御歩きなど便なきころなれば、二条院にも時々ぞ渡りたまふ。さはいへど、やむごとなき方は、ことに思ひきこえたまへる人の、めづらしきことさへ添ひたまへる御悩みなれば、心苦しう思し嘆きて、御修法や何やなど、わが御方に、多く行はせたまふ。

もののけ、生すだまなどいふもの多く出でて、さまざまの名のりするなかに、人にさらに移らず、ただみづからの御身につと添ひたるさまにて、ことにおどろおどろしうわづらはしきこゆることもなければ、また、片時離るる折も

「千尋ともいかでか知らむ定めなく

満ち干る潮ののどけからぬに」

と、ものに書きつけておはするさま、らうらうじきものから、若うをかしきを、めでたしと思す。

今日も、所もなく立ちにけり。馬場の御殿のほどに立てわづらひて、

「上達部の車ども多くて、もの騒がしげなるわたりかな」

と、やすらひたまふに、よろしき女車の、いたう乗りこぼれたるより、扇をさし出でて、人を招き寄せて、

「ここにやは立たせたまはぬ。所避りきこえむ」

と聞こえたり。「いかなる好色者ならむ」と思されて、所もげによきわたりなれば、引き寄せさせたまひて、

「いかで得たまへる所ぞと、ねたさになむ」

とのたまへば、よしある扇のつまを折りて、

「はかなしや人のかざせる葵ゆゑ

神の許しの今日を待ちける

注連の内には」

とある手を思し出づれば、かの典侍なりけり。「あさましう、旧りがたくも今めくかな」と、憎さに、はしたなう、

「かざしける心ぞあだにおもほゆる

八十氏人になべて逢ふ日を」

女は、「つらし」と思ひきこえけり。

「悔しくもかざしけるかな名のみして

人だのめなる草葉ばかりを」

と聞こゆ。人と相ひ乗りて、簾をだに上げたまはぬを、心やましう思ふ人多かり。

がら、「なぞや、かくかたみにそばそばしからでおはせかし」と、うちつぶやかれたまふ。

今日は、二条院に離れおはして、祭見に出でたまふ。西の対に渡りたまひて、惟光に車のこと仰せたり。

「女房出で立つや」

とのたまひて、姫君のいとうつくしげにつくろひたてておはするを、うち笑みて見たてまつりたまふ。

「君は、いざたまへ。もろともに見むよ」

とて、御髪の常よりもきよらに見ゆるを、かきなでたまひて、

「久しう削ぎたまはざめるを、今日は、吉き日ならむかし」

とて、暦の博士召して、時間はせなどしたまふほどに、

「まづ、女房出でね」

とて、童の姿どものをかしげなるを御覧ず。いとらうたげなる髪どものすそ、はなやかに削ぎわたして、浮紋の表の袴にかかれるほど、けぎやかに見ゆ。

「君の御髪は、我削がむ」とて、「うたて、所狭うもあるかな。いかに生ひやらむとすらむ」

と、削ぎわづらひたまふ。

「いと長き人も、額髪はすこし短うぞあめるを、むげに後れたる筋のなきや、あまり情けなからむ」

とて、削ぎ果てて、「千尋」と祝ひきこえたまふを、少納言、「あはれにかたじけなし」と見たてまつる。

「はかりなき千尋の底の海松ぶさの

生ひゆくすゑは我のみぞ見む」

と聞こえたまへば、

壺装束などいふ姿にて、女房の卑しからぬや、また尼などの世を背きけるなども、倒れまどひつつ、物見に出でたるも、例は、「あながちなりや、あなにく」と見ゆるに、今日はことわりに、口うちすげみて、髪着こめたるあやしの者どもの、手をつくりて、額にあてつつ見たてまつりあげたるも。をこがましげなる賤の男まで、おのが顔のならむさまをば知らで笑みさかえたり。何とも見入れたまふまじき、えせ受領の娘などさへ、心の限り尽くしたる車どもに乗り、さまことさらび心げさうしたるなむ、をかしきやうやうの見物なりける。

まして、ここかしこにうち忍びて通ひたまふ所々は、人知れずのみ数ならぬ嘆きまさるも、多かり。

式部卿の宮、棧敷にてぞ見たまひける。

「いとまばゆきまでねびゆく人の容貌かな。神などは目もこそとめたまへ」と、ゆゆしく思したり。姫君は、年ごろ聞こえわたりたまふ御心ばへの世の人に似ぬを、

「なのめならむにてだにあり。まして、かうしも、いかで」

と御心とまりけり。いとど近くて見えむまでは思しよらず。若き人びとは、聞きにくきまでできこえあへり。

祭の日は、大殿にはもの見たまはず。大将の君、かの御車の所争ひを、まねび聞こゆる人ありければ、「いといとほしう憂し」と思して、

「なほ、あたら重りかにおはする人の、ものに情けおくれ、すくすくしきところつきたまへるあまりに、みづからはさしも思さざりけめども、かかる仲らひは情け交はすべきものとも思いたらぬ御おきてに従ひて、次々よからぬ人のせさせたるならむかし。御息所は、心ばせのいと恥づかしく、よしありておはするものを、いかに思し憂じにけむ」

と、いとほしくて、参うでたまへりけれど、齋宮のまだ本の宮におはしませば、榊の憚りにことつけて、心やすくも対面したまはず。ことわりとは思しな

など言ふを、その御方の人も混じれば、いとほしと見ながら、用意せむもわづらはしければ、知らず顔をつくる。

つひに、御車ども立て続けつれば、ひとだまひの奥におしやられて、物も見えず。心やましきをばさるものにて、かかるやつれをそれと知られぬるが、いみじうねたきこと、限りなし。榻などもみな押し折られて、すずろなる車の筒にうちかけたれば、またなう人悪ろく、くやしう、「何に、来つらむ」と思ふにかひなし。物も見で帰らむとしたまへど、通り出でむ隙もなきに、

「事なりぬ」

と言へば、さすがに、つらき人の御前渡りの待たるるも、心弱しや。「笹の隈」にだにあらねばにや、つれなく過ぎたまふにつけても、なかなか御心づくしなり。

げに、常よりも好みとのへたる車どもの、我も我もと乗りこぼれたる下簾の隙間どもも、さらぬ顔なれど、ほほ笑みつつ後目にとどめたまふもあり。大殿のは、しるければ、まめだちて渡りたまふ。御供の人びとうちかしこまり、心ばへありつつ渡るを、おし消たれたるありさま、こよなう思さる。

「影をのみ御手洗川のつれなきに

身の憂きほどぞいとど知らるる」

と、涙のこぼるるを、人の見るもはしたなけれど、目もあやなる御さま、容貌の、「いとどしう出でばえを見ざらましかば」と思さる。

ほどほどにつけて、装束、人のありさま、いみじくととのへたりと見ゆるなかに、上達部はいとことなるを、一所の御光にはおし消たれたためり。大将の御仮の隨身に、殿上の将監などのすることは常のことにもあらず、めづらしき行幸などの折のわざなるを、今日は右近の蔵人の将監仕うまつれり。さらぬ御隨身どもも、容貌、姿、まばゆくとのへて、世にもてかしづかれたまへるさま、木草もなびかぬはあるまじげなり。

一条の大路、所なく、むくつけきまで騒ぎたり。所々の御棧敷、心々にし尽くしたるしつらひ、人の袖口さへ、いみじき見物なり。

大殿には、かやうの御歩きもをさをさしたまはぬに、御心地さへ悩ましければ、思しかげざりけるを、若き人びと、

「いでや。おのがどちひき忍びて見はべらむこそ、栄なかるべけれ。おほよそ人だに、今日の物見には、大將殿をこそは、あやしき山賤さへ見たてまつらむとすなれ。遠き国々より、妻子を引き具しつとも参うで来なるを。御覽ぜぬは、いとあまりもはべるかな」

と言ふを、大宮聞こしめして、

「御心地もよろしき隙なり。さぶらふ人びともさうざうしげなめり」

とて、にはかにめぐらし仰せたまひて、見たまふ。

日たけゆきて、儀式もわざとならぬさまにて出でたまへり。隙もなう立ちわたりたるに、よそほしう引き続きて立ちわづらふ。よき女房車多くて、雑々の人なき隙を思ひ定めて、皆さし退けさするなかに、網代のすこしなれたるが、下簾のさまなどよしばめるに、いたう引き入りて、ほのかなる袖口、裳の裾、汗衫など、ものの色、いときよらにて、ことさらにやつれたるけはひしるく見ゆる車、二つあり。

「これは、さらに、さやうにさし退けなどすべき御車にもあらず」

と、口ごはくて、手触れさせず。いづかたにも、若き者ども酔ひ過ぎ、立ち騒ぎたるほどのことは、えしたためあへず。おとなおとなしき御前の人びとは、「かくな」など言へど、えとどめあへず。

齋宮の御母御息所、もの思し乱るる慰めにもやと、忍びて出でたまへるなりけり。つれなしつくれど、おのづから見知りぬ。

「さばかりにては、さな言はせそ」

「大將殿をぞ、豪家には思ひきこゆらむ」

たまへど、まだ表はれては、わざとてなしきこえたまはず。

女も、似げなき御年のほどを恥づかしう思して、心とけたまはぬけしきなれば、それにつつみたるさまにもてなして、院に聞こし召し入れ、世の中の人も知らぬなくなりたるを、深うしもあらぬ御心のほどを、いみじう思し嘆きけり。

かかることを聞きたまふにも、朝顔の姫君は、「いかで、人に似じ」と深う思せば、はかなきさまなりし御返りなども、をきをさなし。さりとして、人憎く、はしたなくはもてなしたまはぬ御けしきを、君も、「なほことなり」と思しわたる。

大殿には、かくのみ定めなき御心を、心づきなしと思せど、あまりつつまぬ御けしきの、いふかひなければにやあらむ、深うも怨じきこえたまはず。心苦しきさまの御心地に悩みたまひて、もの心細げに思いたり。めづらしくあはれと思ひきこえたまふ。誰れも誰れもうれしきものから、ゆゆしう思して、さまざまの御つつしみせさせたてまつりたまふ。かやうなるほどに、いとど御心のいとまなくて、思しおこたるとはなけれど、とだえ多かるべし。

そのころ、齋院も下りゐたまひて、后腹の女三宮ゐたまひぬ。帝、后と、ことに思ひきこえたまへる宮なれば、筋ことになりたまふを、いと苦しう思したれど、こと宮たちのさるべきおはせず。儀式など、常の神わざなれど、いかめしうののしる。祭のほど、限りある公事に添ふこと多く、見所こよなし。人からと見えたり。

御禊の日、上達部など、数定まりて仕うまつりたまふわざなれど、おぼえことに、容貌ある限り、下襲の色、表の袴の紋、馬鞍までみな調べたり。とりわきたる宣旨にて、大将の君も仕うまつりたまふ。かねてより、物見車心づかひしけり。

世の中かはりて後、よろづもの憂く思され、御身のやむごとなきも添ふにや、軽々しき御忍び歩きもつつまじうて、ここもかしこも、おぼつかなきの嘆きを重ねたまふ、報いにや、なほ我につれなき人の御心を、尽きせずのみ思し嘆く。今は、ましてひまなう、ただ人のやうにて添ひおはしますを、今后は心やましう思すにや、内へのみさぶらひたまへば、立ち並ぶ人なう心やすげなり。折ふしに従ひては、御遊びなどを好まじう、世の響くばかりせさせたまひつつ、今の御ありさましもめでたし。ただ、春宮をぞいと恋しう思ひきこえたまふ。御後見のなきを、うしろめたう思ひきこえて、大将の君によろづ聞こえつけたまふも、かたはらいたきものから、うれしと思す。

まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫君、齋宮にゐたまひにしかば、大将の御心ばへもいと頼もしげなきを、「幼き御ありさまのうしろめたさにことつけて下りやしなまし」と、かねてより思しけり。

院にも、かかることなむと、聞こし召して、  
「故宮のいとやむごとなく思し、時めかしたまひしものを、軽々しうおしなべたるさまにもてなすなるが、いとほしきこと。齋宮をも、この御子たちの列になむ思へば、いづかたにつけても、おろかならざらむこそよからめ。心のすさびにまかせて、かく好色わぎするは、いと世のもどき負ひぬべきことなり」  
など、御けしき悪しければ、わが御心地にも、げにと思ひ知らるれば、かしこまりてさぶらひたまふ。

「人のため、恥ぢがましきことなく、いづれをもなだらかにもてなして、女の怨みな負ひそ」

とのたまはするにも、「けしからぬ心のおほけなきを聞こし召しつけたらむ時」と、恐ろしければ、かしこまりてまかでたまひぬ。

また、かく院にも聞こし召し、のたまはするに、人の御名も、わがためも、好色がまじういとほしきに、いとどやむごとなく、心苦しき筋には思ひきこえ

葵

葵

れならむ」と、胸うちつぶれて、

「扇を取られて、からきめを見る」

と、うちおほどけたる声に言ひなして、寄りゐたまへり。

「あやしくも、さま変へける高麗人かな」

といらふるは、心知らぬにやあらむ。いらへはせで、ただ時々、うち嘆くけはひする方に寄りかかりて、几帳越しに手をとらへて、

「梓弓いるさの山に惑ふかな

ほの見し月の影や見ゆると

何ゆゑか」

と、推し当てにのたまふを、え忍ばぬなるべし。

「心いる方ならませば弓張の

月なき空に迷はましやは」

と言ふ声、ただそれなり。いとうれしきものから。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

「したり顔なりや」と笑はせたまひて、

「わざとあめるを、早うものせよかし。女御子たちなども、生ひ出づるところなれば、なべてのさまには思ふまじきを」

などのたまはす。御装ひなどひきつくろひたまひて、いたう暮るるほどに、待たれてぞ渡りたまふ。

桜の唐の綺の御直衣、葡萄染の下襲、裾いと長く引きて。皆人は表の衣なるに、あざれたる大君姿のなまめきたるにて、いつかれ入りたまへる御さま、げにいと異なり。花の匂ひもけおされて、なかなかことぎましになむ。

遊びなどいとおもしろうしたまひて、夜すこし更けゆくほどに、源氏の君、いたく酔ひ悩めるさまにもてなしたまひて、紛れ立ちたまひぬ。

寢殿に、女一宮、女三宮のおはします。東の戸口におはして、寄りゐたまへり。藤はこなたの妻にあたりてあれば、御格子ども上げわたして、人びと出でるたり。袖口など、踏歌の折おぼえて、ことさらめきもて出でたるを、ふさはしからずと、まづ藤壺わたり思し出でらる。

「なやましきに、いといたう強ひられて、わびにてはべり。かしこけれど、この御前にこそは、蔭にも隠させたまはめ」

とて、妻戸の御簾を引き着たまへば、

「あな、わづらはし。よからぬ人こそ、やむごとなきゆかりはかこちはべるなれ」

と言ふけしきを見たまふに、重々しうはあらねど、おしなべての若人どもにはあらず、あてにをかしきけはひしるし。

そらだきもの、いと煙たうくゆりて、衣の音なひ、いとはなやかにふるまひなして、心にくく奥まりたるけはひはたちおくれ、今めかしきことを好みたるわたりにて、やむごとなき御方々もの見たまふとて、この戸口は占めたまへるなるべし。さしもあるまじきことなれど、さすがにをかしう思ほされて、「いづ

と聞こえたまへば、

「ことにととのへ行ふこともはべらず。ただ公事に、そしうなる物の師どもを、ここかしこに尋ねはべりしなり。よろづのことよりは、「柳花苑」、まことに後代の例ともなりぬべく見たまへしに、まして「さかゆく春」に立ち出でさせたまへらましかば、世の面目にやはべらまし」

と聞こえたまふ。

弁、中将など参りあひて、高欄に背中おしつつ、とりどりに物の音ども調べ合はせて遊びたまふ、いとおもしろし。

かの有明の君は、はかなかりし夢を思し出でて、いともの嘆かしうながめたまふ。春宮には、卯月ばかりと思し定めたれば、いとわりなう思し乱れたるを、男も、尋ねたまはむにあとはかなくはあらねど、いづれとも知らで、ことに許したまはぬあたりにかかづらはむも、人悪く思ひわづらひたまふに、弥生の二十余日、右の大殿の弓の結に、上達部、親王たち多く集へたまひて、やがて藤の宴したまふ。

花盛りは過ぎにたるを、「ほかの散りなむ」とや教へられたりけむ、遅れて咲く桜、二木ぞいとおもしろき。新しう造りたまへる殿を、宮たちの御裳着の日、磨きしつらはれたり。はなばなとものしたまふ殿のやうにて、何ごとも今めかしようもてなしたまへり。

源氏の君にも、一日、内にて御対面のついでに、聞こえたまひしかど、おはせねば、口惜しう、ものの榮なしと思して、御子の四位少将をたてまつりたまふ。

「わが宿の花しなべての色ならば

何かはさらに君を待たまし」

内におはするほどにて、主上に奏したまふ。

るべし。さりとして、知らであらむ、はた、いと口惜しかるべければ、いかにせまし」と、思しわづらひて、つくづくとながめ臥したまへり。

「姫君、いかにつれづれならむ。日ごろになれば、屈してやあらむ」と、らうたく思しやる。かのしるしの扇は、桜襲ねにて、濃きかたにかすめる月を描きて、水にうつしたる心ばへ、目馴れたれど、ゆゑなつかしうもてならしたり。

「草の原をば」と言ひしさまのみ、心にかかりたまへば、

「世に知らぬ心地こそすれ有明の

月のゆくへを空にまがへて」

と書きつけたまひて、置きたまへり。

「大殿にも久しうなりにける」と思せど、若君も心苦しければ、こしらへむと思して、二条院へおはしぬ。見るままに、いとうつくしげに生ひなりて、愛敬づきらうらうじき心ばへ、いとことなり。飽かぬところなう、わが御心のまに教へなさむ、と思すにかなひぬべし。男の御教へなれば、すこし人馴れたることや混じらむと思ふこそ、うしろめたけれ。

日ごろの御物語、御琴など教へ暮らして出でたまふを、例のと、口惜しう思せど、今はいとようならはされて、わりなくは慕ひまつはさず。

大殿には、例の、ふとも対面したまはず。つれづれとよろづ思しめぐらされて、箏の御琴まさぐりて、

「やはらかに寝る夜はなくて」

とうたひたまふ。大臣渡りたまひて、一日の興ありしこと、聞こえたまふ。

「ここらの齡にて、明王の御代、四代をなむ見はべりぬれど、このたびのやうに、文ども警策に、舞、楽、物の音どもとのほりて、齡延ぶることなむはべらざりつる。道々のものの上手ども多かるころほひ、詳しうしろしめし、とのへさせたまへるけなり。翁もほとほと舞ひ出でぬべき心地なむしはべりし」

「さも、たゆみなき御忍びありきかな」

とつきしろひつつ、そら寝をぞしあへる。入りたまひて臥したまへれど、寝入られず。

「をかしかりつる人のさまかな。女御の御おとうとたちにこそはあらめ。まだ世に馴れぬは、五、六の君ならむかし。帥宮の北の方、頭中将のすさめぬ四の君などこそ、よしと聞きしか。なかなかそれならましかば、今すこしをかしてからまし。六は春宮にたてまつらむところざしたまへるを、いとほしうもあるべいかな。わづらはしう、尋ねむほどもまぎらはし、さて絶えなむとは思はぬけしきなりつるを、いかなれば、言通はすべきさまを教へずなりぬらむ」

など、よろづに思ふも、心のとまるなるべし。かうやうなるにつけても、まづ、「かのわたりのありさまの、こよなう奥まりたるはや」と、ありがたう思ひ比べられたまふ。

その日は後宴のことありて、まぎれ暮らしたまひつ。箏の琴仕うまつりたまふ。昨日のことよりも、なまめかしうおもしろし。藤壺は、暁に参う上りたまひにけり。「かの有明、出でやしぬらむ」と、心もそらにて、思ひ至らぬ隈なき良清、惟光をつけて、うかがはせたまひければ、御前よりまかだたまひけるほどに、

「ただ今、北の陣より、かねてより隠れ立ちてはべりつる車どもまかり出づる。御方々の里人はべりつるなかに、四位の少将、右中弁など急ぎ出でて、送りしはべりつるや、弘徽殿の御あかれならむと見たまへつる。けしうはあらぬけはひどもしるくて、車三つばかりはべりつ」

と聞こゆるにも、胸うちつぶれたまふ。

「いかにして、いづれと知らむ。父大臣など聞きて、ことごとしうもてなきむも、いかにぞや。まだ、人のありさまよく見さだめぬほどは、わづらはしか

とて、やをら抱き下ろして、戸は押し立てつ。あさましきにあきれたるさま、いとなつかしうをかしげなり。わななくわななく、

「ここに、人」

と、のたまへど、

「まろは、皆人に許されたれば、召し寄せたりとも、なんでふことかあらむ。ただ、忍びてこそ」

とのたまふ声に、この君なりけりと聞き定めて、いささか慰めけり。わびしと思へるものから、情けなくこはごはしうは見えじ、と思へり。酔ひ心地や例ならざりけむ、許さむことは口惜しきに、女も若うたをやぎて、強き心も知らぬなるべし。

らうたしと見たまふに、ほどなく明けゆけば、心あわたたし。女は、まして、さまざまに思ひ乱れたるけしきなり。

「なほ、名のりしたまへ。いかでか、聞こゆべき。かうてやみなむとは、さりとも思されじ」

とのたまへば、

「憂き身世にやがて消えなば尋ねても

草の原をば問はじとや思ふ」

と言ふさま、艶になまめきたり。

「ことわりや。聞こえ違へたる文字かな」とて、

「いづれぞと露のやどりを分かむまに

小笹が原に風もこそ吹け

わづらはしく思すことならずは、何かつつまむ。もし、すかいたまふか」

とも言ひあへず、人々起き騒ぎ、上の御局に参りちがふけしきども、しげくまよへば、いとわりなくて、扇ばかりをしるしに取り換へて、出でたまひぬ。

桐壺には、人びと多くさぶらひて、おどろきたるもあれば、かかるを、

思されむ。中宮、御目のとまるにつけて、「春宮の女御のあながちに憎みたまふらむもあやしう、わがかう思ふも心憂し」とぞ、みづから思し返されける。

「おほかたに花の姿を見ましかば

つゆも心のおかれまじやは」

御心のうちなりけむこと、いかで漏りにけむ。

夜いたう更けてなむ、事果てける。

上達部おのおのあかれ、后、春宮帰らせたまひぬれば、のどやかになりぬるに、月いと明うさし出でてをかしきを、源氏の君、酔ひ心地に、見過ぐしがたくおぼえたまひければ、「上の人びともうち休みて、かやうに思ひかけぬほどに、もしさりぬべき隙もやある」と、藤壺わたりを、わりなう忍びてうかがひありけど、語らふべき戸口も鎖してければ、うち嘆きて、なほあらじに、弘徽殿の細殿に立ち寄りたまへれば、三の口開きたり。

女御は、上の御局にやがて参う上りたまひにければ、人少なるけはひなり。

奥の枢戸も開きて、人音もせず。

「かやうにて、世の中のあやまちはするぞかし」と思ひて、やをら上りて覗きたまふ。人は皆寝たるべし。いと若うをかしげなる声の、なべての人とは聞こえぬ、

「朧月夜に似るものぞなき」

とうち誦じて、こなたさまには来るものか。いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ。女、恐ろしと思へるけしきにて、

「あな、むくつけ。こは、誰そ」とのたまへど、

「何か、疎ましき」とて、

「深き夜のあはれを知るも入る月の

おぼろけならぬ契りとぞ思ふ」

如月の二十日あまり、南殿の桜の宴させたまふ。后、春宮の御局、左右にして、参う上りたまふ。弘徽殿の女御、中宮のかくておはするを、をりふしごとによすからず思せど、物見にはえ過ぐしたまはで、参りたまふ。

日いとよく晴れて、空のけしき、鳥の声も、心地よげなるに、親王たち、上達部よりはじめて、その道のは皆、探韻賜はりて文つくりたまふ。宰相中将、「春といふ文字賜はれり」と、のたまふ声さへ、例の、人に異なり。次に頭中将、人の目移しも、ただならずおぼゆべかめれど、いとめやすくもてしづめて、声づかひなど、ものものしくすぐれたり。さての人びとは、皆臆しがちに鼻白める多かり。地下の人は、まして、帝、春宮の御才かしくすぐれておはします、かかる方にやむごとなき人多くものしたまふころなるに、恥づかしく、はるばると曇りなき庭に立ち出づるほど、はしたなくて、やすきことなれど、苦しげなり。年老いたる博士どもの、なりあやしくやつれて、例馴れたるも、あはれに、さまざま御覧ずるなむ、をかしかりける。

楽どもなどは、さらにもいはずとのへさせたまへり。やうやう入り日になるほど、春の鶯囀るといふ舞、いとおもしろく見ゆるに、源氏の御紅葉の賀の折、思し出でられて、春宮、かざし賜はせて、せちに責めのたまはするに、逃がれがたくて、立ちてのどかに袖返すところを一折れ、けしきばかり舞ひたまへるに、似るべきものなく見ゆ。左大臣、恨めしさも忘れて、涙落したまふ。

「頭中将、いづら。遅し」

とあれば、柳花苑といふ舞を、これは今すこし過ぐして、かかることもやと、心づかひやしけむ、いとおもしろければ、御衣賜はりて、いとめづらしきことに人思へり。上達部皆乱れて舞ひたまへど、夜に入りては、ことにけぢめも見えず。文など講ずるにも、源氏の君の御をば、講師もえ読みやらず、句ごとに誦じののしる。博士どもの心にも、いみじう思へり。

かうやうの折にも、まづこの君を光にしたまへれば、帝もいかでかおろかに

花 宴

花

宴

と、例の、やすからず世人も聞こえけり。

参りたまふ夜の御供に、宰相君も仕うまつりたまふ。同じ宮と聞こゆるなかにも、后腹の皇女、玉光りかかやきて、たぐひなき御おぼえにさへものしたまへば、人もいとことに思ひかしづききこえたり。まして、わりなき御心には、御輿のうちも思ひやられて、いとど及びなき心地したまふに、すずろはしきま  
でなむ。

「尽きもせぬ心の闇に暮るるかな

雲居に人を見るにつけても」

とのみ、独りごたれつつ、ものいとあはれなり。

皇子は、およすけたまふ月日に従ひて、いと見たてまつり分きがたげなるを、宮、いと苦し、と思せど、思ひ寄る人なきなめりかし。げに、いかさまに作り変へてかは、劣らぬ御ありさまは、世に出でものしたまはまし。月日の光の空に通ひたるやうに、ぞ世人も思へる。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

ことは、憂しや、世の中よ」

と言ひあはせて、「鳥籠の山なる」と、かたみに口がたむ。

さて、そののち、ともすればことのついでごとに、言ひ迎ふるくさはひなるを、いとどものむつかしき人ゆゑと、思し知るべし。女は、なほいと艶に怨みかくるを、わびしと思ひありきたまふ。

中将は、妹の君にも聞こえ出でず、ただ、「さるべき折の脅しぐさにせむ」とぞ思ひける。やむごとなき御腹々の親王たちだに、主上の御もてなしのこよなきにわづらはしがりて、いとことにさりきこえたまへるを、この中将は、「さらにおし消たれきこえじ」と、はかなきことにつけても、思ひいどみきこえたまふ。

この君一人ぞ、姫君の御一つ腹なりける。帝の御子といふばかりにこそあれ、我も、同じ大臣と聞こゆれど、御おぼえことなるが、皇女腹にてまたなくかしづかれたるは、何ばかり劣るべき際と、おぼえたまはぬなるべし。人がらも、あるべき限りとのひて、何ごともあらまほしく、たらひてぞものしたまひける。この御仲どもの挑みこそ、あやしかりしか。されど、うるさくてなむ。

七月にぞ后ゐたまふめりし。源氏の君、宰相になりたまひぬ。帝、下りみさせたまはむの御心づかひ近うなりて、この若宮を坊に、と思ひきこえさせたまふに、御後見したまふべき人おはせず。御母方の、みな親王たちにて、源氏の公事しりたまふ筋ならねば、母宮をだに動きなきさまにしおきたてまつりて、強りにと思すになむありける。

弘徽殿、いとど御心動きたまふ、ことわりなり。されど、

「春宮の御世、いと近うなりぬれば、疑ひなき御位なり。思ほしのどめよ」とぞ聞こえさせたまひける。「げに、春宮の御母にて二十余年になりたまへる女御をおきたてまつりては、引き越したてまつりたまひがたきことなりかし」

底もあらはに」

とあり。「面無のさまや」と見たまふも憎けれど、わりなしと思へりしもさすがにて、

「荒らだちし波に心は騒がねど

寄せけむ磯をいかが恨みぬ」

とのみなむありける。帯は、中將のなりけり。わが御直衣よりは色深し、と見たまふに、端袖もなかりけり。

「あやしのことどもや。おり立ちて乱るる人は、むべをこがましきことは多からむ」と、いとど御心をさめられたまふ。

中將、宿直所より、「これ、まづ綴ぢつけさせたまへ」とて、おし包みておこせたるを、「いかで取りつらむ」と、心やまし。「この帯を得ざらましかば」と思す。その色の紙に包みて、

「なか絶えばかことや負ふと危ふさに

はなだの帯を取りてだに見ず」

とて、やりたまふ。立ち返り、

「君にかく引き取られぬる帯なれば

かくて絶えぬるなかとかこたむ

え逃れさせたまはじ」

とあり。

日たけて、おのおの殿上に参りたまへり。いと静かに、もの遠きさましておはするに、頭の君もいとをかしけれど、公事多く奏しくだす日にて、いとうるはしくすくよかなるを見るも、かたみにほほ笑まる。人まにさし寄りて、

「もの隠しは懲りぬらむかし」

とて、いとねたげなるしり目なり。

「などでか、さしもあらむ。立ちながら帰りけむ人こそ、いとほしけれ。ま

るうはべこそ、さてもありけれ、五十七、八の人の、うちとけてもの言ひ騒げるけはひ、えならぬ二十の若人たちの御なかにももの怖ぢしたる、いとつきなし。かうあらぬさまにもてひがめて、恐ろしげなるけしきを見すれど、なかなかしるく見つけたまひて、「我と知りて、ことさらにするなりけり」と、をこになりぬ。「その人なめり」と見たまふに、いとをかしければ、太刀抜きたるかひなをとらへて、いといたうつみたまへれば、ねたきものから、え堪へで笑ひぬ。

「まことは、うつし心かとよ。戯れにくしや。いで、この直衣着む」とのたまへど、つととらへて、さらに許しきこえず。

「さらば、もろともにこそ」

とて、中將の帯をひき解きて脱がせたまへば、脱がじとすまふを、とかくひきしろふほどに、ほころびはほろほろと絶えぬ。中將、

「つつむめる名や漏り出でむ引きかはし

かくほころぶる中の衣に

上に取り着ば、しるからむ」

と言ふ。君、

「隠れなきものと知る知る夏衣

着たるを薄き心とぞ見る」

と言ひかはして、うらやみなきしどけな姿に引きなされて、みな出でたまひぬ。

君は、「いと口惜しく見つけれぬること」と思ひ、臥したまへり。内侍は、あさましくおぼえければ、落ちとまれる御指貫、帯など、つとめてたてまつれり。

「恨みてもいふかひぞなきたちかさね

引きてかへりし波のなごりに

従へば、すこしはやりかなる戯れ言など言ひかはして、これもめづらしき心地ぞしたまふ。

頭中将は、この君のいたうまめだち過ぐして、常にもどきたまふがねたきを、つれなくてうちうち忍びたまふかたがた多かめるを、「いかで見あらはさむ」とのみ思ひわたるに、これを見つけたる心地、いとうれし。「かかる折に、すこし脅しきこえて、御心まどはして、懲りぬやと言はむ」と思ひて、たゆめきこゆ。

風ひややかにうち吹きて、やや更けゆくほどに、すこしまどろむにやと見ゆるけしきなれば、やをら入り来るに、君は、とけてしも寝たまはぬ心なれば、ふと聞きつけて、この中将とは思ひ寄らず、「なほ忘れがたくすなる修理大夫にこそあらめ」と思すに、おとなおとなしき人に、かく似げなきふるまひをして、見つけられむことは、恥づかしければ、

「あな、わづらはし。出でなむよ。蜘蛛のふるまひは、しるかりつらむものを。心憂く、すかしたまひけるよ」

とて、直衣ばかりを取りて、屏風のうしろに入りたまひぬ。中将、をかしきを念じて、引きたてまつる屏風のもとに寄りて、ごほごほとたたみ寄せて、おどろおどろしく騒がすに、内侍は、ねびたれど、いたくよしばみなよびたる人の、先々もかやうにて、心動かす折々ありければ、ならひて、いみじく心あわたたしきにも、「この君をいかにしきこえぬるか」とわびしきに、ふるふるふつとひかへたり。「誰れと知られで出でなばや」と思せど、しどけなき姿にて、冠などうちゆがめて走らむうしろで思ふに、「いとをこなるべし」と、思しやすらふ。

中将、「いかで我と知られきこえじ」と思ひて、ものも言はず、ただいみじう怒れるけしきにもてなして、太刀を引き抜けば、女、

「あが君、あが君」

と、向ひて手をするに、ほとほと笑ひぬべし。好ましう若やぎてもてなした

衣をだに着まほしがるたぐひもあなればにや、いたうもあらがひきこえさせず。人びとも、「思ひのほかなることかな」と、扱ふめるを、頭中将、聞きつけて、「至らぬ隈なき心にて、まだ思ひ寄らざりけるよ」と思ふに、尽きせぬ好み心も見まほしうなりにければ、語らひつきにけり。

この君も、人よりはいとことなるを、「かのつれなき人の御慰めに」と思ひつれど、見まほしきは、限りありけるをとや。うたての好みや。

いたう忍ぶれば、源氏の君はえ知りたまはず。見つけきこえては、まづ怨みきこゆるを、齡のほどいとほしければ、慰めむと思せど、かなはぬもの憂さに、いと久しくなりにけるを、夕立して、名残涼しき宵のまぎれに、温明殿のわたりをたたずみありきたまへば、この内侍、琵琶をいとをかしう弾きみたり。御前などにて、男方の御遊びに交じりなどして、ことにまさる人なき上手なれば、もの恨めしうおぼえける折から、いとあはれに聞こゆ。

「瓜作りになりやしなまし」

と、声はいとをかしうて歌ふぞ、すこし心づきなき。「鄂州にありけむ昔の人も、かくやをかしかりけむ」と、耳とまりて聞きたまふ。弾きやみて、いといたう思ひ乱れたるけはひなり。君、「東屋」を忍びやかに歌ひて寄りたまへるに、

「押し開いて来ませ」

と、うち添へたるも、例に違ひたる心地ぞする。

「立ち濡るる人しもあらじ東屋に

うたてもかかる雨そそきかな」

と、うち嘆くを、我ひとりしも聞き負ふまじけれど、「うとましや、何ごとをかくまでは」と、おぼゆ。

「人妻はあなわづらはし東屋の

真屋のあまりも馴れじとぞ思ふ」

とて、うち過ぎなまほしけれど、「あまりはしたなくや」と思ひ返して、人に

らず画きたるを、さし隠して見返りたるまみ、いたう見延べたれど、目皮らいたく黒み落ち入りて、いみじうはつれそそけたり。

「似つかはしからぬ扇のさまかな」と見たまひて、わが持たまへるに、さしかへて見たまへば、赤き紙の、うつるばかり色深きに、木高き森の画を塗り隠したり。片つ方に、手はいとさだ過ぎたれど、よしなからず、「森の下草老いぬれば」など書きすさびたるを、「ことしもあれ、うたての心ばへや」と笑まれながら、

「森こそ夏の、と見ゆめる」

とて、何くれとのたまふも、似げなく、人や見つけむと苦しきを、女はさも思ひたらず、

「君し来ば手なれの駒に刈り飼はむ

盛り過ぎたる下葉なりとも」

と言ふさま、こよなく色めきたり。

「笹分けば人やとがめむいつとなく

駒なつくめる森の木隠れ

わづらはしさに」

とて、立ちたまふを、ひかへて、

「まだかかるものをこそ思ひはべらね。今さらなる、身の恥になむ」

とて泣くさま、いといみじ。

「いま、聞こえむ。思ひながらぞや」

とて、引き放ちて出でたまふを、せめておよびて、「橋柱」と怨みかくるを、主上は御桂果てて、御障子より覗かせたまひけり。「似つかはしからぬあはひかな」と、いとをかしう思されて、

「好き心なしと、常にもて悩むめるを、さはいへど、過ぐさざりけるは」

とて、笑はせたまへば、内侍は、なままばゆけれど、憎からぬ人ゆゑは、濡

と、のたまはすれど、かしこまりたるさまにて、御いらへも聞こえたまはねば、「心ゆかぬなめり」と、いとほしく思し召す。

「さるは、好き好きしううち乱れて、この見ゆる女房にまれ、またこなたかなたの人びとなど、なべてならずなども見え聞こえぎめるを、いかなるものくまに隠れありきて、かく人にも怨みらるらむ」とのたまはず。

帝の御年、ねびさせたまひぬれど、かうやうの方、え過ぐさせたまはず、采女、女蔵人などを、容貌、心あるをば、ことにもてはやし思し召したれば、よしある宮仕へ人多かるころなり。はかなきことをも言ひ触れたまふには、もて離るることもありがたきに、目馴るるにやあらむ、「げにぞ、あやしう好いたまはぎめる」と、試みに戯れ事を聞こえかかりなどする折あれど、情けなからぬほどにうちいらへて、まことには乱れたまはぬを、「まめやかにさうさうし」と思ひきこゆる人もあり。

年いたう老いたる典侍、人もやむごとなく、心ばせあり、あてに、おぼえ高くはありながら、いみじうあだめいたる心ぎまにて、そなたには重からぬあるを、「かう、さだ過ぐるまで、などさしも乱るらむ」と、いぶかしくおぼえたまひければ、戯れ事言ひ触れて試みたまふに、似げなくも思はざりける。あさまし、と思しながら、さすがにかかるもをかしうて、ものなどのたまひてけれど、人の漏り聞かむも、古めかしきほどなれば、つれなくもてなしたまへるを、女は、いとつらしと思へり。

主上の御梳櫛にさぶらひけるを、果てにければ、主上は御桂の人召して出でさせたまひぬるほどに、また人もなくて、この内侍常よりもきよげに、様体、頭つきなまめきて、装束、ありさま、いとはなやかに好ましげに見ゆるを、「さも古りがたうも」と、心づきなく見たまふものから、「いかが思ふらむ」と、さすがに過ぐしがたくて、裳の裾を引きおどろかしたまへれば、かはぼりのえな

てまつらむと思ふぞ」

など、こまごまと語らひきこえたまへば、さすがに恥づかしうて、ともかくもいらへきこえたまはず。やがて御膝に寄りかかりて、寝入りたまひぬれば、いと心苦しうて、

「今宵は出でずなりぬ」

とのたまへば、皆立ちて、御膳などこなたに参らせたり。姫君起こしたてまつりたまひて、

「出でずなりぬ」

と聞こえたまへば、慰みて起きたまへり。もろともものなど参る。いとはかなげにすさびて、

「さらば、寝たまひねかし」

と、危ふげに思ひたまへれば、かかるを見捨てては、いみじき道なりとも、おもむきがたくおぼえたまふ。

かやうに、とどめられたまふ折々なども多かるを、おのづから漏り聞く人、大殿に聞こえければ、

「誰れならむ。いとめざましきことにもあるかな」

「今までその人とも聞こえず、さやうにまつはしたはぶれなどすらむは、あてやかに心にくき人にはあらじ」

「内わたりなどにて、はかなく見たまひけむ人を、ものめかしたまひて、人やとがめむと隠したまふななり。心なげにいはけて聞こゆるは」

など、さぶらふ人びとも聞こえあへり。

内にも、かかる人ありと聞こし召して、

「いとほしく、大臣の思ひ嘆かるなることも、げに、ものげなかりしほどを、おほなおほなかくものしたる心を、さばかりのことたどらぬほどにはあらじを。などか情けなくはもてなすなるらむ」

と口ずさみて、口おほひしたまへるさま、いみじうされてうつくし。

「あな、憎。かかること口馴れたまひにけりな。みるめに飽くは、まさなきことぞよ」

とて、人召して、御琴取り寄せて弾かせたてまつりたまふ。

「箏の琴は、中の細緒の堪へがたきこそとこせけれ」

とて、平調におしくだして調べたまふ。かき合はせばかり弾きて、さしやりたまへれば、え怨じ果てず、いとうつくしう弾きたまふ。

小さき御ほどに、さしやりて、ゆしたまふ御手つき、いとうつくしければ、らうたしと思して、笛吹き鳴らしつつ教へたまふ。いとさとくて、かたき調子どもを、ただひとわたりに習ひとりたまふ。大方らうらうじうをかしき御心ばへを、「思ひしことかなふ」と思す。「保曾呂惧世利」といふものは、名は憎けれど、おもしろう吹きすさびたまへるに、かき合はせ、まだ若けれど、拍子違はず上手めきたり。

大殿油参りて、絵どもなど御覧するに、「出でたまふべし」とありつれば、人びと声づくりきこえて、

「雨降りはべりぬべし」

など言ふに、姫君、例の、心細くて屈したまへり。絵も見さして、うつぶしておはすれば、いとらうたくて、御髪のいとめでたくこぼれかかりたるを、かき撫でて、

「他なるほどは恋しくやある」

とのたまへば、うなづきたまふ。

「我も、一日も見たてまつらぬはいと苦しうこそあれど、幼くおはするほどは、心やすく思ひきこえて、まづ、くねくねしく怨むる人の心破らじと思ひて、むつかしければ、しばしかくもありくぞ。おとなしく見なしては、他へもさらに行くまじ。人の怨み負はじなど思ふも、世に長うありて、思ふさまに見えた

わが御かたに臥したまひて、「胸のやるかたなきほど過ぐして、大殿へ」と思す。御前の前裁の、何となく青みわたれるなかに、常夏のはなやかに咲き出でたるを、折らせたまひて、命婦の君のもとに、書きたまふこと、多かるべし。

「よそへつつ見るに心はなぐさまで

露けさまさる撫子の花

花に咲かなむ、と思ひたまへしも、かひなき世にはべりければ」

とあり。さりぬべき隙にやありけむ、御覽ぜさせて、

「ただ塵ばかり、この花びらに」

と聞こゆるを、わが御心にも、ものいとあはれに思し知らるるほどにて、

「袖濡るる露のゆかりと思ふにも

なほ疎まれぬ大和撫子」

とばかり、ほのかに書きさしたるやうなるを、よろこびながらたてまつれる、

「例のことなれば、しるしあらじかし」と、くづほれて眺め臥したまへるに、胸うち騒ぎて、いみじくうれしきにも涙落ちぬ。

つくづくと臥したるにも、やるかたなき心地すれば、例の、慰めには西の対にぞ渡りたまふ。

しどけなくうちふくだみたまへる鬢ぐき、あざれたる桂姿にて、笛をなつかしう吹きすさびつつ、のぞきたまへれば、女君、ありつる花の露に濡れたる心地して、添ひ臥したまへるさま、うつくしうらうたげなり。愛敬こぼるるやうにて、おはしながらとくも渡りたまはぬ、なまうらめしかりければ、例ならず、背きたまへるなるべし。端の方についで、

「こちや」

とのたまへど、おどろかず、

「入りぬる磯の」

も、うちとけむつびたまはず。人目立つまじく、なだらかにもてなしたまふものから、心づきなしと思す時もあるべきを、いとわびしく思ひのほかなる心地すべし。

四月に内へ参りたまふ。ほどよりは大きにおよすけたまひて、やうやう起き返りなどしたまふ。あさましきまで、まぎれどころなき御顔つきを、思し寄らぬことにしあれば、「またならびなきどちは、げにかよひたまへるにこそは」と、思ほしけり。いみじう思ほしかしづくこと、限りなし。源氏の君を、限りなきものに思し召しながら、世の人のゆるしきこゆまじかりしによりて、坊にも据ゑたてまつらずなりにしを、飽かず口惜しう、ただ人にてかたじけなき御ありさま、容貌に、ねびもておはするを御覧するままに、心苦しく思し召すを、「かうやむごとなき御腹に、同じ光にてさし出でたまへれば、疵なき玉」と思しかしづくに、宮はいかなるにつけても、胸のひまなく、やすからずものを思ほす。

例の、中将の君、こなたにて御遊びなどしたまふに、抱き出でたてまつらせたまひて、

「御子たち、あまたあれど、そこをのみなむ、かかるほどより明け暮れ見し。されば、思ひわたさるるにやあらむ。いとよくこそおぼえたれ。いと小さきほどは、皆かくのみあるわざにやあらむ」

とて、いみじくうつくしと思ひきこえさせたまへり。

中将の君、面の色変はる心地して、恐ろしうも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、かたがた移ろふ心地して、涙落ちぬべし。もの語りなどして、うち笑みたまへるが、いとゆゆしううつくしきに、わが身ながら、これに似たらむはいみじういたはしうおぼえたまふぞ、あながちなるや。宮は、わりなくかたはらいたきに、汗も流れてぞおはしける。中将は、なかなかなる心地の、乱るやうなれば、まかでたまひぬ。

めづらかなるまで写し取りたまへるさま、違ふべくもあらず。宮の、御心の鬼にいと苦しく、「人の見たてまつるも、あやしかりつるほどのあやまりを、まさに人の思ひとがめじや。さらぬはかなきことをだに、疵を求むる世に、いかなる名のつひに漏り出づべきにか」と思いつづくるに、身のみぞいと心憂き。命婦の君に、たまさかに逢ひたまひて、いみじき言どもを尽くしたまへど、何のかひあるべきにもあらず。若宮の御ことを、わりなくおぼつかながりきこえたまへば、

「など、かうしもあながちにのたまはすらむ。今、おのづから見たてまつらせたまひてむ」

と聞こえながら、思へるけしき、かたみにただならず。かたはらいたきことなれば、まほにもえのたまはで、

「いかならむ世に、人づてならで、聞こえさせむ」とて、泣いたまふさまぞ、心苦しき。

「いかさまに昔結べる契りにて

この世にかかるなかの隔てぞ

かかることこそ心得がたけれ」

とのたまふ。

命婦も、宮の思ほしたるさまなどを見たてまつるに、えはしたなうもさし放ちきこえず。

「見ても思ふ見ぬはたいかに嘆くらむ

こや世の人のまどふてふ闇

あはれに、心ゆるびなき御ことどもかな」

と、忍びて聞こえけり。

かくのみ言ひやる方なくて、帰りたまふものから、人のもの言ひもわづらはしきを、わりなきことにのたまはせ思して、命婦をも、昔おぼいたりしやうに

参座しにとても、あまた所も歩きたまはず、内、春宮、一院ばかり、さては、藤壺の三条の宮にぞ参りたまへる。

「今日はまたことにも見えたまふかな」

「ねびたまふままに、ゆゆしきまでなりまさりたまふ御ありさまかな」

と、人びとめできこゆるを、宮、几帳の隙より、ほの見たまふにつけても、思ほすことしげかりけり。

この御ことの、師走も過ぎにしが、心もとなきに、この月はさりとともと、宮人も待ちきこえ、内にも、さる御心まうけどもあり、つれなくて立ちぬ。「御ものけにや」と、世人も聞こえ騒ぐを、宮、いとわびしう、「このことにより、身のいたづらになりぬべきこと」と思し嘆くに、御心地もいと苦しくて悩みたまふ。

中将君は、いとど思ひあはせて、御修法など、さとはなくて所々にせさせたまふ。「世の中の定めなきにつけても、かくはかなくてや止みなむ」と、取り集めて嘆きたまふに、二月十余日のほどに、男御子生まれたまひぬれば、名残なく、内にも宮人も喜びきこえたまふ。

「命長くも」と思ほすは心憂けれど、「弘徽殿などの、うけはしげにのたまふ」と聞きしを、「むなしく聞きなしたまはましかば、人笑はれにや」と思し強りてなむ、やうやうすこしづつさはやいたまひける。

主上の、いつしかとゆかしげに思し召したること、限りなし。かの、人知れぬ御心にも、いみじう心もとなくて、人まに参りたまひて、

「主上のおぼつかながりきこえさせたまふを、まづ見たてまつりて詳しく奏しはべらむ」

と聞こえたまへど、

「むつかしげなるほどなれば」

とて、見せたてまつりたまはぬも、ことわりなり。さるは、いとあさましう、

む」

など聞こえたまへど、「わぎと人据ゑて、かしづきたまふ」と聞きたまひしよりは、「やむごとなく思し定めたることにこそは」と、心のみ置かれて、いとど疎く恥づかしく思さるべし。しひて見知らぬやうにもてなして、乱れたる御けはひには、えしも心強からず、御いらへなどうち聞こえたまへるは、なほ人よりはいとことなり。

四年ばかりがこのかみにおはすれば、うち過ぐし、恥づかしげに、盛りにととのほりて見えたまふ。「何ごとかはこの人の飽かぬところはものしたまふ。我が心のあまりけしからぬすさびに、かく怨みられたてまつるぞかし」と、思し知らる。同じ大臣と聞こゆるなかにも、おぼえやむごとなくおはするが、宮腹に一人いつきかしづきたまふ御心おごり、いとこよなくて、「すこしもおろかなるをば、めざまし」と思ひきこえたまへるを、男君は、「などかいときしも」と、ならはいたまふ、御心の隔てどもなるべし。

大臣も、かく頼もしげなき御心を、つらしと思ひきこえたまひながら、見たてまつりたまふ時は、恨みも忘れて、かしづきいとなみきこえたまふ。つとめて、出でたまふところにさしのぞきたまひて、御装束したまふに、名高き御帯、御手づから持たせてわたりたまひて、御衣のうしろひきつくろひなど、御沓を取らぬばかりにしたまふ、いとあはれなり。

「これは、内宴などいふこともはべるなるを、さやうの折にこそ」  
など聞こえたまへば、

「それは、まさされるもはべり。これはただ目馴れぬさまなればなむ」

とて、しひてささせたてまつりたまふ。げに、よろづにかしづき立てて見たてまつりたまふに、生けるかひあり、「たまさかにても、かからむ人を出だし入れて見むに、ますことあらじ」と見えたまふ。

とて、うち笑みたまへる、いとめでたう愛敬ぶきたまへり。いつしか、雛をし据ゑて、そそきゐたまへる。三尺の御厨子一具に、品々しつらひ据ゑて、また小さき屋ども作り集めて、たてまつりたまへるを、ところせきまで遊びひろげたまへり。

「雛やらふとて、犬君がこれをこぼちはべりにければ、つくろひはべるぞ」とて、いと大事と思いたり。

「げに、いと心なき人のしわざにもはべるなるかな。今つくろはせはべらむ。今日は言忌して、な泣いたまひそ」

とて、出でたまふけしき、ところせきを、人びと端に出でて見たてまつれば、姫君も立ち出でて見たてまつりたまひて、雛のなかの源氏の君つくろひ立てて、内に参らせなしたまふ。

「今年だにすこし大人びさせたまへ。十にあまりぬる人は、雛遊びは忌みはべるものを。かく御夫などまうけたてまつりたまひては、あるべかしうしめやかにてこそ、見えたてまつらせたまはめ。御髪参るほどをだに、もの憂くせさせたまふ」

など、少納言聞こゆ。御遊びにのみ心入れたまへれば、恥づかしと思はせてまつらむとて言へば、心のうちに、「我は、さは、夫まうけてけり。この人びとの夫とてあるは、醜くこそあれ。我はかくをかしげに若き人をも持たりけるかな」と、今ぞ思ほし知りける。さはいへど、御年の数添ふしるしなめりかし。かく幼き御けはひの、ことに触れてしるければ、殿のうちの人びとも、あやしと思ひけれど、いとかう世づかぬ御添臥ならむとは思はざりけり。

内より大殿にまかでたまへれば、例のうるはしうよそほしき御さまにて、心うつくしき御けしきもなく、苦しければ、

「今年よりだに、すこし世づきて改めたまふ御心見えば、いかにうれしから

てまつりたまふにも、かたがたむつましくおぼえたまひて、こまやかに御物語など聞こえたまふ。宮も、この御さまの常よりことになつかしううちとけたまへるを、「いとめでたし」と見たてまつりたまひて、婿など思し寄らで、「女にて見ばや」と、色めきたる御心には思ほす。

暮れぬれば、御簾の内に入りたまふを、うらやましく、昔は、主上の御もてなしに、いとけ近く、人づてならで、ものをも聞こえたまひしを、こよなう疎みたまへるも、つらうおぼゆるぞわりなきや。

「しばしばもさぶらふべけれど、事ぞとはべらぬほどは、おのづからおこたりはべるを、さるべきことなどは、仰せ言もはべらむこそ、うれしく」

など、すすくしうて出でたまひぬ。命婦も、たばかりきこえむかたなく、宮の御けしきも、ありしよりは、いとど憂きふしに思しおきて、心とけぬ御けしきも、恥づかしくいとほしければ、何のしるしもなくて、過ぎゆく。「はかなの契りや」と思し乱るること、かたみに尽きせず。

少納言は、「おぼえずをかしき世を見るかな。これも、故尼上の、この御ことを思して、御行ひにも祈りきこえたまひし仏の御しるしにや」とおぼゆ。「大殿、いとやむごとなくておはします。ここかしこあまたかかづらひたまふをぞ、まことに大人びたまはむほどは、むつかしきこともや」とおぼえける。されど、かくとりわきたまへる御おぼえのほどは、いと頼もしげなりかし。

御服、母方は三月こそはとて、晦日には脱がせてまつりたまふを、また親もなくて生ひ出でたまひしかば、まばゆき色にはあらで、紅、紫、山吹の地の限り織れる御小桂などを着たまへるさま、いみじう今めかしくをかしげなり。

男君は、朝拝に参りたまふとて、さしのぞきたまへり。

「今日よりは、大人しくなりたまへりや」

直されなむ」と、「おだしく軽々しからぬ御心のほども、おのづから」と、頼まるる方はことなりけり。

幼き人は、見ついたまふままに、いとよき心ぎま、容貌にて、何心もなくむつれまとはしきこえたまふ。「しばし、殿の内の人にも誰れと知らせじ」と思つて、なほ離れたる対に、御しつらひ二なくして、我も明け暮れ入りおはして、よろづの御ことどもを教へきこえたまひ、手本書きて習はせなどしつつ、ただほかなりける御むすめを迎へたまへらむやうにぞ思したる。

政所、家司などをはじめ、ことに分かちて、心もとなからず仕うまつらせたまふ。惟光よりほかの人は、おぼつかなくのみ思ひきこえたり。かの父宮も、え知りきこえたまはざりけり。

姫君は、なほ時々思ひ出できこえたまふ時、尼君を恋ひきこえたまふ折多かり。君のおはするほどは、紛らはしたまふを、夜などは、時々こそ泊まりたまへ、ここかしこの御いとまなくて、暮るれば出でたまふを、慕ひきこえたまふ折などあるを、いとらうたく思ひきこえたまへり。

二、三日内にさぶらひ、大殿にもおはする折は、いといたく屈しなごしたまへば、心苦しうて、母なき子持たらむ心地して、歩きも静心なくおぼえたまふ。僧都は、かくなむ、と聞きたまひて、あやしきものから、うれしとなむ思ほしける。かの御法事などしたまふにも、いかめしうとぶらひきこえたまへり。

藤壺のまかでたまへる三条の宮に、御ありさまもゆかしうて、参りたまへれば、命婦、中納言の君、中務などやうの人びと対面したり。「けぎやかにもてなしたまふかな」と、やすからず思へど、しづめて、大方の御物語聞こえたまふほどに、兵部卿宮参りたまへり。

この君おはすと聞きたまひて、対面したまへり。いとよしあるさまして、色めかしうなよびたまへるを、「女にて見むはをかしかりぬべく」、人知れず見た

葉のなかより、青海波のかかやき出でたるさま、いと恐ろしきまで見ゆ。かざしの紅葉いたう散り過ぎて、顔のほひにけおされたる心地すれば、御前なる菊を折りて、左大将さし替へたまふ。

日暮れかかるほどに、けしきばかりうちしぐれて、空のけしきさへ見知り顔なるに、さるいみじき姿に、菊の色々移ろひ、えならぬをかざして、今日はまたなき手を尽くしたる入綾のほど、そぞろ寒く、この世のこととおぼえず。もの見知るまじき下人などの、木のもと、岩隠れ、山の木の葉に埋もれたるさへ、すこしものの心知るは涙落としけり。

承香殿の御腹の四の御子、まだ童にて、秋風楽舞ひたまへるなむ、さしつぎの見物なりける。これらにおもしろさの尽きにければ、こと事に目も移らず、かへりてはことざましにやありけむ。

その夜、源氏中将、正三位したまふ。頭中将、正下の加階したまふ。上達部は、皆さるべき限りよろこびしたまふも、この君にひかれたまへるなれば、人の目もおどろかし、心をもよろこばせたまふ、昔の世ゆかしげなり。

宮は、そのころまかでたまひぬれば、例の、隙もやとうかがひありきたまふをことにて、大殿には騒がれたまふ。いとど、かの若草たづね取りたまひてしを、「二条院には人迎へたまふなり」と人の聞こえければ、いと心づきなしと思いたり。

「うちうちのありさまは知りたまはず、さも思さむはことわりなれど、心うつくしく、例の人のやうに怨みのたまはば、我もうらなくうち語りて、慰めきこえてむものを、思はずにのみとりないたまふ心づきなさに、さもあるまじきすさびごともし出で来るぞかし。人の御ありさまの、かたほに、そのことの飽かぬとおぼゆる疵もなし。人よりさきに見たてまつりそめてしかば、あはれにやむごとなく思ひきこゆる心をも、知りたまはぬほどこそあらめ、つひには思し

つとめて、中将君、

「いかに御覧じけむ。世に知らぬ乱り心地ながらこそ。

もの思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の

袖うち振りし心知りきや

あなかしこ」

とある御返り、目もあやなりし御さま、容貌に、見たまひ忍ばれずやありけむ、

「唐人の袖振ることは遠けれど

立ち居につけてあはれとは見き

大方には」

とあるを、限りなうめづらしう、「かやうの方さへ、たどたどしからず、ひとの朝廷まで思ほしやれる御后言葉の、かねても」と、ほほ笑まれて、持経のやうにひき広げて見るたまへり。

行幸には、親王たちなど、世に残る人なく仕うまつりたまへり。春宮もおはします。例の、楽の舟ども漕ぎめぐりて、唐土、高麗と、尽くしたる舞ども、種多かり。楽の声、鼓の音、世を響かす。

一日の源氏の御夕影、ゆゆしう思されて、御誦経など所々にせさせたまふを、聞く人もことわりとあはれがり聞こゆるに、春宮の女御は、あながちなりと、憎みきこえたまふ。

垣代など、殿上人、地下も、心殊なりと世人に思はれたる有職の限りとのへさせたまへり。宰相二人、左衛門督、右衛門督、左右の楽のこと行ふ。舞の師どもなど、世になべてならぬを取りつつ、おのおの籠りみてなむ習ひける。

木高き紅葉の蔭に、四十人の垣代、言ひ知らず吹き立てたる物の音どもにあひたる松風、まことの深山おろしと聞こえて吹きまよひ、色々に散り交ふ木の

朱雀院の行幸は、神無月の十日あまりなり。世の常ならず、おもしろかるべきたびのことなりければ、御方々、物見たまはぬことを口惜しがりたまふ。主上も、藤壺の見たまはざらむを、飽かず思さるれば、試楽を御前にて、せさせたまふ。

源氏中将は、青海波をぞ舞ひたまひける。片手には大殿の頭中将。容貌、用意、人にはことなるを、立ち並びては、なほ花のかたはらの深山木なり。

入り方の日かげ、さやかにさしたるに、楽の声まさり、もののおもしろきほどに、同じ舞の足踏み、おももち、世に見えぬさまなり。詠などしたまへるは、「これや、仏の御迦陵頻伽の声ならむ」と聞こゆ。おもしろくあはれなるに、帝、涙を拭ひたまひ、上達部、親王たちも、みな泣きたまひぬ。詠はてて、袖うちなほしたまへるに、待ちとりたる楽のにぎははしきに、顔の色あひまさりて、常よりも光ると見えたまふ。

春宮の女御、かくめでたきにつけても、ただならず思して、「神など、空にめでつべき容貌かな。うたてゆゆし」とのたまふを、若き女房などは、心憂しと耳とどめけり。藤壺は、「おほけなき心のなからましかば、ましてめでたく見えまし」と思すに、夢の心地なむしたまひける。

宮は、やがて御宿直なりけり。

「今日の試楽は、青海波に事みな尽きぬな。いかが見たまひつる」

と、聞こえたまへば、あいなう、御いらへ聞こえにくくて、

「殊にはべりつ」とばかり聞こえたまふ。

「片手もけしうはあらずこそ見えつれ。舞のさま、手づかひなむ、家の子は殊なる。この世に名を得たる舞の男どもも、げにいとかしこけれど、ここしうなまめいたる筋を、えなむ見せぬ。試みの日、かく尽くしつれば、紅葉の蔭やさうざうしくと思へど、見せたてまつらむの心にて、用意せさせつる」など聞こえたまふ。

紅葉賀

紅  
葉  
賀

かしき御ありさまどもなれば、思ふことなくて遊びあへり。

君は、男君のおはせずなどして、さうざうしき夕暮などばかりぞ、尼君を恋ひきこえたまひて、うち泣きなどしたまへど、宮をばことに思ひ出できこえたまはず。もとより見ならひきこえたまはでならひたまへれば、今はただこの後の親を、いみじう睦びまつはしきこえたまふ。ものよりおはすれば、まづ出でむかひて、あはれにうち語らひ、御懐に入りゐて、いささか疎く恥づかしとも思ひたらず。さるかたに、いみじうらうたきわざなりけり。

さかしら心あり、何くれとむつかしき筋になりぬれば、わが心地もすこし違ふふしも出で来やと、心おかれ、人も恨みがちに、思ひのほかのこと、おのづから出で来るを、いとをかしきもてあそびなり。女などはた、かばかりになれば、心やすくうちふるまひ、隔てなきさまに臥し起きなどは、えしもすまじきを、これは、いとさまかはりたるかしづきぐさなりと、思ほいためり。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

「まだ、ようは書かず」

とて、見上げたまへるが、何心なくうつくしげなれば、うちほほ笑みて、

「よからねど、むげに書かぬこそ悪ろけれ。教へきこえむかし」

とのたまへば、うちそばみて書いたまふ手つき、筆とりたまへるさまの幼げなるも、らうたうのみおぼゆれば、心ながらあやしと思す。「書きそこなひつ」と恥ぢて隠したまふを、せめて見たまへば、

「かこつべきゆゑを知らねばおぼつかな

いかなる草のゆかりなるらむ」

と、いと若けれど、生ひ先見えて、ふくよかに書いたまへり。故尼君のにぞ似たりける。「今めかしき手本習はば、いとよう書いたまひてむ」と見たまふ。雛など、わざと屋ども作り続けて、もろともに遊びつつ、こよなきもの思ひの紛らはしなり。

かのとまりにし人びと、宮渡りたまひて、尋ねきこえたまひけるに、聞こえやる方なくてぞ、わびあへりける。「しばし、人に知らせじ」と君ものたまひ、少納言も思ふことなれば、せちに口固めやりたり。ただ、「行方も知らず、少納言が率て隠しきこえたる」とのみ聞こえさするに、宮も言ふかひなう思して、「故尼君も、かしこに渡りたまはむことを、いとものしと思したりしことなれば、乳母の、いとさし過ぐしたる心ばせのあまり、おいらかに渡さむを、便なし、などは言はで、心にまかせ、率てはふらかしつるなめり」と、泣く泣く帰りたまひぬ。「もし、聞き出でたてまつらば、告げよ」とのたまふも、わづらはしく。僧都の御もにも、尋ねきこえたまへど、あとはかなくて、あたらしかりし御容貌など、恋しく悲しと思す。

北の方も、母君を憎しと思ひきこえたまひける心も失せて、わが心にまかせつべう思しけるに違ひぬるは、口惜しう思しけり。

やうやう人参り集りぬ。御遊びがたきの童女、児ども、いとめづらかに今め

とのたまひて、対に童女召しにつかはす。「小さき限り、ことさらに参れ」とありければ、いとをかしげにて、四人参りたり。

君は御衣にまとはれて臥したまへるを、せめて起こして、

「かう、心憂くなおはせそ。すずろなる人は、かうはありなむや。女は心柔らかなるなむよき」

など、今より教へきこえたまふ。

御容貌は、さし離れて見しよりも、清らにて、なつかしううち語らひつつ、をかしき絵、遊びものども取りに遣はして、見せたてまつり、御心につくことどもをしたまふ。

やうやう起きみて見たまふに、鈍色のこまやかなるが、うち萎えたるどもを着て、何心なくうち笑みなどしてゐたまへるが、いとうつくしきに、我もうち笑まれて見たまふ。

東の対に渡りたまへるに、立ち出でて、庭の木立、池の方など覗きたまへば、霜枯れの前裁、絵に描けるやうにおもしろくて、見も知らぬ四位、五位こきまぜに、隙なう出で入りつつ、「げに、をかしき所かな」と思す。御屏風どもなど、いとをかしき絵を見つつ、慰めておはするもはかなしや。

君は、二、三日、内へも参りたまはで、この人をなつけ語らひきこえたまふ。やがて本にと思すにや、手習、絵などさまさまに書きつつ、見せたてまつりたまふ。いみじうをかしげに書き集めたまへり。「武蔵野と言へばかこたれぬ」と、紫の紙に書いたまへる墨つきの、いとことなるを取りて見ると、すこし小さくて、

「ねは見ねどあはれとぞ思ふ武蔵野の

露分けわぶる草のゆかりを」

とあり。

「いで、君も書いたまへ」とあれば、

「そは、心ななり。御自ら渡したてまつりつれば、帰りなむとあらば、送りせむかし」

とのたまふに、笑ひて下りぬ。にはかに、あさましう、胸も静かならず。「宮の思しのたまはむこと、いかになり果てたまふべき御ありさまにか、とてもかくても、頼もしき人びとに後れたまへるがいみじさ」と思ふに、涙の止まらぬを、さすがにゆゆしければ、念じりたり。

こなたは住みたまはぬ対なれば、御帳などもなかりけり。惟光召して、御帳、御屏風など、あたりあたり仕立てさせたまふ。御几帳の帷子引き下ろし、御座などただひき繕ふばかりにてあれば、東の対に、御宿直物召しに遣はして、大殿籠もりぬ。

若君は、いとむくつけく、いかにすることならむと、ふるはれたまへど、さすがに声立ててもえ泣きたまはず。

「少納言がもとに寝む」

とのたまふ声、いと若し。

「今は、さは大殿籠もるまじきぞよ」

と教へきこえたまへば、いとわびしくて泣き臥したまへり。乳母はうちも臥されず、ものもおぼえず起きりたり。

明けゆくままに、見わたせば、御殿の造りざま、しつらひざま、さらにも言はず、庭の砂子も玉を重ねたらむやうに見えて、かかやく心地するに、はしたなく思ひゐたれど、こなたには女などもさぶらはざりけり。け疎き客人などの参る折節の方なりければ、男どもぞ御簾の外にありける。

かく、人迎へたまへりと、聞く人、「誰れならむ。おぼろけにはあらじ」と、ささめく。御手水、御粥など、こなたに参る。日高う寝起きたまひて、

「人なくて、悪しかめるを、さるべき人びと、夕づけてこそは迎へさせたまはめ」

君は何心もなく寝たまへるを、抱きおどろかしたまふに、おどろきて、宮の御迎へにおはしたると、寝おびれて思したり。

御髪かき繕ひなどしたまひて、

「いぎ、たまへ。宮の御使にて参り来つるぞ」

とのたまふに、「あらざりけり」と、あきれて、恐ろしと思ひたれば、

「あな、心憂。まろも同じ人ぞ」

とて、かき抱きて出でたまへば、大輔、少納言など、「こは、いかに」と聞こゆ。

「ここには、常にもえ参らぬがおぼつかなければ、心やすき所にと聞こえしを、心憂く、渡りたまへるなれば、まして聞こえがたかべければ。人一人参られよかし」

とのたまへば、心あわたたしくて、

「今日は、いと便なくなむはべるべき。宮の渡らせたまはむには、いかさまにか聞こえやらむ。おのづから、ほど経て、さるべきにおはしまさば、ともかうもはべりなむを、いと思ひやりなきほどのことにはべれば、さぶらふ人びと苦しうはべるべし」と聞こゆれば、

「よし、後にも人は参りなむ」とて、御車寄せさせたまへば、あさましう、いかさまにと思ひあへり。

若君も、あやしと思して泣いたまふ。少納言、とどめきこえむかたなければ、昨夜縫ひし御衣どもひきさげて、自らもよろしき衣着かへて、乗りぬ。

二条院は近ければ、まだ明うもならぬほどにおはして、西の対に御車寄せて下りたまふ。若君をば、いと軽らかにかき抱きて下ろしたまふ。

少納言、

「なほ、いと夢の心地しはべるを、いかにしはべるべきことにか」と、やすらへば、

幼き人を盗み出でたりと、もどきおひなむ。そのさきに、しばし、人にも口固めて、渡してむ」と思して、

「暁かしこにもせむ。車の装束さながら。隨身一人二人仰せおきたれ」とのたまふ。うけたまはりて立ちぬ。

君、「いかにせまし。聞こえありて好きがましきやうなるべきこと。人のほただにものを思ひ知り、女の心交はしけることと推し測られぬべくは、世の常なり。父宮の尋ね出でたまへらむも、はしたなう、すずろなるべきを」と、思し乱るれど、さて外してむはいと口惜しかべければ、まだ夜深う出でたまふ。

女君、例のしぶしぶに、心もとけずものしたまふ。

「かしこに、いとせちに見るべきことのはべるを思ひたまへ出でて、立ちかへり参り来なむ」とて、出でたまへば、さぶらふ人びとも知らざりけり。わが御方にて、御直衣などはたてまつる。惟光ばかりを馬に乗せておはしぬ。

門うちたたかせたまへば、心知らぬ者の開けたるに、御車をやら引き入れさせて、大夫、妻戸を鳴らして、しはぶけば、少納言聞き知りて、出で来たり。

「ここに、おはします」と言へば、

「幼き人は、御殿籠もりてなむ。などか、いと夜深うは出でさせたまへると、もののたよりと思ひて言ふ。

「宮へ渡らせたまふべかなるを、そのさきに聞こえ置かむとてなむ」とのたまへば、

「何ごとにかはべらむ。いかにはかばかしき御答へ聞こえさせたまはむ」

とて、うち笑ひてゐたり。君、入りたまへば、いとかたはらいたく、

「うちとけて、あやしき古人どものはべるに」と聞こえさす。

「まだ、おどろいたまはじな。いで、御目覚ましきこえむ。かかる朝霧を知らでは、寝るものか」

とて、入りたまへば、「や」とも、え聞こえず。

「あり経て後や、さるべき御宿世、逃れきこえたまはぬやうもあらむ。ただ今は、かけてもいと似げなき御ことと見たてまつるを、あやしう思しのたまはするも、いかなる御心にか、思ひ寄るかたなう乱れはべる。今日も、宮渡らせたまひて、『うしろやすく仕うまつれ。心幼くもてなしきこゆな』とのたまはせつるも、いとわづらはしう、ただなるよりは、かかる御好き事も思ひ出でられはべりつる」

など言ひて、「この人もことあり顔にや思はむ」など、あいなければ、いたう嘆かしげにも言ひなさず。大夫も、「いかなることにかあらむ」と、心得がたう思ふ。

参りて、ありさまなど聞こえければ、あはれに思しやらるれど、さて通ひたまはむも、さすがにすろなる心地して、「軽々しうもてひがめたと、人もや漏り聞かむ」など、つつましかければ、「ただ迎へてむ」と思す。

御文はたびたびたてまつれたまふ。暮るれば、例の大夫をぞたてまつれたまふ。「障はる事どものありて、え参り来ぬを、おろかにや」などあり。

「宮より、明日にはかに御迎へにとのたまはせたりつれば、心あわたたしくてなむ。年ごろの蓬生を離れなむも、さすがに心細く、さぶらふ人びとも思ひ乱れて」

と、言少なに言ひて、をさをさあへしらはず、もの縫ひいとなむけはひなどしるければ、参りぬ。

君は大殿におはしけるに、例の、女君とみにも対面したまはず。ものむつかしくおぼえたまひて、あづまをすががきて、「常陸には田をこそ作れ」といふ歌を、声はいとなまめきて、すさびるたまへり。

参りたれば、召し寄せてありさま問ひたまふ。しかしかなど聞こゆれば、口惜しう思して、「かの宮に渡りなば、わざと迎へ出でむも、好き好きしかるべし。

「何かは。心細くとも、しばしはかくておはしましなむ。すこしものの心思し知りなむにわたらせたまはむこそ、よくははべるべけれ」と聞こゆ。

「夜昼恋ひきこえたまふに、はかなきものもきこしめさず」

とて、げにいといたう面瘦せたまへれど、いとあてにうつくしく、なかなか見えたまふ。

「何か、さしも思す。今は世に亡き人の御ことはかひなし。おのれあれば」など語らひきこえたまひて、暮るれば帰らせたまふを、いと心細しと思ひて泣いたまへば、宮うち泣きたまひて、

「いとかう思ひな入りたまひそ。今日明日、渡したてまつらむ」など、返す返すこしらへおきて、出でたまひぬ。

なごりも慰めがたう泣きゐたまへり。行く先の身のあらむことなどまでも思し知らず、ただ年ごろ立ち離るる折なうまつはしならひて、今は亡き人となりたまひにける、と思すがいみじきに、幼き御心地なれど、胸つとふたがりて、例のやうにも遊びたまはず、昼はさても紛らはしたまふを、夕暮となれば、いみじく屈したまへば、かくてはいかでか過ごしたまはむと、慰めわびて、乳母も泣きあへり。

君の御もとよりは、惟光をたてまつれたまへり。

「参り来べきを、内より召あればなむ。心苦しう見たてまつりしも、しづ心なく」とて、宿直人たてまつれたまへり。

「あぢきなうもあるかな。戯れにても、もののはじめにこの御ことよ」

「宮聞こし召しつけば、さぶらふ人びとのおろかなるにぞさいなまむ」

「あなかしこ、ものついでに、いはけなくうち出できこえさせたまふな」  
など

言ふも、それをば何とも思したらぬぞ、あさましきや。

少納言は、惟光にあはれなる物語どもして、

想もをかしかりぬべきに、さうざうしう思ひおはす。いと忍びて通ひたまふ所の道なりけるを思し出でて、門うちたたかせたまへど、聞きつくる人なし。かひなくて、御供に声ある人して歌はせたまふ。

「朝ぼらけ霧立つ空のまよひにも

行き過ぎがたき妹が門かな」

と、二返りばかり歌ひたるに、よしある下仕ひを出だして、

「立ちとまり霧のまがきの過ぎうくは

草のとぎしにさはりしもせじ」

と言ひかけて、入りぬ。また人も出で来ねば、帰るも情けなけれど、明けゆく空もはしたなくて殿へおはしぬ。

をかしかりつる人のなごり恋しく、独り笑みしつつ臥したまへり。日高う大殿籠もり起きて、文やりたまふに、書くべき言葉も例ならねば、筆うち置きつつすさびぬたまへり。をかしき絵などをやりたまふ。

かしこには、今日しも、宮わたりたまへり。年ごろよりもこよなう荒れまさり、広うもの古りたる所の、いとど人少なに久しければ、見わたしたまひて、

「かかる所には、いかでか、しばしも幼き人の過ぐしたまはむ。なほ、かしこに渡したてまつりてむ。何の所狭きほどにもあらず。乳母は、曹司などしてさぶらひなむ。君は、若き人びとあれば、もろともに遊びて、いとようものしたまひなむ」などのたまふ。

近う呼び寄せたてまつりたまへるに、かの御移り香の、いみじう艶に染みかへらせたまへれば、「をかしの御匂ひや。御衣はいと萎えて」と、心苦しげに思いたり。

「年ごろも、あつしくさだ過ぎたまへる人に添ひたまへるよ、かしこにわたりて見ならしたまへなど、ものせしを、あやしう疎みたまひて、人も心置くめりしを、かかる折にしものしたまはむも、心苦しう」などのたまへば、

とて、いと馴れ顔に御帳のうちに入りたまへば、あやしう思ひのほかにもと、あきれて、誰も誰もみたり。乳母は、うしろめたなうわりなしと思へど、荒ましう聞こえ騒ぐべきならねば、うち嘆きつつみたり。

若君は、いと恐ろしう、いかならむとわななかれて、いとうつくしき御肌つきも、そぞろ寒げに思したるを、らうたくおぼえて、単衣ばかりを押しくくみて、わが御心地も、かつはうたておぼえたまへど、あはれにうち語らひたまひて、

「いぎ、たまへよ。をかしき絵など多く、雛遊びなどする所に」

と、心につくべきことをのたまふけはひの、いとなつかしきを、幼き心地にも、いといたう怖ぢず、さすがに、むつかしう寝も入らずおぼえて、身じろき臥したまへり。

夜一夜、風吹き荒るるに、

「げに、かう、おはせざらましかば、いかに心細からまし」

「同じくは、よろしきほどにおはしまさましかば」

とささめきあへり。乳母は、うしろめたさに、いと近うさぶらふ。風すこし吹きやみたるに、夜深う出でたまふも、ことあり顔なりや。

「いとあはれに見たてまつる御ありさまを、今はまして、片時の間もおぼつかなかるべし。明け暮れ眺めはべる所に渡したてまつらむ。かくてのみは、いかが。もの怖ぢしたまはざりけり」とのたまへば、

「宮も御迎へになど聞こえのたまふめれど、この御四十九日過ぐしてや、なご思うたまふる」と聞こゆれば、

「頼もしき筋ながらも、よそよそにてならひたまへるは、同じうこそ疎うおぼえたまはめ。今より見たてまつれど、浅からぬ心ぎしはまさりぬべくなむ」

とて、かい撫でつつ、かへりみがちにて出でたまひぬ。

いみじう霧りわたれる空もただならぬに、霜はいと白うおきて、まことの懸

「宮にはあらねど、また思し放つべうもあらず。こち」

とのたまふを、恥づかしかりし人と、さすがに聞きなして、悪しう言ひてけりと思して、乳母にさし寄りて、

「いざかし、ねぶたきに」とのたまへば、

「今さらに、など忍びたまふらむ。この膝の上に大殿籠もれよ。今すこし寄りたまへ」

とのたまへば、乳母の、

「さればこそ。かう世づかぬ御ほどにてなむ」

とて、押し寄せたてまつりたれば、何心もなくゐたまへるに、手をさし入れて探りたまへれば、なよらかなる御衣に、髪はつやつやとかかりて、末のふさやかに探りつけられたる、いとうつくしう思ひやらる。手をとらへたまへれば、うたて例ならぬ人の、かく近づきたまへるは、恐ろしうて、

「寝なむ、と言ふものを」

とて、強ひて引き入りたまふにつきてすべり入りて、

「今は、まろぞ思ふべき人。な疎みたまひそ」

とのたまふ。乳母、

「いで、あなうたてや。ゆゆしうもはべるかな。聞こえさせ知らせたまふとも、さらに何のしるしもはべらじものを」とて、苦しげに思ひたれば、

「さりともし、かかる御ほどをいかかはあらむ。なほ、ただ世に知らぬ心ぎしのほどを見果てたまへ」とのたまふ。

霰降り荒れて、すぎき夜のさまなり。

「いかで、かう人少なに心細うて、過ぐしたまふらむ」

と、うち泣いたまひて、いと見棄てがたきほどなれば、

「御格子参りね。もの恐ろしき夜のさまなめるを、宿直人にてはべらむ。人びと、近うさぶらはれよかし」

「宮に渡したてまつらむとはべるめるを、『故姫君の、いと情けなく憂きものに思ひきこえたまへりしに、いとむげに見ならぬ齡の、まだはかばかしう人のおもむけをも見知りたまはず、中空なる御ほどにて、あまたものしたまふなる中の、あなづらはしき人にてや交じりたまはむ』など、過ぎたまひぬるも、世とともに思し嘆きつること、しるきこと多くはべるに、かくかたじけなきなげの御言の葉は、後の御心もたどりきこえさせず、いとうれしう思ひたまへられぬべき折節にはべりながら、すこしもなぞらひなるさまにもものしたまはず、御年よりも若びてならひたまへれば、いとかたはらいたくはべる」と聞こゆ。

「何か、かう繰り返し聞こえ知らする心のほどを、つつみたまふらむ。その言ふかひなき御心のありさまの、あはれにゆかしうおぼえたまふも、契りことになむ、心ながら思ひ知られける。なほ、人伝てならで、聞こえ知らせばや。

あしわかぬ浦にみるめはかたくとも

こは立ちながらかへる波かは  
めざましからむ」とのたまへば、

「げにこそ、いとかしこけれ」とて、

「寄る波の心も知らでわかぬ浦に

玉藻なびかむほどぞ浮きたる

わりなきこと」

と聞こゆるさまの馴れたるに、すこし罪ゆるされたまふ。「なぞ越えざらむ」と、うち誦じたまへるを、身にしみて若き人びと思へり。

君は、上を恋ひきこえたまひて泣き臥したまへるに、御遊びがたきどもの、

「直衣着たる人のおはする、宮のおはしますなめり」

と聞こゆれば、起き出でたまひて、

「少納言よ。直衣着たりつらむは、いづら。宮のおはするか」

とて、寄りおはしたる御声、いとらうたし。

たるほどにて。かう問はせたまへるかしこまりは、この世ならでも聞こえさせむ」

とあり。いとあはれと思す。

秋の夕べは、まして、心のいとまなく思し乱るる人の御あたりには心をかけて、あながちなるゆかりも尋ねまほしき心もまさりたまふなるべし。「消えむ空なき」とありし夕べ思し出でられて、恋しくも、また、見ば劣りやせむと、さすがにあやふし。

「手に摘みていつしかも見む紫の

根にかよひける野辺の若草」

十月に朱雀院の行幸あるべし。舞人など、やむごとなき家の子ども、上達部、殿上人なども、その方につきづきしきは、みな選らせたまへれば、親王達、大臣よりはじめて、とりどりの才ども習ひたまふ、いとまなし。

山里人にも、久しく訪れたまはざりけるを、思し出でて、ふりはへ遣はしたりければ、僧都の返り事のみあり。

「立ちぬる月の二十日のほどになむ、つひに空しく見たまへなして、世間の道理なれど、悲しび思ひたまふる」

などあるを見たまふに、世の中のはかなさもあはれに、「うしろめたげに思へりし人もいかならむ。幼きほどに、恋ひやすらむ。故御息所に後れたてまつりし」など、はかばかしからねど、思ひ出でて、浅からずとぶらひたまへり。少納言、ゆゑなからず御返りなど聞こえたり。

忌みなど過ぎて京の殿になど聞きたまへば、ほど経て、みづから、のどかなる夜おはしたり。いとすごげに荒れたる所の、人少なるに、いかに幼き人恐ろしからむと見ゆ。例の所に入れたてまつりて、少納言、御ありさまなど、うち泣きつつ聞こえ続けるに、あいなう、御袖もただならず。

いと近ければ、心細げなる御声絶え絶え聞こえて、

「いと、かたじけなきわざにもはべるかな。この君だに、かしこまりも聞こえたまつべきほどならましかば」

とのたまふ。あはれに聞きたまひて、

「何か、浅う思ひたまへむことゆゑ、かう好き好きしきさまを見えたてまつらむ。いかなる契りにか、見たてまつりそめしより、あはれに思ひきこゆるも、あやしきまで、この世のことにはおぼえはべらぬ」などのたまひて、「かひなき心地のみしはべるを、かのいはけなうものしたまふ御一声、いかで」とのたまへば、

「いでや、よろづ思し知らぬさまに、大殿籠もり入りて」

など聞こゆる折しも、あなたより来る音して、

「上こそ、この寺にありし源氏の君こそおはしたなれ。など見たまはぬ」とのたまふを、人びと、いとかたはらいたしと思ひて、「あなかま」と聞こゆ。

「いさ、『見しかば心地の悪しきなぐさみき』とのたまひしかばぞかし」

と、かしこきこと聞こえたりと思してのたまふ。

いとをかしと聞いたまへど、人びとの苦しと思ひたれば、聞かぬやうにて、まめやかなる御とぶらひを聞こえ置きたまひて、帰りたまひぬ。「げに、言ふかひなのけはひや。さりとも、いとよう教へてむ」と思す。

またの日も、いとまめやかにとぶらひきこえたまふ。例の、小さくて、

「いはけなき鶴の一声聞きしより

葦間になづむ舟ぞえならぬ

同じ人にや」

と、ことさら幼く書きなしたまへるも、いみじうをかしげなれば、「やがて御手本に」と、人びと聞こゆ。少納言ぞ聞こえたる。

「問はせたまへるは、今日をも過ぐしがたげなるさまにて、山寺にまかりわ

極わたりにて、内よりなれば、すこしほど遠き心地するに、荒れたる家の木立  
いとももの古りて木暗く見えたるあり。例の御供に離れぬ惟光なむ、

「故按察使大納言の家にはべりて、ものたよりにとぶらひてはべりしかば、  
かの尼上、いたう弱りたまひにたれば、何ごともおぼえず、となむ申してはべ  
りし」と聞こゆれば、

「あはれのことや。とぶらふべかりけるを。などか、さなむどものせざりし。  
入りて消息せよ」

とのたまへば、人入れて案内せさす。わぎとかう立ち寄りたまへることと言  
はせられたれば、入りて、

「かく御とぶらひになむおはしましたる」と言ふに、おどろきて、

「いとかたはらいたきことかな。この日ごろ、むげにいと頼もしげなくな  
せたまひにたれば、御対面などもあるまじ」

と言へども、帰したてまつらむはかしこしとて、南の廂ひきつくるひて、入  
れたてまつる。

「いとむつかしげにはべれど、かしこまりをだにとて。ゆくりなう、もの深  
き御座所になむ」

と聞こゆ。げにかかる所は、例に違ひて思さる。

「常に思ひたまへ立ちながら、かひなきさまにのみもてなさせたまふに、つ  
つまればべりてなむ。悩ませたまふこと、重くとも、うけたまはらざりけるお  
ぼつかなき」など聞こえたまふ。

「乱り心地は、いつともなくのみはべるが、限りのさまになりはべりて、い  
とかたじけなく、立ち寄せたまへるに、みづから聞こえさせぬこと。のたま  
はすることの筋、たまさかにも思し召し変はらぬやうはべらば、かくわりなき  
齢過ぎはべりて、かならず数まへさせたまへ。いみじう心細げに見たまへ置く  
なむ、願ひはべる道のほだしに思ひたまへられぬべき」など聞こえたまへり。

中將の君も、おどろおどろしうさま異なる夢を見たまひて、合はする者を召して、問はせたまへば、及びなう思しもかけぬ筋のことを合はせけり。

「その中に、違ひ目ありて、慎しませたまふべきことなむはべる」と言ふに、わづらはしくおぼえて、

「みづからの夢にはあらず、人の御ことを語るなり。この夢合ふまで、また人にまねぶな」

とのたまひて、心のうちには、「いかなることならむ」と思しわたるに、この女宮の御こと聞きたまひて、「もしさるやうもや」と、思し合はせたまふに、いとどしくいみじき言の葉尽くしきこえたまへど、命婦も思ふに、いとむくつけう、わづらはしきさまさりて、さらにたばかるべきかたなし。はかなき一行の御返りのたまさかなりしも、絶え果てにたり。

七月になりてぞ参りたまひける。めづらしうあはれにて、いとどしき御思ひのほど限りなし。すこしふくらかになりたまひて、うちなやみ、面瘦せたまへる、はた、げに似るものなくめでたし。

例の、明け暮れ、こなたにのみおはしまして、御遊びもやうやうをかしき空なれば、源氏の君も暇なく召しまつはしつつ、御琴、笛など、さまざまに仕うまつらせたまふ。いみじうつつみたまへど、忍びがたき気色の漏り出づる折々、宮も、さすがなる事どもを多く思し続けけり。

かの山寺の人は、よろしくなりて出でたまひにけり。京の御住処尋ねて、時々御消息などあり。同じさまにのみあるも道理なるうちに、この月ごろは、ありしにまさる物思ひに、異事なくて過ぎゆく。

秋の末つ方、いともの心細くて嘆きたまふ。月のをかしき夜、忍びたる所からうして思ひ立ちたまへるを、時雨めいてうちそそく。おはする所は六条京

やがて紛るる我が身ともがな」

と、むせかへりたまふさまも、さすがにいみじければ、

「世語りに人や伝へむたぐひなく

憂き身を覚めぬ夢になしても」

思し乱れたるさまも、いと道理にかたじけなし。命婦の君ぞ、御直衣などは、かき集め持て来たる。

殿におはして、泣き寝に臥し暮らしたまひつ。御文なども、例の、御覧じ入れぬよしのみあれば、常のことながらも、つらういみじう思しほれて、内へも参らで、二、三日籠もりおはすれば、また、「いかなるにか」と、御心動かさせたまふべかめるも、恐ろしうのみおぼえたまふ。

宮も、なほいと心憂き身なりけりと、思し嘆くに、悩ましさまさりたまひて、とく参りたまふべき御使、しきれど、思しも立たず。

まことに、御心地、例のやうにもおはしまさぬは、いかなるにかと、人知れず思すこともありければ、心憂く、「いかならむ」とのみ思し乱る。

暑きほどは、いとど起きも上がりたまはず。三月になりたまへば、いとしるきほどにて、人びと見たてまつりとがむるに、あさましき御宿世のほど、心憂し。人は思ひ寄らぬことなれば、「この月まで、奏せさせたまはざりけること」と、驚ききこゆ。我が御心一つには、しるう思しわくこともありけり。

御湯殿などにも親しう仕うまつりて、何事の御気色をもしるく見たてまつり知れる、御乳母子の弁、命婦などぞ、あやしと思へど、かたみに言ひあはすべきにあらねば、なほ逃れがたかりける御宿世をぞ、命婦はあさましと思ふ。

内には、御物の怪の紛れにて、とみに気色なうおはしましけるやうにぞ奏しけむかし。見る人もさのみ思ひけり。いとどあはれに限りなう思されて、御使などのひまなきも、そら恐ろしう、ものを思すこと、ひまなし。

思すにか」と、ゆゆしうなむ、誰も誰も思しける。

御文にも、いとねむごろに書いたまひて、例の、中に、「かの御放ち書きなむ、なほ見たまへまほしき」とて、

「あさか山浅くも人を思はぬに

など山の井のかけ離るらむ」

御返し、

「汲み初めてくやしと聞きし山の井の

浅きながらや影を見るべき」

惟光も同じことを聞こゆ。

「このわづらひたまふことよろしくは、このごろ過ぐして、京の殿に渡りたまひてなむ、聞こえさすべき」とあるを、心もとなう思す。

藤壺の宮、悩みたまふことありて、まかだたまへり。上の、おぼつかながり、嘆ききこえたまふ御気色も、いといとほしう見たてまつりながら、かかる折だにと、心もあくがれ惑ひて、何処にも何処にも、まうでたまはず、内にてても里にても、昼はつれづれと眺め暮らして、暮るれば、王命婦を責め歩きたまふ。

いかがたばかりけむ、いとわりなくて見たてまつるほどさへ、現とはおぼえぬぞ、わびしきや。宮も、あさましかりしを思し出づるだに、世ともの御もの思ひなるを、さてだにやみなむと深う思したるに、いと憂くて、いみじき御気色なるものから、なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず、心深う恥づかしげなる御もてなしなどの、なほ人に似させたまはぬを、「などか、なのめなることだにうち交じりたまはざりけむ」と、つらうさへぞ思さるる。何ごとをかは聞こえ尽くしたまはむ。くらぶの山に宿りも取らまほしげなれど、あやにくなる短夜にて、あさましう、なかなかなり。

「見てもまた逢ふ夜まれなる夢のうちに

「もて離れたりし御気色のつつまじきに、思ひたまふるさまをも、えあらはし果てはべらずなりにしをなむ。かばかり聞こゆるにても、おしなべたらぬ志のほどを御覧じ知らば、いかにうれしう」

などあり。中に、小さく引き結びて、

「面影は身をも離れず山桜

心の限りとめて来しかど

夜の間の風も、うしろめたくなむ」

とあり。御手などはさるものにて、ただはかなうおし包みたまへるさまも、さだすぎたる御目どもには、目もあやにこのまじう見ゆ。

「あな、かたはらいたや。いかが聞こえむ」と、思しわづらふ。

「ゆくての御ことは、なほざりにも思ひたまへなされしを、ふりはへさせたまへるに、聞こえさせむかたなくなむ。まだ「難波津」をだに、はかばかしう続けはべらざめれば、かひなくなむ。さても、

嵐吹く尾の上の桜散らぬ間を

心とめけるほどのはかなさ

いとどうしろめたう」

と

あり。僧都の御返りも同じさまなれば、口惜しくて、二、三日ありて、惟光をぞたてまつれたまふ。

「少納言の乳母と言ふ人あべし。尋ねて、詳しう語らへ」などのたまひ知らす。「さも、かからぬ隈なき御心かな。さばかりいはけなげなりしけはひを」と、まほならねども、見しほどを思ひやるもをかし。

わざと、かう御文あるを、僧都もかしまり聞こえたまふ。少納言に消息して会ひたり。詳しく、思しのたまふさま、おほかたの御ありさまなど語る。言葉多かる人にて、つきづきしう言ひ続けれど、「いとわりなき御ほどを、いかに

のに思して、年のかさなるに添へて、御心の隔てもまさるを、いと苦しく、思はずに、

「時々は、世の常なる御気色を見ばや。堪へがたうわづらひはべりしをも、いかがとだに、問ひたまはぬこそ、めづらしからぬことなれど、なほうらめしう」

と聞こえたまふ。からうして、

「問はぬは、つらきものにやあらむ」

と、後目に見おこせたまへるまみ、いと恥づかしげに、気高ううつくしげなる御容貌なり。

「まれまれは、あさましの御ことや。訪はぬ、など言ふ際は、異にこそはべるなれ。心憂くものたまひなすかな。世とともにしたなき御もてなしを、もし、思し直る折もやと、とぎまかうさまに試みきこゆるほど、いとど思ほし疎むなめりかし。よしや、命だに」

とて、夜の御座に入りたまひぬ。女君、ふとも入りたまはず、聞こえわづらひたまひて、うち嘆きて臥したまへるも、なま心づきなきにやあらむ、ねぶたげにもてなして、とかう世を思し乱ること多かり。

この若草の生ひ出でむほどのなほゆかしきを、「似げないほどと思へりしも、道理ぞかし。言ひ寄りがたきことにもあるかな。いかにかまへて、ただ心やすく迎へ取りて、明け暮れの慰めに見む。兵部卿宮は、いとあてになまめいたまへれど、匂ひやかになどもあらぬを、いかで、かの一族におぼえたまふらむ。ひとつ后腹なればにや」など思す。ゆかりいとむつましきに、いかでかと、深うおぼゆ。

またの日、御文たてまつれたまへり。僧都にもほのめかしたまふべし。尼上には、

「宮の御ありさまよりも、まさりたまへるかな」などのたまふ。

「さらば、かの人の御子になりておはしませよ」

と聞こゆれば、うちうなづきて、「いとようありなむ」と思したり。雛遊びにも、絵描いたまふにも、「源氏の君」と作り出でて、きよらなる衣着せ、かしづきたまふ。

君は、まづ内に参りたまひて、日ごろの御物語など聞こえたまふ。「いといたう衰へにけり」とて、ゆゆしと思し召したり。聖の尊かりけることなど、問はせたまふ。詳しく奏したまへば、

「阿闍梨などにもなるべき者にこそあなれ。行ひの労は積もりて、朝廷にしろしめされざりけること」と、尊がりのたまはせけり。

大殿、参りあひたまひて、

「御迎へにもと思ひたまへつれど、忍びたる御歩きに、いかがと思ひ憚りてなむ。のどやかに一、二日うち休みたまへ」とて、「やがて、御送り仕うまつらむ」と申したまへば、さしも思さねど、引かされてまかでたまふ。

我が御車に乗せたてまつりたまうて、自らは引き入りてたてまつれり。もてかしづききこえたまへる御心ばへのあはれなるをぞ、さすがに心苦しく思しける。

殿にも、おはしますらむと心づかひしたまひて、久しく見たまはぬほど、いとど玉の台に磨きしつらひ、よろづをととのへたまへり。

女君、例の、はひ隠れて、とみにも出でたまはぬを、大臣、切に聞こえたまひて、からうして渡りたまへり。ただ絵に描きたるものの姫君のやうに、し据ゑられて、うちみじろきたまふこともかたく、うるはしうてもものしたまへば、思ふこともうちかすめ、山道の物語をも聞こえむ、言ふかひありて、をかしういらへたまはばこそ、あはれならめ、世には心も解けず、うとく恥づかしきも

霞むる空の気色をも見む」

と、よしある手の、いとあてなるを、うち捨て書いたまへり。

御車にたてまつるほど、大殿より、「いづちともなくて、おはしましにけること」とて、御迎への人びと、君達などあまた参りたまへり。頭中将、左中弁、さらぬ君達も慕ひきこえて、

「かうやうの御供には、仕うまつりはべらむ、と思ひたまふるを、あさましく、おくらさせたまへること」と恨みきこえて、「いといみじき花の蔭に、しばしもやすらはず、立ち帰りはべらむは、飽かぬわざかな」とのたまふ。

岩隠れの苔の上に並みゐて、土器参る。落ち来る水のさまなど、ゆるある滝のもとなり。頭中将、懐なりける笛取り出でて、吹きすましたり。弁の君、扇はかなううち鳴らして、「豊浦の寺の、西なるや」と歌ふ。人よりは異なる君達を、源氏の君、いといたううち悩みて、岩に寄りゐたまへるは、たぐひなくゆしき御ありさまにぞ、何ごとにも目移るまじかりける。例の、箏篋吹く隨身、笙の笛持たせたる好き者などあり。

僧都、琴をみづから持て参りて、

「これ、ただ御手一つあそばして、同じうは、山の鳥もおどろかしはべらむ」と切に聞こえたまへば、

「乱り心地、いと堪へがたきものを」と聞こえたまへど、けに憎からずかき鳴らして、皆立ちたまひぬ。

飽かず口惜しと、言ふかひなき法師、童べも、涙を落としあへり。まして、内には、年老いたる尼君たちなど、まださらにかかる人の御ありさまを見ざりつれば、「この世のものともおぼえたまはず」と聞こえあへり。僧都も、

「あはれ、何の契りにて、かかる御さまながら、いとむつかしき日本の末の世に生まれたまへらむと見るに、いとなむ悲しき」とて、目おしのごひたまふ。

この若君、幼な心地に、「めでたき人かな」と見たまひて、

とのたまふ御もてなし、声づかひさへ、目もあやなるに、

「優曇華の花待ち得たる心地して

深山桜に目こそ移らね」

と聞こえたまへば、ほほゑみて、「時ありて、一度開くなるは、かたかなるものを」とのたまふ。

聖、御土器賜はりて、

「奥山の松のとぼそをまれに開けて

まだ見ぬ花の顔を見るかな」

と、うち泣きて見たてまつる。聖、御まもりに、独鈷たてまつる。見たまひて、僧都、聖徳太子の百済より得たまへりける金剛子の数珠の、玉の装束したる、やがてその国より入れたる筥の、唐めいたるを、透きたる袋に入れて、五葉の枝に付けて、紺瑠璃の壺どもに、御薬ども入れて、藤、桜などに付けて、所につけたる御贈物ども、ささげたてまつりたまふ。

君、聖よりははじめ、読経しつる法師の布施ども、まうけの物ども、さまさまに取りにつかはしたりければ、そのわたりの山がつまで、さるべき物ども賜ひ、御誦経などして出でたまふ。

内に僧都入りたまひて、かの聞こえたまひしこと、まねびきこえたまへど、「ともかくも、ただ今は、聞こえむかたなし。もし、御志あらば、いま四、五年を過ぐしてこそは、ともかくも」とのたまへば、「さなむ」と同じさまにのみあるを、本意なしと思す。

御消息、僧都のもとなる小さき童して、

「夕まぐれほのかに花の色を見て

今朝は霞の立ちぞわづらふ」

御返し、

「まことにや花のあたりは立ち憂きと

「よし、かう聞こえそめはべりぬれば、いと頼もしうなむ」とて、おし立てたまひつ。

暁方なりにければ、法華三昧行ふ堂の懺法の声、山おろしにつきて聞こえくる、いと尊く、滝の音に響きあひたり。

「吹きまよふ深山おろしに夢さめて

涙もよほす滝の音かな」

「さしぐみに袖ぬらしける山水に

澄める心は騒ぎやはする

耳馴ればべりにけりや」と聞こえたまふ。

明けゆく空は、いといたう霞みて、山の鳥どもそこはかとなうさへづりあひたり。名も知らぬ木草の花どもも、いろいろに散りまじり、錦を敷けると見ゆるに、鹿のたたずみ歩くも、めづらしく見たまふに、悩ましきも紛れ果てぬ。

聖、動きもえせねど、とかうして護身参らせたまふ。かれたる声の、いといたうすきひがめるも、あはれに功づきて、陀羅尼誦みたり。

御迎への人びと参りて、おこたりたまへる喜び聞こえ、内よりも御とぶらひあり。僧都、世に見えぬさまの御くだもの、何くれと、谷の底まで掘り出で、いとなみきこえたまふ。

「今年ばかりの誓ひ深うはべりて、御送りにもえ参りはべるまじきこと。なかなかにも思ひたまへらるべきかな」

など聞こえたまひて、大御酒参りたまふ。

「山水に心とまりはべりぬれど、内よりもおぼつかながらせたまへるも、かしこければなむ。今、この花の折過ぐさず参り来む。

宮人に行きて語らむ山桜

風よりさきに来ても見るべく」

答へきこえむ」とのたまへば、

「はしたなうもこそ思せ」と人びと聞こゆ。

「げに、若やかなる人こそうたでもあらめ、まめやかにのたまふ、かたじけなし」

とて、みざり寄りたまへり。

「うちつけに、あさはかなりと、御覧ぜられぬべきついでなれど、心にはさもおぼえはべらねば。仏はおのづから」

とて、おとなおとなしう、恥づかしげなるにつつまれて、とみにもえうち出でたまはず。

「げに、思ひたまへ寄りがたきついでに、かくまでのたまはせ、聞こえさするも、いかが」とのたまふ。

「あはれにうけたまはる御ありさまを、かの過ぎたまひにけむ御かはりに、思しないでむや。言ふかひなきほどの齢にて、むつましかるべき人にも立ち後はべりにければ、あやしう浮きたるやうにて、年月をこそ重ねはべれ。同じさまにもものしたまふなるを、たぐひになさせたまへと、いと聞こえまほしきを、かかる折はべりがたくてなむ、思されむところをも憚らず、うち出ではべりぬる」と聞こえたまへば、

「いとうれしう思ひたまへぬべき御ことながらも、聞こしめしひがめたることなどやはべらむと、つつましうなむ。あやしき身一つを頼もし人にする人なむはべれど、いとまだ言ふかひなきほどにて、御覧じ許さるる方もはべりがたげなれば、えなむうけたまはりとはめられざりける」とのたまふ。

「みな、おぼつかかなからずうけたまはるものを、所狭う思し憚らで、思ひたまへ寄るさまことなる心のほどを、御覧ぜよ」

と聞こえたまへど、いと似げなきことを、さも知らでのたまふ、と思して、心解けたる御答へもなし。僧都おはしぬれば、

すこし引き開けて、扇を鳴らしたまへば、おぼえなき心地すべかめれど、聞き知らぬやうにやとて、みぎり出づる人あなり。すこし退きて、

「あやし、ひが耳にや」とたどるを、聞きたまひて、

「仏の御しるべは、暗きに入りても、さらに違ふまじかなるものを」

とのたまふ御声の、いと若うあてなるに、うち出でむ声づかひも、恥づかしけれど、

「いかなる方の、御しるべにか。おぼつかなく」と聞こゆ。

「げに、うちつけなりとおぼめきたまはむも、道理なれど、

初草の若葉の上を見つるより

旅寝の袖も露ぞ乾かぬ

と聞こえたまひてむや」とのたまふ。

「さらに、かやうの御消息、うけたまはりわくべき人もものしたまはぬさまは、しろしめしたりげなるを。誰れにかは」と聞こゆ。

「おのづからさるやうありて聞こゆるならむと思ひなしたまへかし」

とのたまへば、入りて聞こゆ。

「あな、今めかし。この君や、世づいたるほどにおはするとぞ、思すらむ。

さるにては、かの『若草』を、いかで聞いたまへることぞ」と、さまざまあやしきに、心乱れて、久しうなれば、情けなしとて、

「枕結ふ今宵ばかりの露けさを

深山の苔に比べざらなむ

乾がたうはべるものを」と聞こえたまふ。

「かうやうのついでなる御消息は、まださらに聞こえ知らず、ならはぬことになむ。かたじけなくとも、かかるついでに、まめまめしう聞こえさすべきことなむ」と聞こえたまへれば、尼君、

「ひがこと聞きたまへるならむ。いとむつかしき御けはひに、何ごとをかは

「いとあはれにものしたまふことかな。それは、とどめたまふ形見もなきか」と、幼かりつる行方の、なほ確かに知らまほしくて、問ひたまへば、

「亡くなりはべりしほどにこそ、はべりしか。それも、女にてぞ。それにつけて物思ひのもよほしになむ、齡の末に思ひたまへ嘆きはべるめる」と聞こえたまふ。

「さればよ」と思さる。

「あやしきことなれど、幼き御後見に思すべく、聞こえたまひてむや。思ふ心ありて、行きかかづらふ方もはべりながら、世に心の染まぬにやあらむ、独り住みにてのみなむ。まだ似げなきほどと常の人に思しなずらへて、はしたなくや」などのたまへば、

「いとうれしかるべき仰せ言なるを、まだむげにいはきなきほどにはべるめれば、たはぶれにても、御覧じがたくや。そもそも、女人は、人にもてなされて大人にもなりたまふものなれば、詳しくはえとり申さず、かの祖母に語らひはべりて聞こえさせむ」

と、すくよかに言ひて、ものごはきさましたまへれば、若き御心に恥づかしくて、えよくも聞こえたまはず。

「阿弥陀仏ものしたまふ堂に、することはべるころになむ。初夜、いまだ勤めはべらず。過ぐしてさぶらはむ」とて、上りたまひぬ。

君は、心地もいと悩ましきに、雨すこしうちそそぎ、山風ひやかに吹きたるに、滝のよどみもまさりて、音高う聞こゆ。すこしねぶたげなる読経の絶え絶えすごく聞こゆるなど、すずろなる人も、所からものあはれなり。まして、思しめぐらすこと多くて、まどろませたまはず。初夜と言ひしかども、夜もいたう更けにけり。内にも、人の寝ぬけはひしるくて、いと忍びたれど、数珠の脇息に引き鳴らさるる音ほの聞こえ、なつかしううちそよめく音なひ、あてはかなりと聞きたまひて、ほどもなく近ければ、外に立てわたしたる屏風の中を、

僧都、世の常なき御物語、後世のことなど聞こえ知らせたまふ。我が罪のほど恐ろしう、「あぢきなきことに心をしめて、生ける限りこれを思ひ悩むべきなめり。まして後の世のいみじかるべき」。思し続けて、かうやうなる住まひもせまほしうおぼえたまふものから、昼の面影心にかかりて恋しければ、

「ここにもものしたまふは、誰れにか。尋ねきこえまほしき夢を見たまへしかな。今日なむ思ひあはせつる」

と聞こえたまへば、うち笑ひて、

「うちつけなる御夢語りにぞはべるなる。尋ねさせたまひても、御心劣りせさせたまひぬべし。故按察使大納言は、世になくて久しくなりはべりぬれば、えしろしめさじかし。その北の方なむ、なにがしが妹にはべる。かの按察使かくれて後、世を背きてはべるが、このごろ、わづらふことはべるにより、かく京にもまかでねば、頼もし所に籠もりてものははべるなり」と聞こえたまふ。

「かの大納言の御女、ものしたまふと聞きたまへしは。好き好きしき方にはあらで、まめやかに聞こゆるなり」と、推し当てにのたまへば、

「女ただ一人はべりし。亡せて、この十余年にやなりはべりぬらむ。故大納言、内にたてまつらむなど、かしこういつきはべりしを、その本意のごとくものしはべらで、過ぎはべりにしかば、ただこの尼君一人もてあつかひはべりしほどに、いかなる人のしわざにか、兵部卿宮なむ、忍びて語らひつきたまへりけるを、本の北の方、やむごとなくなどして、安からぬこと多くて、明け暮れ物を思ひてなむ、亡くなりはべりにし。物思ひに病づくものと、目に近く見たまへし」

など申したまふ。「さらば、その子なりけり」と思しあはせつ。「親王の御筋にて、かの人にもかよひきこえたるにや」と、いとどあはれに見まほし。「人のほどもあてにをかしう、なかなかのさかしら心なく、うち語らひて、心のままに教へ生ほし立てて見ばや」と思す。

「あはれなる人を見つるかな。かかれれば、この好き者どもは、かかる歩きをのみして、よくさるまじき人をも見つくるなりけり。たまさかに立ち出づるだに、かく思ひのほかなることを見るよ」と、をかしう思す。「さて、いとうつくしかりつる児かな。何人ならむ。かの人の御代はりに、明け暮れの慰めにも見ばや」と思ふ心、深うつきぬ。

うち臥したまへるに、僧都の御弟子、惟光を呼び出でさす。ほどなき所なれば、君もやがて聞きたまふ。

「通りおはしましけるよし、ただ今なむ、人申すに、おどろきながら、さぶらべきを、なにがしこの寺に籠もりはべりとは、しろしめしながら、忍びさせたまへるを、憂はしく思ひたまへてなむ。草の御むしろも、この坊にこそ設けはべるべけれ。いと本意なきこと」と申したまへり。

「いぬる十余日のほどより、瘡病にわづらひはべるを、度重なりて堪へがたくはべれば、人の教へのまま、にはかに尋ね入りはべりつれど、かやうなる人の験あらはさぬ時、はしたなかるべきも、ただなるよりは、いとほしう思ひたまへつつみてなむ、いたう忍びはべりつる。今、そなたにも」とのたまへり。

すなはち、僧都参りたまへり。法師なれど、いと心恥づかしく人柄もやむごとなく、世に思はれたまへる人なれば、軽々しき御ありさまを、はしたなう思す。かく籠もれるほどの御物語など聞こえたまひて、「同じ柴の庵なれど、すこし涼しき水の流れも御覧せさせむ」と、せちに聞こえたまへば、かの、まだ見ぬ人びとにことごとしう言ひ聞かせつるを、つつましう思せど、あはれなりつるありさまもいぶかしくて、おはしぬ。

げに、いと心ことによしありて、同じ本草をも植ゑなしたまへり。月もなきころなれば、遣水に篝火ともし、灯笼なども参りたり。南面いと清げにしつらひたまへり。そらだきもの、いと心にくく薫り出で、名香の香など匂ひみちたるに、君の御追風いとなれば、内の人びとも心づかひすべかめり。

まつれるが、まもらるるなりけり」と、思ふにも涙ぞ落つる。

尼君、髪をかき撫でつつ、

「梳ることをうるさがりたまへど、をかしの御髪や。いとかなうものしたまふこそ、あはれにうしろめたけれ。かばかりになれば、いとかなう人もあるものを。故姫君は、十ばかりにて殿に後れたまひしほど、いみじうものは思ひ知りたまへりしぞかし。ただ今、おのれ見捨てたてまつらば、いかで世におはせむとすらむ」

とて、いみじく泣くを見たまふも、すずろに悲し。幼心地にも、さすがうちまもりて、伏目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪、つやつやとめでたう見ゆ。

「生ひ立たむありかも知らぬ若草を

おくらす露ぞ消えむそらなき」

またゐたる大人、「げに」と、うち泣きて、

「初草の生ひ行く末も知らぬまに

いかでか露の消えむとすらむ」

と聞こゆるほどに、僧都、あなたより来て、

「こなたはあらはにやはべらむ。今日しも、端におはしましけるかな。この上の聖の方に、源氏の中将の瘡病まじなひにもしたまひけるを、ただ今なむ、聞きつけはべる。いみじう忍びたまひければ、知りはべらで、ここにはべりながら、御とぶらひにもまでざりける」とのたまへば、

「あないみじや。いとあやしきさまを、人や見つらむ」とて、簾下ろしつ。

「この世に、ののしりたまふ光る源氏、かかるついでに見たてまつりたまはむや。世を捨てたる法師の心地にも、いみじう世の憂へ忘れ、齡延ぶる人の御ありさまなり。いで、御消息聞こえむ」

とて、立つ音すれば、帰りたまひぬ。

げに読みみたる尼君、ただ人と見えぬ。四十余ばかりにて、いと白うあてに、瘦せたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髪のうちくしげにそがれたる末も、なかなか長きよりもこよなう今めかしきものかなと、あはれに見たまふ。清げなる大人二人ばかり、さては童女ぞ出で入り遊ぶ。中に十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て、走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひさき見えて、うつくしげなる容貌なり。髪は扇を広げたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

「何ごとぞや。童女と腹立ちたまへるか」

とて、尼君の見上げたるに、すこしおぼえたるどころあれば、「子なめり」と見たまふ。

「雀の子を犬君が逃がしつる。伏籠のうちに籠めたりつるものを」

とて、いと口惜しと思へり。このみたる大人、

「例の、心なしの、かかるわざをして、さいなまるこそ、いと心づきなけれ。いづ方へかまかりぬる。いとをかしう、やうやうなりつるものを。烏などもこそ見つけくれ」

とて、立ちて行く。髪ゆるるかにいと長く、めやすき人なめり。少納言の乳母とこそ人言ふめるは、この子の後見なるべし。

尼君、

「いで、あな幼や。言ふかひなうものしたまふかな。おのが、かく、今日明日におぼゆる命をば、何とも思したらで、雀慕ひたまふほどよ。罪得ることぞと、常に聞こゆるを、心憂く」とて、「こちや」と言へば、ついゐたり。

つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざし、いみじうつくし。「ねびゆかむさまゆかしき人かな」と、目とまりたまふ。さるは、「限りなう心を尽くしきこゆる人に、いとよう似たて

「さて、たたずみ寄るならむ」

と言ひあへり。

「いで、さ言ふとも、田舎びたらむ。幼くよりさる所に生ひ出でて、古めいたる親にのみ従ひたらむは」

「母こそゆゑあるべけれ。よき若人、童など、都のやむごとなき所々より、類にふれて尋ねとりて、まばゆくこそもてなすなれ」

「情けなき人なりて行かば、さて心安くてしも、え置きたらじをや」

など言ふもあり。君、

「何心ありて、海の底まで深う思ひ入るらむ。底の「みるめ」も、ものむつかしう」

などのたまひて、ただならず思したり。かやうにても、なべてならず、もてひがみたること好みたまふ御心なれば、御耳とどまらむをや、と見たてまつる。

「暮れかかりぬれど、おこらせたまはずなりぬるにこそはあめれ。はや帰らせたまひなむ」

とあるを、大徳、

「御もののけなど、加はれるさまにおはしましけるを、今宵は、なほ静かに加持など参りて、出でさせたまへ」と申す。

「さもあること」と、皆人申す。君も、かかる旅寝も慣らひたまはねば、さすがにかしくて、

「さらば暁に」とのたまふ。

人なくて、つれづれなれば、夕暮のいたう霞みたるに紛れて、かの小柴垣のほどに立ち出でたまふ。人びとは帰したまひて、惟光朝臣と覗きたまへば、ただこの西面にしも、仏据ゑたてまつりて行ふ、尼なりけり。簾すこし上げて、花たてまつるめり。中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いとなやまし

びかなる所にはべる。

かの国の前の守、新発意の、女かしづきたる家、いといたしかし。大臣の後にて、出で立ちもすべかりける人の、世のひがものにて、交じらひもせず、近衛の中将を捨てて、申し賜はれりける司なれど、かの国の人にもすこしあなづられて、『何の面目にてか、また都にも帰らむ』と言ひて、頭も下ろしはべりにけるを、すこし奥まりたる山住みもせで、さる海づらに出でゐたる、ひがひがしきやうなれど、げに、かの国のうちに、さも、人の籠もりゐぬべき所々はありながら、深き里は、人離れ心すごく、若き妻子の思ひわびぬべきにより、かつは心をやれる住まひになむはべる。

先つころ、まかり下りてはべりしついでに、ありさま見たまへに寄りてはべりしかば、京にてこそ所得ぬやうなりけれ、そこらはるかに、いかめしう占めて造れるさま、さは言へど、国の司にてし置きけることなれば、残りの齡ゆたかに経べき心構へも、二なくしたりけり。後の世の勤めも、いとよくして、なかなか法師まさりしたる人になむはべりける」と申せば、

「さて、その女は」と、問ひたまふ。

「けしうはあらず、容貌、心ばせなどはべるなり。代々の国の司など、用意ことにして、さる心ばへ見すなれど、さらにうけひかず。『我が身のかくいたづらに沈めるだにあるを、この人ひとりにこそあれ、思ふさまことなり。もし我に後れてその志とげず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね』と、常に遺言しおきてはべるなる」

と聞こゆれば、君もをかしと聞きたまふ。人びと、

「海龍王の后になるべきいつき女ななり」

「心高き苦しや」とて笑ふ。

かく言ふは、播磨守の子の、蔵人より、今年、かうぶり得たるなりけり。

「いと好きたる者なれば、かの入道の遺言破りつべき心はあらむかし」

「何人の住むにか」

と問ひたまへば、御供なる人、

「これなむ、なにがし僧都の、二年籠もりはべる方にはべるなる」

「心恥づかしき人住むなる所にこそあなれ。あやしうも、あまりやつしけるかな。聞きもこそすれ」などのたまふ。

清げなる童などあまた出で来て、闕伽たてまつり、花折りなどするもあらはに見ゆ。

「かしこに、女こそありけれ」

「僧都は、よも、さやうには、据ゑたまはじを」

「いかなる人ならむ」

と口々言ふ。下りて覗くもあり。

「をかしげなる女子ども、若き人、童女なむ見ゆる」と言ふ。

君は、行ひしたまひつつ、日たくるままに、いかならむと思したるを、

「とかう紛らはさせたまひて、思し入れぬなむ、よくはべる」

と聞こゆれば、後への山に立ち出でて、京の方を見たまふ。はるかに霞みわたりて、四方の梢そこはかとなう煙りわたれるほど、

「絵にいとよくも似たるかな。かかる所に住む人、心に思ひ残すことはあらじかし」とのたまへば、

「これは、いと浅くはべり。人の国などにはべる海、山のありさまなどを御覧せさせてはべらば、いかに、御絵いみじうまさらせたまはむ。富士の山、なにがしの嶽」

など、語りきこゆるもあり。また西国のおもしろき浦々、磯の上を言ひ続けるもありて、よろづに紛らはしきこゆ。

「近き所には、播磨の明石の浦こそ、なほことにはべれ。何の至り深き隈はなけれど、ただ、海の面を見わたしたるほどなむ、あやしく異所に似ず、ゆほ

わらは病にわづらひたまひて、よろづにまじなひ加持など参らせたまへど、しるしなくて、あまたたびおこりたまひければ、ある人、「北山になむ、なにがし寺といふ所に、かしこき行ひ人はべる。去年の夏も世におこりて、人びとまじなひわづらひしを、やがてとどむるたぐひ、あまたはべりき。ししこらかしつる時はうたてはべるを、とくこそ試みさせたまはめ」など聞こゆれば、召しに遣はしたるに、「老いかがりて、室の外にもまかです」と申したれば、「いかがはせむ。いと忍びてものせむ」とのたまひて、御供にむつましき四、五人ばかりして、まだ暁におはす。

やや深う入る所なりけり。三月のつごもりなれば、京の花盛りはみな過ぎにけり。山の桜はまだ盛りにて、入りもておはするままに、霞のたたずまひもをかしう見ゆれば、かかるありさまならひたまはず、所狭き御身にて、めづらしう思されけり。

寺のさまもいとあはれなり。峰高く、深き巖屋の中にぞ、聖入りゐたりける。登りたまひて、誰とも知らせたまはず、いといたうやつれたまへれど、しるき御さまなれば、

「あな、かしこや。一日、召しはべりしにやおはしますらむ。今は、この世のことを思ひたまへねば、験方の行ひも捨て忘れてはべるを、いかで、かうおはしましつらむ」

と、おどろき騒ぎ、うち笑みつつ見たてまつる。いと尊き大徳なりけり。さるべきもの作りて、すかせたてまつり、加持など参るほど、日高くさし上がりぬ。

すこし立ち出でつつ見渡したまへば、高き所にて、ここかしこ、僧坊どもあらはに見おろさるる、ただこのつづら折の下に、同じ小柴なれど、うるはしくし渡して、清げなる屋、廊など続けて、木立いとよしあるは、

若 紫

若

紫

「かかる所に思ふやうならむ人を据ゑて住まばや」とのみ、嘆かしう思しわ  
たる。

「光る君といふ名は、高麗人のめできこえてつけたてまつりける」とぞ、言  
ひ伝へたるとなむ。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

ければ、いづ方につけてもいとかなやかなるに、この君さへかくおはし添ひぬれば、春宮の御祖父にて、つひに世の中を知りたまふべき右大臣の御勢ひは、ものにもあらず庄されたまへり。

御子どもあまた腹々にものしたまふ。宮の御腹は、蔵人少将にていと若うをかしきを、右大臣の、御仲はいと好からねど、え見過ぐしたまはで、かしづきたまふ四の君にあはせたまへり。劣らずもてかしづきたるは、あらまほしき御あはひどもになむ。

源氏の君は、主上の常に召しまつはせば、心安く里住みもえしたまはず。心のうちには、ただ藤壺の御ありさまを、類なしと思ひきこえて、「さやうならむ人をこそ見め。似る人なくもおはしけるかな。大殿の君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかず」おぼえたまひて、幼きほどの心一つにかかりて、いと苦しきまでぞおはしける。

大人になりたまひて後は、ありしやうに御簾の内にも入れたまはず。御遊びの折々、琴笛の音に聞こえかよひ、ほのかなる御声を慰めにて、内住みのみ好ましようおぼえたまふ。五六日さぶらひたまひて、大殿に二三日など、絶え絶えにまかでたまへど、ただ今は幼き御ほどに、罪なく思しなして、いとなみかしづききこえたまふ。

御方々の人びと、世の中におしなべたらぬを選りとのへすぐりてさぶらはせたまふ。御心につくべき御遊びをし、おほなおほな思しいたつく。

内には、もとの淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方の人びとまかで散らずさぶらはせたまふ。

里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨下りて、二なう改め造らせたまふ。もとの木立、山のたたずまひ、おもしろき所なりけるを、池の心広くしなして、めでたく造りののしる。

しにも」ともよほさせたまひければ、さ思したり。

さぶらひにまかだたまひて、人びと大御酒など参るほど、親王たちの御座の末に源氏着きたまへり。大臣気色ばみきこえたまふことあれど、もののつつましきほどにて、ともかくもあへしらひきこえたまはず。

御前より、内侍、宣旨うけたまはり伝へて、大臣参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。御祿の物、主上の命婦取りて賜ふ。白き大桂に御衣一領、例のことなり。

御盃のついでに、

「いときなき初元結ひに長き世を

契る心は結びこめつや」

御心ばへありて、おどろかさせたまふ。

「結びつる心も深き元結ひに

濃き紫の色し褪せずは」

と奏して、長橋より下りて舞踏したまふ。

左馬寮の御馬、蔵人所の鷹据ゑて賜はりたまふ。御階のもとに親王たち上達部つらねて、祿ども品々に賜はりたまふ。

その日の御前の折櫃物、籠物など、右大弁なむ承りて仕うまつらせける。屯食、祿の唐櫃どもなど、ところせきまで、春宮の御元服の折にも数まされり。なかなか限りもなくいかめしうなむ。

その夜、大臣の御里に源氏の君まかでさせたまふ。作法世にめづらしきまで、もてかしづききこえたまへり。いときびはにておはしたるを、ゆゆしううつくしと思ひきこえたまへり。女君はすこし過ぐしたまへるほどに、いと若うおはすれば、似げなく恥づかしと思いたり。

この大臣の御おぼえいとやむごとなきに、母宮、内の一つ后腹になむおはし

たてまつる。こよなう心寄せきこえたまへれば、弘徽殿の女御、またこの宮とも御仲そばそばしきゆゑ、うち添へて、もとよりの憎さも立ち出でて、ものしと思したり。

世にたぐひなしと見たてまつりたまひ、名高うおはする宮の御容貌にも、なほ匂はしきはたとへむ方なく、うつくしげなるを、世の人、「光る君」と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おぼえもとりどりなれば、「かかやく日の宮」と聞こゆ。

この君の御童姿、いと変へまうく思せど、十二にて御元服したまふ。居起ち思しいとなみて、限りある事に事を添へさせたまふ。

一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式、よそほしかりし御響きに落とさせたまはず。所々の饗など、内蔵寮、穀倉院など、公事に仕うまつれる、おろそかなることぞと、とりわき仰せ言ありて、清らを尽くして仕うまつれり。

おはします殿の東の廂、東向きに椅子立てて、冠者の御座、引入の大臣の御座、御前にあり。申の時にて源氏参りたまふ。角髪結ひたまへるつらつき、顔のほひ、さま変へたまはむこと惜しげなり。大蔵卿、蔵人仕うまつる。いと清らなる御髪を削ぐほど、心苦しげなるを、主上は、「御息所の見ましかば」と、思し出づるに、堪へがたきを、心強く念じかへさせたまふ。

かうぶりしたまひて、御休所にまかだたまひて、御衣奉り替へて、下りて拝したてまつりたまふさまに、皆人涙落としたまふ。帝はた、ましてえ忍びあへたまはず、思し紛るる折もありつる昔のこと、とりかへし悲しく思さる。いとかうきびはなるほどは、あげ劣りやと疑はしく思されつるを、あさましううつくしげき添ひたまへり。

引入の大臣の皇女腹にただ一人かしづきたまふ御女、春宮よりも御けしきあるを、思しわづらふことありける、この君に奉らむの御心なりけり。内にも、御けしき賜はらせたまへりければ、「さらば、この折の後見なかめるを、添ひ臥

まりて、ねむごろに聞こえさせたまひけり。

母后、「あな恐ろしや。春宮の女御のいとさがなくて、桐壺の更衣の、あらはにはかなくもてなされにし例もゆゆしう」と、思しつつみて、すがすがしうも思し立たざりけるほどに、后も亡せたまひぬ。

心細きさまにておはしますに、「ただ、わが女皇女たちの同じ列に思ひきこえむ」と、いとねむごろに聞こえさせたまふ。さぶらふ人びと、御後見たち、御兄の兵部卿の親王など、「かく心細くておはしまさむよりは、内住みせさせたまひて、御心も慰むべく」など思しなりて、参らせたてまつりたまへり。

藤壺と聞こゆ。げに、御容貌ありさま、あやしきまでぞおぼえたまへる。これは、人の御際まさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめきこえたまはねば、うけばりて飽かぬことなし。かれは、人の許しきこえざりしに、御心ぎしあやくなりしぞかし。思し紛るとはなけれど、おのづから御心移ろひて、こよなう思し慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。

源氏の君は、御あたり去りたまはぬを、ましてしげく渡らせたまふ御方は、え恥ぢあへたまはず。いづれの御方も、われ人に劣らむと思いたるやはある、とりどりにいとめでたけれど、うち大人びたまへるに、いと若うつくしげにて、切に隠れたまへど、おのづから漏り見たてまつる。

母御息所も、影だにおぼえたまはぬを、「いとよう似たまへり」と、典侍の聞こえけるを、若き御心地にいとあはれと思ひきこえたまひて、常に参らまほしく、「なづさひ見たてまつらばや」とおぼえたまふ。

主上も限りなき御思ひどちにて、「な疎みたまひそ。あやしくよそへきこえつべき心地なむする。なめしと思さで、らうたくしたまへ。つらつき、まみなどは、いとよう似たりしゆゑ、かよひて見えたまふも、似げなからずなむ」など聞こえつけたまへれば、幼心地にも、はかなき花紅葉につけても心ぎしを見え

弁も、いと才かしこき博士にて、言ひ交はしたることどもなむ、いと興ありける。文など作り交はして、今日明日帰り去りなむとするに、かくありがたき人に対面したるよろこび、かへりては悲しかるべき心ばへをおもしろく作りたるに、御子もいとあはれなる句を作りたまへるを、限りなうめでたてまつりて、いみじき贈り物どもを捧げたてまつる。朝廷よりも多くの物賜はず。

おのづから事広ごりて、漏らさせたまはねど、春宮の祖父大臣など、いかなることにかと思し疑ひてなむありける。

帝、かしこき御心に、倭相を仰せて、思しよりにける筋なれば、今までこの君を親王にもなさせたまはざりけるを、「相人はまことにかしこかりけり」と思して、「無品の親王の外戚の寄せなきにては漂はさじ。わが御世もいと定めなきを、ただ人にて朝廷の御後見をするなむ、行く先も頼もしげなめること」と思し定めて、いよいよ道々の才を習はさせたまふ。

際ことに賢くて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王となりたまひなば、世の疑ひ負ひたまひぬべくものしたまへば、宿曜の賢き道の人に勘へさせたまふにも、同じさまに申せば、源氏になしたてまつるべく思しおきてたり。

年月に添へて、御息所の御ことを思し忘るる折なし。「慰むや」と、さるべき人びと参らせたまへど、「なずらひに思さるるだにいとかたき世かな」と、疎ましうのみよろづに思しなりぬるに、先帝の四の宮の、御容貌すぐれたまへる聞こえ高くおはします、母后世になくかしづききこえたまふを、主上にさぶらふ典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはしましし時より見たてまつり、今もほの見たてまつりて、「亡せたまひにし御息所の御容貌に似たまへる人を、三代の宮仕へに伝はりぬるに、え見たてまつりつけぬを、後の宮の姫宮こそ、いとようおぼえて生ひ出でさせたまへりけれ。ありがたき御容貌人になむ」と奏しけるに、「まことにや」と、御心と

かの御祖母北の方、慰む方なく思し沈みて、おはすらむ所にだに尋ね行かむと願ひたまひしるしにや、つひに亡せたまひぬれば、またこれを悲しび思すこと限りなし。御子六つになりたまふ年なれば、このたびは思し知りて恋ひ泣きたまふ。年ごろ馴れ睦びきこえたまひつるを、見たてまつり置く悲しびをなむ、返す返すのたまひける。

今は内におのみさぶらひたまふ。七つになりたまへば、読書始めなどせさせたまひて、世に知らず聡う賢くおはすれば、あまり恐ろしきまで御覧ず。

「今は誰れも誰れもえ憎みたまはじ。母君なくてだにらうたうしたまへ」とて、弘徽殿などにも渡らせたまふ御供には、やがて御簾の内に入れたてまつりたまふ。いみじき武士、仇敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはず。女皇女たち二ところ、この御腹におはしませど、なずらひたまふべきだにぞなかりける。御方々も隠れたまはず、今よりなまめかしう恥づかしげにおはすれば、いとをかしううちとけぬ遊び種に、誰れも誰れも思ひきこえたまへり。

わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひ続ければ、ことごとしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。

そのころ、高麗人の参れる中に、かしこき相人ありけるを聞こし召して、宮の内に召さむことは、宇多の帝の御誠めあれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館に遣はしたり。御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつるに、相人驚きて、あまたたび傾きあやしぶ。

「国の親となりて、帝王の上なき位に昇るべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷の重鎮となりて、天の下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし」と言ふ。

たまふなる。いとすさまじう、ものしと聞こし召す。このごろの御気色を見てまつる上人、女房などは、かたはらいたしと聞きけり。いとおし立ちかどかどしきところものしたまふ御方にて、ことにもあらず思し消ちてもてなしたまふなるべし。月も入りぬ。

「雲の上も涙にくるる秋の月

いかですむらむ浅茅生の宿」

思し召しやりつつ、灯火をかかげ尽くして起きおはします。右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。人目を思して、夜の御殿に入らせたまひても、まどろませたまふことかたし。朝に起きさせたまふとても、「明るも知らで」と思し出づるにも、なほ朝政は怠らせたまひぬべかめり。

ものなども聞こし召さず、朝餉のけしきばかり触れさせたまひて、大床子の御膳などは、いと遙かに思し召したれば、陪膳にさぶらふ限りは、心苦しき御気色を見たてまつり嘆く。すべて、近うさぶらふ限りは、男女、「いとわりなきわぎかな」と言ひ合はせつつ嘆く。「さるべき契りこそはおはしましけめ。そこらの人の誹り、恨みをも憚らせたまはず、この御ことに触れたることをば、道理をも失はせたまひ、今はた、かく世の中のことも、思ほし捨てたるやうになりゆくは、いとたいだいしきわぎなり」と、人の朝廷の例まで引き出で、ささめき嘆きけり。

月日経て、若宮参りたまひぬ。いとどこの世のものならず清らにおよすげたまへれば、いとゆゆしう思したり。

明くる年の春、坊定まりたまふにも、いと引き越さまほしう思せど、御後見すべき人もなく、また世のうけひくまじきことなりければ、なかなか危く思し憚りて、色にも出ださせたまはずなりぬるを、「さばかり思したれど、限りこそありけれ」と、世人も聞こえ、女御も御心落ちるたまひぬ。

せさせたまふ。いとこまやかにありさま問はせたまふ。あはれなりつること忍びやかに奏す。御返り御覧ずれば、

「いともかしこきは置き所もはべらず。かかる仰せ言につけても、かきくらす乱り心地になむ。

荒き風ふせぎし蔭の枯れしより

小萩がうへぞ静心なき」

などやうに乱りがはしきを、心をさめざりけるほどと御覧じ許すべし。いとかうしも見えじと、思し静むれど、さらにえ忍びあへさせたまはず、御覧じ初めし年月のことさへかき集め、よろづに思し続けられて、「時の間もおぼつかかりしを、かくても月日は経にけり」と、あさましう思し召さる。

「故大納言の遺言あやまたず、宮仕への本意深くものしたりしよろこびは、かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ。言ふかひなしや」とうちのたまはせて、いとあはれに思しやる。「かくても、おのづから若宮など生ひ出でたまはば、さるべきついでもありなむ。命長くとこそ思ひ念ぜめ」

などのたまはず。かの贈り物御覧ぜさす。「亡き人の住処尋ね出でたりけむしるしの釵ならましかば」と思ほすもいとかひなし。

「尋ねゆく幻もがなつてにても

魂のありかをそこと知るべく」

絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限りありければいとにほひ少なし。大液芙蓉未央柳も、げに通ひたりし容貌を、唐めいたる装ひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。朝夕の言種に、「翼をならべ、枝を交はさむ」と契らせたまひしに、かなはざりける命のほどぞ、尽きせず恨めしき。

風の音、虫の音につけて、もののみ悲しう思さるるに、弘徽殿には、久しく上の御局にも参う上りたまはず、月のおもしろきに、夜更くるまで遊びをぞし

ち返しつつ、御しほたれがちにのみおはします」と語りて尽きせず。泣く泣く、「夜いたう更けぬれば、今宵過ぎさず、御返り奏せむ」と急ぎ参る。

月は入り方の、空清う澄みわたれるに、風いと涼しくなりて、草むらの虫の声ごゑもよほし顔なるも、いと立ち離れにくき草のもとなり。

「鈴虫の声の限りを尽くしても

長き夜あかずふる涙かな」

えも乗りやらず。

「いとどしく虫の音しげき浅茅生に

露置き添ふる雲の上人

かごと聞こえつべくなむ」

と言はせたまふ。をかしき御贈り物などあるべき折にもあらねば、ただかの御形見にとて、かかる用もやと残したまへりける御装束一領、御髪上げの調度めく物添へたまふ。

若き人びと、悲しきことはさらにも言はず、内わたりを朝夕にならひて、いとさうざうしく、主上の御ありさまなど思ひ出できこゆれば、とく参りたまはむことをそそのかしきこゆれど、「かく忌ま忌ましき身の添ひたてまつらむも、いと人聞き憂かるべし、また、見たてまつらでしばしもあらむは、いとうしろめたう」思ひきこえたまひて、すがすがともえ参らせたてまつりたまはぬなりけり。

命婦は、「まだ大殿籠もらせたまはざりける」と、あはれに見たてまつる。御前の壺前栽のいとおもしろき盛りなるを御覧するやうにて、忍びやかに心にき限りの女房四五人さぶらはせたまひて、御物語せさせたまふなりけり。このごろ、明け暮れ御覧する長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ、枕言に

思し急ぐめれば、ことわりに悲しう見たてまつりはべるなど、うちうちに思うたまふるさまを奏したまへ。ゆゆしき身にはべれば、かくておはしますも、忌ま忌ましうかたじけなくなむ」

とのたまふ。宮は大殿籠もりにけり。

「見たてまつりて、くはしう御ありさまも奏しはべらまほしきを、待ちおはしますらむに、夜更けはべりぬべし」とて急ぐ。

「暮れまどふ心の闇も堪へがたき片端をだに、はるくばかりに聞こえまほしうはべるを、私にも心のどかにまかだたまへ。年ごろ、うれしく面だたしきついでにて立ち寄りたまひしものを、かかる御消息にて見たてまつる、返す返すつれなき命にもはべるかな。

生まれし時より、思ふ心ありし人にて、故大納言、いまはとなるまで、『ただ、この人の宮仕への本意、かならず遂げさせたてまつれ。我れ亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな』と、返す返す諫めおかれはべりしかば、はかばかしう後見思ふ人もなき交じらひは、なかなかなるべきことと思ひたまへながら、ただかの遺言を違へじとばかりに、出だし立てはべりしを、身に余るまでの御心ざしの、よろづにかたじけなきに、人げなき恥を隠しつつ、交じらひたまふめりつるを、人の嫉み深く積もり、安からぬこと多くなり添ひはべりつるに、横様なるやうにて、つひにかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなむ、かしこき御心ざしを思ひたまへられはべる。これもわりなき心の闇になむ」

と、言ひもやらずむせかへりたまふほどに、夜も更けぬ。

「上もしかなむ。『我が御心ながら、あながちに人目おどろくばかり思されしも、長かるまじきなりけりと、今はつらかりける人の契りになむ。世にいささかも人の心を曲げたることはあらじと思ふを、ただこの人のゆゑにて、あまたさるまじき人の恨みを負ひし果て果ては、かううち捨てられて、心をさめむ方なきに、いとど人悪ろうかたくなになり果つるも、前の世ゆかしうなむ』とう

「『参りては、いとど心苦しう、心肝も尽くるやうになむ』と、典侍の奏したまひしを、もの思うたまへ知らぬ心地にも、げにこそいと忍びがたうはべりけれ」

とて、ややためらひて、仰せ言伝へきこゆ。

「『しばしは夢かとのみたどられしを、やうやう思ひ静まるにしも、覚むべき方なく堪へがたきは、いかにすべきわざにかとも、問ひあはすべき人だになきを、忍びては参りたまひなむや。若宮のいとおぼつかなく、露けき中に過ぐしたまふも、心苦しう思さるるを、とく参りたまへ』など、はかばかしうものたまはせやらず、むせかへらせたまひつつ、かつは人も心弱く見たてまつるらむと、思しつつまぬにしもあらぬ御気色の心苦しきに、承り果てぬやうにてなむ、まかではべりぬる」

とて、御文奉る。

「目も見えはべらぬに、かくかしこき仰せ言を光にてなむ」とて、見たまふ。

「ほど経ばすこしうち紛るることもやと、待ち過ぐす月日に添へて、いと忍びがたきはわりなきわざになむ。いはけなき人をいかにと思ひやりつつ、もろともに育まぬおぼつかなさを。今は、なほ昔のかたみになずらへて、ものしたまへ」

など、こまやかに書かせたまへり。

「宮城野の露吹きむすぶ風の音に

小萩がもとを思ひこそやれ」

とあれど、え見たまひ果てず。

「命長さの、いとつらう思うたまへ知らるるに、松の思はむことだに、恥づかしう思うたまへはべれば、百敷に行きかひはべらむことは、ましていと憚り多くなむ。かしこき仰せ言をたびたび承りながら、みづからはえなむ思ひたまへたつまじき。若宮は、いかに思ほし知るにか、参りたまはむことをのみなむ

心ばせのなだらかにめやすく、憎みがたかりしことなど、今ぞ思し出づる。さま悪しき御もてなしゆゑこそ、すげなう嫉みたまひしか、人柄のあはれに情けありし御心を、主上の女房なども恋ひしのびあへり。なくてぞとは、かかる折にやと見えたり。

はかなく日ごろ過ぎて、後のわぎなどにもこまかにとぶらはせたまふ。ほど経るままに、せむ方なう悲しう思さるるに、御方がたの御宿直なども絶えてしまはず、ただ涙にひちて明かし暮らさせたまへば、見たてまつる人さへ露けき秋なり。「亡きあとまで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などにはなほ許しなうのたまひける。一の宮を見たてまつらせたまふにも、若宮の御恋しさのみ思ほし出でつつ、親しき女房、御乳母などを遣はしつつ、ありさまを聞こし召す。

野分立ちて、にはかに肌寒き夕暮のほど、常よりも思し出づること多くて、靱負命婦といふを遣はす。夕月夜のをかしきほどに出だし立てさせたまひて、やがて眺めおはします。かうやうの折は、御遊びなどせさせたまひしに、心ことなる物の音を掻き鳴らし、はかなく聞こえ出づる言の葉も、人よりはことなりしけはひ容貌の、面影につと添ひて思さるるにも、闇の現にはなほ劣りけり。

命婦、かしこに参で着きて、門引き入るるより、けはひあはれなり。やもめ住みなれど、人一人の御かしづきに、とかくつくろひ立てて、めやすきほどにて過ぐしたまひつる、闇に暮れて臥し沈みたまへるほどに、草も高くなり、野分にいと荒れたる心地して、月影ばかりぞ八重葎にも障はらず差し入りたる。南面に下ろして、母君も、とみにえものものたまはず。

「今までとまりはべるがいと憂きを、かかる御使の蓬生の露分け入りたまふにつけても、いと恥づかしうなむ」

とて、げにえ堪ふまじく泣いたまふ。

たゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを御覽じはてむと思し召すに、「今日始むべき祈りども、さるべき人びとうけたまはれる、今宵より」と、聞こえ急がせば、わりなく思ほしながらまかでさせたまふ。

御胸つとふたがりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。御使の行き交ふほどもなきに、なほいぶせさを限りなくのたまはせつるを、「夜半うち過ぐるほどになむ、絶えはてたまひぬる」とて泣き騒げば、御使もいとあへなくて帰り参りぬ。聞こし召す御心まどひ、何ごとも思し召しわかれず、籠もりおはします。

御子は、かくてもいと御覽ぜまほしけれど、かかるほどにさぶらひたまふ、例なきことなれば、まかでたまひなむとす。何事かあらむとも思したらず、さぶらふ人びとの泣きまどひ、主上も御涙のひまなく流れおはしますを、あやしと見たてまつりたまへるを、よろしきことにだに、かかる別れの悲しからぬはなきわぎなるを、ましてあはれに言ふかひなし。

限りあれば、例の作法にをさめたてまつるを、母北の方、同じ煙にのぼりなむと、泣きこがれたまひて、御送りの女房の車に慕ひ乗りたまひて、愛宕といふ所にいといかめしうその作法したるに、おはし着きたる心地、いかばかりかはありけむ。「むなしき御骸を見る見る、なほおはするものと思ふが、いとかわひなければ、灰になりたまはむを見たてまつりて、今は亡き人と、ひたぶるに思ひなりなむ」と、さかしうのたまひつれど、車よりも落ちぬべうまろびたまへば、さは思ひつかしと、人びともてわづらひきこゆ。

内より御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来てその宣命読むなむ、悲しきことなりける。女御とだに言はせずなりぬるが、あかず口惜しう思さるれば、いま一階の位をだにと、贈らせたまふなりけり。これにつけても憎みたまふ人びと多かり。もの思ひ知りたまふは、様、容貌などのめでたかりしこと、

めづらしきまで見えたまふを、え嫉みあへたまはず。ものの心知りたまふ人は、「かかる人も世に出でおはするものなりけり」と、あさましきまで目をおどろかしたまふ。

その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなむとしたまふを、暇さらに許させたまはず。年ごろ、常の篤しきになりたまへれば、御目馴れて、「なほしばしころみよ」とのみのたまはするに、日々に重りたまひて、ただ五六日のほどにいと弱うなれば、母君泣く泣く奏して、まかでさせたまつりたまふ。かかる折にも、あるまじき恥もこそと心づかひして、御子をば留めたてまつりて、忍びてぞ出でたまふ。

限りあれば、さのみもえ留めさせたまはず、御覧じだに送らぬおぼつかなきを、言ふ方なく思ほさる。いとにほひやかにうつくしげなる人の、いたう面瘦せて、いとあはれとものを思ひしみながら、言に出でても聞こえやらす、あるかなきかに消え入りつつものしたまふを御覧するに、来し方行く末思し召されず、よろづのことを泣く泣く契りのたまはすれど、御いらへもえ聞こえたまはず、まみなどもいとたゆげにて、いとどなよなよと、我がの気色にて臥したれば、いかさまにと思し召しまどはる。輦車の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひて、さらにえ許させたまはず。

「限りあらむ道にも、後れ先立たじと、契らせたまひけるを。さりとも、うち捨てては、え行きやらじ」

とのたまはするを、女もいといみじと、見たてまつりて、

「限りとて別るる道の悲しきに

いかまほしきは命なりけり

いとかく思ひたまへましかば」

と、息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげに

初めよりおしなべての上宮仕へしたまふべき際にはあらざりき。おぼえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせたまふあまりに、さるべき御遊びの折々、何事にもゆゑある事のふしぶしには、まづ参う上らせたまふ。ある時には大殿籠もり過ぐして、やがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前去らずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽き方にも見えしを、この御子生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、「坊にも、ようせずは、この御子の居たまふべきなめり」と、一の皇子の女御は思し疑へり。人より先に参りたまひて、やむごとなき御思ひなべてならず、皇女たちなどもおはしませば、この御方の御諫めのみぞ、なほわづらはしう心苦しう思ひきこえさせたまひける。

かしこき御蔭をば頼みきこえながら、落としめ疵を求めたまふ人は多く、わが身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。御局は桐壺なり。あまたの御方がたを過ぎさせたまひて、ひまなき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふも、げにことわりと見えたり。参う上りたまふにも、あまりうちしきる折々は、打橋、渡殿のここかしこの道に、あやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾、堪へがたく、まさなきこともあり。またある時には、え避らぬ馬道の戸を鎖しこめ、こなたかなた心を合はせて、はしたなめわづらはせたまふ時も多かり。事にふれて数知らず苦しきことのみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとどあはれと御覧じて、後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司を他に移させたまひて、上局に賜はす。その恨みましてやらむ方なし。

この御子三つになりたまふ年、御袴着のこと一の宮のたてまつりしに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くして、いみじうせさせたまふ。それにつけても、世の誹りのみ多かれど、この御子のおよすげもおはする御容貌心ばへありがたく

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

はじめより我はと思ひ上がりたまへる御方がた、めざましきものにおとしめ嫉みたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、ましてやすからず。朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふ積もりにやありけむ、いと篤しくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかずあはれなるものに思ほして、人のそしりをもえ憚らせたまはず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。

上達部、上人なども、あいなく目を側めつつ、「いとまばゆき人の御おぼえなり。唐土にも、かかる事の起こりにこそ、世も乱れ、悪しかりけれ」と、やうやう天の下にもあぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにてまじらひたまふ。

父の大納言は亡くなりて、母北の方なむいにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方がたにもいたう劣らず、なにごとの儀式をもてなしたまひけれど、とりたててはかばかしき後見しなければ、事ある時は、なほ抛り所なく心細げなり。

先の世にも御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなる稚児の御容貌なり。

一の皇子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲の君と、世にもてかしづききこゆれど、この御にほひには並びたまふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、私物に思ほしかしづきたまふこと限りなし。

桐 壺

桐

壺

藤裏葉	梅枝	少女	朝顏	薄雲	松風	絵合	濔標	明石	須磨	花散里	賢木	葵	花宴	紅葉賀	若紫	桐壺
一九	三四	七三	九〇	一一四	一三一	一四六	一七一	二〇一	二三四	二三九	二七六	三一	三二〇	三四二	三七八	三九六